県道丸亀多度津線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

中東遺跡 2
奥白方中落遺跡
奥白方南原遺跡

2008. 2

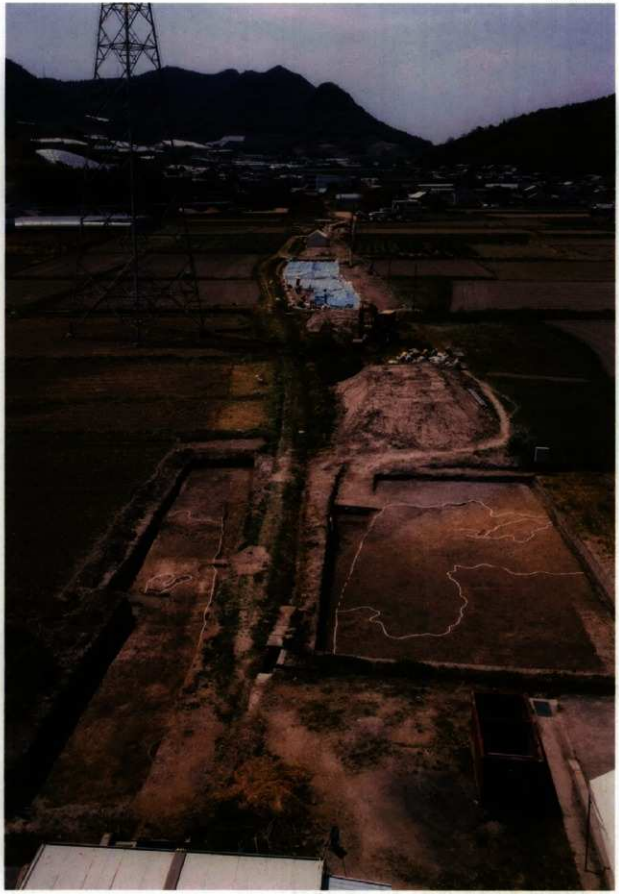
香川県教育委員会

県道丸亀多度津線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

中東遺跡 2
奥白方中落遺跡
奥白方南原遺跡

2008.2

香川県教育委員会



奥白方地区全景（東より）
－手前から中東遺跡、奥白方南原遺跡、奥白方中落遺跡－

奥白方中落遺跡1区の弥生時代集落遺構（上空より）

奥白方中落遺跡 SR02 土器集中A群（東より）

奥白方中落遺跡3区 SH06（東より）

奥白方中落遺跡 不明遺構 SX01 古銭出土状況（東より）

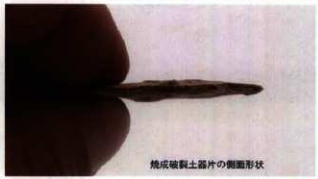
奥白方中落遺跡
SR02
土器集中A群出土の
部分黒斑土器
（焼成破損土器）

奥白方中落遺跡 SR02 土器集中A群出土の歪んだ土器（熱変形もしくは焼成破損土器）

奥白方中落遺跡 SR02 土器集中A群出土の変形・剥離土器

奥白方中落遺跡 SR02 土器集中A群出土の焼成破損土器（本文第 89 頁参照）

第89図掲載の焼成破裂痕土器（1～4）及び焼成破裂土器片（5～7）



奥白方中落遺跡 SR02 土器集中A群出土の焼成破損土器（本文 103 頁参照）

巻頭図版6

SH05 中央土坑 篩目粗（M0001）

SH05 中央土坑 篩目細（M0002）

SH03 中央土坑 篩目粗（M0003）

SH03 中央土坑 篩目細（M0004）

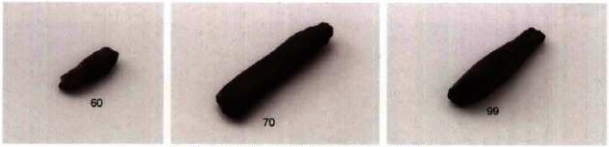
SH06 床面西側焼土 篩目粗（M0005）

SH06 床面西側焼土 篩目細（M0006）

SH06 中央土坑 篩目粗（M0007）

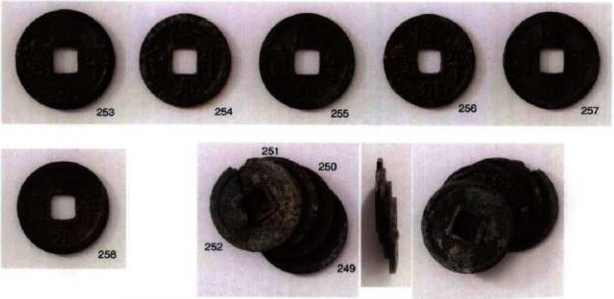
SH06 中央土坑 篩目細（M0008）

奥白方中落遺跡　弥生時代竪穴住居跡出土磁着微細粒の拡大写真（約 4.6 倍 本文 105 頁参照）



奥白方中落遺跡 弥生時代遺構出土の棒状鉄片

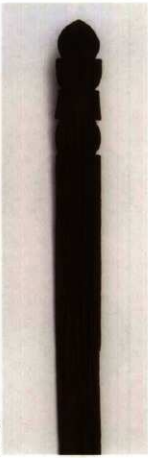
奥白方中落遺跡出土のサヌカイト製大型剥片・打製石庖丁・楔状石核



奥白方中落遺跡 SX01 出土の古銭（「隆平永寶」－皇朝十二銭） ほぼ原寸大

奥白方南原遺跡 B区 ST01（南より）

奥白方南原遺跡 B区 ST01 出土の白磁



奥白方南原遺跡 A区 SE01 出土の
卒塔婆（B面）

序 文

多度津町の奥白方地区は、瀬戸内海の島々を望む海岸を間近に控え、交通の利便が良いことから、古くより文化が栄えた土地柄です。今回発掘調査を実施した県道丸亀多度津線建設予定地内の遺跡では、弥生時代から鎌倉時代にわたる遺跡が見つかりました。

中東遺跡は県史跡「盛土山古墳」に近く、須恵器や埴輪など古墳に関連する遺物が出土しました。周辺にも中小規模の古墳が埋もれている可能性が考えられます。奥白方南原遺跡では、鎌倉時代ごろの集落跡を検出し、当時の海浜部の集落の姿が明らかとなりました。奥白方中落遺跡では、弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居跡や倉庫跡などが見つかりました。黒藤山4号墳など、周辺に分布する古墳の母胎となった集落と考えられます。これらの成果は奥白方地域のいにしえの姿を解明するうえで重要な資料となります。

本報告書が歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から整理・報告にいたるまでの間、県道路課・善通寺土木事務所および関係機関、ならびに地元関係各位には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成20年2月

香川県埋蔵文化財センター
所長　渡部　明夫

例　　言

1．本書は県道丸亀多度津線道路建設事業に伴って平成16年度に実施した中東（なかひがし）遺跡・奥白方南原（おくしらかたみなんばら）遺跡・奥白方中落（おくしらかたなかおち）遺跡の発掘調査事業の報告書である。

2．本書で報告する各遺跡は、香川県仲多度郡多度津町奥白方に所在する。

3．発掘調査は、県土木部道路建設課から依頼された香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施したものである。

4．本書挿図中の座標は日本測地系 第４系国土座標値に基づき、レベル高はすべてT.P.に統一した。挿図の一部に国土地理院発行数値地図25000（地図画像）「徳島」「岡山及丸亀」を使用した。

5．遺構番号はＳＨ竪穴住居跡、ＳＰ柱穴、ＳＢ掘立柱建物跡、ＳＡ区画遺構、ＳＫ土坑、ＳＤ溝状遺構、ＳＸ不明遺構、の略号を付した。

6．発掘調査、整理作業にあたっては、地元関係者・多度津町教育委員会・香川県歴史博物館・愛媛大学田崎博之氏、徳島文理大学大久保徹也氏、香川大学井尻敏氏、善通寺市役所海邉博史氏、大川広域行政組合松田朝由氏、その他関係各位より多大なご協力、ご援助を得た。

7．本書の執筆分担は目次に記載した。全体編集は森下が行った。

8．本文頁、挿図・表・図版番号は通し番号とし、本文末尾に参考文献を付した。第４章第８節の注・参考文献については節の末尾に付した。

目　次

第１章　調査に至る経緯と調査の経過 ……（森下）　1

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　自然環境 ……（森下）　2
第２節　歴史環境 ……（中里・森下）　5

第３章　中東遺跡２次調査

第１節　概要 ……（中里）　10
第２節　調査方法及び土層序 ……（中里）　10
第３節　遺構・遺物 ……（中里）　11
第４節　まとめ ……（中里）　17

第４章　奥白方中落遺跡

第１節　概要 ……（森下）　19
第２節　土層 ……（森下）　19
第３節　弥生時代 ……（森下）　23
第４節　古代・中世 ……（森下）　60
第５節　自然河川 ……（森下）　73
第６節　柱穴出土の遺物 ……（森下）　83
第７節　包含層出土の遺物 ……（森下）　83
第８節　奥白方中落遺跡から出土した
古銭に関する鉛同位体比調査 ……（平尾・魯）　85
第９節　まとめ ……（森下）　93

第５章　奥白方南原遺跡

第１節　概要 ……（長井）　108
第２節　土層 ……（長井）　108
第３節　遺構と遺物 ……（長井）　115
第４節　香川県奥白方南原遺跡出土木製品の樹種調査結果 ‥（吉田生物研究所）159
第５節　まとめ ……（長井）　160

参考文献 ……　168
中東遺跡出土遺物観察表 ……　170
奥白方中落遺跡出土遺物観察表 ……　173
奥白方南原遺跡出土遺物観察表 ……　189

挿図目次

第1図　遺跡位置図 …… 1
第2図　調査区位置図（1/1,000） …… 4
第3図　周辺遺跡位置図（1/25,000） …… 6
第4図　丸亀平野の微地形と弥生時代遺跡の分布 …… 7
第5図　奥白方周辺遺跡詳細図（1/10,000） …… 8
（中東遺跡）
第6図　調査区割図（1/1,000） …… 10
第7図　遺構配置図（1/200） …… 11
第8図　調査区土層図（1/80） …… 12
第9図　SD01 土層断面図（1/40）、出土遺物（1/4） …… 13
第10図　1区 SX01 土器群出土状況図・
土層断面図（1/30） …… 14
第11図　SX01 土器集中部出土遺物（1/4） …… 15
第12図　SX01 出土遺物（1/4） …… 15
第13図　SX02・04・05 土層断面図（1/40） …… 16
第14図　褐灰色礫混粘質土層出土遺物（1/4） …… 16
第15図　その他の出土遺物（1/4） …… 16
第16図　土製品（1/4）・石器（1/2） …… 17
第17図　微地形復元図（1/500） …… 18
（奥白方中落遺跡）
第18図　奥白方中落遺跡調査区位置図及び
1区土層図（1/80） …… 20
第19図　2区土層図（1/80） …… 21
第20図　5区土層図（1/80） …… 22
第21図　SH01 平・断面図（1/60） …… 24
第22図　SH01 断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2） …… 25
第23図　SH02 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2） …… 26
第24図　SH02 出土遺物（1/2） …… 27
第25図　SH03 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） …… 28
第26図　SH03 中央土壙周辺平・断面図（1/20）・
SH03 出土遺物（1/4・1/2） …… 29
第27図　SH04 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） …… 30
第28図　SH05 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2） …… 32
第29図　SH06 平・断面図（1/60・1/30）、出土遺物（1/5） …… 33
第30図　SH06 出土遺物（1/3・1/2） …… 34
第31図　SH07 平・断面図（1/60）・
出土遺物（1/4・1/6・1/2・1/3） …… 35
第32図　SH08 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） …… 36
第33図　SB01 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） …… 37
第34図　SB02 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/3） …… 38
第35図　SB02・SP080・091 遺物出土状況図（1/20） …… 39
第36図　SB03 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） …… 40
第37図　SB04 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） …… 41
第38図　SB05 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） …… 43
第39図　SB06 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2） …… 44
第40図　SB07 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） …… 45
第41図　SB08 平・断面図（1/60） …… 46
第42図　SK01 平・断面図（1/40） …… 46
第43図　SK02 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） …… 47
第44図　SD01 平面図（1/60）・断面図（1/40）・
出土遺物（1/4） …… 48
第45図　SD02 平面図（1/60）・断面図（1/40） …… 50
第46図　SD02 出土遺物（1/4） …… 51
第47図　SD03 平面図（1/60）・断面図
（1/60・1/40）、出土遺物（1/4・1/2） …… 52
第48図　SD03 出土遺物1（1/4・1/2） …… 53
第49図　SD03 出土遺物2（1/4・1/2） …… 54
第50図　SD03 出土遺物3（1/4・1/2） …… 55
第51図　SD03 出土遺物4（1/2） …… 56
第52図　SD04 平面図（1/60）・断面図（1/40）
出土遺物（1/4） …… 58
第53図　SD05 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） …… 59
第54図　SD06 平・断面図（1/30）、出土遺物（1/4） …… 59
第55図　SB09 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） …… 60
第56図　SB10 平・断面図（1/60） …… 61
第57図　SB11 平・断面図（1/60） …… 62
第58図　SB12 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） …… 63
第59図　SB13 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） …… 64
第60図　SB14 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） …… 65
第61図　SB15 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4） …… 65
第62図　SB16 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/2） …… 66
第63図　SB17 平・断面図（1/60） …… 67
第64図　SB18 平・断面図（1/60） …… 67
第65図　SE01 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） …… 68
第66図　SX01 周辺遺構分布図（1/60） …… 69
第67図　SX01 平・断面図（1/10）、出土遺物（1/1） …… 70
第68図　SK03 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4） …… 71
第69図　SR02・SR03 断面図（1/40） …… 72
第70図　SR02 遺物出土状況図（1/30） …… 74
第71図　SR01・02 出土遺物（1/4・1/2） …… 75
第72図　SR02 出土遺物1（1/4） …… 76
第73図　SR02 出土遺物2（1/4） …… 77
第74図　SR02 出土遺物3（1/4・1/2） …… 78
第75図　SR02 出土遺物4（1/4） …… 79
第76図　SR03・05 出土遺物（1/4） …… 79
第77図　柱穴出土遺物（1/4・1/2） …… 81
第78図　包含層出土遺物（1/4・1/2） …… 82
第79図　奥白方中落遺跡から出土した
隆平永寶の鉛同位体比 …… 87
第80図　奥白方中落遺跡から出土した
隆平永寶の鉛同位体比 …… 88
第81図　今回の隆平永寶とこれまで測定された
隆平永寶・皇朝十二銭の鉛同位体比 …… 89
第82図　今回の隆平永寶とこれまで測定された
隆平永寶・皇朝十二銭の鉛同位体比 …… 90
第83図　今回の隆平永寶と日本の鉱山の鉛同位体比 …… 91
第84図　今回の隆平永寶と日本の鉱山の鉛同位体比 …… 91
第85図　今回の隆平永寶とこれまで測定された隆平永寶・
皇朝十二銭・長登鉱山の鉛同位体比 …… 92
第86図　今回の隆平永寶とこれまで測定された隆平永寶・
皇朝十二銭・長登鉱山の鉛同位体比 …… 92
第87図　奥白方中落遺跡出土の弥生土器変遷図 …… 93
第88図　奥白方中落遺跡遺構変遷図（1/500） …… 96
第89図　焼成破裂痕土器実測図（1/2） …… 103
（奥白方南原遺跡）
第90図　奥白方南原遺跡調査地区割図 …… 108
第91図　A区（西・東）北壁・中央南北壁
（縦1/80・横1/200） …… 109
第92図　C区 北壁（縦1/80・横1/200） …… 109
第93図　B区（東）北壁①・②、B区（西）北壁・西壁
（縦1/80・横1/200） …… 110
第94図　E区①・②東壁、F区①・②東壁・F区①西壁
（縦1/80・横1/200） …… 111
第95図　H区 北壁（縦1/80・横1/200） …… 112
第96図　I区（東・西）北壁、J区トレンチ南、K区
（東・西）トレンチ南（縦1/80・横1/200） …… 113
第97図　A区 遺構配置図（1/250） …… 114
第98図　A区 SD01 断面図（1/40）、出土遺物（1/4） …… 115

第99図　A区 SD11 断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4) ‥ 116
第100図　A区 SB01 平・断面図 (1/60) ····· 116
第101図　A区 SB02 平・断面図 (1/60) ····· 117
第102図　A区 SB03 平・断面図 (1/60) ····· 117
第103図　A区 SD02 断面図 (1/40) ····· 118
第104図　A区 SD02 出土遺物 1 (1/4) ····· 119
第105図　A区 SD02 出土遺物 2 (1/4) ····· 120
第106図　A区 SD04・07 断面図 (1/40) ····· 121
第107図　A区 SD05・06・09 断面図 (1/40)、
出土遺物 (1/4) ····· 122
第108図　A区 SE01 平・断面図 (1/20)、
出土遺物 (1/4) ····· 123
第109図　A区 SE01 出土遺物 (1/4・1/3) ····· 124
第110図　A区 SE02 平・断面図 (1/20) ····· 125
第111図　A区 SE02 出土遺物 1 (1/4・1/5) ····· 126
第112図　A区 SE02 出土遺物 2 (1/5) ····· 127
第113図　A区 SK08 平・断面図 (1/40) ····· 128
第114図　A区 SK23 平・断面図 (1/40)、
出土遺物 (1/4) ····· 128
第115図　A区 ピット出土遺物 (1/4) ····· 129
第116図　A区 SX01 平・断面図 (1/60) ····· 130
第117図　A区 SX01 出土遺物 1 (1/4) ····· 131
第118図　A区 SX01 出土遺物 2 (1/4) ····· 132
第119図　A区 SX04 平・断面図 (1/60)、
出土遺物 (1/4) ····· 133
第120図　A区 遺構外出土遺物 (1/4) ····· 134
第121図　B区 遺構配置図 (1/200) ····· 135
第122図　B区 SD01・03・04・05 断面図 (1/40) ····· 135
第123図　B区 SD02・08 平・断面図 (1/60)、
出土遺物 (1/4) ····· 136
第124図　B区 SD09・10 断面図 (1/40) ····· 137
第125図　B区 SD11 断面図 (1/40) ····· 137
第126図　B区 SD21・22 断面図 (1/40) ····· 137
第127図　B区 SD23・24 断面図 (1/40) ····· 138
第128図　B区 SK19 平・断面図 (1/40) ····· 138
第129図　B区 ST01 平・断面図 (1/20)、
出土遺物 (1/4・1/2) ····· 139
第130図　B区 ST02 平・断面図 (1/20)、
出土遺物 (1/4) ····· 140
第131図　B区 SX01 断面図 (1/40)、
出土遺物 (1/4) ····· 141
第132図　B区 SX02 断面図 (1/40) ····· 141
第133図　B区 SX04 平・断面図 (1/40・1/60) ····· 142
第134図　B区 SX05・06 断面図 (1/40) ····· 142
第135図　C区 遺構配置図 (1/200) ····· 143
第136図　D区 遺構配置図 (1/200) ····· 143
第137図　C区 SD01 断面図 (1/40)、
出土遺物 (1/4) ····· 144
第138図　D区 SD01 断面図 (1/40) ····· 144
第139図　D区 SD02・03・05 断面図 (1/40)、
出土遺物 (1/2・1/4) ····· 146
第140図　E区 遺構配置図 (1/200) ····· 147
第141図　F区 遺構配置図 (1/200) ····· 147
第142図　E区 SR01・F区 SD01 出土遺物 (1/4) ····· 147
第143図　F区 SD01・02 断面図 (1/40) ····· 148
第144図　F区 SD01・SR01 出土遺物 (1/4・1/2) ···· 149
第145図　H区 遺構配置図 (1/200) ····· 150
第146図　H区 SR01 出土遺物 (1/4) ····· 150
第147図　H区 SD01・02・03 断面図 (1/40) ····· 150
第148図　H区 SD03・SK01・遺構外出土遺物 (1/4) ‥ 151
第149図　I区 遺構配置図 (1/200) ····· 152
第150図　I区 SR01 出土遺物 (1/4) ····· 152
第151図　I区 SD01・02 断面図 (1/40)、
出土遺物 (1/4) ····· 153
第152図　I区 SD11・12 断面図 (1/40) ····· 153
第153図　I区 SK01 平・断面図 (1/40)、
SK01・02 出土遺物 (1/4) ····· 154
第154図　I区 SP14 平・断面図 (1/10)、
出土遺物 (1/4) ····· 155
第155図　I区 遺構外出土遺物 (1/4) ····· 155
第156図　J・K区遺構配置図 ····· 157
第157図　K区 遺構外出土遺物 (1/4) ····· 158
第158図　遺構変遷図①弥生時代中期～後期 ····· 161～162
第159図　遺構変遷図②中世Ⅰ (12世紀代) ····· 163～164
第160図　遺構変遷図③中世Ⅱ・Ⅲ (13～15世紀代) ‥ 165～166

表目次

第1表　奥白方中落遺跡から出土した
隆平永寶の銘同位体比値 ····· 86
第2表　奥白方中落遺跡石器集計表 ····· 99
第3表　奥白方中落遺跡微細遺物一覧表 ····· 105
中東遺跡　土器観察表 (1) ····· 170
中東遺跡　土器観察表 (2) ····· 171
中東遺跡　土器観察表 (3) ····· 172
奥白方中落遺跡　土器観察表 (1) ····· 173
奥白方中落遺跡　土器観察表 (2) ····· 174
奥白方中落遺跡　土器観察表 (3) ····· 175
奥白方中落遺跡　土器観察表 (4) ····· 176
奥白方中落遺跡　土器観察表 (5) ····· 177
奥白方中落遺跡　土器観察表 (6) ····· 178
奥白方中落遺跡　土器観察表 (7) ····· 179
奥白方中落遺跡　土器観察表 (8) ····· 180
奥白方中落遺跡　土器観察表 (9) ····· 181
奥白方中落遺跡　土器観察表 (10) ····· 182
奥白方中落遺跡　土器観察表 (11) ····· 183
奥白方中落遺跡　土器観察表 (12) ····· 184
奥白方中落遺跡　土器観察表 (13) ····· 185
奥白方中落遺跡　土器観察表 (14) ····· 186
奥白方中落遺跡　土器観察表 (15) ····· 187
奥白方中落遺跡　石器観察表 (1) ····· 187
奥白方中落遺跡　石器観察表 (2) ····· 188
奥白方中落遺跡　金属観察表 ····· 188
奥白方南原遺跡　土器観察表 (1) ····· 189
奥白方南原遺跡　土器観察表 (2) ····· 190
奥白方南原遺跡　土器観察表 (3) ····· 191
奥白方南原遺跡　土器観察表 (4) ····· 192
奥白方南原遺跡　土器観察表 (5) ····· 193
奥白方南原遺跡　土器観察表 (6) ····· 194
奥白方南原遺跡　土器観察表 (7) ····· 195
奥白方南原遺跡　土器観察表 (8) ····· 196
奥白方南原遺跡　土器観察表 (9) ····· 197
奥白方南原遺跡　土器観察表 (10) ····· 198
奥白方南原遺跡　土器観察表 (11) ····· 199
奥白方南原遺跡　石器観察表 ····· 200
奥白方南原遺跡　鉄製品観察表 ····· 200
奥白方南原遺跡　木製品観察表 ····· 200

写真図版目次

巻頭図版1
　奥白方地区全景（東より）
巻頭図版2
　奥白方中落遺跡1区の弥生時代集落遺構（上空より）
　奥白方中落遺跡3区 SH06（東より）
　奥白方中落遺跡 不明遺構 SX01 古銭出土状況（東より）
　奥白方中落遺跡 SR02 土器集中A群（東より）
巻頭図版3
　奥白方中落遺跡 SR02 土器集中A群出土の部分黒斑土器（焼成破損土器）
　奥白方中落遺跡 SR02 土器集中A群出土の歪んだ土器（熱変形もしくは焼成破損土器）
巻頭図版4
　奥白方中落遺跡 SR02 土器集中A群出土の変形・剥離土器
　奥白方中落遺跡 SR02 土器集中A群出土の焼成破損土器（本文第89頁参照）
巻頭図版5
　奥白方中落遺跡 SR02 土器集中A群出土の焼成破損土器（本文105頁参照）
巻頭図版6
　奥白方中落遺跡　弥生時代竪穴住居跡出土磁着微細粒の拡大写真（約4.6倍 本文107頁参照）
巻頭図版7
　奥白方中落遺跡 弥生時代遺構出土の棒状鉄片
　奥白方中落遺跡出土のサヌカイト製大型剥片・打製石庖丁・楔状石核
　奥白方中落遺跡 SX01 出土の古銭（「隆平永宝」-皇朝十二銭）
巻頭図版8
　奥白方南原遺跡 B 区 ST01（南より）
　奥白方南原遺跡 B 区 ST01 出土の白磁
　奥白方南原遺跡 A 区 SE01 出土の卒塔婆
図版1　中東遺跡
　(1) 遺跡全景（東より）
図版2　中東遺跡
　(2) 遺跡から盛土山古墳及び弘田川中流域を望む（北西より）
　(3) 遺跡より弘田川河口方面を望む（南より）
図版3　中東遺跡
　(4) Ⅱ区遺構検出状況（西より）
　(5) Ⅱ区 SD01（西より）
　(6) Ⅰ区 SD01（東より）
図版4　中東遺跡
　(7) Ⅰ区 SX01（東より）
　(8) Ⅰ区 SX01 遺物出土状況（北より）
図版5　中東遺跡
　(9) Ⅰ区 SX01ミニチュア土器出土状況（南より）
　(10) Ⅰ区 SX01 太型蛤刃石斧出土状況（北より）
　(11) Ⅰ区 SX05 断面（東より）
　(12) Ⅱ区 SX04 断面（南より）
　(13) 奈良時代～室町時代前半期の遺物
図版6　中東遺跡
　(14) 焼成時に表面が剥離した土器（弥生土器　壺）
　(15) 製塩土器
図版7　中東遺跡
　(16) 須恵器装飾付器台と器財埴輪
　(17) ミニチュア土器・太型蛤刃石斧・土器片転用の土製紡錘車
図版8　奥白方中落遺跡
　(1) 1区遺構分布状況（北より）
　(2) 1区完掘全景（クレーン撮影）
図版9　奥白方中落遺跡
　(3) 2区完掘全景（クレーン撮影）
　(4) 3区完掘全景（クレーン撮影）
図版10　奥白方中落遺跡
　(5) 4区西側完掘全景（西より）
　(6) 3区調査状況（東より）
　(7) 4区東側遺構検出状況（南より）
図版11　奥白方中落遺跡
　(8) 4区東側完掘全景（南より）
　(9) 5区遺構検出状況（西より）
図版12　奥白方中落遺跡
　(10) 1区 SH01 完掘状況（クレーン撮影）
　(11) 1区 SH01（SP005）断面（南より）
　(12) 1区 SH01（SP010）断面（南より）
　(13) 1区 SH01（SP031）断面（南より）
　(14) 1区 SH01 中央土坑検出状況（北より）
図版13　奥白方中落遺跡
　(15) 1区 SH02 検出状況（北より）
　(16) 1区 SH02（SP063）断面（南より）
　(17) 1区 SH02（SP069）断面（北より）
　(18) 1区 SH02 壁溝断面（西より）
　(19) 1区 SH02 中央土坑断面（東より）
図版14　奥白方中落遺跡
　(20) 1区 SH02·03 完掘状況（クレーン撮影）
　(21) 1区 SH03 貼床検出状況（南より）
図版15　奥白方中落遺跡
　(22) 1区 SH03 断面（北より）
　(23) 1区 SH03 中央土坑断面（西より）
　(24) 1区 SH03 中央土坑土器出土状況（北より）
　(25) 1区 SH03（SP051）打製石庖丁出土状況（東より）
　(26) 1区 SH03 壁溝遺物出土状況（北より）
　(27) 1区 SH03 北東部壁溝内の礎板痕跡検出状況（北より）
　(28) 1区 SH03 壁溝断面（南より）
図版16　奥白方中落遺跡
　(29) 2区 SH04 完掘状況（クレーン撮影）
　(30) 2区 SH04 ミニチュア土器出土状況（東より）
　(31) 2区 SH05 床面検出状況（西より）
図版17　奥白方中落遺跡
　(32) 2区 SH05 断面（南より）
　(33) 2区 SH05 床面検出状況（西より）
　(34) 2区 SH05 中央土坑焼土（南より）
　(35) 2区 SH05（SP275）サヌカイト出土状況（西より）
　(36) 4区 SH06 床面検出状況（西より）
図版18　奥白方中落遺跡
　(37) 4区 SH06 完掘状況（東より）
　(38) 4区 SH06 壁溝断面（西より）
　(39) 4区 SH06 床面叩き石出土状況（南より）
　(40) 4区 SH06 鍛冶炉断面（上面より）
　(41) 4区 SH06 中央土坑鉄片出土状況（上面より）
図版19　奥白方中落遺跡
　(42) 4区 SH07·SD04 完掘状況（南より）
　(43) 4区 SH07 断面（西より）
図版20　奥白方中落遺跡
　(44) 4区 SH07 断面（西より）

(45) 4区 SH07 床面直上鉄器出土状況（西より）
(46) 4区 SH07 床面直上叩き石出土状況（南より）
(47) 5区 SH08 完掘状況（クレーン撮影）
図版 21 奥白方中落遺跡
(48) 5区 SH08 中央土坑断面（北より）
(49) 5区 SH08 東端中央土坑断面（東より）
(50) 1区 SB01 完掘状況（西より）
(51) 1区 SB01（SP056）断面（北より）
(52) 1区 SB01（SP056）断面（北より）
図版 22 奥白方中落遺跡
(53) 1区 SB02 完掘状況（クレーン撮影）
(54) 1区 SB02 完掘状況（東より）
図版 23 奥白方中落遺跡
(55) 1区 SB02（SP080）完掘（西より）
(56) 1区 SB02（SP080）作業風景（北より）
(57) 1区 SB02（SP080）検出状況（北より）
(58) 1区 SB02（SP091）断面（東より）
(59) 4区・2区にまたがる SB03 検出状況（南より）
図版 24 奥白方中落遺跡
(60) 4区 SB03（SP511）断面（西より）
(61) 2区 SB03（SP298）断面（南より）
(62) 3区 SB04（SP451）断面（西より）
(63) 3区 SB04（SP454）断面（西より）
(64) 3区 SB04 完掘状況（クレーン撮影）
図版 25 奥白方中落遺跡
(65) 3区 SB05・06・08 完掘全景（クレーン撮影）
(66) 3区 SB05（SP450）
(67) 3区 SB05（SP435）断面（東より）
(68) 3区 SB05（SP435）断面（東より）
(69) 3区 SB06（SP426）断面（西より）
図版 26 奥白方中落遺跡
(70) 4区 SB07（SP541）断面（南より）
(71) 4区 SB07（SP535）断面（南より）
(72) 4区 SK02 断面（北より）
(73) 4区 SK02 礫取り上げ後の炭化物（南より）
(74) 4区 SK02 完掘状況（北より）
図版 27 奥白方中落遺跡
(75) 1区 SD01 断面・遺物出土状況（北より）
(76) 1区 SD01, SD02 切り合い部（西より）
(77) 1区 SD02 西側床面（西より）
(78) 1区 SD02 断面（西より）
(79) 1区 SD02 断面（西より）
(80) 2区北壁断面（南より）
(81) 2区 SD03 遺物出土状況（南より）
(82) 1区 SD03 サヌカイト塊出土状況（北より）
図版 28 奥白方中落遺跡
(83) 4区 SD04 検出状況（南より）
(84) 2区 SD05（東より）
図版 29 奥白方中落遺跡
(85) 1区 SB09（北より）
(86) 1区 SB09（SP042）断面（北より）
(87) 1区 SB09（SP041）断面（北より）
(88) 1区 SB09（SP025）断面（南より）
(89) 4区 SB14 検出状況（北より）
図版 30 奥白方中落遺跡
(90) 4区 SB16 完掘状況（南より）
(91) 5区全景（東より）
図版 31 奥白方中落遺跡
(92) 3区 SE01 完掘状況（西より）
(93) 3区 SE01 断面（北より）
(94) 3区 SE01 土師質土器小皿出土状況（西より）
(95) 2区 SX01 生粘土塊想定配置（西より）
(96) 2区 SX01 生粘土塊検出状況（南より）
図版 32 奥白方中落遺跡
(97) 2区 SX01 断ち割り断面（南より）
(98) 5区 SK03 断面（南より）
図版 33 奥白方中落遺跡
(99) 5区 SR01 石錘出土状況（北より）
(100) 5区 SR02 土器集中範囲 B 出土状況（南より）
(101) 3区 SR02 土器集中範囲 A 検出状況（東より）
図版 34 奥白方中落遺跡
(102) 5区 SR02 土器集中範囲 C 検出状況（北より）
(103) 1区 SR05 段丘崖堆積層断面（西より）
図版 35 奥白方中落遺跡
(104) 2区 SD03（南より）
(105) 現地説明会風景
図版 36 奥白方中落遺跡
(106) SH01 出土遺物
(107) SH02 出土遺物
(108) SH03 出土遺物（1）
図版 37 奥白方中落遺跡
(109) SH03 出土遺物（2）
図版 38 奥白方中落遺跡
(110) SH03 出土遺物（3）
(111) SH03 出土遺物（4）
(112) SH04 出土遺物
図版 39 奥白方中落遺跡
(113) SH05 出土遺物
(114) SH06 出土遺物
図版 40 奥白方中落遺跡
(115) SH07 出土遺物
(116) SB01 出土遺物
(117) SB01・02 出土遺物
図版 41 奥白方中落遺跡
(118) SB03 出土遺物
(119) SB04 出土遺物
図版 42 奥白方中落遺跡
(120) SK02 出土遺物（1）
図版 43 奥白方中落遺跡
(121) SK02 出土遺物（2）
(122) SD01 出土遺物
図版 44 奥白方中落遺跡
(123) SD02 出土遺物（1）
図版 45 奥白方中落遺跡
(124) SD02 出土遺物（2）
(125) SD03 土器集中部出土遺物（1）
図版 46 奥白方中落遺跡
(126) SD03 土器集中部出土遺物（2）
図版 47 奥白方中落遺跡
(127) SD03 東側肩部出土遺物（1）
図版 48 奥白方中落遺跡
(128) SD03 東側肩部出土遺物（2）
図版 49 奥白方中落遺跡
(129) SD03 出土遺物（1）
図版 50 奥白方中落遺跡
(130) SD03 出土遺物（2）
図版 51 奥白方中落遺跡
(131) SD03 上層出土遺物（1）
図版 52 奥白方中落遺跡
(132) SD03 上層出土遺物（2）

(133) SD05 出土遺物
図版 53 奥白方中落遺跡
(134) SB12 出土遺物
(135) SB13 出土遺物
(136) SE01 出土遺物
図版 54 奥白方中落遺跡
(137) SR02 土器集中部 A 出土遺物 (1)
図版 55 奥白方中落遺跡
(138) SR02 土器集中部 A 出土遺物 (2)
図版 56 奥白方中落遺跡
(139) SR02 土器集中部 A 出土遺物 (3)
図版 57 奥白方中落遺跡
(140) SR02 土器集中部 A 出土遺物 (4)
(141) SR02 土器集中部 A 出土遺物 (5)
(142) SR02 土器集中部 B 出土遺物 (1)
図版 58 奥白方中落遺跡
(143) SR02 土器集中部 A 出土遺物 (6)
図版 59 奥白方中落遺跡
(144) SR02 土器集中部 A 出土遺物 (7)
図版 60 奥白方中落遺跡
(145) SR02 土器集中部 A 出土遺物 (8)
図版 61 奥白方中落遺跡
(146) SR02 土器集中部 A 出土遺物 (9)
図版 62 奥白方中落遺跡
(147) SR02 土器集中部 A 出土遺物 (10)
図版 63 奥白方中落遺跡
(148) SR02 土器集中部 B 出土遺物 (2)
図版 64 奥白方中落遺跡
(149) SR02 土器集中部 C 出土遺物
(150) 柱穴出土遺物 (1)
図版 65 奥白方中落遺跡
(151) SR05 出土遺物
(152) 柱穴出土遺物 (2)
図版 66 奥白方中落遺跡
(153) 柱穴出土遺物 (3)
図版 67 奥白方中落遺跡
(154) 石臼
(155) 石臼未製品
図版 68 奥白方中落遺跡
(156) 打製石庖丁・楔状石核
(157) 打製石庖丁・楔状石核
図版 69 奥白方中落遺跡
(158) 磨滅刃器
(159) スクレイパー
(160) 大型剥片・分割石核
図版 70 奥白方中落遺跡
(161) 楔状石核
(162) 石斧類 (抉状片刃石斧・扁平片刃石斧・太形蛤刃石斧)
図版 71 奥白方中落遺跡
(163) 叩き石
(164) 石錘 (有溝石錘・礫石錘)
図版 72 奥白方中落遺跡
(165) 砥石
(166) 2区 SX01 周辺出土の焼土
図版 73 奥白方中落遺跡
(167) 弥生時代遺構出土の微細遺物顕微鏡写真
図版 74 奥白方南原遺跡
(1) A～D区遠景 (背後に天狗山) (北東)
(2) A区南部 完掘状況 (東)
図版 75 奥白方南原遺跡
(3) A区 SD01 断面 (南)
(4) A区 SD01 遺物出土状況 (南) (1)
図版 76 奥白方南原遺跡
(5) A区 SD01 遺物出土状況 (南) (2)
(6) A区 SB02 検出状況 (南)
図版 77 奥白方南原遺跡
(7) A区 SE01 本塔婆出土状況 (南)
(8) A区 SE01 石臼 (S1) 出土状況 (東)
図版 78 奥白方南原遺跡
(9) A区 SE01 断ち割り断面 (北)
(10) A区 SE02 曲物検出状況 (南) (1)
図版 79 奥白方南原遺跡
(11) A区 SE02 曲物検出状況 (南) (2)
(12) A区 SE02 断面 (南)
図版 80 奥白方南原遺跡
(13) A区 SE02 曲物下位石組み検出状況 (南)
(14) A区 SE02 曲物下位石組み検出状況 (北)
図版 81 奥白方南原遺跡
(15) A区 SX04 完掘状況 (東)
(16) B区 SD02、SD08 合流部礫群出土状況 (南) (1)
図版 82 奥白方南原遺跡
(17) B区 SD02、SD08 合流部礫群出土状況 (南) (2)
(18) B区 ST01 人骨出土状況 (南)
図版 83 奥白方南原遺跡
(19) B区 ST01 人骨出土状況 (西)
(20) B区 ST01 人骨出土状況 (南東)
図版 84 奥白方南原遺跡
(21) B区 ST01 断面 (南)
(22) B区 ST01 断面 (西)
図版 85 奥白方南原遺跡
(23) B区 ST02 断面 (北)
(24) B区 ST02 断面 (西)
図版 86 奥白方南原遺跡
(25) B区中央部 遺構完掘状況 (東)
(26) B区中央部 遺構完掘状況 (南上空)
図版 87 奥白方南原遺跡
(27) B区 五輪塔表採状況 (西)
(28) C区 全景 (西)
図版 88 奥白方南原遺跡
(29) C区 SD01 遺物出土状況 (南)
(30) D区西部全景 (東)
図版 89 奥白方南原遺跡
(31) D区東部全景 (西)
(32) F区①東壁断面 (西)
図版 90 奥白方南原遺跡
(33) F区② SR01 断面 (西)
(34) F区 SD01 完掘状況 (東)
図版 91 奥白方南原遺跡
(35) F区 SR01 遺物出土状況 (東)
(36) F区① SR01 完掘状況 (東)
図版 92 奥白方南原遺跡
(37) I区 SR01 土器出土状況 (調査区北壁) (南)
(38) I区東部 遺構完掘状況 (西)
図版 93 奥白方南原遺跡
(39) I区 SP14 土器出土状況 (上位) (北) (1)
(40) I区 SP14 土器出土状況 (上位) (北) (2)
図版 94 奥白方南原遺跡
(41) I区 SP14 土器出土状況 (下位) (南)
図版 95～104 奥白方南原遺跡出土遺物

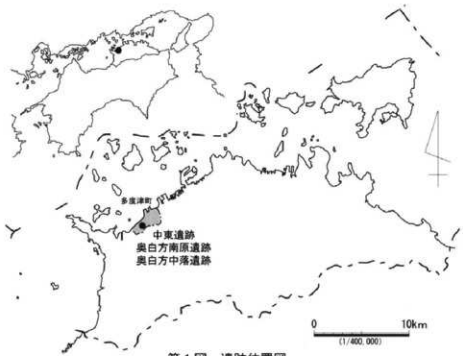
第１章　調査に至る経緯と調査の経過

県道多度津丸亀線建設に伴う奥白方地区の埋蔵文化財のとりあつかいについては、路線に隣接する県史跡「盛土山古墳」の保護協議（木下 1998）を先行して行い、その後平成 10 年度・平成 15 年度に香川県教育委員会文化行政課が路線内の試掘調査を実施し、中東遺跡・奥白方南原遺跡・奥白方中落遺跡を確認した。このうち中東遺跡については、平成 14 年度に 640㎡の発掘調査を実施し、すでに調査報告書（宮崎 2003）を刊行している。

平成 16 年度の発掘調査は、中東遺跡の残地 355㎡、奥白方南原遺跡 3,611㎡、奥白方中落遺跡 1,226㎡を実施した。このうち、中東遺跡と奥白方中落遺跡は平成 16 年度から設けた小規模遺跡発掘調査班が担当した。小規模遺跡発掘調査班は県土木部関係の小規模遺跡を効率的に調査するために設けた調査体制で、文化財専門員古野徳久、同森下英治、調査技術員中里伸明、臨時職員宮西（旧姓細川）真由美が発掘調査にあたった。奥白方南原遺跡は、大規模遺跡調査班が対応し、主任技師長井博志、技師新谷政徳、調査技術員宮武直人、臨時職員東條俊子・門脇範子が発掘調査にあたった。現地調査は中東遺跡を平成 16 年 4 月 1 日から 4 月 30 日まで、奥白方南原遺跡を平成 16 年 4 月 1 日から 9 月 30 日まで、奥白方中落遺跡を平成 16 年 5 月 1 日から 7 月 31 日まで行った。6 月 12 日には奥白方南原遺跡の鎌倉時代遺構および奥白方中落遺跡の弥生時代遺構を中心として現地説明会を開催した。説明会には地元住民を中心に約 350 人の参加があった。

整理作業は、中東遺跡調査分を平成 17 年 1 月 1 日から 1 月 31 日まで、それ以外の調査分を平成 19 年 4 月から 11 月に埋蔵文化財センターで行った。平成 16 年度の整理作業は上記の小規模遺跡発掘調査班が行った。平成 19 年度の整理作業は、奥白方中落遺跡を森下、奥白方南原遺跡を長井が主に担当した。なお、奥白方中落遺跡出土古銭の鉛同位体分析を別府大学平尾良光氏に依頼し、奥白方南原遺跡出土卒塔婆の樹種同定を吉田生物研究所に委託し、それらの成果を本文中に収録した。

発掘調査・整理体制は以下のとおりである。



第１図　遺跡位置図

平成16年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

課長	北原和利
総務・芸術文化グループ	
課長補佐	森岡 修
主任	香川浩章
主任主事	八木秀憲
文化財グループ	
課長補佐	大山真充
主任	山下平重
文化財専門員	松本和彦

香川県埋蔵文化財センター

所長	中村仁
次長	渡部明夫
総務課	
課長	野保昌宏
係長	松崎日出聴
主査	塩崎かおり
主任主事	田中千晶
調査課	
課長	藤好史郎
参事	河野浩征
文化財専門員	古野徳久　森下英治
主任技師	長井博志
技師	新谷政徳
調査技術員	中里伸明　宮武直人
臨時職員	東條俊子　門脇範子
	宮西（旧姓 細川）真由美

平成19年度

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

課長	鈴木健司
課長補佐	武井喜紀
副主幹	古田泉
主任	林照代
文化財グループ	
課長補佐	藤好史郎
主任	森格也
文化財専門員	信里芳紀

香川県埋蔵文化財センター

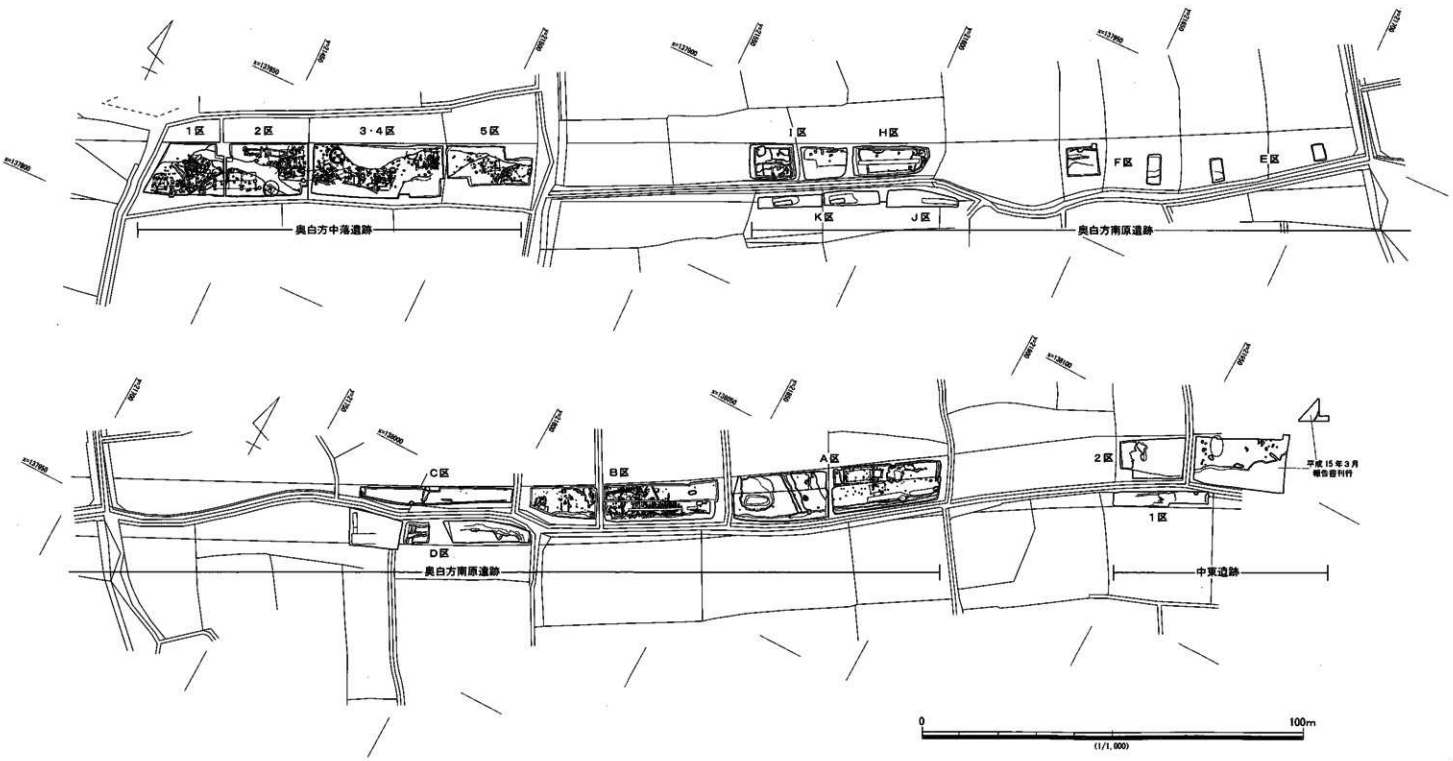
所長	渡部明夫
次長	廣瀬常雄
総務課長	野口孝一
主任	宮田久美子
	嶋田和司
	古市和子
資料普及課長（兼）整理課長	廣瀬常雄
主任文化財専門員	西村尋文
文化財専門員	森下英治
	蔵本晋司
	宮崎哲治
	長井博志

第2章　遺跡の立地と環境

第1節　自然環境

今回調査を行った仲多度郡多度津町奥白方地区は、県中央部丸亀平野の北西端に位置する。調査地近辺を流れる観音童川は、天霧山北麓の谷水を水源として狭い谷部を流下しながら周辺に河岸段丘面を形成し、河口付近で現在の弘田川と合流してすぐに瀬戸内海に注ぐ。河川延長1,100ｍ（河川法による2級水系県管理区間距離）という、小規模なこの川の流域が奥白方地区である。

調査地北側には黒藤山丘陵、南に天霧山丘陵が迫り、丘陵斜面地はブドウ栽培が盛んである。田地は標高10～20ｍの河川沿いと、10ｍ以下の平坦な低地に展開する。発掘調査を行った平成16年夏は、台風の上陸が特に多く、洪水警報もたびたび発令されるなど、調査中に大雨の影響を受けた。今回の発



第２図　調査区位置図（1/1,000）

掘調査でも、弥生時代以後の洪水埋没河川跡が多数見つかり、狭隘な谷地形を脅かす自然現象が古くから人々の憂慮を招いたことを実感した。

今回調査を実施した地点は、観音堂川に沿った東西延長 610 m、幅 15 mの東西に細長い範囲であり、このうち最も標高の低い中東遺跡周辺は、現在は平坦な水田地である。周辺水田地の水利は、主に天霧山の谷水を利用する。また、南方の水田が利用する満濃用水の余水も相当量流入する。

調査地の南にそびえる標高 360 mの天霧山は、大麻山山塊の北部に位置し、瀬戸内海に向けて突出する独立丘陵である。山頂部に硬質の安山岩（讃岐岩）、その下に安山岩もしくは流紋岩が広く分布する。これらは 1,500 万年前の瀬戸内火山活動で形成された岩石である。石槌石の斑晶をもつ流紋岩が知られ、弥生時代の磨製石庖丁の素材などに利用されている。火山岩層下位の基盤層は領家花崗岩類である。このうち天霧山の花崗岩は荘内半島から七宝山塊に連なる花崗岩と同質で、角閃石・雲母などの鉱物を含む花崗閃緑岩である。一方で同じ弘田川水系でも善通寺地域の大麻山山塊の岩質は、角閃石を含まない黒雲母花崗岩である。低地の沖積層を構成する砂粒には、少なからず差異が生じているものと考えられる。

中東遺跡周辺の微地形は、西から東に緩やかに下降し、さらに南から北への幅約 10 mの埋没低地が当該道路予定地を横断する。埋没低地の東側は平成 11 年度の調査で検出した中世微高地にあたる。すなわち、中東遺跡における今回の調査地は、西側の奥白方南原遺跡に続く微高地と、平成 11 年度調査の微高地に挟まれた僅かな低地部に相当する。

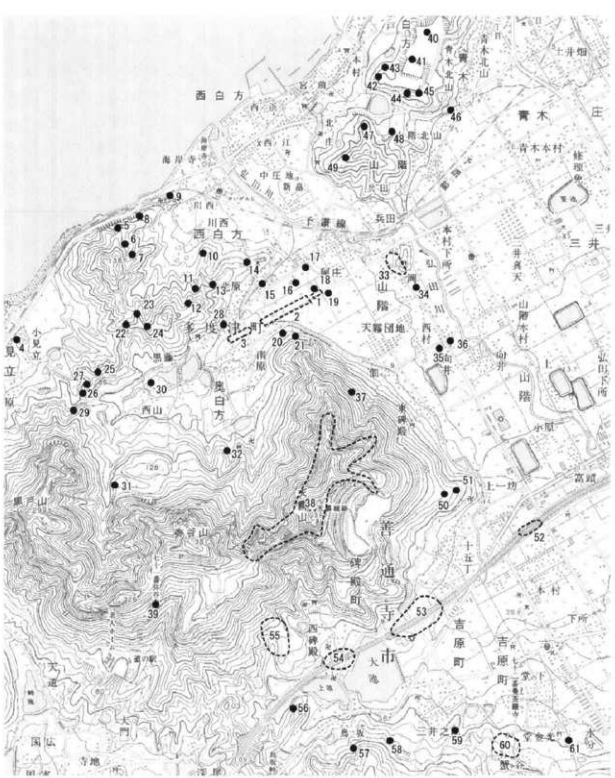
奥白方南原遺跡は谷部の緩傾斜地と水田の平坦面との間の傾斜変換線を跨ぐ位置にある。傾斜変換線より谷奥側（山側）は、周辺より一段低くなっており、河川域が想定される。また調査区内を東西に縦断する現存農道は周辺条里型地割に合致する。

奥白方中落遺跡は、観音堂川に最も接した位置にあり、現在の河川に向かって南から北に張り出す段丘地形の先端部付近、標高 9～12 mの範囲に立地する。調査地の南側にはこの谷部では最も広い段丘面が広がっており、遺跡は調査地の南にさらに広がるものと推定される。

第２節　歴史環境

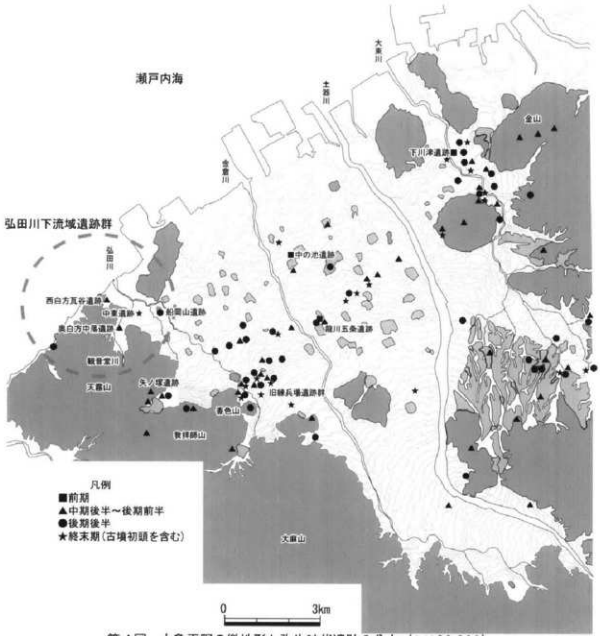
今回報告する遺跡から北約 1 kmに所在する西白方瓦谷遺跡では、この地域で初めて縄文時代中期の土器が出土した。遺跡の調査は現在進行中だが今のところ海浜部でありながら貝塚を形成した形跡はない。瀬戸内海対岸の岡山では同様地形で縄文時代の貝塚が多く知られるが、香川側ではこの地域に限らず貝塚はほとんど形成されない。弥生時代以後の遺跡は比較的多い。奥白方南原遺跡では弥生中期の河川跡が確認され、近隣に当該時期の集落が予想される。また奥白方中落遺跡では弥生中期から後期の遺構を多数検出した。谷あいの集落の一角である。一方、調査地北側の東北浦丘陵では、かつて緑泥片岩製の磨製石庖丁が採集されている（川畑迪氏採集資料）。器体両側に抉りを入れる、伊予地域に特徴的な形式で、搬入品と考えられる。また、調査地東側の弘田川縁辺に、「船岡山」と呼ばれる低独立丘陵がある。その西裾において、家屋建築工事に伴う掘削により弥生時代後期～終末期の土器群が出土した（岡 1999）。壺は複合口縁のものが目立つ。

また、今回調査した各遺跡や船岡山遺跡で出土した弥生後期～終末期の土器は、胎土中に金雲母を多く含む茶褐色の土器片が多い。この胎土は、弘田川沿いに 3km 南の稲木遺跡や 4km 南の旧練兵場遺跡の土器に一定量認めることができる。旧練兵場遺跡で出土したこの胎土の蛍光Ｘ線分析では、下川津Ｂ



1	中東遺跡	(弥生・古墳)	17	中東3号墳	(古墳)	33	船岡山遺跡	(弥生)	49	西谷古墳	(古墳)
2	奥白方南原遺跡	(中世)	18	中東2号墳	(古墳)	34	桑木古墳	(古墳)	50	東西神社古墳群	(古墳)
3	奥白方中落遺跡	(弥生・古代)	19	徳土山古墳	(古墳)	35	西村塚1号墳	(古墳)	51	天霧山麓シスト群	(古墳)
4	古見立古墳	(古墳)	20	向井原1号墳	(古墳)	36	西村塚2号墳	(古墳)	52	上一坊遺跡	(弥生)
5	経尾山1号墳	(古墳)	21	向井原2号墳	(古墳)	37	箱式石棺	(古墳)	53	矢ノ塚遺跡	(弥生～中世)
6	経尾谷1号墳	(古墳)	22	黒藤山1号墳	(古墳)	38	天霧城跡	(中世)	54	西碑殿遺跡	(弥生)
7	経尾谷2号墳	(古墳)	23	黒藤山2号墳	(古墳)	39	弥谷寺磨崖仏	(中世)	55	月信遺跡	(弥生)
8	御産盥山古墳	(古墳)	24	黒藤山3号墳	(古墳)	40	転石古墳	(古墳)	56	鶴背古墳	(古墳)
9	経納山古墳	(古墳)	26	鳥越1号墳	(古墳)	41	前山塚古墳	(古墳)	57	鳥坂古墳群	(古墳)
10	東北浦古墳	(古墳)	27	鳥越2号墳	(古墳)	42	向山1号墳	(古墳)	58	火上山古墳	(古墳)
11	陶窯跡	(古墳)	25	鳥越3号墳	(古墳)	43	向山2号墳	(古墳)	59	中山古墳	(古墳)
12	黒藤山4号墳	(古墳)	28	北ノ前古墳	(古墳)	44	来付1号墳	(古墳)	60	曼荼羅寺南遺跡	(弥生)
13	黒藤山5号墳	(古墳)	29	風戸山古墳	(古墳)	45	来付2号墳	(古墳)	61	曼荼羅寺古墳	(古墳)
14	朝日山古墳	(古墳)	30	西山古墳	(古墳)	46	宿地古墳	(古墳)			
15	寺前古墳	(古墳)	31	弥谷山古墳	(古墳)	47	徳公塚古墳	(古墳)			
16	中東1号墳	(古墳)	32	八王寺古墳	(古墳)	48	鳥打古墳	(古墳)			

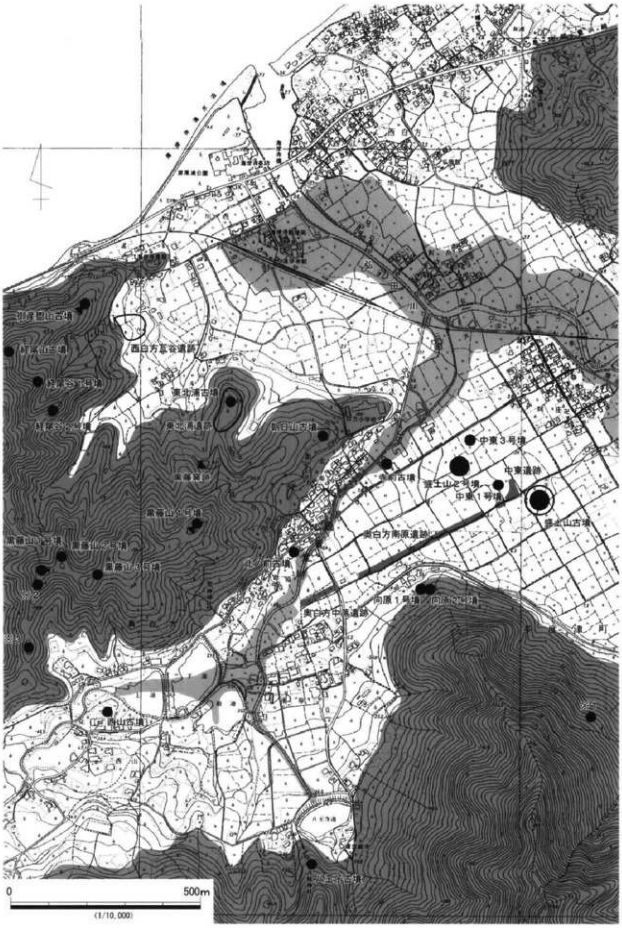
第3図　周辺遺跡位置図（1/25,000）



第４図　丸亀平野の微地形と弥生時代遺跡の分布（1/120,000）

類（大久保 1995）と同じ胎土である高松市上天神遺跡出土土器とは、異なるグループに入る胎土であることが確認されている（白石 1995）。当該地域で生産された土器の移動を検討する材料となり得る。

当遺跡周辺の丘陵には多くの古墳が分布する。当該遺跡の北側丘陵上には黒藤山古墳群がある。丘陵上の黒藤山４号古墳は全長 35 mの前方後円古墳である。後円部裾には拳大の円礫が数多く分布し、葺石が想定される。埴輪はこれまで採集されたことはなく、元来埴輪はもたない古墳と考えられる。その北側尾根上には、東北浦古墳がある。かつて箱式石棺より捩文鏡が出土している。さらに北側の丘陵に御産盥山古墳がある。前方部が発達した平面形状で側面を眼下の瀬戸内海に向ける。墳丘には現在も埴輪が散布し、吉備系の特殊器台形埴輪片も採集されている。これ以外にも丘陵上には前期から中期の円墳が多数分布する。奥白方中落遺跡から西に約 700 mの地点、観音堂川沿いの段丘上には、かつて三角縁神獣鏡が出土した西山古墳が存在したとされる。地図に基づいて現地を確認したが、整地され現存しない。地形的にみると、古墳が立地するにはあまり適切とは言えない地形で、地元の聞き取りなどを行っ



第5図　奥白方周辺遺跡群詳細図（1/10,000）

たが、確実な古墳の位置を確かめることはできなかった。出土したとされる三角縁神獣鏡は、張氏作四神四獣鏡で、京都府椿井大塚山古墳、奈良県黒塚古墳、愛知県奥津社古墳出土鏡と同笵鏡である。南西の天霧山丘陵中腹では、長さ約4.2mの竪穴式石室をもつ弥谷古墳がある。安山岩塊石を小口積みした石室で、安山岩柱状礫による天井石が2～3石残る。墳丘は滅失部分が多いが、遺存部から復元すると直径15mほどの円墳となる。以上の古墳は前期に属する古墳である。

中東遺跡の隣接地には二段築成で二重の周濠をもつ県史跡盛土山古墳がある。墳丘基底部の直径が約40mで、大正4年に開墾された際、箱式石棺より銅鏡・硬玉製勾玉・巧瑠製勾玉・碧玉製管玉・ガラス製小玉・トンボ玉・雁木玉・銅鈴・鉄刀が出土した。銅鏡は、画文帯環状乳四神四獣鏡で、面径19cm前後、8個の環状乳を持つ。これらの出土品は現在東京国立博物館に収蔵されている。近年の周濠調査で出土した埴輪は、円筒埴輪3期（川西編年）に盾形や家形などの形象埴輪を伴う。5世紀前半ごろに位置づけられる（木下1998）。中期の古墳である。

天霧山丘陵の急峻な斜面に、横穴式石室の向井原古墳や、小石室墓などがある。向井原古墳は1墳丘2石室の古墳で、現存する第一石室は安山岩を主体とする川原石を積み上げたもので、基底石とそれより上の積み石との大きさがさほど変わらない6世紀前半の石室である。一方、黒藤山丘陵裾部に現存する北ノ前古墳は、玄門立柱をととめ、奥壁は大型の立石を基底石とする大型石室墳で、6世紀後半から末ごろに位置づけられる。

古代の集落はこれまで見つかっていない。中世では南の天霧山丘陵頂部に天霧城が築かれる。香川氏の居城（秋山1983）とされ、東方尾根の発掘調査（斉藤・藤好1997）では中国産青花など輸入陶磁器などが出土している。

（第5図　凡例）
※1　天霧山東北斜面に位置する箱式石棺
※2　黒藤山1号墳の南約20mに位置する小円墳
※3　黒藤山1号墳の南約200mの丘陵背部に位置する小円墳で、墳頂部に石室石材と思われる塊石が散在。

第3章　中東遺跡2次調査

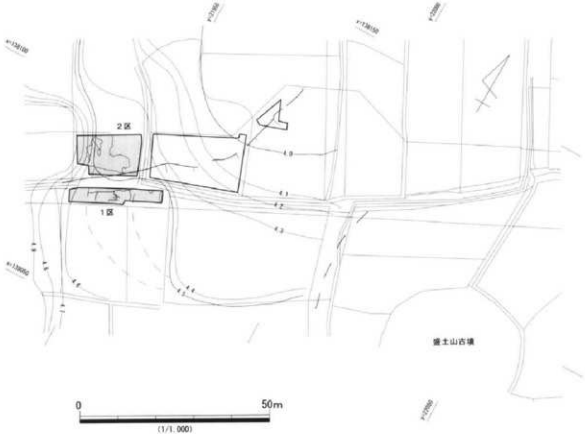
第1節　概要

調査対象範囲の中央やや南を、現条里型地割に合致する東西方向の畦道が通るため、調査区を南側と北側で区分けし、調査順にしたがって南側を1区・北側を2区と区分けした。ただし、遺構・遺物の内容及び土層序は、基本的に一連のものである。検出した遺構は条里型地割に合致する溝跡（SD01）1条、不明遺構4基がある。また、1区と2区にまたがって広がる、浅い窪地地形をSX01として報告した。

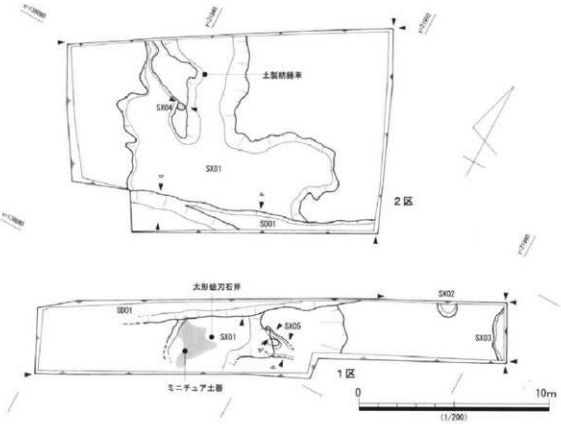
第2節　調査方法及び土層序

現耕作土及び旧耕作土を機械掘削で除去し、畦道に沿って東西方向に流れる溝跡を検出した。1区でその北側肩部・2区で南側肩部を確認した。また、この溝跡に切られるかたちで、古墳時代前期～奈良時代の遺物を含む包含層（褐灰色礫混粘質土層）が1区・2区に全体に広がる。これらを除去すると、遺物を多量に含む黒褐色礫混粘質土層が1区・2区の中央に広がるのを確認した。調査時には何らかの遺構埋土である可能性を考慮し、SX01の遺構名を付し、掘削及び遺物取り上げを行った。SX01は1区の中央やや西側で遺物出土量が特に多い。このため、土器群を分布状況からNo.1～8にグルーピングして取り上げた。遺物は弥生時代終末期～古墳時代前期を主とする。

基盤層は黄灰色粘土を基本とするが、調査区西側は基盤礫層が露出している。この礫層は隣接する奥白方南原遺跡に続いている。



第6図　調査区割図（1/1,000）



第7図　遺構配置図（1/200）

第3節　遺構・遺物

＜溝跡　SD01＞

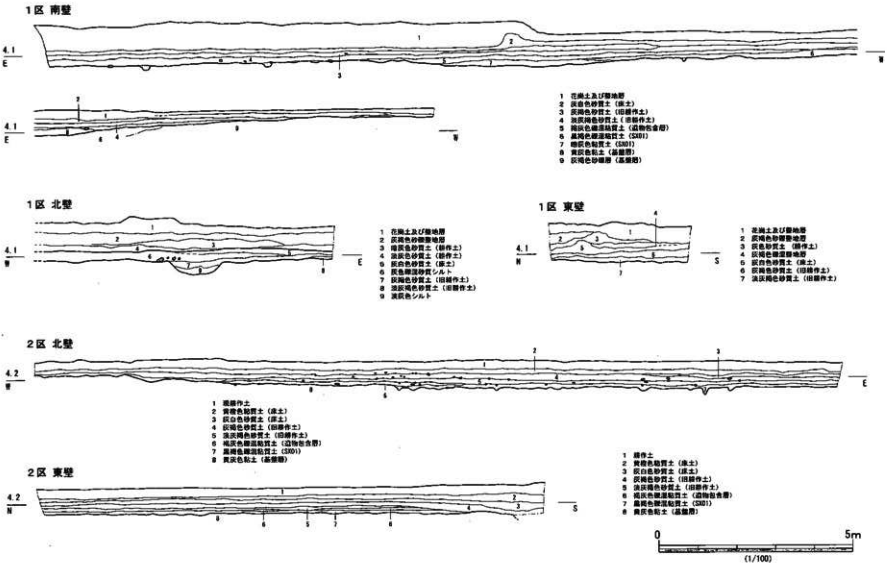
1区と2区を画する東西方向の畦道は、現状条里型地割の坪界線に合致する。これにほぼ重複して、1区北側と2区南側にまたがる溝跡SD01を確認した。溝跡内の堆積層は、灰青色～暗灰色の砂層を主とし、部分的に礫が含まれる。西側から東側に向けて、底場のレベルが低くなっており、この方向で緩やかに水の流れがあったことが想定できる。また、2区で検出した溝跡の断面形は、調査区南端で一旦最深部に至り、南に向かって上がり始める。一方、1区側の土層断面では、掘り直しの状況が観察できる。これらのことから、この溝跡は、継続的に使用される中で幾度かの再掘削を行ったものと判断できる。

出土遺物は、少量ではあるが2区側で確認できた。1は貼付高台を有する土師質土器坏である。12世紀頃のものと思われる。2は土師質土器坏。比較的浅いが、体部は内湾し、外傾度も弱い。13世紀後半～14世紀前半のものと思われる。3・4は土師質土器小皿である。

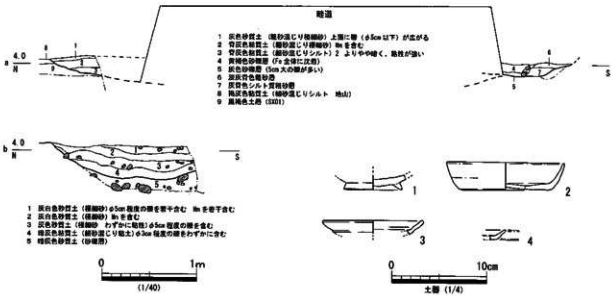
この溝跡は、8世紀の遺物を含む褐灰色礫混粘質土層の上面で検出したことから、掘削時期は8世紀以降と考える。また、出土遺物から14世紀中頃までには埋没している。ただし、SD01の大部分は、現畦道下にあるので、埋没時期はさらに下る可能性がある。

＜窪地地形 SX01＞

1区及び2区のほぼ中央は、緩やかな窪地となる。この自然地形をSX01とした。堆積層は黒褐色礫混粘質土層である。調査当初、遺構埋土の可能性も考えたが、明確な遺構は検出されなかった。遺物の出土量は多く、特に1区で集中的に出土したため、面的なまとまりでNo.1～8にわけて取り上げた。し



第8図　調査区土層図（1/80）



第９図　SD01 土層断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

かし、遺物内容の分布上の偏差は認められなかった。

出土遺物は弥生時代前期～中期に遡る可能性のあるものが若干認められるものの、ほとんどが弥生時代終末期～古墳時代前期の範疇に収まるものであり、比較的まとまっている。これは、当該期までに形成された窪地に、土器などを廃棄した状況と考えられる。したがって、調査区近辺には、当該期の集落が営まれていた可能性が想定される。

5～15は、土器集中部からの出土である。5は広口壺口縁部であり、外面に粘土紐を貼り付けた後、その上下を横ナデで調整し、刻目を施す。6はミニチュア土器の壺である。11は高坏脚部もしくは台付鉢の脚部である。16・17は壺の体部および底部、18は甕の体部及び底部である。このうち16の体部外面には、焼成時の破損による剥離が認められる（図版6）。また、二次的な被熱を受け、底部付近は非常に焼き締まり、堅緻になっている。SX01の他の土器には、土器焼成破損を示す資料は認められない。よって、破損品の廃棄という状況は窺えない。二次的に被熱していることからしても、何らかの用途で使用され、他の土器と同様に廃棄されたものと思われる。

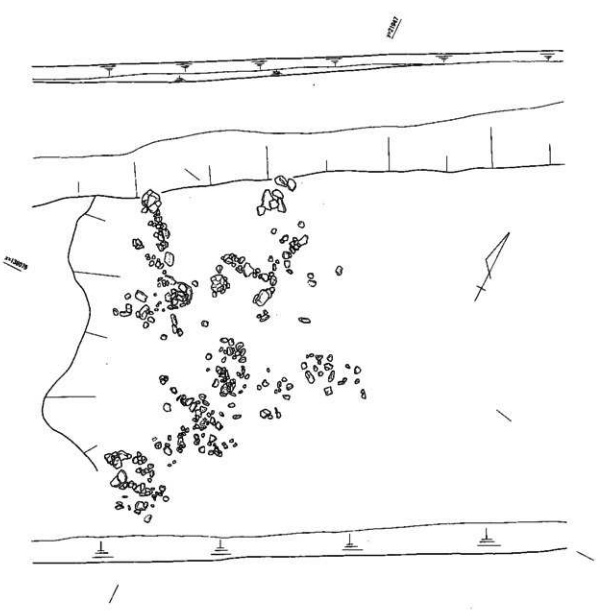
19～37は土器集中部以外のSX01出土遺物である。ただし、37の製塩土器は褐灰色礫混粘質土層に伴う可能性が高い。甕は叩き目を若干残すものが目立つ。また、口縁部は外傾度が強いものと弱いものがあり、強く外傾するものはやや薄く、端部が若干肥厚する。

＜その他の遺構＞

遺構の性格を明らかに出来なかったものをここで取り上げる。いずれも実測可能な遺物は出土しなかった。

SX02は楕円形を呈する土壙である。幅0.9 m、長さ0.75 m以上、深さ0.27 m。埋土は淡灰色シルト。SX03は1区東端に位置する不定形の土壙である。大半は調査区外に広がるものとみられる。埋土は淡灰褐色砂質土。SX01同様、窪地に堆積した層である可能性がある。

SX04はSX01内の北側にある中州状の微高地に位置する円形状の土壙である。直径0.4 m、深さ0.08 m。埋土は灰褐色シルト。

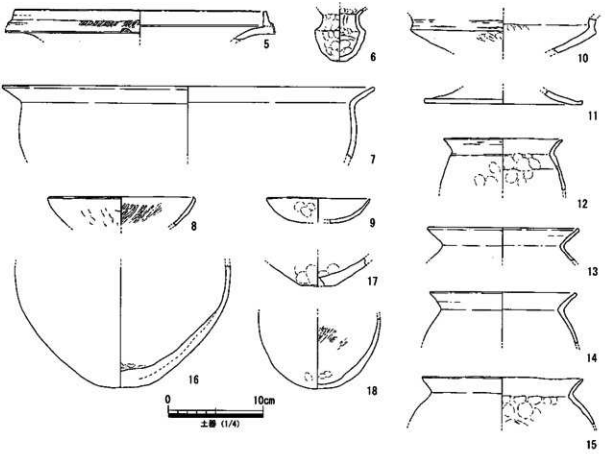


第10図　1区SX01土器群出土状況図・土層断面図（1/30）

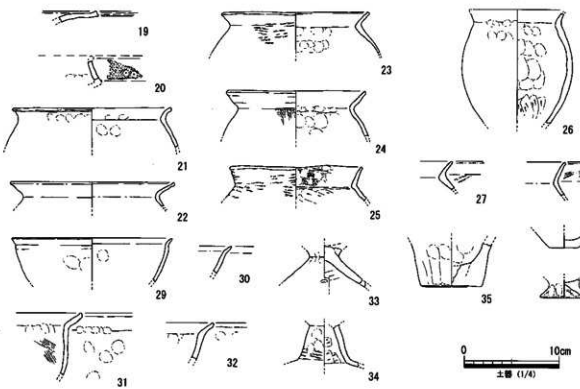
SX05は、2区で検出されたSX01の東側に隣接する。平面形は不定形で、SX01に向かって2条の溝跡が延びる。幅1.1m、長さ1.5m以上、深さ0.04m。埋土は黒褐色砂混粘質土。SX01と一連のものであろう。

＜包含層出土遺物＞

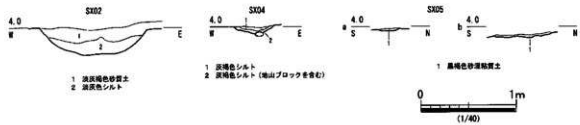
SX01の上に堆積する褐灰色礫混粘質土層よりまとまって出土した。このうち、壺(38)・甕(39)・鉢(40)はSX01出土のものと同様の特徴を有しており、同時期のものである。また、この層からは製塩土器が



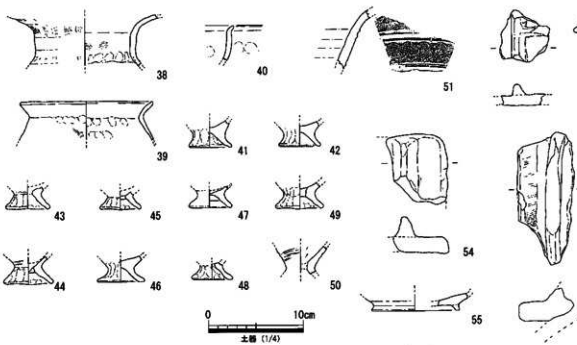
第 11 図　SX01 土器集中部出土遺物（1/4）



第 12 図　SX01 出土遺物（1/4）

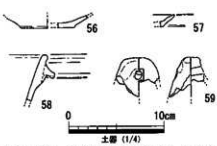


第13図　SX02・04・05土層断面図（1/40）



第14図　褐灰色礫混粘質土層出土遺物（1/4）

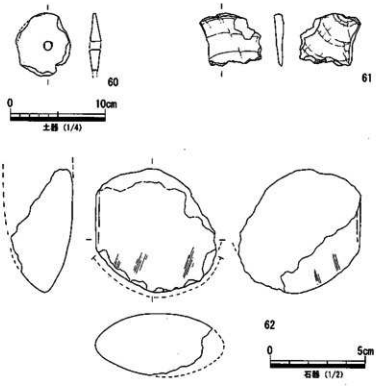
まとまって出土した（41～50）。44・50は体部下半が残っており、外面には平行叩きが認められる。47は脚部内面を指オサエした後にナデを施すが、それ以外の殆どは指オサエを明瞭に残す。また、殆どのものが底部を円盤充填法で成形している。これらの製塩土器もSX01と同時期のものと思われるが、SX01から殆ど出土していないことから、やや新しい時期の一群である。SX01の下限である古墳時代前期に位置付けておきたい。51は須恵器の装飾付器台、52～53は器財埴輪であり、本来古墳に伴う遺物である。このうち53は、剥離面の状況から盾形埴輪のように円筒部に接合するものと思われる。55は8世紀前半の須恵器坏であり、この層の下限を示す資料である。



第15図　その他の出土遺物（1/4）

＜その他の出土遺物＞

機械掘削などで出土した遺物である。56は削り出し高台を有する土師質土器坏、57は土師質土器小皿である。58は土師質土器の羽釜であり、鍔部下半に煤が多量に付着する。59は飯蛸壺で、吊手部上面は平坦に仕上げている。これらは本来SD01に伴うものであった可能性が高い。



第16図　土製品（1/4）・石器（1/2）

＜土製品・石器＞

SX01より土製紡錘車（60）及び太形蛤刃石斧（61）が、1区壁面よりサヌカイトの剥片（62）が出土した。これらはいずれも弥生時代前期～中期に遡る可能性がある。土製紡錘車は周縁部を指オサエで成形した後、全体をナデにより平滑に仕上げている。サヌカイトの剥片は刃部に二次加工が認められる。太形蛤刃石斧の石材は緑色岩で、刃部に敲打痕が認められることから、叩き石に転用されたものと考えられる。

第4節　まとめ

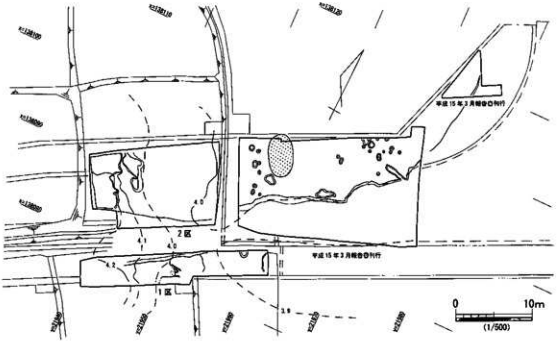
今回の発掘調査では、遺構密度が低く、性格を明らかに出来る遺構はほとんど検出されなかった。しかし、SD01・SX01および褐灰色礫混粘質土層からは、比較的まとまって遺物が出土しており、調査区近辺のおおまかな土地利用の変遷をうかがい知ることは可能である。

弥生時代終末期～古墳時代前期

SX01及びその上層（褐灰色礫混粘質土層）からは、弥生時代終末期～古墳時代前期の遺物がまとまって出土しており、近辺に集落が営まれた可能性があることが判明した。集落の位置を厳密に推定することは難しいが、調査区西側では基盤礫層が露出しており、微地形の復原から調査区の西側が微高地になっていたことが想定される（図17）。また、中東遺跡の西側に隣接する奥白方南原遺跡では弥生時代中期～後期の遺物が出土しており、ここでも近辺に集落が存在していたことが窺える。したがって、中東遺跡と奥白方南原遺跡の間に位置する微高地に集落が営まれた可能性が指摘できる。また、出土遺物では製塩土器が10点以上出土しており、当該期遺物の出土量に占める割合は比較的高い。つまり、中東遺跡の近辺に想定される集落は、海浜部の集落としての位置づけが可能であり、したがって当該期の汀線が中東遺跡のかなり近くにまで入り込んでいた状況が想定できよう。

弘田川河口の近辺で当該期の集落は今のところ他に確認されていないが、弥生時代中期～後期の集落遺跡としては、船岡山遺跡（岡1999）・奥白方中落遺跡が確認されており、当該期に至っても立地を変えながら集落が展開していたものと考えられる。一方、当該期には黒藤山4号墳、西山古墳が築造されているほか、備蔵畑の開墾によって消失したものや、未確認のものが黒藤山及び天露山の山麓一帯に展開していたものと想定される。これらの古墳を築造した集団の集落は、中東遺跡から想定される集落を含む、弘田川河口西岸もしくは奥白方盆地に求められる。

このような、土器製塩を生業とする海浜部の集落近辺に、前方後円墳が所在するという状況は、岡山県の牛窓半島、黒島に所在する製塩遺跡と前方後円墳との関係に近い。これらを営む集団は、「製塩・



第17図　微地形復元図（1/500）

漁労だけでなく、航海技術者として畿内と九州を結ぶ内海水運の担い手」との評価がなされている（川越 1992）。当該期の弘田川中流域には、旧練兵場遺跡を中心とした大規模な集落が形成されており、これらの大規模集落が他地域と交流する際には、中東遺跡を含む弘田川河口付近の海浜集団が大きな役割を担っていたものと思われる。

古墳時代中期後半

SX01の上に堆積する褐灰色礫混り粘質土層からは、前述した弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の遺物とは別に、古墳時代中期後半の遺物が比較的まとまって出土した。遺物はいずれも器財埴輪及び須恵器の装飾付器台の破片である。これらは本来古墳に伴うものであり、集落の存在を想定させるような遺物は認められなかった。中東遺跡の南東には盛土山古墳が隣接し、平成11年度調査（宮崎 2003）では古墳の周溝跡が検出されていることからしても、この辺りが墓域として利用されていたのは明らかである。今回の調査で出土した器財埴輪は、盛土山古墳で出土した器財埴輪と胎土・焼成が共通しており、また、装飾付器台は平成11年度調査の周溝跡より出土した須恵器とほぼ同じ時期のものであると思われる。

中世

条里溝跡SD01が検出された。SD01は、平成11年度調査時に検出されたSR01（宮崎 2003）と同じものである。したがって、これまで旧河道として認識されていたSR01が、条里溝跡であることが今回の調査で明らかとなった。存続時期を詳細に検討することは難しいが、出土遺物および土層序からは、8世紀を上限とし、幾度かの再掘削を繰り返して使用されながら、14世紀以降に埋没したものと考えられる。隣接する奥白方南原遺跡では、12世紀後半の井戸及び木棺墓が検出されており、平成11年調査時にもSR01から13世紀後半頃の土師質土器が出土していることから、近辺に居住域が存在していた可能性が高い。

第４章　奥白方中落遺跡

第１節　概要

観音堂川は奥白方地区の谷間を深く下刻して流れる。その中流域の南岸には小規模な河岸段丘が形成される。奥白方中落遺跡は、その段丘面の緩やかな斜面に立地する遺跡である。調査地は、段丘面の先端付近で、おおむね河川に沿う延長約 100 m、幅 15 mの範囲が対象である。調査地は西の上流側と東の下流側との間で約 1.2 mの比高差がある。なお、調査地の南側背後にはさらに緩傾斜の段丘面が続く。

調査区名称は、調査順序にあわせて上流側を１区、下流側を５区としたが、調査進行上３区と４区の境界が不明瞭で、報告にあたっては両調査区を一括して３・４区とした。

主な調査成果は、弥生時代中期後半から後期前葉までの集落跡を新たに確認し、８棟の竪穴住居跡、10 棟の掘立柱建物跡などを検出したこと、古代の掘立柱建物跡などとともに皇朝十二銭である「隆平永宝」がまとまって 10 枚出土したことなどである。

これらの遺構は、天狗山からの土砂堆積等で形成された黄色系礫混じり粘土層を基盤として形成され、遺構埋土の色調や土質はその基盤層に良く似たものが多い。そのため、遺構埋土を見極めることに労力を要した。特に弥生期の掘立柱建物跡は掘り形が大きく、間違いなく建物跡を構成する柱穴でありながら、復元に至らなかった柱穴も多数ある。

以下、土層の概要を報告した後に、個別遺構を弥生時代、古代以後に分けて報告し、最後に河川跡を報告する。

第２節　土層

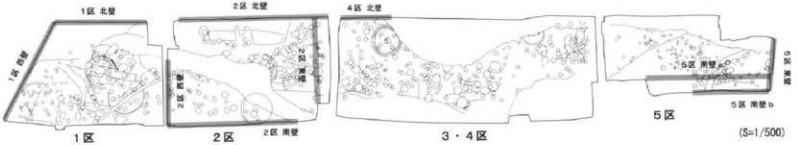
１区（第 18 図）

１区は調査地のなかで最も上流側に位置し、調査前は段丘崖に接する小規模な水田が形成されていた。水田耕土を除去すると、その直下に遺跡の基盤となる淡黄灰色系の礫混じり粘質シルト層が露出した。弥生時代・古代の遺構は、この層上面で確認できる。遺構確認面の標高は約 11.8 mである。なお、調査区の北西隅では中世ごろに埋没・整地されたとみられる段丘崖（1 ～ 9 層）を確認した。

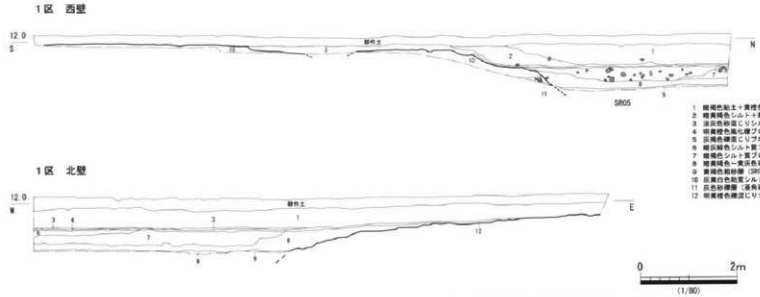
２区（第 19 図）

２区は調査区西側では耕作土下位に褐色系の遺物包含層（西壁 4 層）が約 7cm の厚さで堆積し、それを除去すると柱穴等の遺構が確認でき、一方、調査区の東側および北側では、耕作土下位に厚さ 20 ～ 25cm で礫を多数含む土層（北壁・東壁 2 層）が一様に堆積し、それを除去すると褐色系シルトの遺物包含層（北壁・東壁 2 層）が 10 ～ 30cm の厚さで広がる。遺物包含層は特に東側で遺物量が多く、調査区の北東隅付近では一面に土器群が広がった状態を確認した。その包含層は、さらにその下位の SD03 の窪みの埋没途上に投棄された遺物が多く含まれるものと判断した。ただ、包含層除去後に多数の柱穴を確認したことから、竪穴住居跡などの遺構が重複することによって包含層が形成された可能性も否定できない。

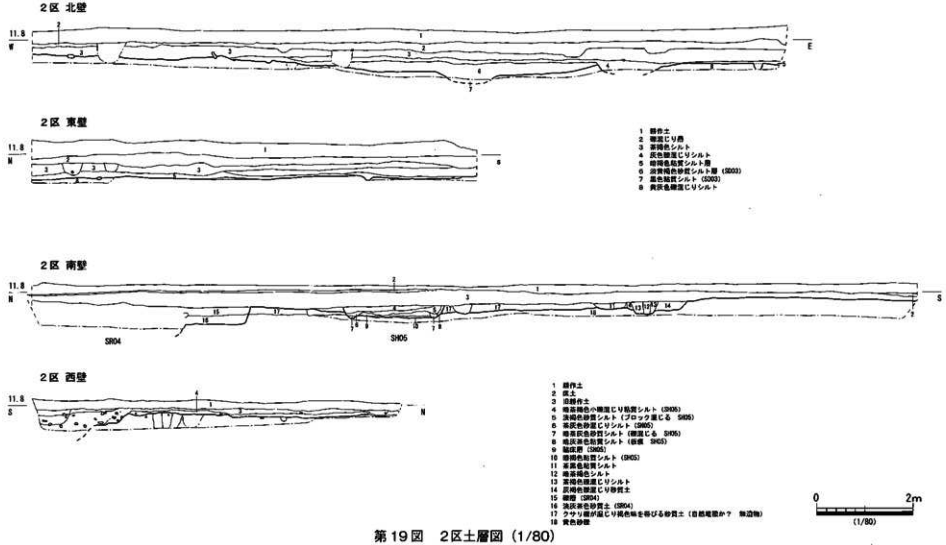
なお、調査区中央を北西から南東にかけて、土石流により埋没した河川 SR04（15･16 層）を検出した。この河川は弥生時代や古代の遺構を削って東に流下することから、古代以後の河川跡と考えられる。Ⅱ区南壁にはこの河川による撹乱を免れた弥生時代竪穴住居跡 SH05 埋土（4 ～ 10 層）が確認できる。



奥白方中落遺跡 調査区配置

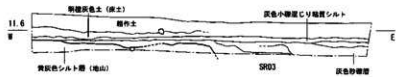


第18図 奥白方中落遺跡調査区位置図及び1区土層図（1/80）

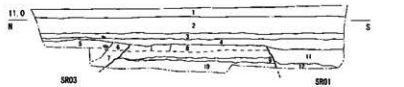


第19図　2区土層図 (1/80)

4区　北壁

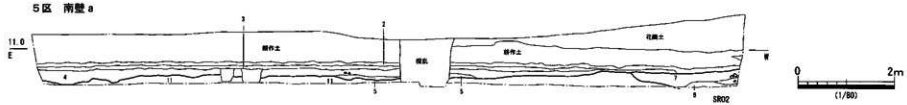


5区　東壁

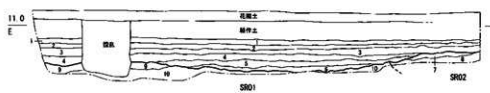


1　花崗土
2　耕作土
3　明褐灰色土（表土）
4　灰色小砂混じり粘質シルト
5　礫層
6　淡灰褐色
7　砂質シルト
8　茶褐色小砂混じり粘質シルト
9　淡茶灰色粘質シルト
10　青灰褐色丸土
11　灰茶褐色粘質シルト
12　礫層

5区　南壁a



5区　南壁b



1　灰褐色砂混じりシルト（表土）
2　淡灰色砂混じり粘質シルト（白色礫を少量含み 8c 沈骨多い）
3　灰色粘質しり粘質シルト（白色礫を多量に含み調査区全域に水平堆積）
4　暗灰褐色粘質シルト（白色土ブロックを少量含み粘着質草干に傾斜堆積）
5　灰色粘質シルト（炭ブロック含む　中世の溝み）
6　暗灰褐色粘質シルト（炭ブロック含む　中世の溝み　この遺構の下端面で花崗出土　土師器 10 世の SR01 所属か）
7　淡灰褐色粘質シルト（小礫混じるが比較的きれいな堆積状　SR02 の最終埋没部か　土師器り 1・2 はこの間に含まれる）
8　砂層型（3 ～ 10cm 大の礫　礫間は砂質　SR02 の側壁決水部か）
9　暗茶褐色砂質シルト（ぎん攻質が強固状態に広がるきれいな堆積　SR01 の最終埋没層）
10　砂礫層（4 ～ 10cm 大の礫　扁角礫多い　SR01 の流水堆積層）
11　淡灰褐色粘質シルト

第 20 図　4・5区土層図（1/80）

3・4区

この調査区は、北壁・南壁が土石流で埋没した河川で占められており、有効な土層図を作成することができていない。竪穴住居跡SH03に近い4区北壁では、耕作土・床土・河川SR03堆積層（4～7層）がみられるが、その下位に位置する6層・7層も緩やかに東に傾斜する様子がみられる。この層は当初別の竪穴住居跡と考えて調査を行ったが、土層堆積は緩やかであり、河川SR03堆積層と判断した。この河川堆積層は、2区の河川SR04堆積層と比べ、礫の粒径がやや細かく、幾分砂やシルトが混じる。4区東側で検出した古代の柱穴は、この堆積層上面で検出されている。一方、弥生時代中期の竪穴住居跡SH07はこの河川に切られている。このことから、SR03は弥生中期以後、古代以前に埋没した河川跡と言える。また、調査区南側の河川SR02については、土層断面図を作成しなかったが、調査区東側で弥生時代中期の遺密な遺物包含層を伴っている。これは、北側の河川SR03（4～7層）と同様に、土石流による埋没に先行する河川機能時の堆積層と考えられる。少なくとも当調査区南側河川SR02については、弥生時代に機能した河川である。

5区（第20図）

5区は東ほど遺構面が深く、東端における遺構面の深さは、現地表から約1.2mを計る。4区から続く河川SR02は、当調査区では2又に分かれ、上層では弥生時代終末期ごろの土器群を伴う礫堆積がみられた。また、北側の河川SR03は中世の柱穴に切られており、3・4区の所見と矛盾しない。当調査区の河川は、比較的古い段階に埋没した河川と考えられる。

なお、調査区南壁にはSR02に先行する河川SR01の屑部がかかる。

第3節　弥生時代

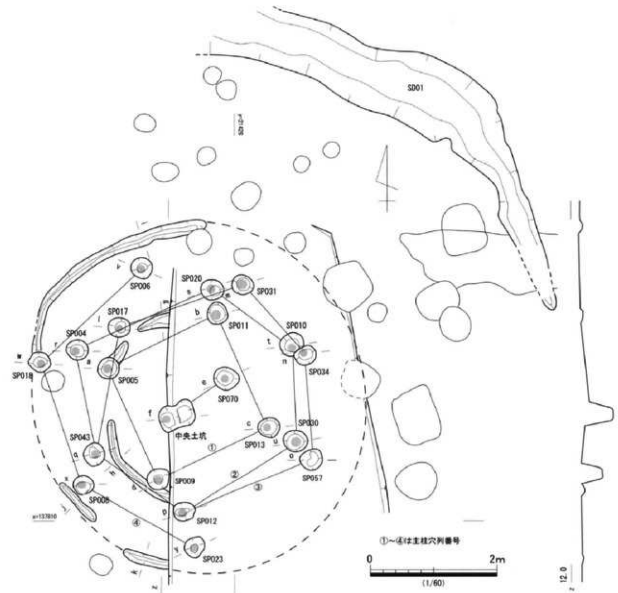
竪穴住居跡

SH01（第21・22図）

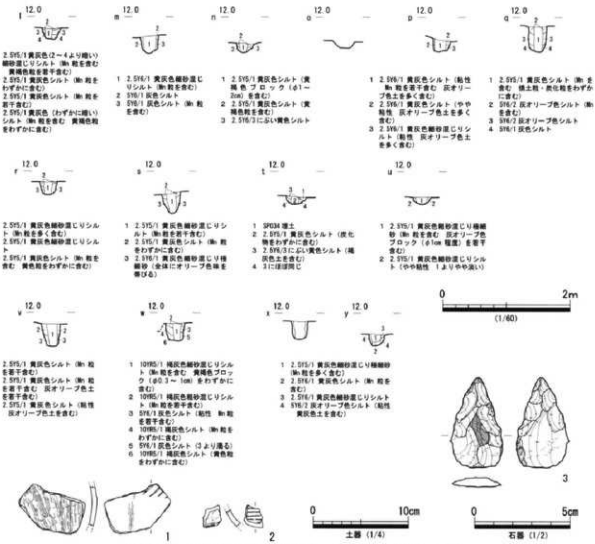
Ⅰ区西端で検出した直径5.5mの円形住居跡である。掘り方は削平を被り、壁溝跡及び柱穴の配列により復元した。壁溝跡は円形に巡る外側壁溝跡と、直径約3.0mで巡る内側壁溝跡がある。内外とも壁溝跡の幅は0.1～0.15mで、深さは0.02～0.05m。住居東半分は後世の撹乱により一段掘り窪められ、壁溝跡は残らない。

壁溝跡に囲まれた住居内部には合計23基の柱穴が存在した。柱穴は直径0.3～0.35mで、断面に直径0.1～0.15mの柱痕を留めるものが多い。埋土は黄灰色系シルトで、柱痕部が褐色を呈し、掘り方は黄色味が強い。住居中央では埋土中に小粒の炭化物や焼土が混じる浅い中央土坑を検出した。これらの遺構すべてが当該住居に伴うか不明だが、柱穴は壁溝跡から復元できる住居平面形に合致して、複数の多角形配置を想定することができる。また、中央土坑は位置的に見て炉跡の下部が一部遺存したものとみて矛盾はない。

柱配置は、中央土坑に接する柱穴とSP070が組合い、棟柱を構成する。その外側には3列の主柱穴列が認められる。主柱穴列1は4柱穴が組み合い、内側壁溝跡と重複する。主柱穴列2・3はそれぞれ6柱穴が組み合うが、SP043・SP012は柱を共有したと考えられる。主柱穴列4は外側壁溝跡と一部重複して巡るが、東側は撹乱の削平により消失しており、4穴のみ遺存する。以上の柱穴列は重複関係からみて、複数回の建て替えが想定できる。しかし前後関係を示す材料は乏しく、柱構造の変遷を細かく辿ることは困難である。



第21図　SH01 平・断面図 (1/60)



第22図　SH01 断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2）

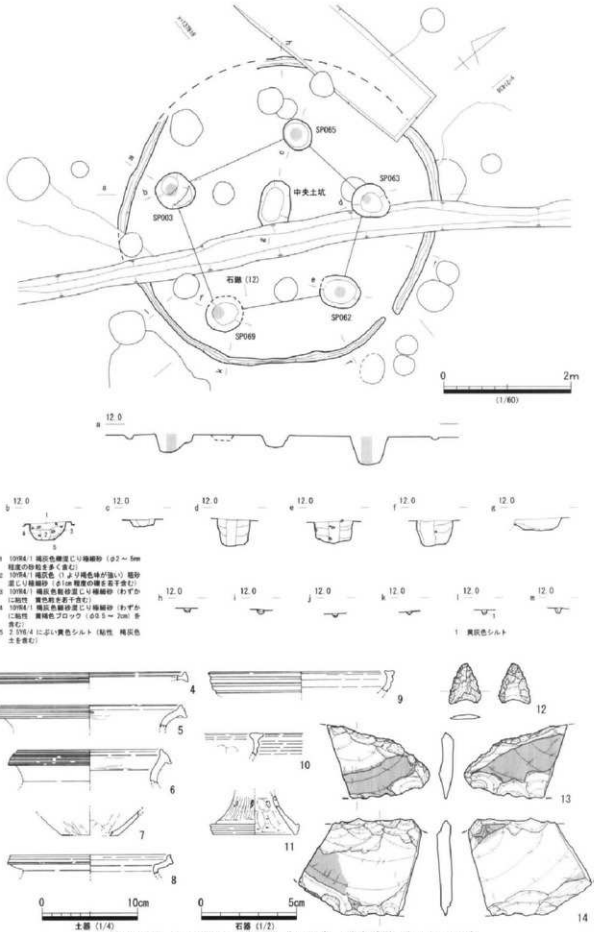
なお、住居跡の2.5 m外側にSD01が巡る。位置関係から見て当該住居に付属する周溝跡と判断できる。詳細は48頁に報告する。

出土遺物はいずれも小片が多く、掲載した遺物は土器2点、石器1点である。1は外面にヘラ刻みを施す壺胴部片。2は外面に細い沈線文を施す高杯脚部片である。3はサヌカイト製の石鏃未製品である。横長剥片素材で先端部を粗加工し、わずかに基部加工を施した後、製作を停止する。素材剥片の背面にあたる図左側の素材面には、摩滅した痕跡が残る。打製石庖丁等から転用した石核から得られた剥片を素材としている。1は主柱穴列1のSP013、2は内側壁溝跡、3は主柱穴列2（3）SP012より出土した。

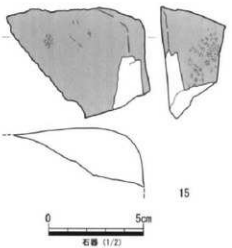
以上の出土遺物から弥生時代中期後半の住居跡と判断できる。

SH02（第23・24図）

Ⅰ区東側で検出した竪穴住居跡である。表土除去後の遺構面精査時には住居跡埋土が若干残っていたが、数回の上面精査により床面まで下がり、床面で主柱穴の平面プラン及び壁溝跡を検出した。壁溝跡から復元できる住居の平面形は円形を呈し、直径5.1 mをはかる。壁溝跡から0.6 ～ 1.0 m内側で5本からなる主柱穴列、床面中央で長径0.8 m、短径0.5 mの楕円形の中央土坑を確認した。柱穴は掘り形が直径0.5 ～ 0.6 mとやや大形で、いずれも断面に直径0.15 mの柱痕を認める。中央土坑は深さ0.17 m



第 23 図　SH02 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2）



第24図　SH02出土遺物（1/2）

で、炭化物はほとんど含まれなかった。床面に段差はなく平坦で、主柱穴SP069に近接して石鏃が1点床面から出土した。床面では、上記の主柱穴以外にも柱穴があるが、当該住居跡との関係は明らかでない。

なお当該住居跡西端は、SH03と僅かに重複する。重複箇所が狭いことから、土層で前後関係を判断することができなかったが、SH03に伴う周溝跡SD02は確実に当該住居に先行するので、SH03が先行しSH02が後出するものと判断した。

遺構検出の経緯から、元来の埋土中に含む遺物を包含層として取り上げたため、当該遺構に伴う遺物は少量である。

4～6は口縁端部に凹線文を施す壺である。4は頸部がラッパ状に開く形態、5-6は口縁部が短く外反する形態の壺である。6は頸胴部境まで遺存するが、押捺突帯などの貼付は観察できない。8は甕口縁部片である。口縁端部を上方に跳ね上げ、外端面に凹線文を2条施す。9·10は高杯もしくは鉢口縁部片である。口縁端部を内外面に拡張し、平坦な上端面はナデ仕上げ、口縁部より下に幅広い凹線を2～3条施す。11は高杯脚部片である。脚端部を拡張し凹線文を施す。

12はサヌカイト製の凹基式石鏃である。重さ1g以下の小型品である。13·14はサヌカイト製打製石庖丁である。いずれも背部は敲打により成形し、素材の打瘤を除去する。12は刃部にやや粗い加工が施され、その剥離面を含めて表裏の広い範囲に使用による摩滅痕が残る。14は刃部に不規則な粗い加工が施され、その加工に切られる摩滅痕が観察できる。15は流紋岩製の磨石片である。残存する器表面の全面が摩滅し、側面にはそれに切られる敲打痕が残る。

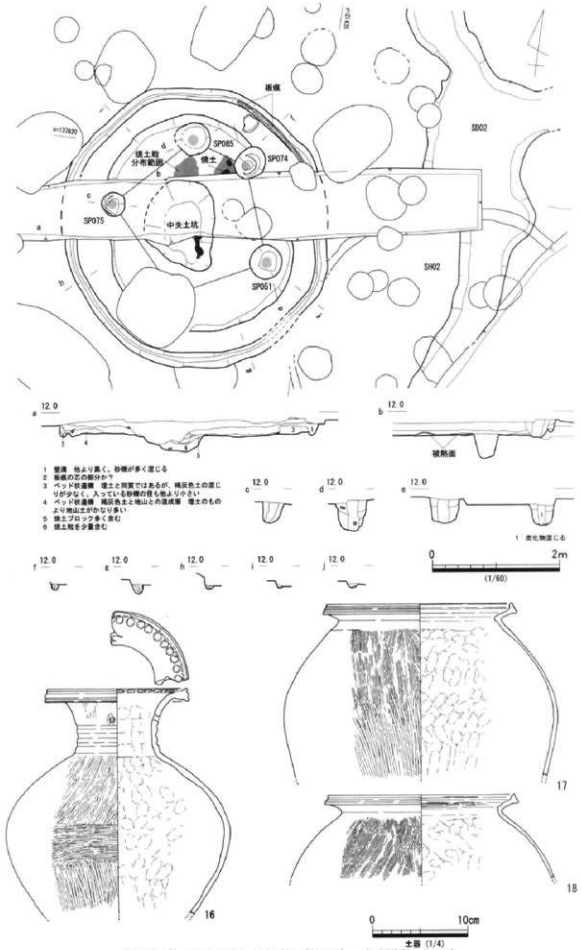
遺物の出土位置は、7はSP062、8·11·15はSP112、13はSP063、14はSP069、それ以外は床面直上で出土した。

以上の出土遺物から弥生時代中期後半の住居跡と判断できる。

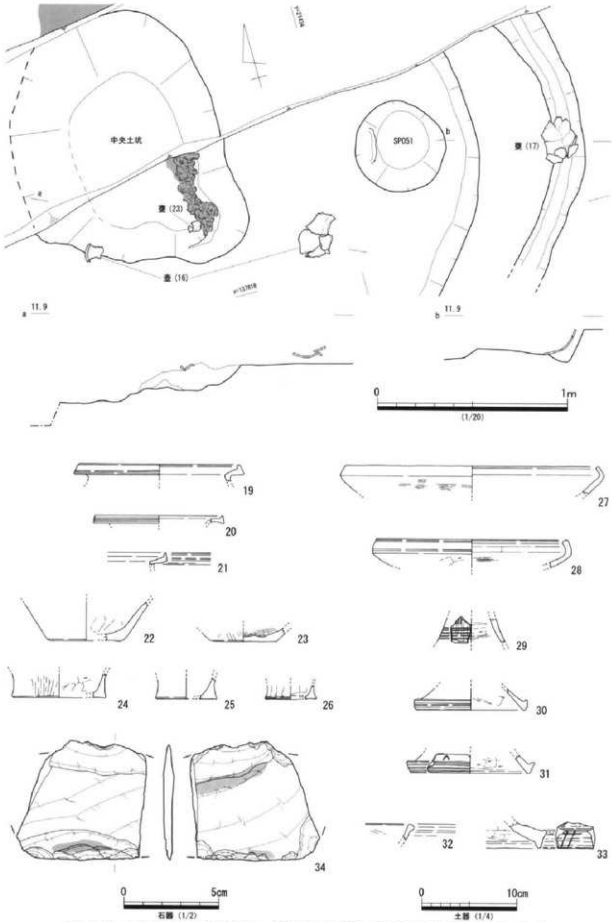
SH03（第25・26図）

I区北東で検出した竪穴住居跡である。掘立柱建物跡SB02と重複してそれに先行し、中央部では試掘トレンチと重複する。住居跡掘り形の規模は、直径4.4m、深さは0.25mで、幅0.2mの壁溝跡が全周する。壁溝跡から内側0.3～0.5mに0.06mの緩い段跡を確認した。幅狭のベッド状遺構である。段跡付近で主柱穴4穴（SP051·074·075·085）を確認した。またSB02の柱穴SP114により滅失した主柱穴を想定すると、5本主柱穴が復元できる。各柱穴は直径0.35～0.45mで、直径0.15mの柱痕を断面で確認した。床面中央には不定形な中央土坑がある。長径1.4m、幅1.1mと大形で、深さは0.14mをはかる。土坑内の東側肩部に赤化した被熱土塊が集積し、埋土中から広口壺口縁部片などが出土した。また、中央土坑の北側では床面に2箇所の被熱土塊分布がみられ、床面自体も被熱して赤化する。中央土坑の埋土を土壌洗浄したところ、直径0.1cm以下の微細鉄滓状遺物が少量認められた（105頁第3表参照）。

住居跡北東部の壁溝跡では、溝跡底に幅0.04～0.05mで細く直線的に延びる板痕跡を確認した。住居の壁板痕跡と考える。住居跡南東部の壁溝跡上面では、土器片が壁溝跡を塞ぐ位置で出土した。細か



第 25 図　SH03 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

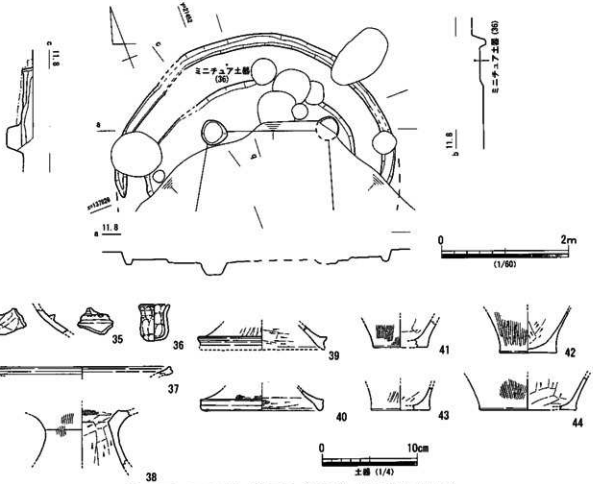


第 26 図　SH03 中央土壙周辺平・断面図（1/20）・SH03 出土遺物（1/4・1/2）

く出土状況を点検すると、第26図に示したように、土器片（17の甕）と壁溝跡の外側の立ち上がり（住居壁面）面との間に約0.04mの隙間が残っており、その隙間は住居壁板材の厚みと考えて矛盾はない。なお、その土器が遺存する箇所は、SH02と重複する位置にあたる。土器の最上部はSH02床面レベルと一致し、そこで破損する。したがってSH03埋没後に、SH02の建築に伴う掘削により17の甕が破損した、とみて矛盾はない。当該住居に後出するSH02の壁溝跡は当該埋土中で重複していたはずだが、調査時には検出できていない。また、後述のSB02を構成するSP114が当該住居跡埋土を切って掘削されていたはずだが、当該住居跡の床面精査時には留意できず、調査後の写真を観察して切り合いを確認している。このような事情もあり、床面原位置において記録した16·17·23の土器以外については、多少とも新しい段階の遺物が混在したことを認める必要がある。

出土遺物は土器18点、打製石庖丁1点がある。16は胴張りの体部から口縁部がラッパ状に開く壺である。頸部に幅広の凹線文を4条施し、口縁部を上下に拡張、端面に 細い凹線文、口縁部内面に円形浮文を密にほどこす。17·18は口縁部を拡張し凹線文を施す甕である。18は口縁端部を外上方に跳ね上げ気味に拡張し、胴部上半は内彎気味で口縁部に至る。19·20は口縁部の拡張が上方のみの個体である。27·28は大きく開く杯部の末端を短く折り返す形態の高杯。29～31·33は高杯脚部片である。34はサヌカイト製打製石庖丁で左右両端を折損し、表裏面に摩滅痕を残す。

29はSP075、34はSP051、そのほかは床面より出土している。以上の出土遺物から、弥生時代中期後半に所属する住居跡と考える。



第27図　SH04平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

SH04（第 27 図）

2区中央で検出した竪穴住居跡である。直径 4.5 mの円形を呈し、南側の大部分を SR04 に抉られる。住居外縁には幅 0.2 mの壁溝跡が廻り、その内側 0.4 ～ 0.5 mに高さ 0.07cm の段が廻る。幅の狭いベッド状遺構である。主柱穴は2穴が残る。うち一つの柱穴は掘り方側面の一部だけが遺存していた。床面では大小の柱穴が残るが、これらは多くが古代に所属する掘立柱建物跡を構成する柱穴である。遺存する床面部のうち、ベッド状遺構床面上よりミニチュア土器1点（36）が出土した。そのほかは、土器細片が多い。

35 は断面三角形突帯を添付する壺肩部片である。突帯上には細かいピッチで刻目を施す。また突帯より上部には強い横ナデもしくは凹線文を施す。36 はミニチュア土器壺である。底縁は丸く、体部は寸胴で頸部の締まりがない形態。外面調整はヘラミガキ（もしくは板ナデ）を施した後に、指でナデ仕上げする。内面も丁寧にナデ仕上げしており、ミニチュア土器としては精製品として仕上げられたものである。頸部最小径が 1.7cm で、指先がかろうじて挿入できるサイズ。内部に微細な淡茶褐色系の付着物が認められる。37 は甕口縁である。図面で表現できていないが、口縁部外面が下方に大きく膨れる形態である。38 は高杯脚部片である。円盤充填法により成形され、円盤が剥落したものである。円盤剥離面は器表面と同様に橙色に焼成される。破断面では橙色層の内部に黒化層があることから、土器焼成段階で剥落した可能性が考えられる。39･40 は高杯脚端部片である。内面は横方向のヘラ削りを施した後に、ナデ仕上げする。41 ～ 44 は甕底部で 41 を除くと内面のヘラ削りを顕著に残す。

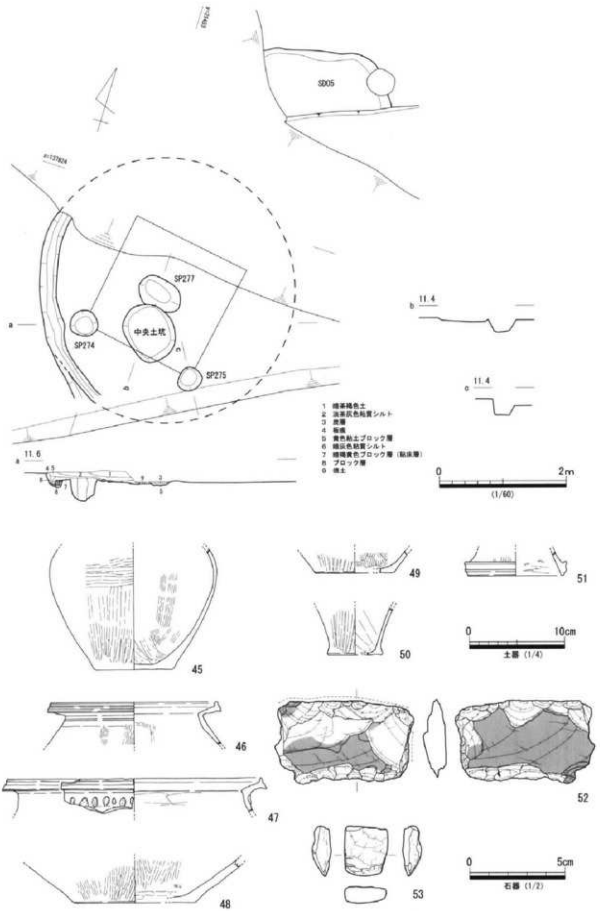
以上の出土遺物から、SH04 は弥生時代中期後半に所属する住居跡である。

SH05（第 28 図）

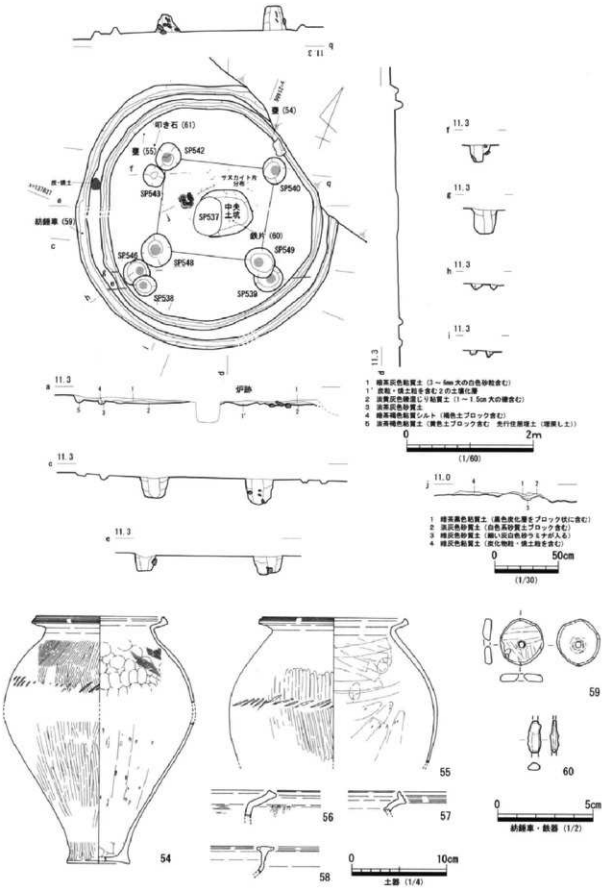
2区南側で検出した竪穴住居跡である。大部分を SR04 で抉られ滅失する。住居中央から西側にかけて床面が残り、幅 0.3 mの壁溝跡、主柱穴2本、中央土坑2基を確認した。主柱穴は配置から見て4本と考えられる。中央土坑はやや南寄りに位置し、長径 0.92 m、短径 0.75 mの浅い楕円形の土坑である。埋土中に炭層が顕著に認められ、床面が強く焼けて焼土塊となる部分もあった。住居中央の SP277 は深さ 0.2 m以上ある深めの土坑である。両者に切り合いは認められなかった。壁溝跡の断面では、外壁沿いに幅約 0.04 mの強い褐色味のある縦方向の土層を確認した。壁板痕跡と考える。

中央土坑埋土の土壌洗浄を行ったところ、直径 0.9cm と 0.5cm の微細滓状遺物2点が出土した。また直径 0.1cm 以下の微細な鉄滓や鍛造剥片も多数回収した。このほか、主柱穴の SP274 から小形扁平片刃石斧（53）、SP275 から打製石庖丁（52）が出土した。

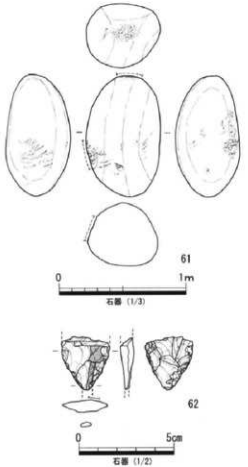
45･48･49 は壺底部片、46･47 は甕口縁部片である。甕口縁部はいずれも凹線文を施文し、47 の頸部には押捺突帯を施す。突帯とはいえ、その上下端には強い横ナデが施されており、口縁から胴部にかけての緩やかな器形変化に大部分が同化する。したがって、指先の圧痕部のみが口縁部胴部境に巡る形状である。52 はサヌカイト製打製石庖丁である。図右面が素材剥片の主要剥離面で、図左面には素材剥片を剥離した板状石核の底面が残る。表裏に使用痕があるが、図下縁には表裏両面から使用痕を切る調整剥離が施される。側縁欠損後の再加工痕跡である。欠損前の全長は不明だが、背部形状や素材剥片の主要剥離面形状からみて、10cm 前後の大きさが想定できる。53 は石英粒や石榴石の斑晶をもつ流紋岩を石材とした小型扁平片刃石斧である。石材は近隣の天霧山山麓から瀬戸内海に浮かぶ津島社にかけて分布する流紋岩に類似しており、当遺跡およびその周辺で製作されたものとみてよい。基部が折損し、



第28図　SH05 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2）



第29図　SH06平・断面図（1/60・1/30）、出土遺物（1/5）



第30図　SH06出土遺物（1/3・1/2）

表裏面が剥落して、刃部付近のみが残る。表面の剥落後に刃部研ぎ直しがみられる。

以上の出土遺物から、SH05は弥生時代中期後半に所属する住居跡である。

SH06（第29・30図）

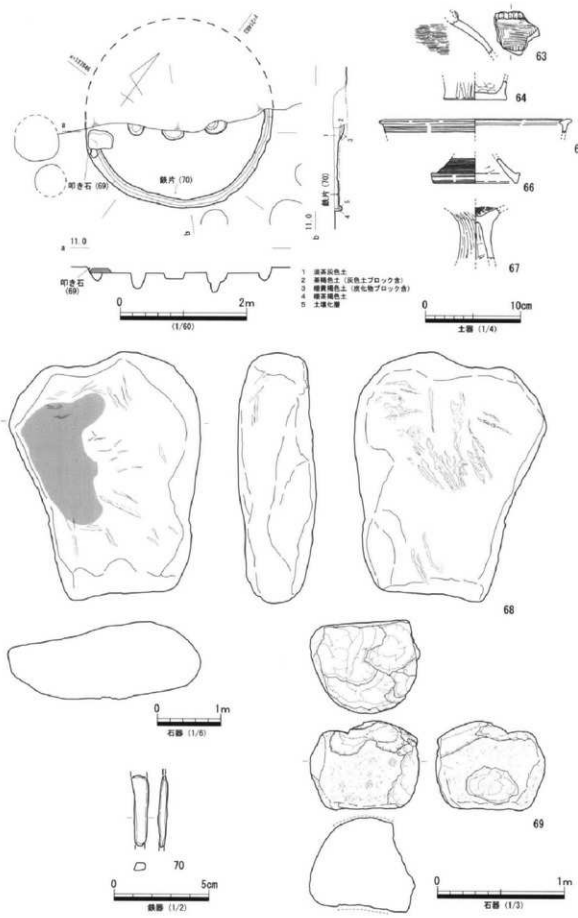
3区西側で検出した竪穴住居跡である。北東側の一部をSR03に挟られるが、床面はほぼ完存する。直径4.2mの円形で、外側に幅0.15mの壁溝跡が廻る外側住居と、直径3.5mの円形で、幅0.13mの壁溝跡が廻る内側住居が、同心円状に重複する。断面観察の結果、外側住居が先行し、その埋没後に内側住居が構築されたものと判断した。中央には長径0.8m、短径0.7m、深さ0.05m以下の浅い中央土坑があり、掘立柱建物跡SB07の柱穴SP537に切られる。埋土中には炭化物粒が多く混じる。中央土坑の0.15m西には床面を馬蹄状に削り出し、多量の炭化物が周囲を取り巻く遺構が認められた。馬蹄部内には薄い白色砂層がラミナ状に認められる。その部分の床面は赤化しており、被熱が認められる。また内外の壁溝跡間の西側床面では、直径約0.2mの範囲に炭化物・焼土がまとまって分布する一画があった。

柱穴はSP540・542・548・549が正方形に配置されており、内側住居跡に伴う4本の主柱穴と考える。それに先行するSP539はSP546・SP543と組合い、外側住居の主柱穴と考えられるが、SP540はその周囲に先行する柱穴がみられないことから、SP540については住居立替えにおいても外側住居の柱を存続させたものと想定できる。

埋土中からは、サヌカイト剥片、叩き石、土器片転用の小型紡錘車、鉄片が出土した。鉄片は中央土坑内で1cmサイズのものが1点出土した。そのほか、中央土坑埋土と馬蹄状焼土部埋土を土壌洗浄した結果、鉄滓状遺物が出土した。特に中央土坑では多様な形状の鉄滓が含まれる（105頁第3表参照）。また、中央土坑の北側では微細なサヌカイト剥片がまとまって出土した。当住居出土のサヌカイト剥片は64点で、重量は87gをはかる。

54・55・57は口縁部に凹線文を施文する甕である。外面下半を丁寧なヘラミガキ、上半を縦ハケ、肩部にヘラ刻みを1段巡らせる。内面下半は強いヘラ削りを施し器壁を薄く仕上げる。56は細頸壺、58は口縁部が内外面に細く拡張する高杯もしくは鉢である。いずれも内外面の横ナデが顕著。59は土器片転用の紡錘車である。直径2.3cmと小振りである。60は扁平な棒状鉄片である。鉄鏃基部の可能性もあるが、茎部としては細すぎる。61は脈岩製の叩き石である。ラグビーボール状で、小口・腹縁に敲打痕がある。腹縁は、サヌカイトの板状石核から両極打法により剥片を剥取する際に生じる線状敲打痕である。器表面を実体顕微鏡下で観察すると、微細な鉄錆状物質が付着する。鍛冶作業に使用した可能性も考えられる。62はサヌカイト製石錐である。作用部及び基部が折損する。

以上の出土遺物から、SH06は弥生時代中期後半に所属する住居跡である。



第 31 図　SH07 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/6・1/2・1/3）

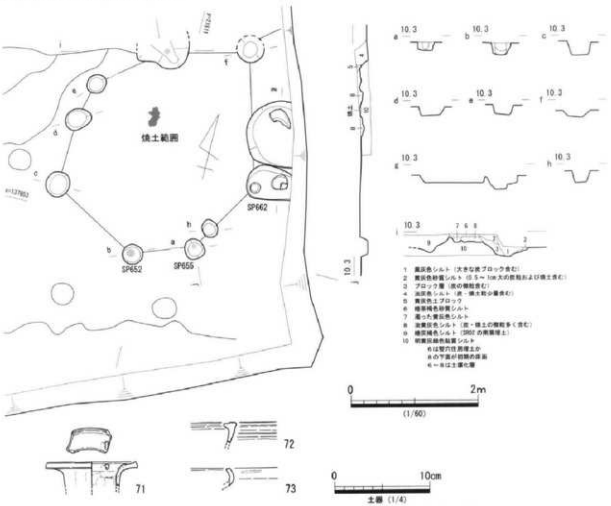
SH07（第 31 図）

4 区中央部で検出した円形の竪穴住居跡である。北半分を SR03 に切られる。直径 3.0 m で 0.15 m 幅の壁溝跡が廻り、検出面から床面までの深さは約 0.1 m をはかる。ベッド状遺構は認められなかった。中央に炭化物を含む直径 0.35 m、深さ 0.08 m の中央土坑があり、それを挟む 2 本の主柱穴を検出した。柱間は 1.25 m をはかる。床面の南側では鉄片 1 点が出土し、西側では大形の大形台石、叩き石とともに、サヌカイト剥片が出土した。剥片は 1cm 前後の小形剥片が多く、合計 70 点、重量は 20 g である。中央土坑や床面付近の土壌洗浄を行ったが、明確な微細鉄滓状遺物は検出できなかった。

なお、当該住居跡の南約 5 m には SR02 屑部の土器集中範囲 A があり、東約 3 m には不定型な溝跡 SD04 がある。つまり、住居跡の南から東にかけては地形的に低くなっており、SR02 土器集中地点 A は、この住居跡縁辺の廃棄域と言える。

埋土中および床面出土の遺物は少なく、63 ～ 67 の土器片が出土したにとどまる。63 の壺は頸部に押捺突帯を施文し、胴部は縦ハケ後に横方向にヘラミガキを施す。65 の鉢もしくは高杯は口縁部上端を内外面に細く拡張し、上端面に浅い凹線文を施すものである。

68 の台石は非整形の扁平安山岩塊石製で、上下面に主に線状敲打痕が多く認められる。表面の風化が顕著だが、片面に強い研磨痕がある。69 は流紋岩製の叩き石である。欠損部を除いて、全面に敲打痕あるいは敲打による剥離痕が認められる。70 は扁平な形状の鉄片である。鉄鏃茎部の可能性もあるが、遺存部のみでは判断できない。



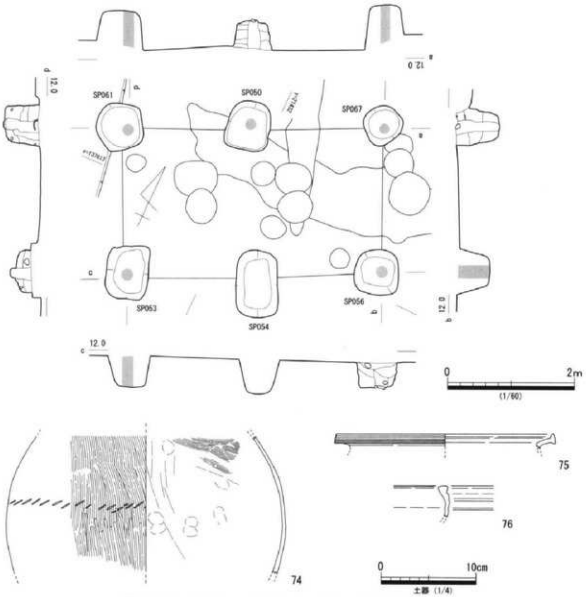
第 32 図　SH08 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

以上の出土遺物から、SH07は弥生時代中期後半に所属する竪穴住居跡と考えられる。

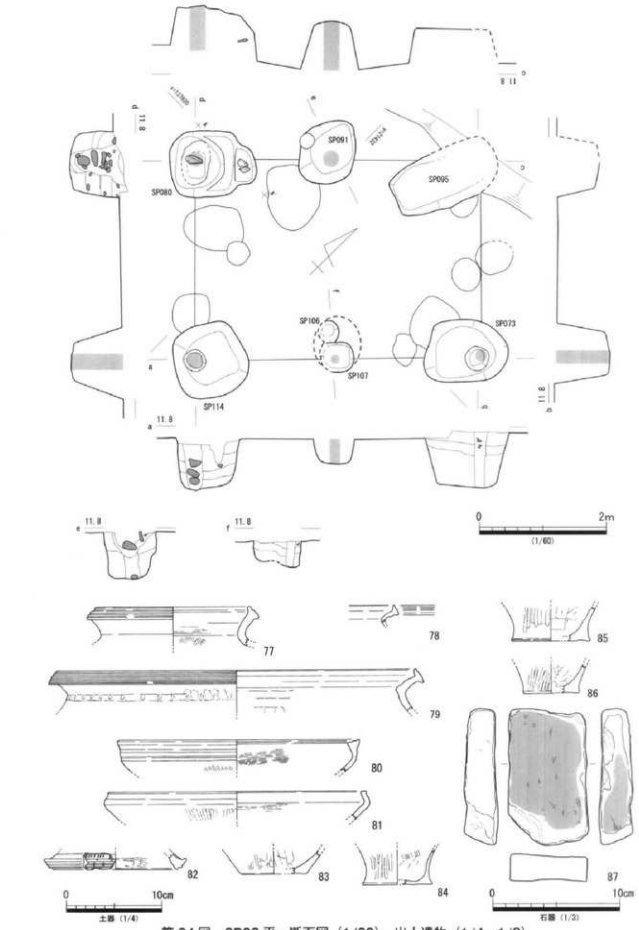
SH08（第32図）

5区東端で検出した柱穴列である。埋土や柱痕の色調や土質が共通する柱穴が、不規則ながら直径約3mの範囲に廻り、その内部に焼土面が認められたことから住居跡と判断した。柱穴は合計10基を検出した。間隔が狭いものもあり、同時にすべて使われた柱とは言えない。柱間隔1～1.5mで7本の主柱穴をもつ柱構造と想定するのが妥当である。中央やや北よりの床面で、径0.3mの範囲が被熱のために焼土化した箇所を確認した。周辺の土壌を採取して洗浄したが、微細鉄滓状遺物は確認できなかった。また、北端の柱穴（断面iライン）は、柱を抜き取った後に流入した土壌中に大粒の炭化物を含む。この断面で当該住居跡の床面土壌化層（iライン6～8層）を確認した。

なお、当調査区の着手前に確認調査を実施した際、SP655付近で完形のサヌカイト製打製石庖丁が出土していたが、遺憾ながら遺物洗浄中に紛失した。この住居に伴うものとみてよい。



第33図　SB01 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第 34 図　SB02 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/3）

出土遺物は中央焼土周辺で出土した土器3点である。71は口縁部内面に棒状浮文を貼付する広口壺、73は口縁部が短く内傾する高杯である。これらの出土遺物から、SH08は弥生時代中期後半新相に所属する住居跡と判断できる。

掘立柱建物跡

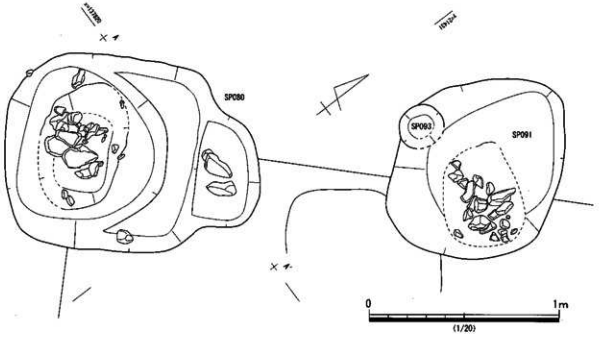
SB01（第33図）

1区中央やや南側で検出した掘立柱建物跡である。規模は梁間1間（2.3m）、桁行2間（4.1m）、面積9.43㎡で、建物跡主軸は北から約60度東偏する。柱穴は一辺0.65～0.8mの隅丸方形を呈するものが多く、SP054のみ南北長が1.1mとやや大きい。そのSP054は柱痕の検出に失敗しているが、他の5基は主に断面で直径0.18～0.2mで暗灰黄色系土の柱痕を確認した。掘り形埋土は灰色土ブロックを含む黄色系土で、基盤層との区分が困難なものが多い。他の遺構との重複関係は、SH03周溝跡と考えられるSD02より古く、SH01の周溝跡と考えられるSD01とは、位置的に重複するものの、埋土の重複はないために先後関係は明らかではない。

柱穴より出土した土器が3点ある。74はSP061出土の甕胴部片である。最大径やや上部にヘラ刻みを巡らせる。75の甕および76の鉢もしくは高杯はSP066出土。これらの出土遺物から、SB01は弥生時代中期後半に所属する掘立柱建物跡と判断できる。

SB02（第34・35図）

1区中央やや北寄りで検出した掘立柱建物跡である。規模は梁間1間（3.15m）、桁行2間（4.55m）、面積14.33㎡で、建物跡主軸は北から約45度東偏する。柱穴は隅丸方形を呈するものが多く、一辺1～1.3mと大形で、深さは0.8～0.9mと深い。SP095は撹乱を受けるものの、南北長が約2mと推定され、抜き取りを考慮しても特に大形である。そのSP095は柱痕の検出に失敗しているが、他の5基は主に断面で直径0.2～0.25mの柱痕を確認した。SP080・091・114では廃絶に際して柱の周囲をある程度掘

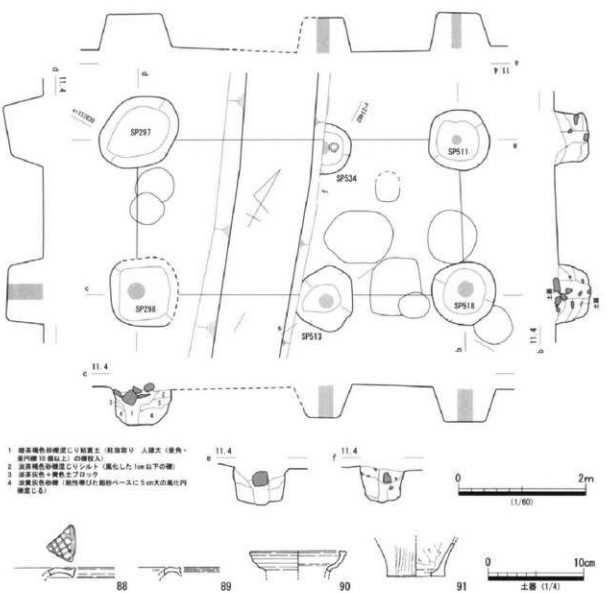


第35図　SB02-SP080・091遺物出土状況図（1/20）

り下げ、柱を抜いた後の窪みに20cmほどの礫を投入した状況を確認した（第35図）。掘り形埋土は灰色土ブロックを含む黄色系土で、基盤層との区分が困難なものが多い。なお、SP080は掘り形の東側が階段状となる。

他の遺構との重複関係は、SH03とSP114が重複しており、調査時にはSP114が古いものと考えていたが、調査後にSH03検出状況あるいは掘削状況の写真を点検すると、明らかにSP114の埋土がSH03検出面で確認できることから、SH03に後出する掘立柱建物跡とした。そのほか、建物跡を復元できなかった大形柱穴SP108など、当遺構に先行する建物跡が存在した可能性もあるが、明らかにできなかった。

柱穴出土の土器は77が壺、78･79が甕、80～82が高杯、83～86が底部片である。このうち、77は口縁部が短く立ち上がり、端部に凹線文を施す。79は口縁部胴部境に押捺を巡らせる。突帯貼付の痕跡は不明瞭だが、押捺突帯と同一の手法で口胴部境に指による押捺を施し、その上から強い横ナデを加えたものである。80は拡張口縁上面がやや内傾し、上端面に凹線文を施す。81は口縁部が短く内傾する高杯だが、口縁端部を面取りし、外端部を僅かながら外方に拡張する特徴を認める。82は裾端部の



第36図　SB03平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

凹線文施文後に、不規則な刻目を施すものである。

このほか、87は安山岩製の砥石である。上面と側面に砥面を認めるが、さほど平滑ではない。

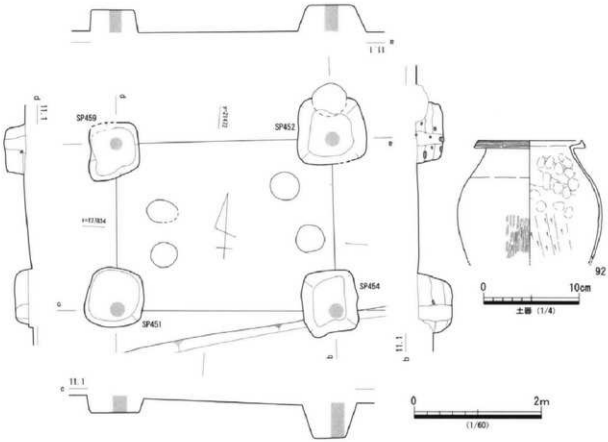
以上の出土遺物から、SB02は弥生時代中期後半に所属する掘立柱建物跡と判断できる。

SB03（第36図）

2区と3区にまたがって検出した掘立柱建物跡である。規模は梁間1間（2.45 m）、桁行2間（5.2 m）、面積12.74㎡で、建物跡主軸は北から約30度東偏する。桁行の柱間は東側で2.2 m、西側で3.0 mと0.8 mほどの差があるが、南北の柱筋は概ね揃う。柱穴平面形は隅丸方形が基調でやや丸みを帯びるものもある。柱穴規模は一辺1～1.3 mと大形で、深さは0.55～0.6 mをはかる。SP297は柱痕の検出に失敗しているが、他の5基は主に断面で直径0.18～0.25 mの柱痕を確認した。SP298・513・518では廃絶に際して柱の周囲をある程度掘り下げ、柱を抜いた後の窪みに20cmほどの礫を投入した状況を確認した。長方形土坑SK02と近接するが、主軸方向が異なることから、先後関係にあるものと言える。

柱穴出土の土器は、88～90が壺、91が甕底部片である。88は内面に斜格子文を施し口縁端面に条線をもつ工具による強い横ナデを施す。89は口縁端面の凹線文は細く浅い。90は口縁部が膨らんで内彎する細頸壺である。

以上の出土遺物から、SB03は弥生時代中期後半に所属する掘立柱建物跡と判断できる。



第37図　SB04平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

SB04（第 37 図）

3区中央付近で検出した掘立柱建物跡である。規模は梁間 1 間（2.7 m）、桁行 1 間（3.45 m）、面積 9.32 ㎡で、建物跡主軸は北から約 88 度東偏する。柱穴平面形は隅丸方形が基調で、柱穴規模は一辺 0.8 ～ 1.1 mである。深さは 0.4 ～ 0.6 mをはかる。直径 0.18 ～ 0.25 mで暗灰黄色系土の柱痕を主に断面で確認した。

建物跡の南に隣接して SR04 が存在し、当遺構を抉りながら東に流下する。したがって当建物跡は南側に広がる余地を残す。また、SP452 は弥生時代の可能性が高い柱穴と重複し、周辺に直径 0.3 ～ 0.5 mの柱穴も多数分布する。これら周辺大小の柱穴を住居跡を構成した柱穴とすると、当遺構と先後関係がある遺構が存在した可能性を考慮する必要がある。

92 は SP454 の柱痕部で出土した土器である。口縁端部に細く浅い凹線文を施す。胴部下半は内面を強く削り、器壁を薄く仕上げる。

出土遺物から、SB04 は弥生時代中期後半に所属する掘立柱建物跡と判断できる。

SB05（第 38 図）

3区中央付近で検出した掘立柱建物跡である。規模は梁間 1 間（2.5 m）、桁行 1 間（4.0 m）、面積 10.0㎡で、建物跡主軸は北から約 60 度東偏する。柱穴平面形は隅丸方形が基調で、柱穴規模は一辺 0.7 ～ 1.5 mとバラツキがある。深さは 0.55 ～ 0.7 mをはかる。各柱穴で直径 0.18 ～ 0.25 mの暗灰黄色系土の柱痕を主に断面で確認した。SP431・435 では廃絶に際して柱の周囲をある程度掘り下げ、柱を抜いた後の窪みに 20cm ほどの礫を投入した状況を確認した。

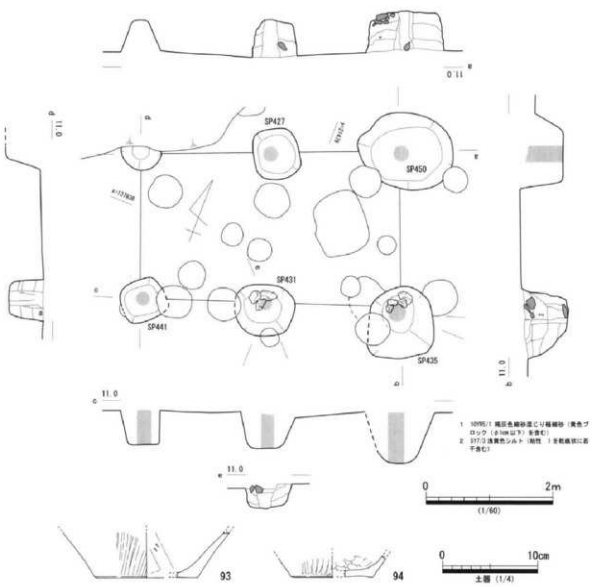
当建物跡と重複して弥生時代の掘立柱建物跡 SB06、SB08 があり、当該建物跡は切り合いからみて、SB412 に先行する。柱穴より 93·94 の壺底部片が出土している。これらの土器から、SB05 は弥生時代中期後半に所属する掘立柱建物跡と判断できる。

SB06（第 39 図）

3区中央部で検出した掘立柱建物である。規模は梁間 1 間（3.6 m）、桁行 1 間（2.2 m）、面積 7.92㎡で、建物跡主軸は北から約 65 度東偏する。柱穴平面形は方形が基調で、柱穴規模は直径 0.8 ～ 1.2 m、深さは 0.2 ～ 0.75 mと不揃いである。SK401 とした柱穴と北西の柱穴は遺構検出に失敗している。前者は調査深度が不十分で、後者は柱痕部のみ掘り下げものと言える。SP415 も当初調査深度が不十分だったが、再検出により下端を確認した。再検出以後の記録には土層断面記録はないが、上半部の断面からみて、直径 0.2 mの柱痕が想定できる。SP426 では直径 0.22 mの柱痕を確認した。

95 ～ 97 は SK401 とした柱穴で出土した土器である。95 の口縁部は端部下半が外方に膨らみ、端面に細い凹線文を施す甕である。口胴部境内面は稜線が弱く、丸めに仕上げる。96 は口縁端部を上方に摘み上げて拡張する形態の甕で、胎土が他の土器と異なり、白黄色を呈し黒雲母をほとんど含まない。また、胎土中に火山ガラスを多むなど、当遺跡で一般的な弥生土器の胎土とは異なる。98 はサヌカイトの大型剥片である。表裏縁辺に若干の加工を施すが、未加工の鋭い縁辺も残る。稜線の摩滅も観察できないことから、遺跡内で剥離された大型剥片と判断できる。99 は SP415 埋土中より出土した棒状鉄片である。図の中ほどで断面正方形状に膨らむが、上下端は断面が扁平である。鉄鏃や鉄鉗などの特定器種とは見なしがたい。

以上の出土遺物から、SB06 は弥生時代中期後半の掘立柱建物跡と判断できる。

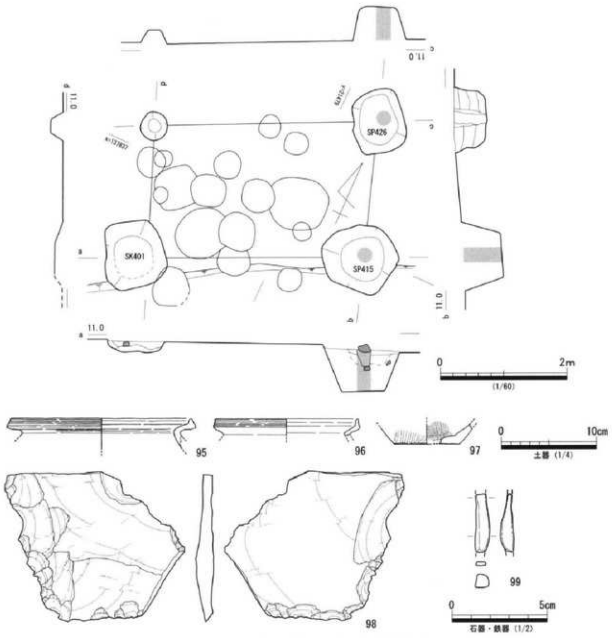


第 38 図　SB05 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

SB07（第 40 図）

4 区西端で検出した掘立柱建物跡である。規模は梁間 2 間（4.7 m）、桁行 2 間（5.2 m）、面積 24.4㎡で、建物跡主軸は北から 41 度東偏する。南西側梁間中間柱は確認できなかったが、想定される位置は他の柱穴との重複が顕著なことから、検出ミスの可能性が高く、総柱構造と考える。柱穴平面形は円形が基調で、柱穴規模は直径 0.5 ～ 0.8 m、深さは 0.4 ～ 0.65 m をはかる。各柱穴で直径 0.18 ～ 0.20 m の暗灰黄色系土の柱痕を主に断面で確認した。重複する弥生時代の竪穴住居跡 SH06 に後出する。また、長方形土坑 SK02 の主軸方向と一致し、当建物跡の中間柱位置が SK02 横断軸と一致、また建物南西側の丁度中央に SK02 掘り形が収まることから、互いに強く関連する遺構と判断できる。

掘立柱建物と方形土坑が関連する事例としては、東かがわ市原間遺跡 SB Ⅲ 05 で建物中央に長方形



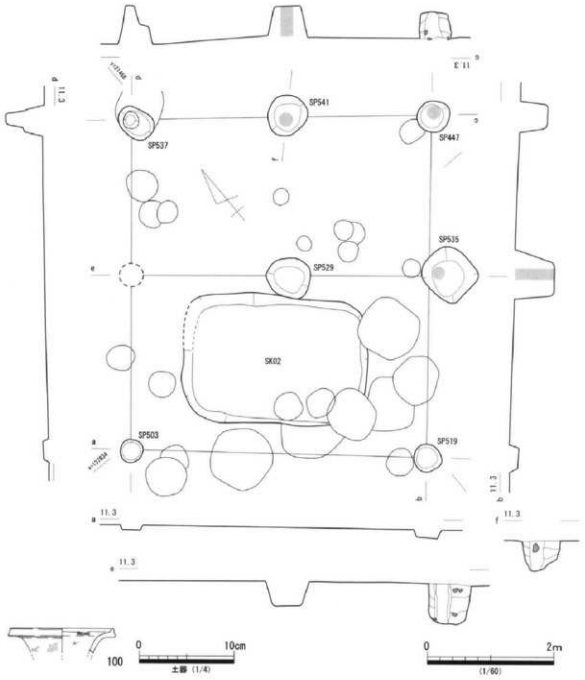
第 39 図　SB06 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2）

土坑（報告書では土壙墓と認定している）が存在する例がある。

100 は SP529 より出土した壺口縁部片である。口縁端部を上方に跳ね上げ、端面はナデ仕上げ。出土遺物からみて、SB07 は弥生時代後期前半に所属する掘立柱建物跡と判断できる。

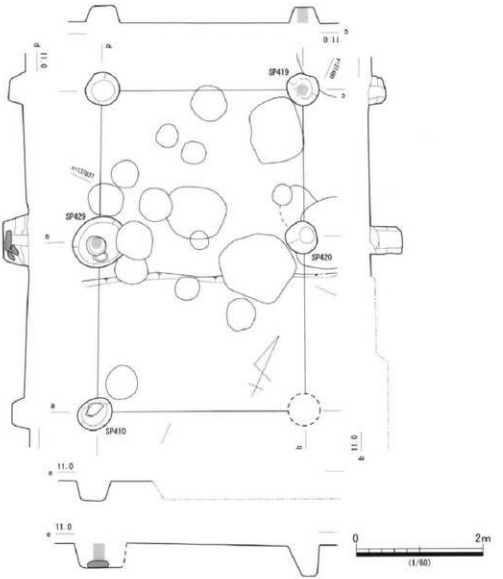
SB08（第 41 図）

3 区中央部で検出した掘立柱建物跡である。規模は梁間 1 間（3.2 m）、桁行 1 間（5.0 m）、面積 16.0 ㎡で、建物跡主軸は北から約 30 度西偏する。柱穴平面形は円形が基調で、柱穴規模は直径 0.5 ～ 0.8 m、深さは 0.25 ～ 0.5 m をはかる。一部の柱穴で直径 0.18 m の暗灰黄色系土の柱痕を主に断面で確認した。SP410・429 では柱痕下部に 30 ～ 35cm 大の安山岩板石による根石を確認した。



第 40 図　SB07 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

弥生時代の掘立柱建物跡 SB05・SB06 と重複し、柱穴の切り合いから SB05 より新しい。図化可能な出土遺物はなかった。



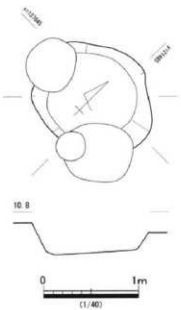
第41図　SB08平・断面図（1/60）

土坑

SK01（第42図）

4区東側で検出した直径約2mの円形土坑である。深さは0.5mで側壁は比較的急に立ち上がる。埋土は地山と類似した黄灰色系シルトで、若干濁った灰黄色土が混じる。埋土中より実測不能な縄文土器もしくは弥生前期ごろと推定される土器小片が1点出土した。

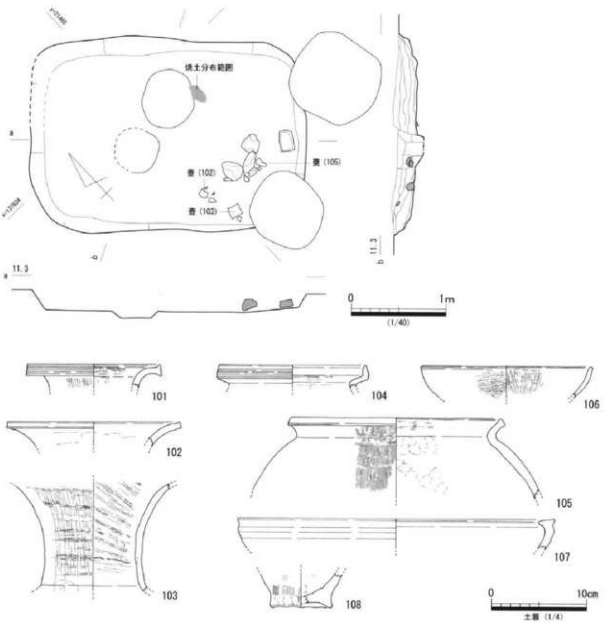
当該土坑と同様の埋土をもつ柱穴も、周辺に少量存在することから、今回の調査地で内で最も古い住居跡の可能性もある。



第42図　SK01平・断面図（1/40）

SK02（第43図）

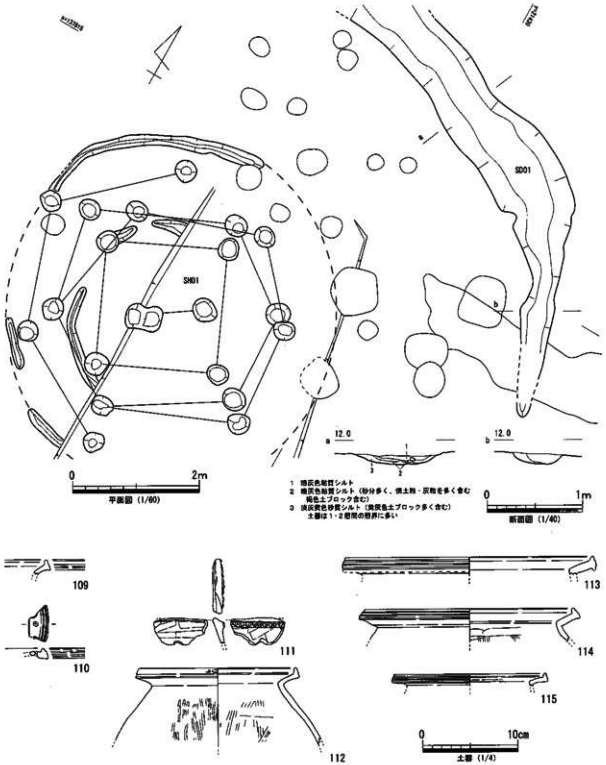
4区西端で検出した長方形土坑である。長辺4.4m、短辺3.0m、深さ0.4mで、やや隅丸を呈する。側壁の立ち上がりは約45度の傾



第 43 図　SK02 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

斜である。埋土は灰茶褐色系土で、埋土下層から床面にかけて、焼土や炭化物が多く含まれる。床面には、遺存状態が良好な土器が 4 個体、焼土の集中範囲が 1 箇所みられた。焼土はいずれも小片である。また、30cm 大の礫も土器と同数程度床面で確認した。形状からみて貯蔵穴の可能性が高い。

出土遺物は 101・107・108 が埋土中、その他は床面および埋土下層の炭・焼土層で出土した土器である。104 は口縁部を上方に折り曲げ、外面に凹線文を施す甕である。風化した金雲母を多量に含む胎土を使用する。103 は頸部が長く伸び、口縁部に向かって大きく外反する形態の壺である。図版 42 に示したように、接合する一方の破片にのみ黒斑が見られる。105 は凹線文を施文せず、器壁も厚い甕である。これらの土器から、SK02 は弥生時代後期前半新相ごろに所属すると判断した。



第 44 図　SD01 平面図（1/60）・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

溝跡

SD01（第 44 図）

1 区中央部で検出した弧状の溝跡である。SH01 の外側壁溝跡から 2.5 m外で、SH01 を取り巻くように掘削される。住居跡を囲む周溝跡と考えられる。北東部の幅は約 1 m、深さは 0.13 mで、南ほど幅が狭くなり、延長約 7 m地点で途切れる。断面形は浅い皿状で、住居跡側の立ち上がりは特に急に立ち

上がる訳ではない。底場レベルは、断面を取得したa・bラインではほぼ等しいが、SD02と重複する付近から南に向かっては急速に浅くなる。堆積状況は、住居跡側に黄灰色ブロックを多く含む淡黄色系土がまず流入し、その上部に焼土や炭化物の小粒を含む褐色系堆積層がみられる。出土遺物量は少ないが、主に上部層で土器片が出土した。

なお、南端部ではSH03の周溝跡と考えられるSD02と重複し、当該溝跡が新しい。当該溝跡が囲む範囲を復元すると、西側下端、つまり住居跡SH01側の下端で計測して直径11.4m、その面積は約95㎡となる。

出土遺物は109～115の土器である。109・110は口縁部に凹線文を施文する広口壺で、110は口縁部直下の水平面に微細な穿孔がある。穿孔は現存範囲に3穴みられることから、蓋用の紐掛孔ではなく、口縁部内面施文の一つと判断できる。

111は器種や部位が不明な土器片である。工具原体による刻目をもつ突帯と、その上部に口縁部のように面取りした端面を認めるが、内面は全面が表面剥落しており、全体の形態が不明である。112は口縁部を上方に拡張し凹線文を施文する甕である。器壁はやや厚手で口縁部屈曲の内面稜線は鈍い。114は外面に剥離痕が認められる。剥離面には器壁内面の黒化層が露出しており、土器焼成時の剥離か、使用時の剥離か、判別できない。

以上の出土土器から、SD01は弥生時代中期後半に所属する溝跡と判断できる。

SD02（第45・46図）

1区東側で検出した弧状の溝跡である。SH03の外側壁溝跡から約2m外で、SH03を取り巻く形状を呈す。住居跡SH03を囲む周溝跡である。主に住居跡東側の残りが良く、最大幅1.5m、深さ0.15mをはかる。南東部では、後出する住居跡SH02に切られ、南西部では住居跡SH01の周溝跡SD01と重複し、それに先行する。SD01との重複箇所から2m西の地点では、溝底が急に浅くなり、溝跡が途切れる。溝跡が途切れる前の延長2.7mの範囲の北側溝底に、幅0.06m、深さ0.05mの板痕跡が認められた。それに連動して当該溝跡内側の上端線も、断面eライン付近で屈曲して直線的となる。また、北東側で東へT状に分岐する地点がある。当該溝跡が囲む範囲を復元すると、西側下端、つまり住居跡SH03側の下端で計測して、直径9mとなる。面積は約63.6㎡である。

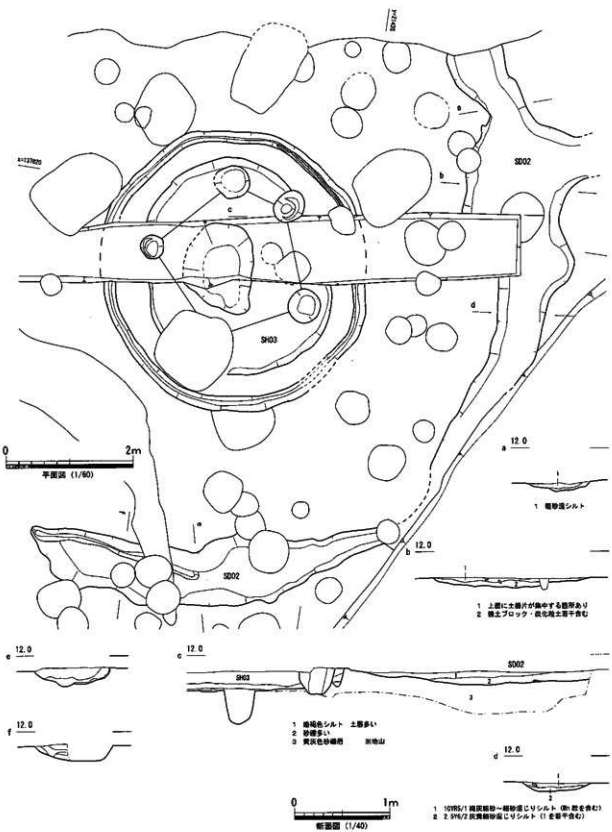
なお、溝跡の東側の調査時には重複する他の遺構との区別が困難で、溝底で検出した柱穴等もある。したがって、一部当該遺構を切る柱穴等の遺物が混在した可能性もある。

116～134はSD02出土遺物である。このうち、121・124・130・135は南側、それ以外は北側で出土している。116～121は壺である。116・119は頸部に凹線文を施文するが、凹凸が低く目立たない。122～130は甕である。131～135は高杯である。131～133は口縁部が短く内傾する形態で、いずれも端部を面取りする。134は口縁部が屈曲する形態で、白色系を呈し胎土中に火山ガラスを多く含むなど、当遺跡に一般的な胎土とは異なる。

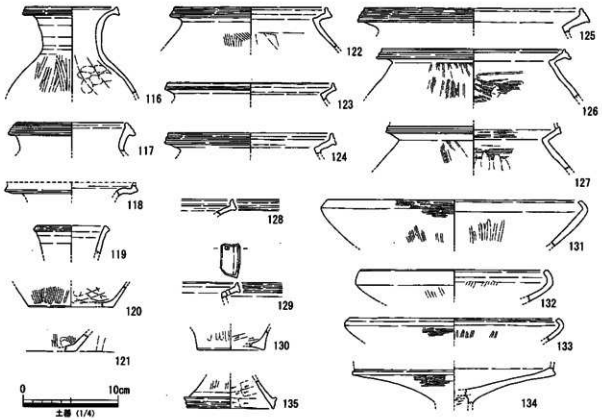
以上の出土土器から、SD02は弥生時代中期後半に所属する溝跡と判断できる。

SD03（第47～51図）

2区北側で検出した浅い溝跡状の落ち込みである。調査区北壁際がもっとも幅広く幅6m、南に向かって幅2～3mに狭まる。深さは0.3mで、主に黄褐色系シルト層が堆積していた。断面では溝跡上層と



第 45 図　SD02 平面図（1/60）・断面図（1/40）



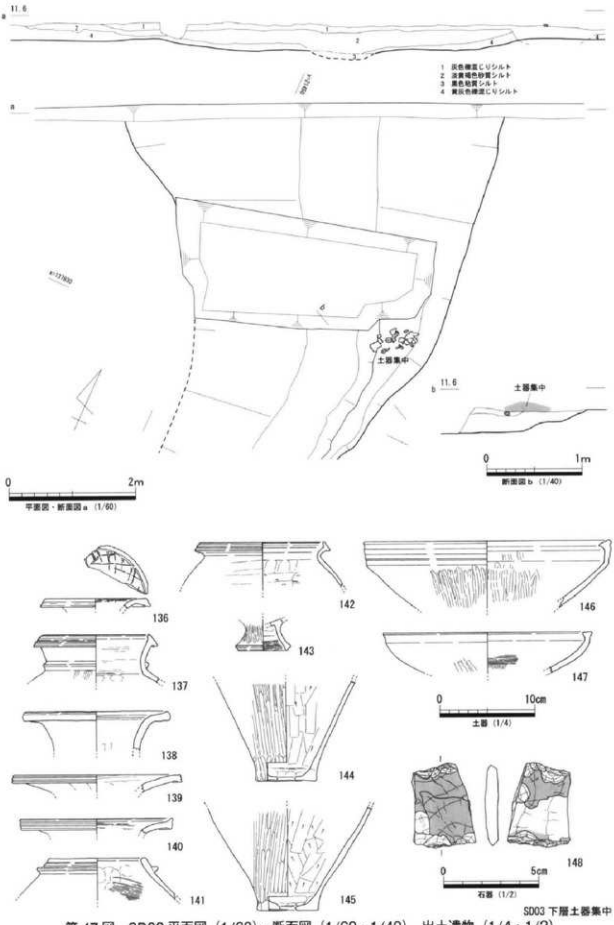
第46図　SD02出土遺物（1/4）

なる図の2層が東西に幅広く堆積し、遺構面を覆う。溝跡内の堆積層中には土器は少なく、むしろ溝跡肩付近で数箇所の土器集中を確認した。

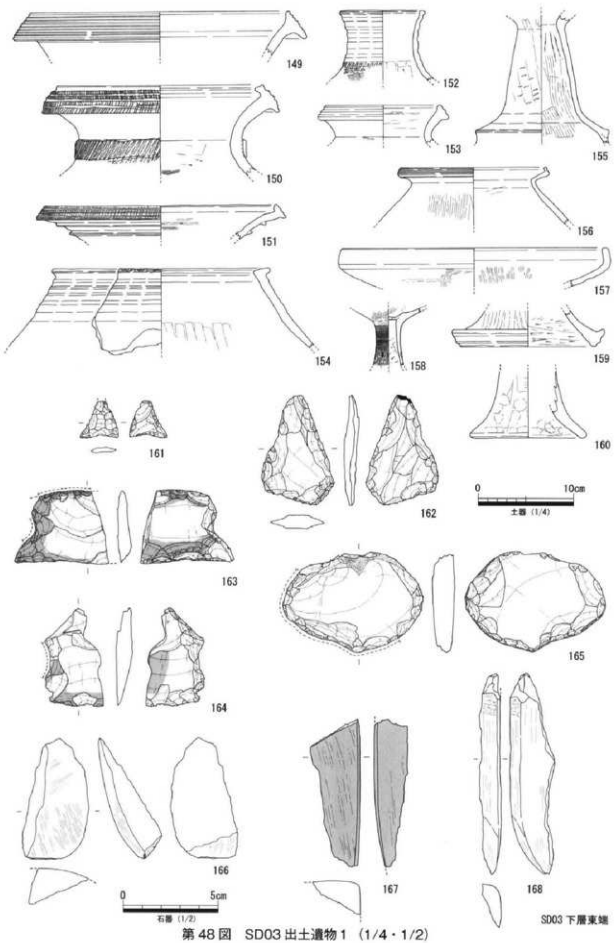
図示した土器集中は溝跡検出面とほぼ同レベルで検出した土器集中である。一方、図化範囲から東に外れて、2区北東隅付近でもう一箇所の土器集中を確認している。当該溝跡は2区中央に位置する住居跡SH04に切られており、図化した土器集中はSH04に近い位置にあることから、これらの土器群もSH04に先行するものとみられる。一方、2区北東隅で検出した土器群は、当該溝跡が大部分埋没した後に投棄された土器群であり、図化した土器集中部より後出するものと考えられる。そのほか中層、上層の遺物を区分して報告しているが、大部分は遺物の分布単位を捕らえて取り上げたものではないために、層位ごとの一括性は薄い。

136～148は図化した土器集中部で出土した遺物である。136～141は壺。136は内面加飾の壺で、斜格子文は繊維質の施文原体を使用する。138は口縁部拡張が顕著でない広口壺である。白色系胎土で、外面に微細な赤色顔料の痕跡が観察できる。139は口縁部拡張が顕著でない壺口縁部である。金雲母を多く含む胎土。141は無頸壺で口縁部突帯から上に凹線文を施文する。142は口縁部内面の稜線が消失する甕である。144･145の底部穿孔は焼成後の穿孔である。148は楔状石核である。上下縁を敲打打面に設定し、左右側縁は折れる。

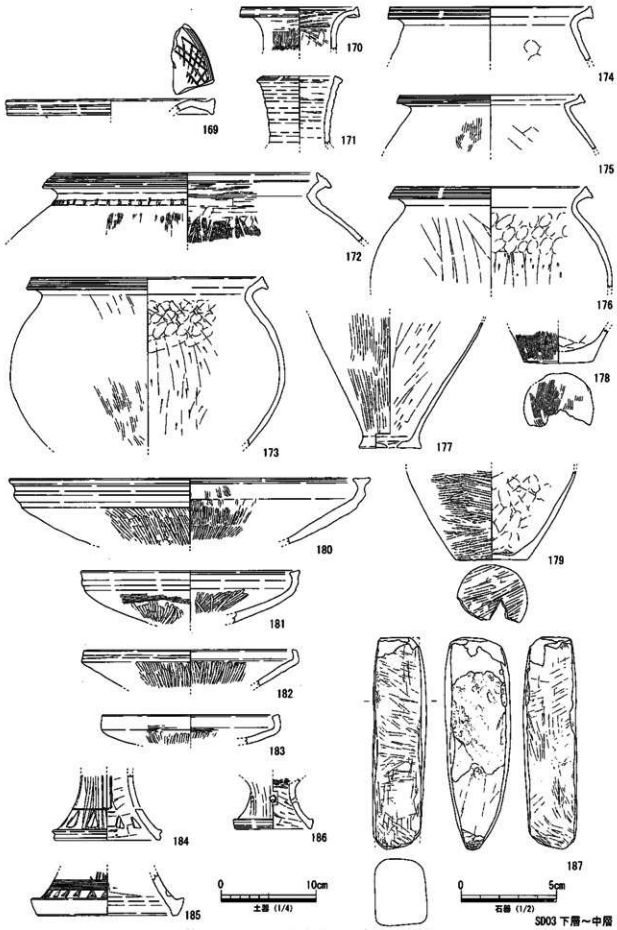
149～168は、図化範囲外の当該溝跡東側肩部で集中して出土した遺物群である。149～151は口縁部に凹線文多条を施文する壺である。150は凹線文施文後、その上からヘラ刻み2段を加え、151は縦方向1段のヘラ刻みを加える。さらに151は頸部に断面三角形突帯を2条貼付する。150の胎土は火山ガラスを多く含む白色系である。154は口縁部が逆L字状の無頸壺である。端部に細かく刻目を施し、



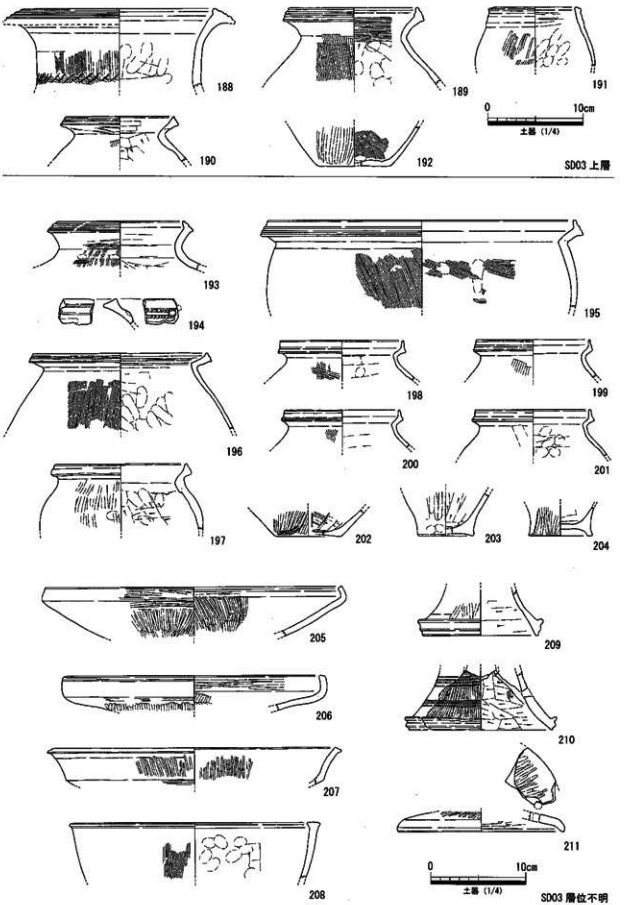
第47図　SD03平面図（1/60）・断面図（1/60・1/40）、出土遺物（1/4・1/2）



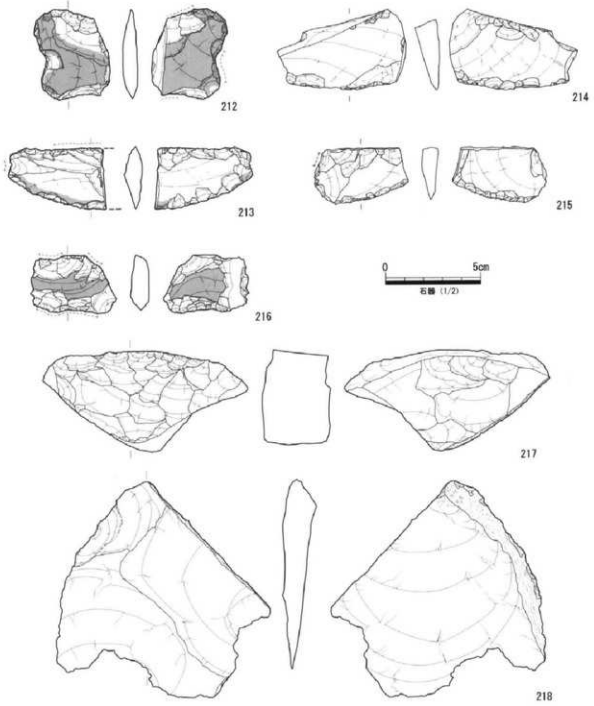
第 48 図　SD03 出土遺物 1 （1/4・1/2）



第 49 図　SD03 出土遺物 2（1/4・1/2）



第 50 図　SD03 出土遺物 3 (1/4・1/2)



第 51 図　SD03 出土遺物 4 (1/2)

口縁部下には幅広い単位の凹線文を 4 条施文する。内面は上半部は強い横ナデ、下半部は上方向への強い指ナデを認める。155 は装飾器台脚柱部である。脚端部が下方に屈曲し、円孔が巡る。脚柱部外面は叩き目をナデ消すが、僅かにその痕跡が残る。158 は高杯脚柱部である。細く先端が尖った工具で多条沈線文を施す。160 は支脚脚部片である。161 ～ 165 はサヌカイト製打製石器である。161 の石鏃は左右非対称で、先端部加工中に折損したものである。162 は表裏の素材面に摩滅痕があることから、打製石庖丁を素材として三角形状に加工した石鏃未製品と判断した。刃部の顕著な摩滅痕を切る 163 は

打製石庖丁である。主に片面からの加工を認める。164は打製石庖丁片である。抉り部から刃部にかけて、極めて強い摩滅痕を認める。165は自然面を除くほぼ全周に敲打打面をもつ楔状石核である。166～168は磨製石器である。166は変成作用が弱い緑色岩を石材とする太形蛤刃石斧である。167・168は緑色片岩を石材とする柱状片刃石斧である。168は顕著な変成作用を認めるが、167は変成が弱い部分を石材としており、別個体と判断できる。

169～187は当初包含層扱いで取り上げたが、後に出土位置から当該溝跡出土品として採用した遺物群である。169·170は広口壺、171は長頸壺である。172は口胴境の押捺突帯上下に強い横ナデを施す甕である。173·174·176（※編集後、173と176は同一個体と判明した）は口縁部内面の稜線が消失し、口胴部が緩やかなS字カーブとなる甕である。180～185は高杯である。185の脚台裾の矢羽根状透かしは未貫通である。187は緑色片岩製の柱状片刃石斧である。遺存部中程に着柄痕が残る。刃部先端に顕著な敲打痕があり、脱柄後叩き石として転用している。

188～192は上層出土とした土器群である。これも包含層出土品を出土位置等から採用した土器群である。188は頸部に原体刻目を巡らせる壺である。原体は二枚貝腹縁を使用する。191は口縁部下に凹線文を施文する無頸壺である。

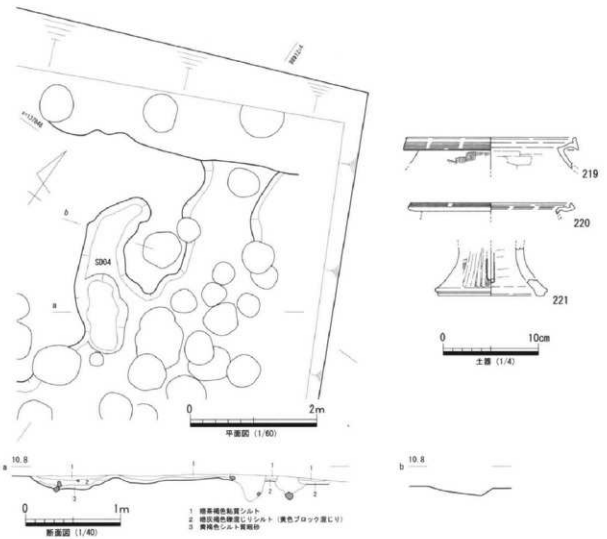
193～211は層位不明の土器である。197～201は小型の甕だが、このうち、198·200·201は口縁部上方拡張で薄造りの甕で、水簸したような精良な胎土。一方199は同様の形態だが、やや粗い砂粒が混じる胎土で、口縁部に凹線文を施文する。197は器壁が厚く、胎土中に含まれる砂粒はさらに粗い。このように、同形態の甕も胎土と細部形態の組合せにいくつかのパターンがみられる。なお、この形態の甕は、善通寺地域旧練兵場遺跡の後期前半新相から後半古相にかけての土器資料に一定量認められる。207は口縁部が屈曲して外反する高杯である。杯部外面は横方向の粗いハケ調整で、胎土中には金雲母を多く含む。211は蓋と判断した。

212～218はサヌカイト製打製石器である。212·213は打製石庖丁で摩滅痕が顕著。214·215はスクレイパーである。216は楔状石核で、表裏の素材面に摩滅痕を留めた打製石庖丁転用品。217は板状素材を石核に用い、敲打分割した後に分割面を打面として剥片剥離を行う分割石核である。現状で厚さ3.5cmをはかるので、板状素材の厚さはそれを越えるものと考えられる。218は、そのような板状素材の小口自然面を打撃して得られた大型剥片である。背面に2面の大きなネガ面が遺存する。剥片縁辺は鋭い刃縁を留めており、遺跡内で剥離された剥片である可能性が高い。

以上の出土遺物から、SD03は弥生時代中期後半から後期前半新相にかけて存続した溝跡で、存続期間の長さと、不規則な土器集中部の存在、また不明瞭な土層堆積状況等からみて、自然形成の浅い窪地のような遺構である可能性が高いといえる。

SD04（第52図）

4区東端で検出した溝跡状の浅い落ち込みである。SR02の北肩が浅く北側に広がり、幅2m以上、深さ0.08～0.1mの範囲に礫混じりの褐色系シルト層が堆積し、一部西側に派生する深さ0.16mの溝跡を伴う。SR02の北肩から当該溝跡西肩への遺構ラインは、2～3m北西に位置する住居跡SH07に沿ってカーブするように見える。詳細はSR02の項で述べるが、SR02北肩では焼成破損土器を含む多量の土器が出土しており、当該溝跡と合わせてSH07の周辺付属施設である可能性が高い。なお、重



第 52 図　SD04 平面図（1/60）・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

複する多くの柱穴は、当該溝跡に後出するものである。

219 ～ 221 の土器片が出土した。弥生時代中期後半に所属する。

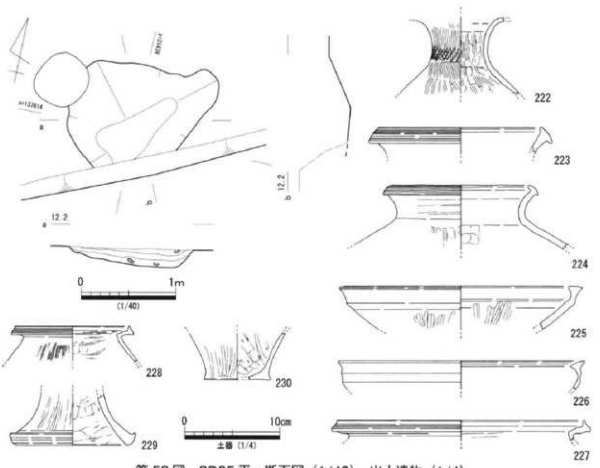
SD05（第 53 図）

1 区南端で検出した溝状の落ち込みである。最大幅 1.3 m、深さ 0.2 m で南側調査区外に延びる。南壁との境では幅が 0.9 m に減じており、その幅で南に接続するとすれば、溝跡の北端で途切れる部分だけが不定形に広がったものと言える。埋土は黄褐色系シルトで、溝跡 SD01 や SD02 など住居跡周溝跡と判断した溝跡に類似する。

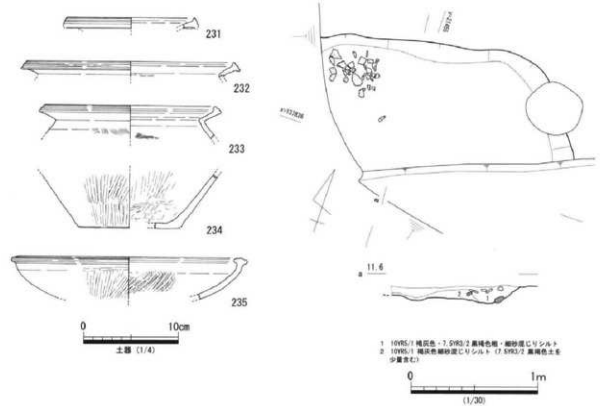
222 ～ 224 は壺である。222 は頸部下端に二枚貝腹縁の押捺刻目を施す。そのほか、弥生時代中期後半に所属する遺物群である。

SD06（第 54 図）

2 区中央東よりで検出した溝跡である。SR04 や試掘トレンチにより滅失する部分が多く、南に向かっ



第 53 図　SD05 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 54 図　SD06 平・断面図（1/30）、出土遺物（1/4）

てカーブする溝跡の北肩ラインだけを検出した。そのため当初は竪穴住居跡と誤認して調査を進めている。北側の立ち上がりは断面図に示したように緩やかで、底場からやや浮いた位置で、土器片及び小型礫の集積が認められた。南側への立ち上がりが僅かに断面図に反映しており、遺存部南端から数十センチ以内で収束するものと推定し、溝幅は約1.5 mとなる。溝跡のカーブは概ねSH05の掘り形に対応する。位置関係からも、SH05の周溝の一部とみられる。

231 ～ 235は土器集中部より出土した遺物群である。弥生時代中期後半に所属することから、SH05の所属時期と矛盾ない。

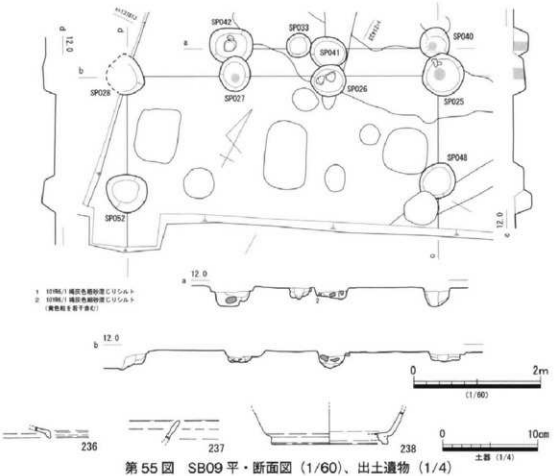
第4節　古代・中世

掘立柱建物跡

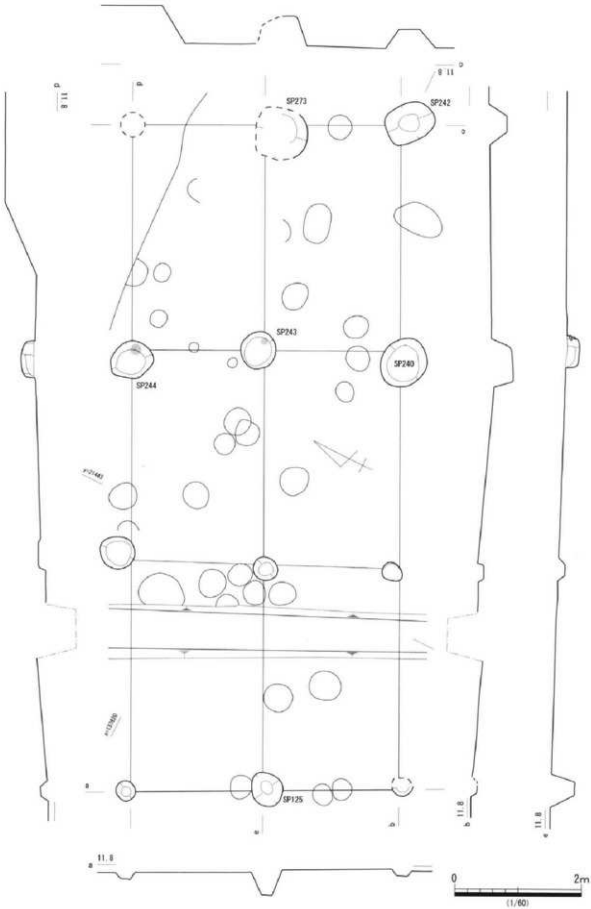
SB09（第55図）

1区南端で検出した掘立柱建物跡である。建物跡南側は調査区外に延びる。規模は梁間2間以上（現存長2.65 m、柱間長1.8 m）、桁行3間（4.9 m）、梁間が2間として復元すると、建物跡面積は17.64㎡である。北側側柱に切られて、先行する側柱の柱穴があることから、建て替えを行ったものと考えられる。建物跡主軸は北から約60度東偏し、周辺の条里型地割に合致する。柱穴は円形基調で直径0.5 ～ 0.65 m、柱痕は直径0.15 ～ 0.18 mである。

柱穴より3点の土器が出土した。いずれも須恵器で、236は坏蓋、237は坏身口縁部片、238は坏身



第55図　SB09平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第56図　SB10平・断面図（1/60）

底部片である。これらの遺物から、奈良時代8世紀中葉頃の建物跡と判断できる。

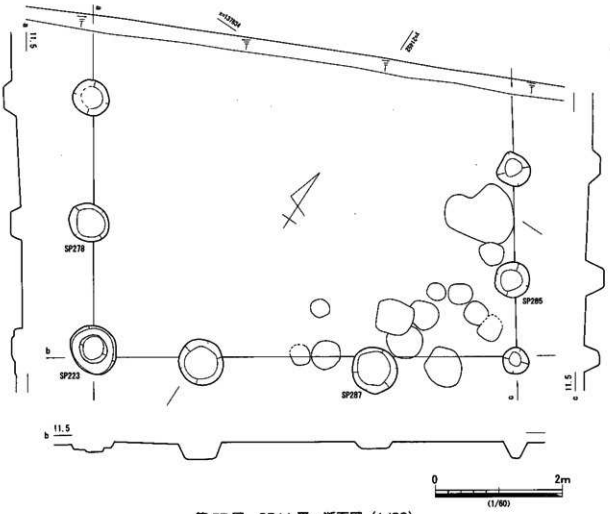
SB10（第56図）

1区東端から2区西端にまたがって検出した掘立柱建物跡である。建物跡北東隅をSR04に抉られる。規模は梁間2間（4.3 m）、桁行3間（10.2 m）、復元建物跡面積は43.9㎡と大形である。建物跡主軸は北から約60度東偏し、周辺の条里型地割に合致する。柱穴は円形基調で直径0.4～0.65 m、柱痕は直径0.12～0.16 mである。埋土は暗褐色系礫混じりシルトで、弥生期の遺構と比較して褐色味が強い。図化可能な出土遺物はなかったが、埋土の状況と柱構造から、古代の建物跡と考えられる。

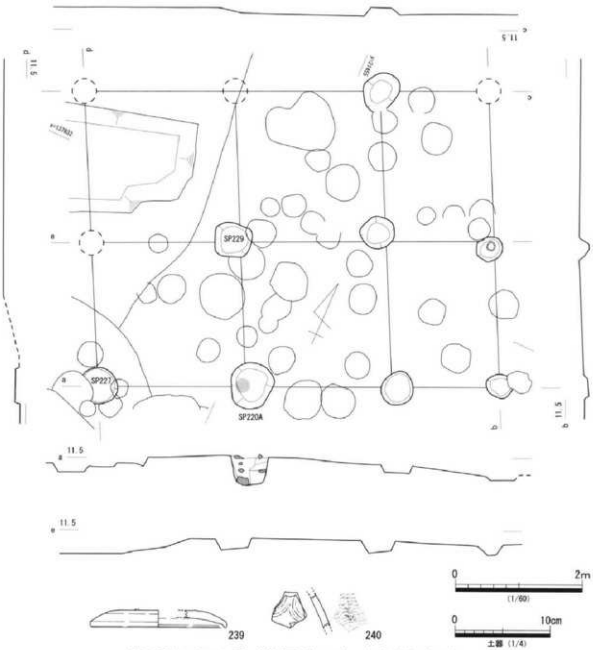
SB11（第57図）

2区北東側で検出した掘立柱建物跡である。撹乱や削平により、確認可能な柱穴が限られており、復元に困難を要したが、梁間2間（3.3 m）、桁行3間以上（現存5.0 m、柱間長2.0 m）の南北棟の掘立柱建物跡として復元するのが妥当と判断した。調査中には当該建物跡の東側に同様の規模・埋土をもつ柱穴SP287・SP279・SP285があり、同じ建物跡として復元を試みたが、柱筋が不揃なことから別遺構と判断した。

柱穴は直径0.6～0.7 mの円形基調で、深さは0.1～0.15 mと浅いことから、東側の柱列は隅柱を除



第57図　SB11 平・断面図（1/60）

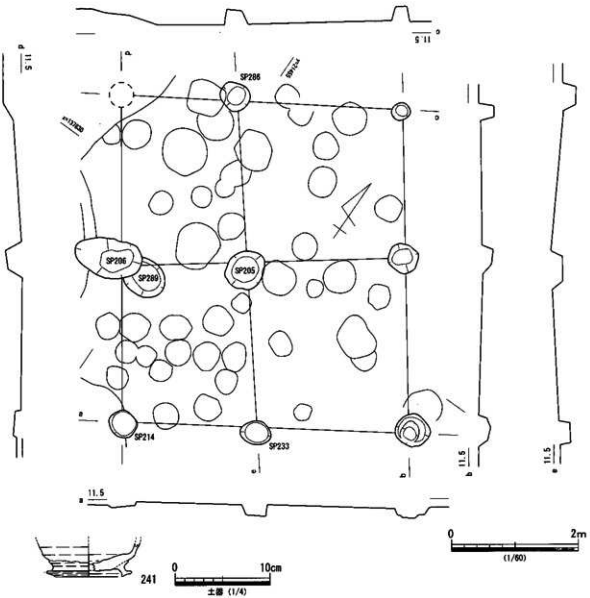


第 58 図　SB12 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

いて遺存しない。建物跡主軸方位は北から約 35 度西偏する。埋土は暗褐色系シルトで、弥生期の遺構と比較して褐色味が強い。埋土からは弥生土器片しか出土していないが、土質と柱構造から、古代の建物跡と考えられる。

SB12（第 58 図）

2区東側で検出した掘立柱建物跡である。柱筋があまり揃わないが、梁間2間（4.0 m）×桁行3間（6.3 m）の総柱構造を復元した。建物跡面積は 25.2㎡である。建物跡主軸方位は北から約 30 度西偏する。柱穴は直径 0.4 ～ 0.6 mの円形基調で、深さは 0.1 ～ 0.3 mと浅い。埋土は暗褐色系シルトで、SP220 より須恵器甕胴部片（240）、SP227 より須恵器坏蓋（239）が出土している。出土遺物から、古代の建物跡と

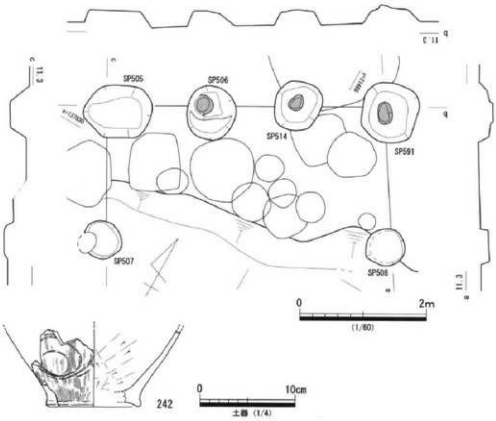


第59図　SB13平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

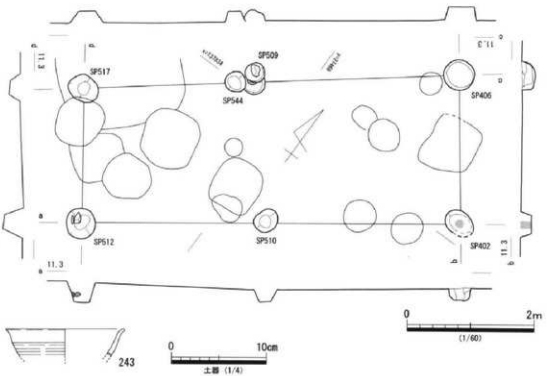
考えられる。同じ古代の掘立柱建物跡のSB13とは位置的に重複するが、先後関係は明らかでない。

SB13（第59図）

2区東側で検出した掘立柱建物跡である。梁間2間(4.5 m)×桁行2間(5.2 m)の総柱構造を復元した。建物跡面積は23.4㎡である。建物跡主軸方位は北から約35度西偏する。柱穴は直径0.4～0.6 mの円形基調で、深さは0.1～0.3 mと浅い。埋土は暗褐色系シルトである。建物を構成する柱穴からは出土遺物はなかったが、位置的に重複し、規模や埋土が類似するSP204より8世紀前半代の須恵器片（241）が出土している。したがって、時期的にはその前後の古代の建物跡と考えられる。一方、SB203と重複するが、先後関係は明らかでない。また、古銭が出土した不明遺構SX02とも重複する位置にあり、時期差を考慮する必要がある。



第 60 図　SB14 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第 61 図　SB15 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

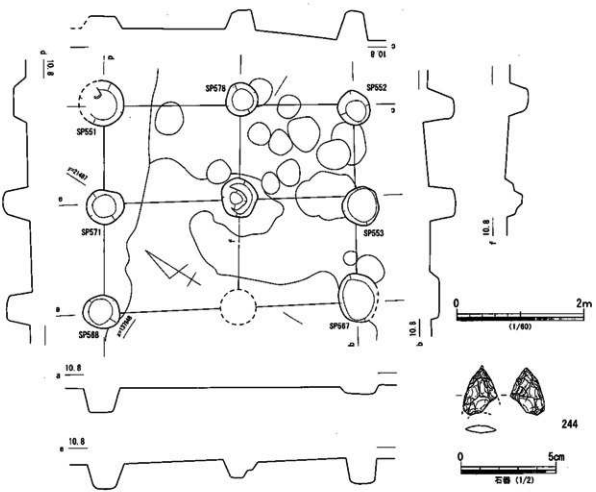
SB14（第 60 図）

4 区西端で検出した掘立柱建物跡である。梁間 2 間以上（現存長 2.8 m、柱間長 2.2 m）、桁行 3 間（4.4 m）で、梁間 2 間と想定すると建物跡面積は 19.4㎡である。建物跡主軸方位は北から約 60 度東偏する。柱穴は直径 0.65 ～ 1.0 m の円形基調で、深さは 0.2 ～ 0.3 m と浅い。埋土は暗褐色系シルトで、それぞれの柱穴より須恵器片が出土しているが、図化できたのは SP514 より出土した弥生土器 1 点のみである。242 は上げ底気味の要底部片で、外面にハケ原体による弧状沈線を認めるが、極めて不明瞭で、意図的な絵画とは言い難い。

須恵器が出土していることと、柱構造からみて古代の掘立柱建物と判断できる。

SB15（第 61 図）

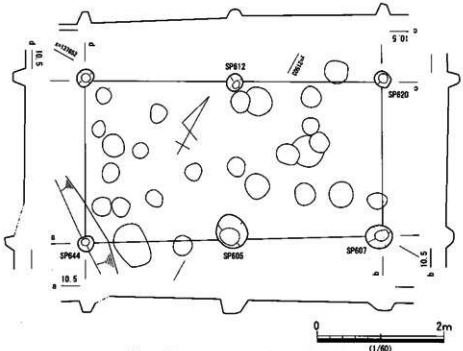
3 区西端で検出した掘立柱建物である。梁間 1 間（2.1 ～ 2.3 m）、桁行 2 間（5.9 ～ 6.0 m）、面積 13.2㎡で小規模な長屋形状である。埋土は暗褐色系と灰白色系が混在し、灰白色系の SP509 より 243 の陶器が出土しているが、建物跡はそれに切られる柱穴で構成したものと考えられることから、現段階では柱穴埋土の色調からみて、古代の掘立柱建物跡と見ておきたい。なお、建物主軸方向は 2 区の SB13 と共通する。



第 62 図　SB16 平・断面図（1/60）、出土遺物（1/2）

SB16（第 62 図）

4 区東端で検出した掘立柱建物跡である。梁間 2 間（3.15 m）、桁行 2 間（3.9 m）、建物跡面積は 12.3㎡をはかる。建物跡主軸方位は北から約 30 度西偏する。柱穴は直径約 0.6 m、深さは 0.3 ～ 0.4 m、柱筋は比較的揃う。埋土は暗褐色系シルトで、SP568・571・551 は SR03 堆積層を切って掘り込まれる。層位関係からみて、古代の建物跡と考えられる。埋土中より、サヌカイト製打製石鏃 1 点（244）が出土した。

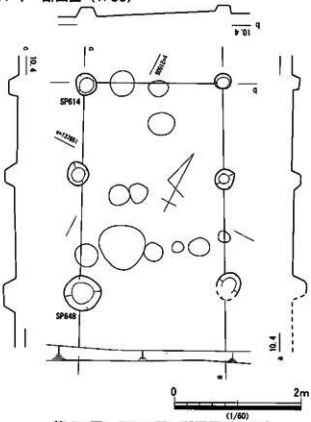


第 63 図　SB17 平・断面図（1/60）

SB17（第 63 図）

5 区で検出した掘立柱建物跡である。梁間 1 間（2.45 m）、桁行 2 間（4.7 m）、建物跡面積 115㎡をはかる。柱穴は円形基調で、直径 0.3 ～ 0.5 m、深さは 0.2 m と浅い。建物跡主軸方位は北から約 60 度東偏する。埋土は締りのない灰褐色系砂質土で、柱痕は明確ではなかった。

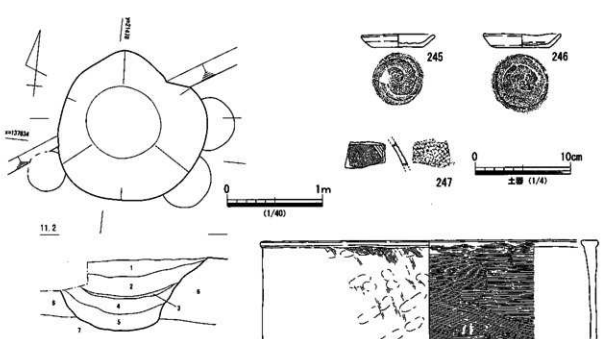
柱穴出土遺物はないが、埋土が共通する周辺柱穴からは中世の遺物が出土することから、中世の掘立柱建物跡と判断した。



第 64 図　SB18 平・断面図（1/60）

SB18（第 64 図）

5 区で検出した掘立柱建物跡である。梁間 1 間（2.2 m）、桁行 2 間（3.3 m）、建物跡



第 65 図　SE01 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

面積 7.26㎡の小形建物跡である。ただし、南側は調査区外に延びる可能性がある。柱穴は円形基調で、直径 0.3 ～ 0.5 m、深さは 0.2 ～ 0.25 m と浅い。建物跡主軸方位は北から約 30 度西偏する。埋土は締りのない灰褐色系砂質土で、柱痕は明確ではなかった。

柱穴出土遺物はないが、埋土が共通する周辺柱穴からは中世の遺物が出土することから、中世の掘立柱建物跡と判断した。

井戸跡

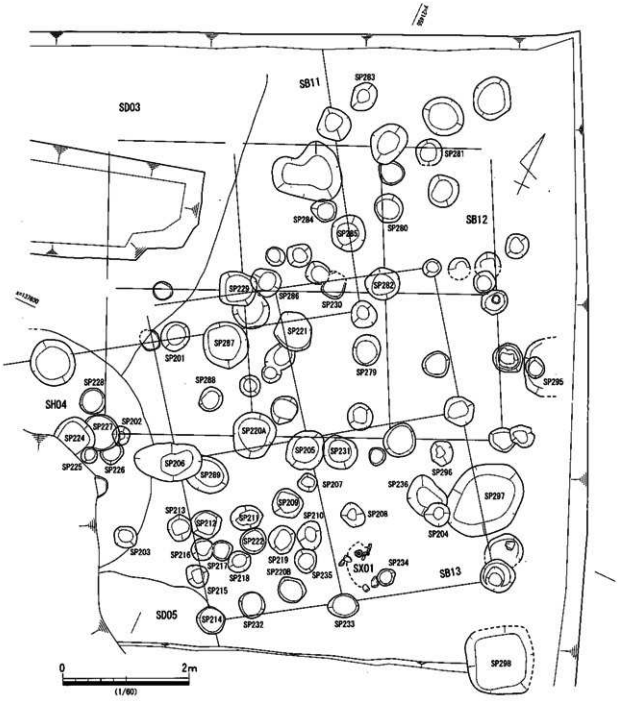
SE01（第 65 図）

3 区で検出した井戸跡である。直径 1.5 m、深さ 0.75 m で円形を呈し、側壁の立ち上がりは比較的緩やかである。底場は湧水層と考えられる灰青色砂礫層まで掘削される。埋土はブロック土を多く含む上層（1･2 層）と、軟弱な粘性シルトの下層（4･5 層）に分かれ、主に下層から図示した遺物が出土した。245･246 は土師器小皿、247 は亀山焼の甕、248 は瓦質の鉢である。これらの出土遺物からで 13 世紀末～ 14 世紀前半ごろに機能した井戸と判断した。

性格不明土坑

SX01（第 66・67 図）

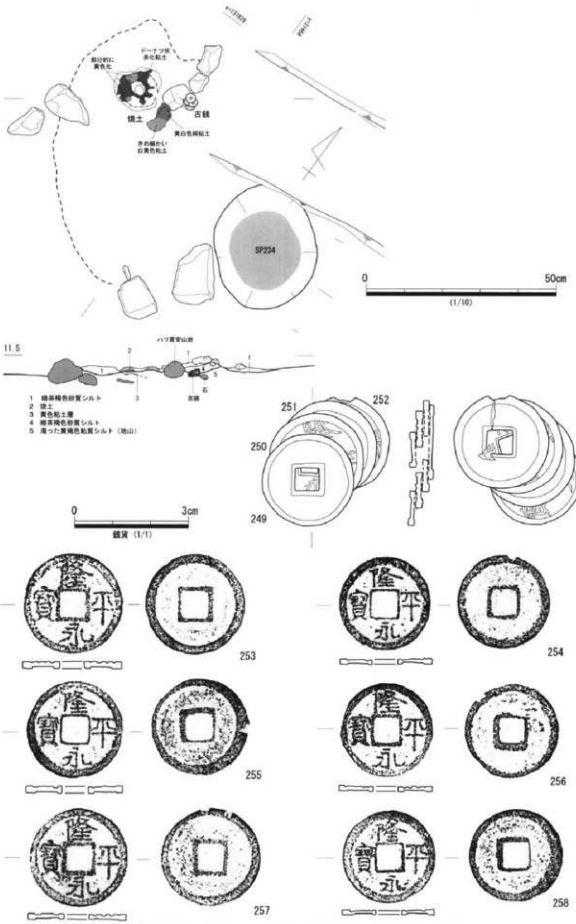
2 区東側で検出した不明遺構である。古代柱穴群検出中に、差金状態で錆付いた古銭が出土し、付近を精査すると、直径 0.7m ほどの範囲に 0.02 m ほどの厚さの暗茶褐色シルトが分布、そのやや北寄りに直径 8cm のドーナツ状に盛り上がった赤色化した粘土を確認した。その外側 1.5 ～ 2.0cm 離れて、きめ細かい白黄色粘土やハリ質安山岩の摩滅礫などが取り巻く。古銭は摩滅礫の外側傾斜面に架かる状態



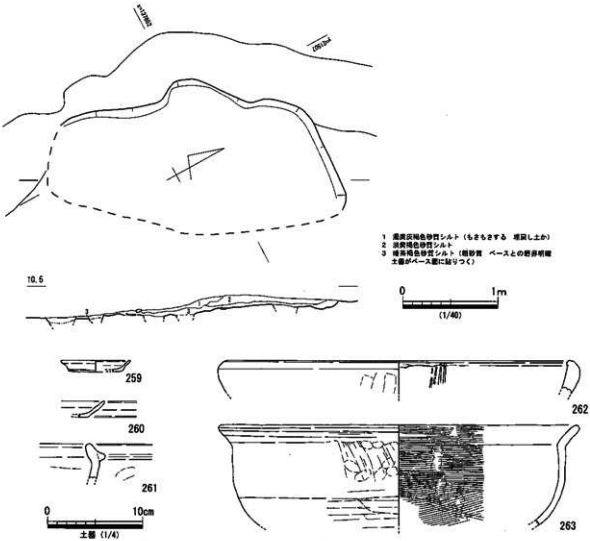
第66図　SX01 周辺遺構分布図（1/60）

で出土した。これらは、地山面に貼りついた状態で出土していることから、原位置を留めるものと考える。掘立柱建物跡 SB13 の南側梁行中間柱 SP233 の北側 0.5 mの位置にあたる。また、SB12 の南側柱筋から南に 1.8 m離れた位置にあたる。

遺構検出面は、古代の柱穴が 0.2 ～ 0.3 mと浅く、0.5 m以上上部を削平されたと考えられることから、当該遺構は暗茶褐色シルトが分布する直径約 0.7 mの範囲に存在した土坑状遺構の最下部に位置するものと考えられる。



第67図　SX01 平・断面図（1/10）、出土遺物（1/1）



第 68 図　SK03 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

古銭出土時には、カーブ面を留めた焼土塊も出土した。焼土のカーブ面は直径 6～8cm で、ドーナツ状の赤化粘土と外側の黄色粘土との間に丁度収まる大きさである。鋳造関連遺構の可能性も考え、周辺土壌を洗浄して微細遺物を探索したが、金属滓などは認められなかった。そのほか、土器など時期を特定できる遺物は回収できていない。

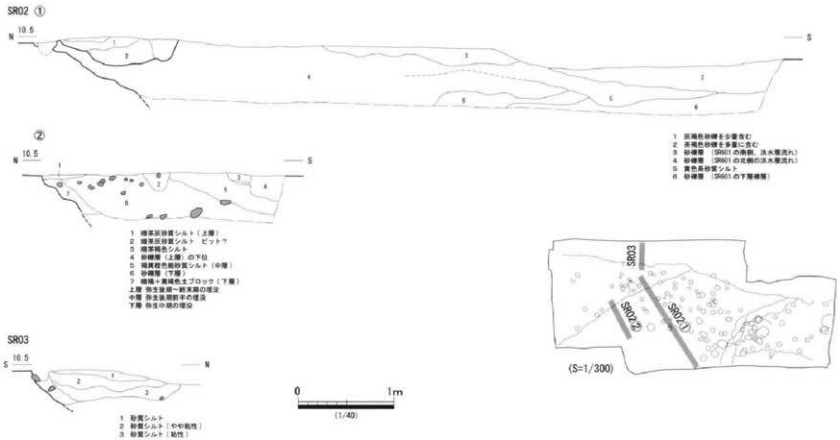
古銭は全部で 10 枚ある。すべて「隆平永寶」銘を認める。皇朝十二銭の一つである。

土坑

SK03（第 68 図）

5 区東端で検出した浅い落ち込み状遺構である。長さ 5.3 mの不整楕円形を呈し、深さは 0.2 mと浅い。埋土は淡褐色系粗砂シルトで、下部遺構との層境が明瞭である。埋土中より中世土器片が出土しており、中世の落ち込み遺構と判断した。

259·260 は土師器坏、261 は羽釜、262 は土師器擂鉢、263 は土師器土鍋である。坏や擂鉢の形状から、14 世紀中葉から後葉に位置づけられる。



第 69 図　SR02・SR03 断面図 (1/40)

第5節　自然河川

SR01（第71図）

5区南東部で北肩のみ検出した河川跡である。SR02に切られ、西に流下する。堆積層は最上部に暗灰黄色シルト層が堆積し、下部は4～10cm大の礫を含む砂礫層となる。川底の確認は行っていない。

切り合いから見て、弥生時代中期後半もしくはそれ以前の河川と考える。5区南壁付近で当該河川上部の中世包含層として取り上げた砂岩製の有溝石錘（270）は、出土状況の写真記録から判断して当該河川に伴うものと判断した。扁平な礫を円形に整形し、小口縁に擦り切り手法で溝を切る。そのほか、264～269の弥生時代中期後半の遺物が出土した。

SR02（第69～75図）

3区南東から4区南東隅を介して、5区中央部を西に流下する河川である。3・4区では北肩にテラスを形成し、住居跡SH07の近くで図示したように、自然礫とともに多くの弥生時代中期後半土器が出土した。土器には熱により変形したものや、接合する破片の一方には黒斑があり他方には全く黒斑がみられないものなど、土器焼成によるとみられる破損・変形品を含む。土器集中部Aとしたこれらの土器は、テラス部に堆積する淡灰茶色砂質土に含まれる。河川中心部では、5～10cm大の円礫を多量に含む砂礫層がそれを切って流下する。5区中央部ではその砂礫層上面で弥生時代後期後半～終末期の土器溜りを確認した。これを土器集中B・Cとする。土器集中Aの弥生時代中期後半から、土器集中B・Cの後期後半までの間に、当該河川は土石流等によって大部分が埋没したものと考えられる。

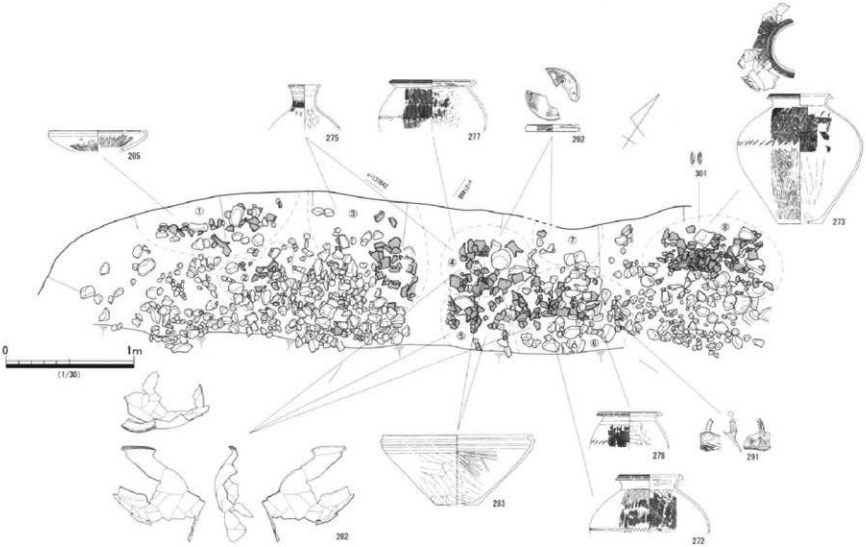
271～276は土器集中A出土の壺である。いずれも橙色系胎土で、微細な赤色粒、黒色粒を含む。このうち、273の壺は接合する破損した土器片の、片方のみに黒斑があり、黒斑部と無黒斑部の境で接合する。これは、土器が破損して分割した後にも焼成が継続したことを示す。

277～282は甕である。胎土は壺と同じく橙色系の胎土である。このうち282は形状が大きく歪む。特に胴部のねじれが顕著で、表裏面が剥離した痕跡を留める破片を含む。また、器表面の一部に気泡が多く生じ、灰青色に色調変化した部分に特に多い。これは砂粒が融解して生じたようにみえる。

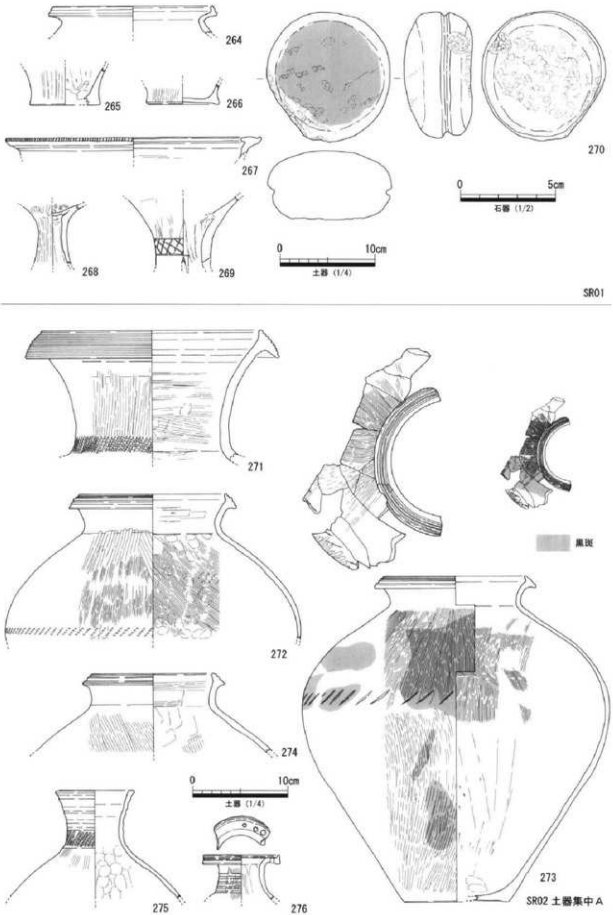
283は大型鉢である。白色系の胎土で、微細な火山ガラスを含む。橙色系の胎土と異質である。一方、284～286は口縁部に凹線文を有する高杯もしくは鉢で、胎土はいずれも橙色系である。このうち286は、表面が剥離痕が剥離痕で覆われ、図では表現できていないが歪みも生じている。さらに気泡や色調変化もある。

287～290は高杯脚部片である。287は白色系で安山岩系の円磨礫細粒を含む胎土で、ほかは橙色系胎土である。291は水差形土器、292は蓋でいずれも橙色系胎土である。

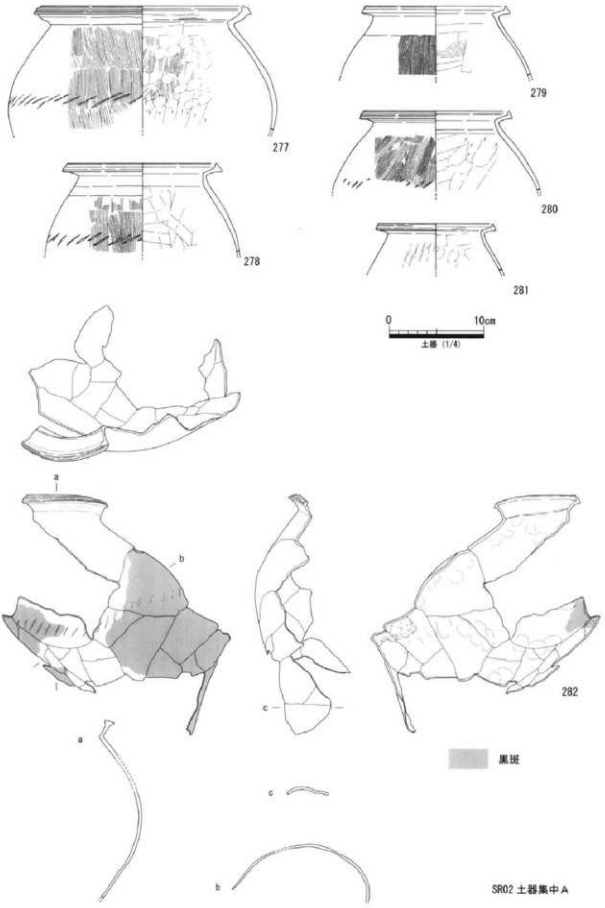
以上のSR02土器集中A出土土器には、当遺跡では少数派の胎土のものも含まれるが、多くは斉一的な橙色系胎土をもち、一部の壺（273）・甕（282）・鉢もしくは高杯（286）には変形・剥離・気泡・色調変化などが認められた。これらは被熱・被炎等の非常の事故により生じたものとみるのが妥当である。厳密には土器使用中もしくは使用後の二次的な被熱の可能性もあるが、土器焼成における破損の可能性もある。焼土を探索したが、焼土片はほとんど含まれていないことは、生成要因を検討する手がかりになるが、確定的ではない。



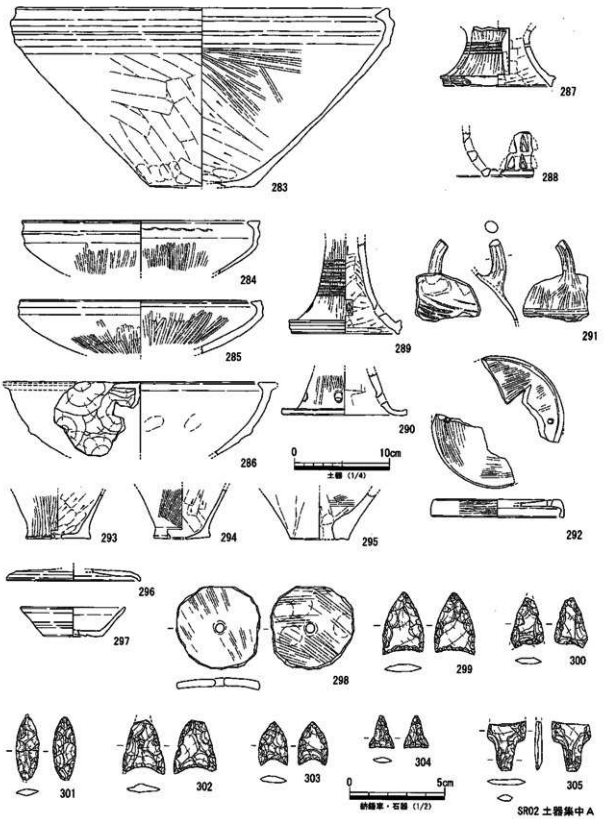
第 70 図　SR02 遺物出土状況図（1/30）



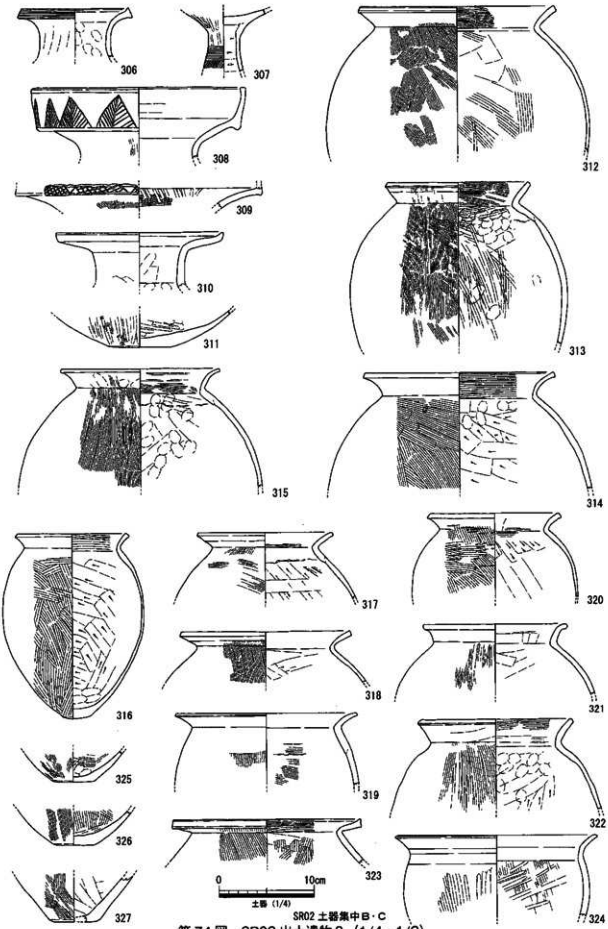
第 71 図　SR01・02 出土遺物（1/4・1/2）



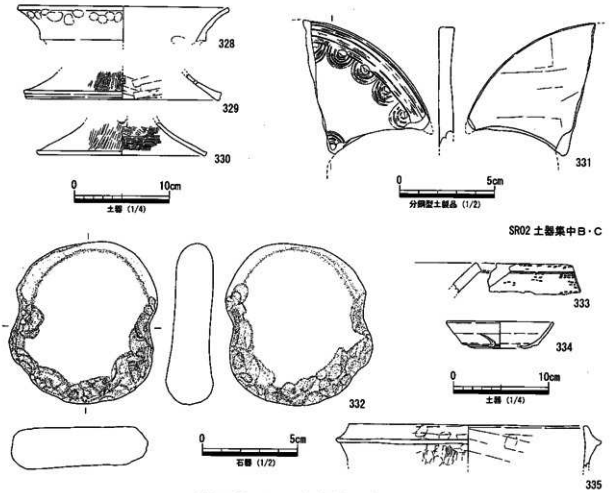
第 72 図　SR02 出土遺物 1 （1/4）



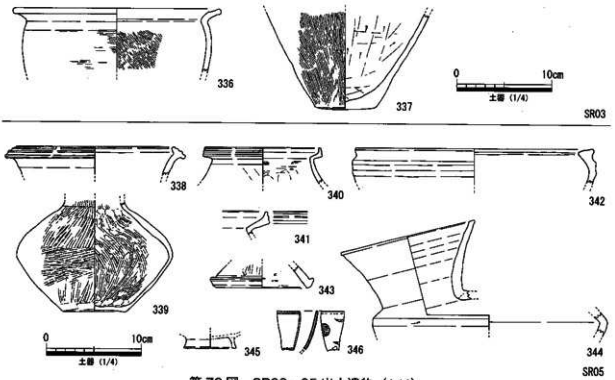
第 73 図　SR02 出土遺物 2 （1/4）



第74図　SR02出土遺物3（1/4・1/2）



第 75 図　SR02 出土遺物 4 (1/4)



第 76 図　SR03・05 出土遺物 (1/4)

このほか、土器片転用紡錘車、サヌカイト製打製石鏃などが出土している。また、296・297は河川埋没後の土器集中部A付近の窪地で出土した須恵器である。

306～315は土器集中B出土の土器である。306の壺は混在品で、すべて甕で構成する土器群である。胴部から肩部にかけての張りを残し、口縁端部を面取りする形状で、底部は平底を留める。胎土はいずれも金雲母を多く含むことで共通する。316～330は土器集中C出土の土器である。高杯脚柱部は混在で、壺、甕、高杯で構成する。壺は複合口縁2点と広口壺1点があり、複合口縁壺は口縁部に鋸歯文を施す。鋸歯内部は二分割綾杉文を描くものと、斜格子文を描くものがある。広口壺口縁部は僅かに外上方に端部を摘み上げることが特徴である。甕は土器集中Bとよく似るが、口縁部が若干カーブしながら外反することが特徴である。またカーブ途上で屈曲外反する甕もある。高杯328は口縁杯部境が突帯状に突出する形状。脚部の329は当遺跡唯一の下川津B類土器である。その他の土器は金雲母を多く含む斉一的な胎土を有する。

このほか、332の砂岩製礫石錘、331の分銅型土製品が出土しているが、いずれもSR01に近い位置で出土しており、元来はSR01に所属する可能性が高い。また、333～335は河川埋没後の堆積層で出土した中世土器である。

以上のSR02出土遺物は、土器集中Aが弥生時代中期後半、土器集中B・Cが弥生時代後期後半に所属する。

SR03（第76図）

4区北側から5区北側にかけて西に流下する河川である。直径2～5cmほどの礫を大量に含む砂礫層で埋没する。南肩部の立ち上がりは急峻で、川底の調査は行っていない。弥生時代の住居跡は当該河川により抉られるが、4区東端、5区北側で古代や中世の柱穴が河川堆積層を切ることから、弥生時代から古代までの間に生じた土石流跡と考えられる。

堆積層中より336・337の弥生時代後期の甕が出土した。

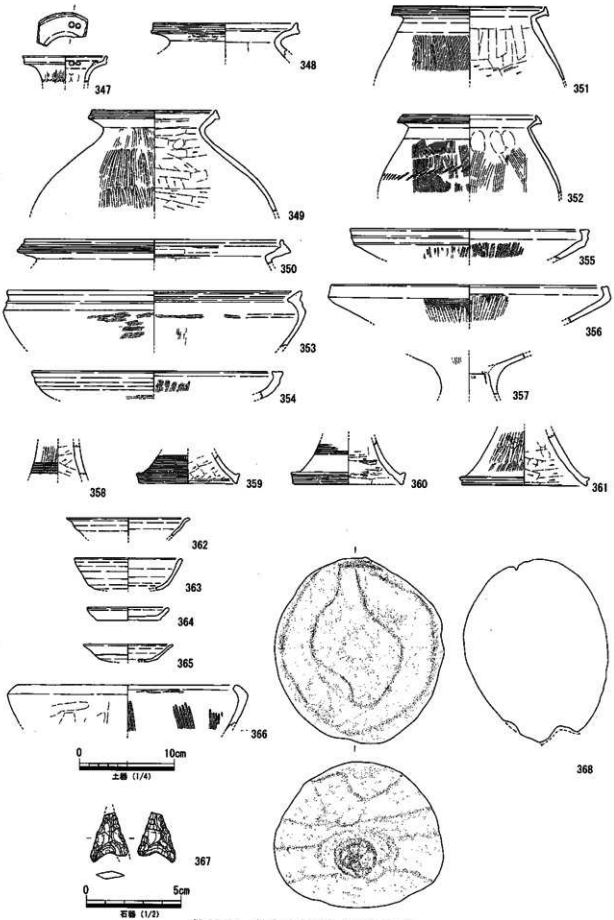
SR04

1区北東から2区中央部を西に流下し、3区南側を介して調査区外へ至る河川跡である。幅2.5～4mで5～15cm大の円礫により埋没する。深さは1区で約1m、幅が広がる2区では遺構面から1.5m下まで掘り下げたが、川底に至らなかった。3区では北側に約2mのテラス部を介して最深部は1.5m以上に及ぶ。川の肩部やテラス部には暗灰茶色砂質土が堆積する。礫による埋没に先行する堆積層である。

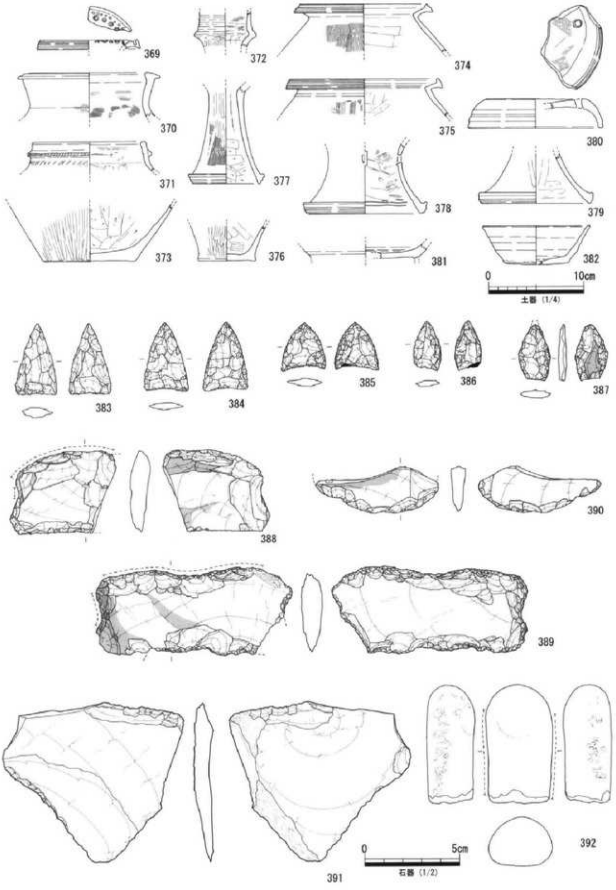
SR05に切られ、弥生・奈良時代の遺構を切ることから、古代末ごろ土石流によって一度に埋没した遺構と考えられる。

SR05（第76図）

1区北西部で検出した河川跡である。ただし、調査区内に流水の痕跡はほとんどみられず、数度にわたって埋めて整地した水平堆積土層を確認した。河川肩部は崖状の傾斜で、そのまま現在の観音堂川へ繋がるものと推定される。



第 77 図　柱穴出土遺物 (1/4・1/2)



第78図　包含層出土遺物（1/4・1/2）

調査区内では河川堆積下部で中世初期の須恵器が出土しており、河川の整地時期はそれ以後である。河川形成時期は定かでないが、弥生時代の遺構は完全に切られており、それ以後と言える。古代末～中世初期のいわゆる完新世段丘形成時期に一致する可能性があろう。338～344に出土遺物を示した。このうち、343·345が段丘崖最下層で出土したもの。346が段丘崖埋没層より出土したものである。

第6節　柱穴出土の遺物（第77図）

347～368に住居跡や建物跡を構成しない柱穴出土の遺物を示した。このうち362は2区出土の須恵器で9世紀ごろの所産である。2区出土皇朝十二銭出土遺構の下限を示す遺物と評価できる。368は凝灰岩製の叩き石である。小口に窪みがみられる。

第7節　包含層出土の遺物（第78図）

包含層出土の遺物を369～392にまとめた。372は極端に頸径が細い細頸壺である。口縁部は複合形状で、外面に凹線文を施す。胎土は橙色系である。380は蓋である。外縁に凹線文を施す。382は2区出土の須恵器である。9世紀に位置づけられる。

383～387はサヌカイト製打製石鏃である。387は凸基無茎式で、ほかは平基式。388·389はサヌカイト製打製石庖丁、389の表裏の摩滅は弱い。391はサヌカイト製の大型剥片である。小口面に自然面を留める。392は砂岩製の叩き石である。側縁を中心に敲打痕が残る。

第8節　奥白方中落遺跡から出土した古銭に関する鉛同位体比調査

別府大学大学院　文学研究科　魯 鍵珏（ジヒョン）・平尾良光

1. はじめに

銭貨に関する研究によると、日本の銭貨は7世紀になって生産されはじめ、8世紀からは大量に鋳造されるようになったという。これらがいわゆる皇朝十二銭である。銭貨は製造された年代や場所、発行などの情報がわかっている場合が多く、これに関する研究も色々な分野から進んでいる[1]。その中の一つが銭貨に関する自然科学的な分析で、残っている記録や肉眼観察などからでは得られない情報にまで接近し、重要な意味を付与することができる。特に、銭貨に含まれている鉛を分析して材料の産地を推定する研究は材料・製品の需要と供給、物資の移動、地域間の交流などの問題まで扱うことができる。この研究では奥白方中落遺跡から出土した皇朝十二銭の一種である隆平永寶に関して鉛同位体比分析法を応用し、古銭に使われた材料の産地を推定することにした。このことで、奥白方中落遺跡から出土した古銭や遺跡などについてより明確な理解ができると期待する。

2. 資　料

皇朝十二銭は日本古代に日本で発行された銅銭12種のことで、奈良時代の古銭3種、平安時代の古銭9種がある。隆平永寶は平安時代の古銭の中で一番古い銭となり、初鋳年月は延暦15年（796）11月である[2]。香川県仲多度郡多度津町に位置する奥白方中落遺跡では弥生時代中期後半～後期前半の住居地、古代・中世の遺構が確認され、古代の遺構からは隆平永寶が出土した。これらの隆平永寶はほぼ完全な形態を有しており、8世紀末の古銭といわれている。

この研究では奥白方中落遺跡から出土した隆平永寶の中で5点に関して鉛同位体比分析を行うことにした。5点の資料は報告番号255、257、254、256、252であり、これらの表面から錆を少量採取していただき、測定用の試料とした。

3. 鉛同位体比の原理[3]

地球が誕生したのは45.6億年前とされている。そして、この時にすべての元素の同位体組成は地球上で各元素毎にある値になっていて、その値は地球のどこでも同じ値であったとされている。ほとんどの元素の同位体比は時間が経っても変化しなかったが、例外的ないくつかの元素は変化した。鉛はその例外的な元素の一つである。

鉛（Pb）には^{204}Pb,^{206}Pb,^{207}Pb,^{208}Pbの同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた^{238}Uは^{206}Pbに、^{235}Uは^{207}Pbに、^{232}Thは^{208}Pbに変化する。よって、U（ウラン）とTh（トリウム）が減少した量だけ鉛の量は増えてくる。各鉛同位体の量は岩石中のU、Th、Pbの量比および岩石中でPbとU、Thが共存していた時間の長さによって、それぞれの増加量が異なるため、鉛同位体比の違いとして表わすことができる。

それ故、同位体の量が地球の誕生から変わっていない^{204}Pb量と、変化した^{206}Pb,^{207}Pb,^{208}Pb量との比を調査し、これを世界の鉛鉱山の同位体比と比較することによって鉛の産地の違いを判別することができる。

4. 分析方法

採取したサビ試料に関して鉛同位体比を次のように測定した。試料をアルコールで洗浄し、石英製ビーカーに入れ、少量の硝酸で溶解した。これを蒸留水で約5mlに希釈し、直流2Vで電気分解した。約1日の時間をかけて電気分解を続け、析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。この溶液から0.2μgの鉛を分取し、リン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上に乗せた。以上のように準備したフィラメントを質量分析計（別府大学に設置されているサーモフィッシャーサイエンティフィック社の表面電離型質量分析計 MAT262）の中にセットし、条件を整え、鉛同位体比を1200℃で測定した。また、同一条件で標準鉛試料 NBS-SRM981 を測定し、規格化した。

5. 測定値の表し方[4)]

鉛同位体比測定の結果を理解するため、資料の同位体比を次のように示した。鉛には ^{204}Pb, ^{206}Pb, ^{207}Pb, ^{208}Pb の独立した4つの同位体があり、同位体比は $^{206}Pb/^{204}Pb$, $^{207}Pb/^{204}Pb$, $^{208}Pb/^{204}Pb$, $^{204}Pb/^{206}Pb$, $^{207}Pb/^{206}Pb$, $^{208}Pb/^{206}Pb$, $^{204}Pb/^{207}Pb$, $^{206}Pb/^{207}Pb$, $^{208}Pb/^{207}Pb$, $^{204}Pb/^{208}Pb$, $^{206}Pb/^{208}Pb$, $^{207}Pb/^{208}Pb$ という12の方法で表現される。この方法の中で一番整った図で表現でき、4種類の同位体を含む $^{206}Pb/^{204}Pb - ^{207}Pb/^{204}Pb$（B式図）と $^{207}Pb/^{206}Pb - ^{208}Pb/^{206}Pb$（A式図）という2つの図を用いた表現方法を利用して測定結果を図化した。

中国の前漢時代、後漢時代・三国時代の銅鏡を分析して、これらを図中にプロットすると、前漢時代の銅鏡と後漢・三国時代の銅鏡の材料が、はっきり区分されて分布した。そこで前漢時代の銅鏡が分布した領域を、他の出土資料と比較して華北産材料の領域（A と A'）と表し、後漢時代・三国時代の銅鏡が分布する領域を華南産材料の領域（B と B'）と表した。弥生時代後期の突線鈕銅鐸や広形銅矛などの青銅器の中でもより後期とされる資料は華北産材料の領域の中で一定な範囲に集まって分布するので、この領域を特定領域 'a' と表した。

日本産材料の領域を設定する場合、西暦6世紀頃までの遺物で日本産の材料を用いたと断定できる資料は今のところ確認できていないので、8世紀以降に作られた銭貨と現代の鉛鉱山が示す分布を日本産材料の領域（C と C'）とした。

朝鮮半島産材料の領域には、朝鮮半島で製作されたと考えられる多鈕細文鏡を用い、それらが示す分布領域を朝鮮半島産材料の範囲（D と D'）とした。

鉛材料の産地は当然鉛鉱山が示す値から設定するべきであるが、文化財資料が製作された当時に利用された鉱山を探すことは無理であり、現実的にも限界がある。そのため、文化財資料が製作された当時の鉛材料を資料から取り、それを基準に領域を仮定し、設定した。この仮定した領域は弥生時代資料だけでなく後の時代の資料の判別にも利用でき、今までは矛盾がないようにみられる。

6. 結　果

隆平永寶の鉛同位体比分析の結果、得られた値を第1表に示し、第79図・第80図に図化した。奥白方中落遺跡から出土した5点の隆平永寶はすべてが日本産材料の領域に重なって分布した。拡大図をみると、5点の資料はかなり近い値を示している。これは5点の隆平永寶が同一の材料で鋳造された可能性が高いことを意味する。また、このことは5点の資料が同じ材料で同一の時期あるいはかなり近い時期に鋳造された可能性があることを示していると考えられる。

第1表　奥白方中落遺跡から出土した隆平永寶の鉛同位体比値

番号	資料名 報告番号	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	測定番号
1	隆平永寶 255	18.423	15.609	38.542	0.8473	2.0921	BP1392
2	隆平永寶 257	18.424	15.610	38.544	0.8473	2.0921	BP1393
3	隆平永寶 254	18.420	15.605	38.528	0.8472	2.0917	BP1394
4	隆平永寶 256	18.421	15.609	38.539	0.8473	2.0921	BP1395
5	隆平永寶 252	18.419	15.605	38.529	0.8472	2.0918	BP1396
	誤　差	± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006	

7. 考　察

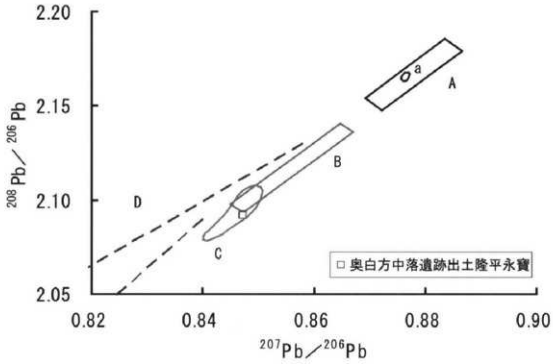
奥白方中落遺跡出土の隆平永寶に関する測定結果をより深く理解するために、これまで測定された隆平永寶と皇朝十二銭の測定結果と比較してみた[5]。第81図・第82図は今回の隆平永寶とこれまで測定された隆平永寶とそれ以外の皇朝十二銭を比較した図である。これまでに測定された隆平永寶はすべてが日本産材料の領域に分布しており、皇朝十二銭もそのほとんどが日本産材料の領域に位置した。これまでに測定された隆平永寶には2種類の材料があるようにも見える。今回の資料はその一方の材料と類似している。

第83図と第84図は日本の鉱山の値と今回の資料を比較した図であり、第85図と第86図は今回の資料とこれまで測定された皇朝十二銭、長登鉱山の値を比較した図である。第83図と第84図をみると、今回の5点の資料は日本産材料ではあるが、日本の鉱山と比べると一致する鉱山はないように考えられる。そのため、今のところでは今回の資料が日本のどこの鉱山の材料で鋳造されたかはいえない。しかし、第85図と第86図をみると、長登鉱山の鉱石が今回の資料や皇朝十二銭などと誤差範囲内の近接したところに位置することがわかる。このことは奥白方中落遺跡出土の隆平永寶が長登鉱山あるいはその付近の鉱山からの材料で鋳造された可能性があることを示唆するともいえる。

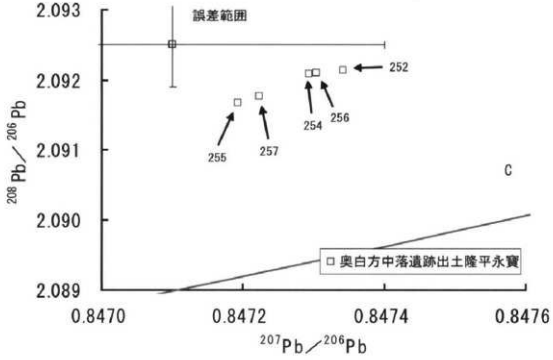
隆平永寶を含む皇朝十二銭のような古銭は現在残っている記録が多く、得られる情報も多い。それに鉛同位体比分析のような科学的な研究が加えられると、より詳しい情報まで得ることができる。今回の資料である隆平永寶5点は測定の結果、日本産材料であることはわかったが、詳しくどの鉱山の材料であるかを明らかにすることはできなかった。これに関して今後、日本の鉱山や古銭に関する研究がより進んだ後に考え直す必要がある。

※参考文献

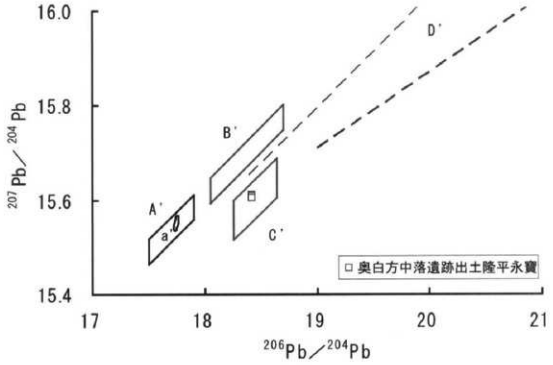
1) 高橋照彦、2001「日本における銭貨生産と原料調達」国立歴史民俗博物館報告第86集 p.131 ～ p.183
2) 水野清一・小林行雄、1959「図解－考古学辞典」東京創元社 p.325 ～ p.326
3) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と鋳造」鶴山堂（東京）p.31 ～ p.33
4) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と鋳造」鶴山堂（東京）p.35 ～ p.39
5) 齋藤　努、2001「日本の銭貨の鉛同位体比分析」国立歴史民俗博物館報告第86集 p.65 ～ p.129



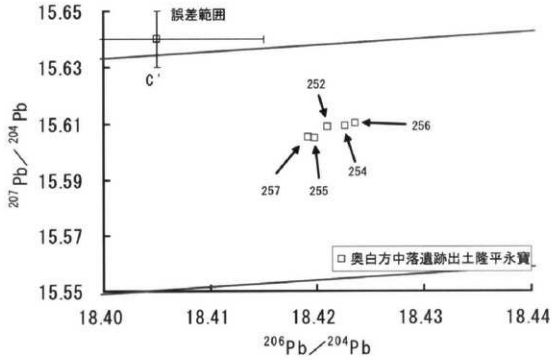
第 79 図　奥白方中落遺跡から出土した隆平永寶の鉛同位体比（$^{207}Pb/^{206}Pb$–$^{208}Pb/^{206}Pb$）



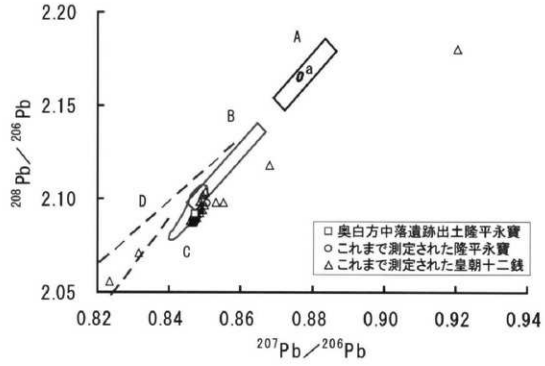
第 79 図の拡大図（$^{207}Pb/^{206}Pb$–$^{208}Pb/^{206}Pb$）



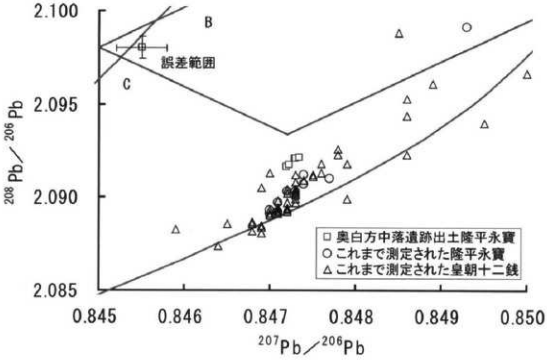
第 80 図　奥白方中落遺跡から出土した隆平永寶の鉛同位体比（$^{206}Pb/^{204}Pb$-$^{207}Pb/^{204}Pb$）



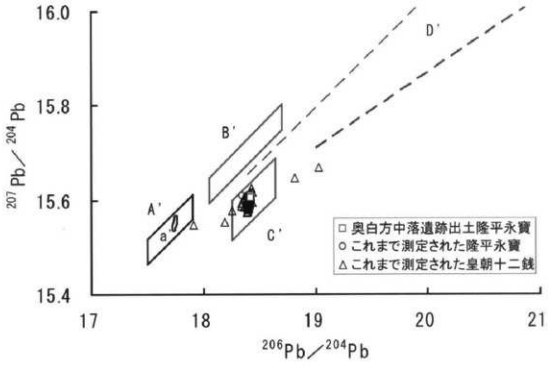
第 80 図の拡大図（$^{206}Pb/^{204}Pb$-$^{207}Pb/^{204}Pb$）



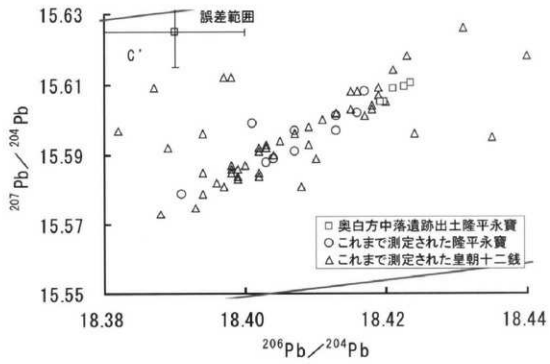
第 81 図　今回の隆平永寶とこれまで測定された隆平永寶・皇朝十二銭の鉛同位体比
($^{207}Pb/^{206}Pb$-$^{208}Pb/^{206}Pb$)



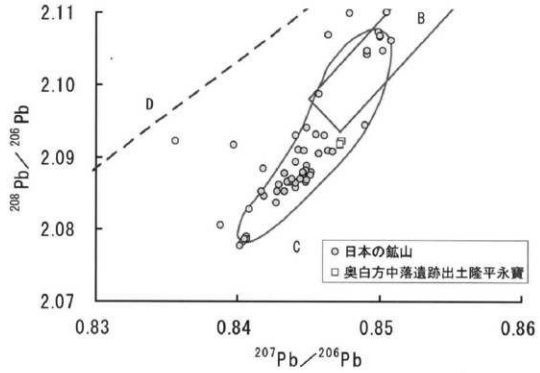
第 81 図の拡大図 ($^{207}Pb/^{206}Pb$-$^{208}Pb/^{206}Pb$)



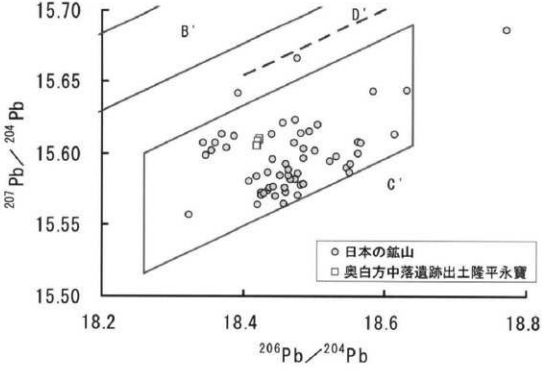
第 82 図　今回の隆平永寶とこれまで測定された隆平永寶・皇朝十二銭の鉛同位体比
($^{206}Pb/^{204}Pb$-$^{207}Pb/^{204}Pb$)



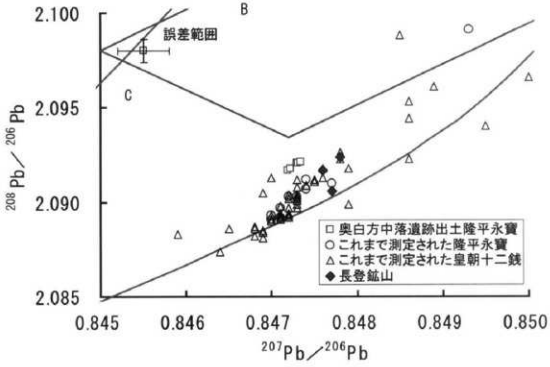
第 82 図の拡大図 ($^{206}Pb/^{204}Pb$-$^{207}Pb/^{204}Pb$)



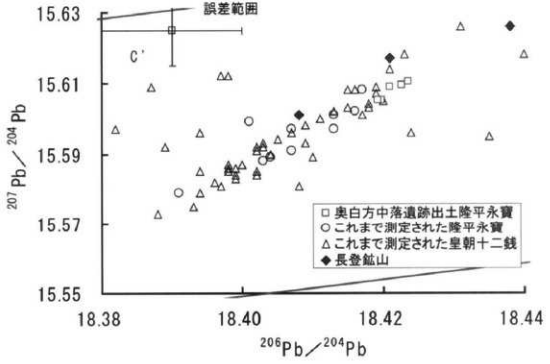
第 83 図　今回の隆平永寶と日本の鉱山の鉛同位体比（$^{207}Pb/^{206}Pb$–$^{208}Pb/^{206}Pb$）



第 84 図　今回の隆平永寶と日本の鉱山の鉛同位体比（$^{206}Pb/^{204}Pb$–$^{207}Pb/^{204}Pb$）



第 85 図　今回の隆平永寶とこれまで測定された隆平永寶・皇朝十二銭・長登鉱山の鉛同位体比
($^{207}Pb/^{206}Pb$-$^{208}Pb/^{206}Pb$)



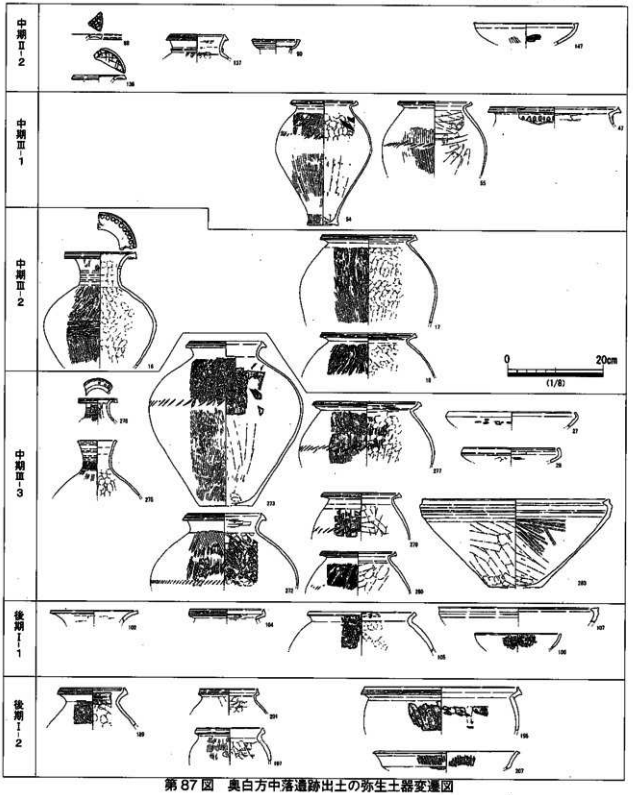
第 86 図　今回の隆平永寶とこれまで測定された隆平永寶・皇朝十二銭・長登鉱山の鉛同位体比
($^{206}Pb/^{204}Pb$-$^{207}Pb/^{204}Pb$)

第9節　まとめ

（1）奥白方中落遺跡出土の弥生土器

弥生時代中期後半から後期前半までの土器資料が多く出土した。当遺跡と同一水系にある普通寺周辺出土資料に主に基づいて組まれた信里編年（信里 2005）を援用し、これらの土器を位置づけてみたい。

壺・甕に細い凹線文が出現する時期は、信里編年中期Ⅱ-2である。この時期は広口壺口縁部内面の



第87図　奥白方中落遺跡出土の弥生土器変遷図

加飾が残り、細頸壺の口縁部突帯が凹線文に変化するなど、凹線文盛行期に向けて土器の各部位に凹線文施文の方向性がみられる。掘立柱建物跡SB03出土の土器、SD03出土土器の一部にはこの時期のものがある。

甕口縁部を上方に拡張し、やや典型的な凹線文を施文し始めるのは、中期Ⅲ-1である。甕A5型式は肩がはり、底部に向けて強く窄まる形態を特徴とする。加えて、善通寺地域や当地域では甕の口縁部・頸部境に前段階までみられた押捺突帯が、凹線文盛行に伴うヨコナデ技法の影響を受けて、突帯全体にナデがおよび、押捺や突帯上下の接合部の凹凸が器壁と一体化し、押捺底部の窪みだけが残る状態が生じる。SH06やSB03出土資料はこの時期に位置づけられる。

SB03に後出するSH03では、広口壺内面に円形浮文を連続して添付し、頸部外面は太い凹線文（いわゆる「凹線文B種」（小林・佐原1964））が施され、甕口縁部は上下に大きく拡張し、強いヨコナデを伴う典型的な凹線文を施す。これらは、中期Ⅲ-2に位置づけられる。

SR02土器集中Aでは、広口壺の頸部の外反度が弱く、直立気味となり、頸部上端から口縁部が急に反転して短く開く。また、口縁部内面に小穿孔を伴う円形浮文が貼付される。頸部外面の凹線文はやや細めとなる。口縁部が外反しない直口壺が出現し、頸部外面に凹線文を施す。壺は口縁部の短いタイプが多く、後期初頭へ続く器形が増える。甕は口縁部凹線文を維持しつつ、胴部中程に最大径をもち、肩部の張りが減少する傾向がみられ、やや厚手のものが増える。また高杯では口縁部を短く内面に折り曲げたタイプが多くなる。これらは、後期初頭にも共通する要素を多く併せ持ち、中期Ⅲ-3として位置づけられる。

後期は前半古相の後期Ⅰ-1と前半中相のⅠ-2に分けられる。SK02出土資料は凹線文施文の大型鉢をもちつつ、口縁部に凹線文を施さない甕が出現する。後期Ⅰ-1である。SD03には口縁部が屈曲して外反する高杯が出現する。後期Ⅰ-2に位置づけられる。

以上、中期Ⅱ-2から後期Ⅰ-2まで、連続的な土器様相の変化が認められる。なお、焼成破損土器が出土したSR02土器集中Aの土器群は、上記のとおり中期Ⅲ-3に位置づけることができる。

（2）奥白方中落遺跡の変遷

中期Ⅱ-2

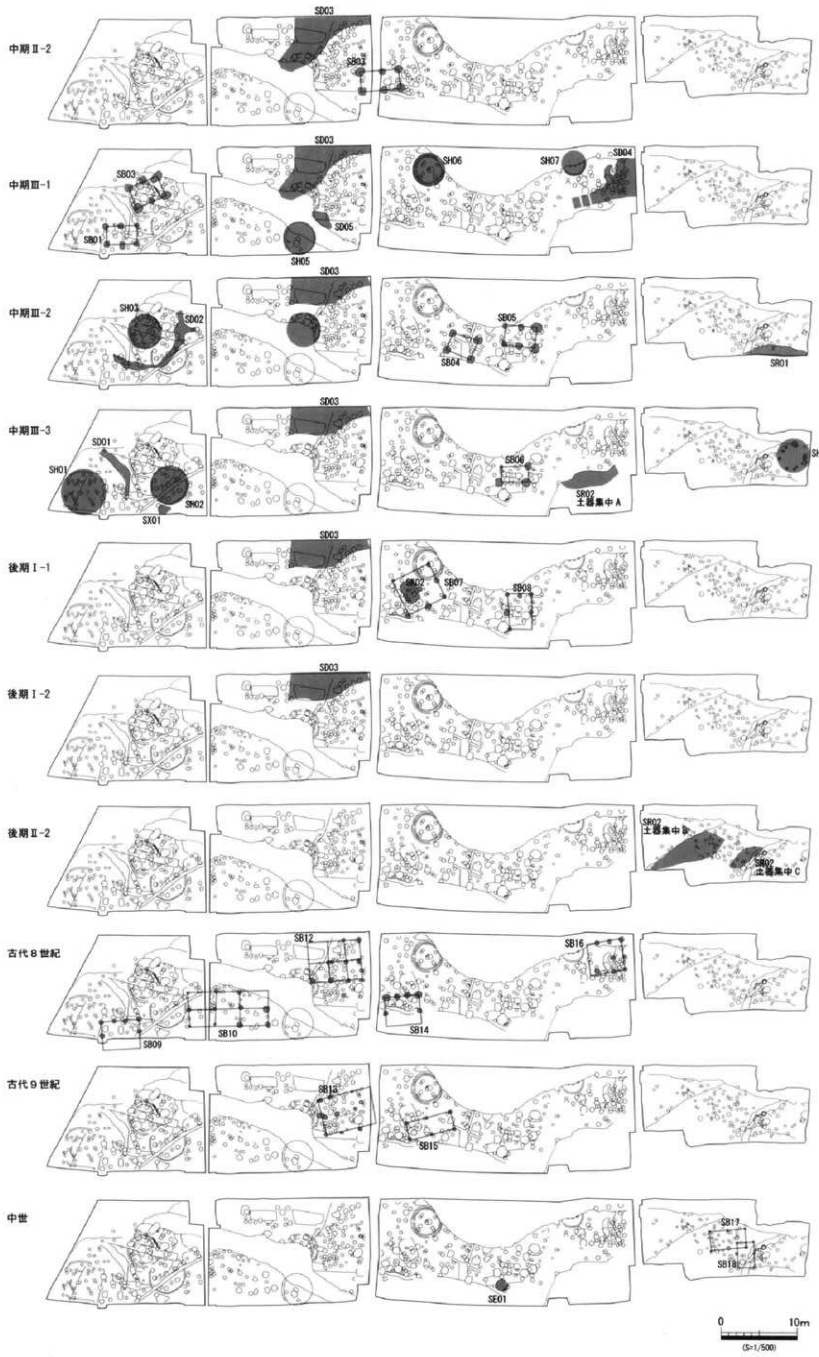
この時期に所属する遺構は掘立柱建物跡SB03の1基のみである。低地跡SD03にはこの時期の土器が多数含まれており、SB03北西側を取り巻くように低地が広がる景観を復元できる。SB03は弥生中期では最も大きな掘立柱建物跡である。

中期Ⅲ-1

地形的に高い1区に掘立柱建物跡2棟、低地のSD03を介して東方に竪穴住居跡SH05・SH06・SH07が等間隔に分布する。SD05・SD04はそれぞれ近接する竪穴住居跡の周溝の一部と目される。掘立柱建物跡2棟をセットとして捕らえるならば、25mほどの間隔を隔てて建物（群）が分布する景観を復元できる。

この時期の竪穴住居跡3棟は、鉄片もしくは後述する磁着微細粒資料が確認された住居跡である。それが鉄器生産を反映するとすれば、当遺跡の集落の営みにあって、この時期に活発に行われたとも考えられる。

中期Ⅲ-2



第88図　集白方中落遺跡遺構変遷図（1/500）

前段階の掘立柱建物群の位置に竪穴住居跡SH03が構築される。同様に、前段階のSH05に近接してSH04が、前段階のSH06・07間の「空閑地」に掘立柱建物SB04・SB05が構築される。それぞれの距離は約25mで、これも前段階の建物群間の距離にほぼ等しい。空間利用の継続性を反映するものと言える。

中期Ⅲ-3

前段階のSH03に近接してSH01・SH02が構築される。両住居跡間は約8m、中央に周溝SD01が配置される。SD01は両住居の最接近部付近で屈曲し、丁度中間に位置する。これまで、同時期の住居間の距離は20～25mが維持されてきたが、この段階では近接して構築されるようになる。反面、前段階で掘立柱建物跡2棟が近接した場所には、SB06の棟のみが構築されるにとどまる。また、そこから東に25mほど離れて、住居跡SH08が新たに構築される。

後期Ⅰ-1・Ⅰ-2

住居跡は分布せず、調査地中央に掘立柱建物跡2棟が構築される。SB07は2間×2間総柱構造で建物内部に長方形土坑が伴う。梁間1間以上の建物跡は丸亀平野では、後期から始まる建築パターンである。柱穴形態も、中期の方形基調から円形基調に変化する。なお、高松平野より東の地域では、中期段階も円形基調の掘立柱建物がある。

後期Ⅰ-2には建物自体が調査範囲からなくなり、SD03や包含層遺物で土器が少量出土するに留まる。一旦、集落が途切れている可能性が高い。

後期Ⅱ-2

後期後半新相にSR02土器集中B・Cが形成される。近隣に集落が再開されたものと目されるが、遺構は見つかっていない。

古代8世紀

8世紀中葉頃に条里方向に沿う建物が構築される。SB09・SB14は同一規格の建物で、約35m隔てて、東西主軸を揃えて配置される。その間にあるSB10・SB12は、主軸が若干北にふれており、SB09・14とは時期が異なる可能性がある。

皇朝十二銭である「隆平永寶」が出土したSX01はSB12の南前面にあり、この時期の建物遺構とは重複しない。

古代9世紀

調査地中央に、条里方向からやや西にふれた建物跡2棟（SB13・SB15）が配置される。また、東に20m離れて、主軸方向が等しいSB16が構築される。

中世

SE01は13世紀末～14世紀前半の井戸跡。やや時期が遅れて、14世紀後半の建物跡2棟や不定形土坑SK03がある。今回の調査地の主に東側を中心として、周辺に集落跡が広がっている可能性が考えられる。

以上、弥生時代中期後半を中心に、今回の調査地の遺構変遷をまとめた。当遺跡の中期後半集落は、掘立柱建物跡2棟と竪穴住居跡が20～25mの距離を隔て、レイアウトを変更しながら調査地周辺を占有し続ける空間構造の一端が明らかとなった。

（3）奥白方中落遺跡における石器生産について

今回の発掘調査で出土した石器は、総点数が529点ある。うち53点を報告した。報告した石器の石材は、サヌカイトが最も多く39点、遺跡周辺で採集可能な流紋岩5点・凝灰岩1点・砂岩が3点ある。遺跡から40km以上離れた吉野川流域に産出する結晶片岩や緑色岩は主に石斧に使用され、5点ある。実測図不掲載の石器もサヌカイトが466点と最も多く、遺跡周辺で採集可能なハリ質安山岩や安山岩の石核・剥片が少量、遠隔地石材の結晶片岩の棒状剥片が1点出土している。棒状剥片は石斧とは石材が異なり、灰色系で変成が強い石材で、縄文晩期の石棒などによく使用される結晶片岩（石墨片岩か）である。

遠隔地石材の結晶片岩石器は、遺跡内で生産した痕跡はなく、完成品として入手している可能性が高い。また遺跡周辺で採集可能な流紋岩等の石材は、弥生前期であれば磨製石庖丁石材などに利用されることがある（善通寺市龍川五条遺跡（森下英1998）で天霧山流紋岩製の磨製石庖丁がある）が、今回の弥生中期後半の遺跡では小型扁平片刃石斧に流紋岩が1点使用されているほかは、凝灰岩とともに台石・叩石・磨石として利用されているにすぎない。砂岩については、有溝石錘・礫石錘に使用される。非掲載のハリ質安山岩・安山岩は数量も少なく、本格的に石器生産に供した石材とは考え難い。つまり、遺跡内で生産された石器はほぼ全てサヌカイト製石器と考えてよい。

それでは、遺跡内でのサヌカイト製石器の生産はどのような内容であったのか、定型石器と剥片・石核類から推定してみたい。

－定型石器の検討－

定型石器は主に2種類ある。石鏃と打製石庖丁である。ほかにスクレイパーや石錐があるが、少量である。石鏃は未製品を含めて19点、打製石庖丁は図面非掲載分を含めて合計20点ある。このうち、非掲載分はいずれも表裏素材面に石庖丁の特徴的な摩滅痕を留める小片である。それらは石核に転用され、分割されたものを含んでいる。また、報告分の石鏃未製品（3）、楔状石核（148・216）は素材面に同様の摩滅痕が認められるので、それら転用品を含めると計22点の打製石庖丁が存在したことになる。なお、摩滅刃器としたものは、剥片の折れ面、特に階段状剥離による折れ面の鋭い稜線に強い摩滅痕を認める石器である。イネ科植物の収穫等に使用された際に生じる光沢をもつ独特の摩滅痕とは異なり、対象物にこすり当てることで生じるような摩滅をもつもので、善通寺市龍川五条遺跡の弥生前期の石器（森下1998の摩滅刃器C類）にも少量ながら含まれ、収穫具以外の用途をもつ石器といえる。

ところで中期後半の遺跡では、サヌカイト製石器が主体を占め、なかでも石鏃の数量が飛躍的に増加すると言われてきた。特に高地性集落と呼ばれる丘陵頂部付近に存在する遺跡、三豊市紫雲出山遺跡や坂出市烏帽子山遺跡などでは、石鏃の量が圧倒的に多い（森下英1997）。一方で、矢ノ塚遺跡（鷹田編1987）など当遺跡と同様の立地環境にある遺跡では、石鏃の約半分量の打製石庖丁が出土している遺跡も多い。これらの器種認定について、石庖丁に特有の摩滅などから器種認定を見直すと、相当な量の石庖丁を追加抽出できるものと考える。少なくとも、高地性集落である烏帽子山遺跡出土の石器（今井1994）を確認した限りでは、摩滅が顕著な石器は限られる。紫雲出山遺跡報告書（小林・佐原1964）においても、石庖丁の摩滅について詳細な記述がありながら、打製石庖丁以外の摩滅痕は特に言及されていないことから、転用された石庖丁についてはその存在を多く見積もることはできないであろう。つまり、石鏃と石庖丁の遺跡立地別の比率は現在表示されている器種組成率（森下1997）以上に差があり得る。

報告分点数	石材						総計
器種	サヌカイト	流紋岩	凝灰岩	砂岩	結晶片岩	緑色岩	
打製石鏃丁	10						10
磨滅刃器	1						1
スクレイパー	2						2
石鏃	16						16
石鏃未製品	2						2
石錐	1						1
大型剥片	3						3
分割石核	1						1
楔状石核	3						3
太型蛤刃石斧						1	1
柱状片刃石斧					3		3
扁平片刃石斧		1					1
大型台石		1					1
叩石		1	1	1	1		4
磨石		1					1
砥石		1					1
有溝石錘				1			1
礫石錘				1			1
総計	39	5	1	3	4	1	53

非掲載分点数	石材				総計
器種	サヌカイト	ハリ質安山岩	安山岩	結晶片岩	
打製石鏃丁	10				10
磨滅刃器	3				3
スクレイパー	3				3
加工痕有剥片	2				2
石鏃未製品	1				1
大型剥片	3				3
剥片	402	5	1		408
石核	1		1		2
楔状石核	41				41
分割石核	1	1			2
縁状剥片				1	1
総計	466	6	2	1	476

剥片組成	点数
3cm 以下	277
剥片 A	9
剥片 B	72
折れ片	44
合計	402

報告分重量	石材						総計 (g)
器種	サヌカイト	流紋岩	凝灰岩	砂岩	結晶片岩	緑色岩	
スクレイパー	49.91						49.91
石鏃	3.92						3.92
石錐	25.89						25.89
石鏃未製品	20.64						20.64
打製石鏃丁	304.32						304.32
大型剥片	281.88						281.88
分割石核	221.97						221.97
磨滅刃器	10.93						10.93
楔状石核	101.78						101.78
太型蛤刃石斧						38.56	38.56
柱状片刃石斧					307		307
扁平片刃石斧		7.21					7.21
大型台石							
叩石		378.13	518.96	88.84	403.43		1389.36
磨石		87.14					87.14
砥石		281.53					281.53
有溝石錘				221.03			221.03
礫石錘				240.45			240.45
総計	1021.24	754.01	518.96	550.32	710.43	38.56	3593.52

非掲載分重量	石材				総計 (g)
器種	サヌカイト	ハリ質安山岩	安山岩	結晶片岩	
打製石鏃丁	149.76				149.76
磨滅刃器	51.98				51.98
スクレイパー	58.52				58.52
加工痕有剥片	13.24				13.24
石鏃未製品	6.09				6.09
大型剥片	116.81				116.81
剥片	1059.99	29.25	11.48		1100.72
石核	91.28		43.84		135.12
楔状石核	414.49				414.49
分割石核	40.94	90.21			131.15
縁状剥片				2.89	2.89
総計	1999.79	119.46	55.32	2.89	2180.77

第２表　奥白方中落遺跡石器集計表

さて、石鏃の型式は平基式10点、凹基式3点、凸基無茎式2点、凸基有茎式1点である。型式間の数量比は紫雲出山遺跡をはじめとする香川県西部の遺跡に共通する。長さは未製品を除いて最大が3.7cm、最小が1.7cm、平均で2.7cmと、小型が多い。未製品は長さ4.7cm、5.8cmでいずれも石庖丁の転用品である。完成品でも、例えば長さ1.9cmの161は左右が非対称で基部加工が不十分である。長さが足らずに廃棄した可能性を考えたい。要するに、一定以上の素材剥片の長さが必要である。ここで仮に未製品の平均長5.3cmと完成品平均長2.7を比較すると、素材から製品まで約半分の寸法に減少することになる。最小の石鏃1.7cmを2倍して、石鏃素材剥片の最小限界長を3.4cmと仮定する。やや幅をみて、長さ3cm以下の剥片は使用目的なしに廃棄されたものと仮定できる。

－剥片類の検討－

次に、定型石器の生産に供する剥片類のあり方について検討する。

サヌカイト製石器の生産に関係する器種は、剥片408点（報告掲載3点報告不掲載405点）、石核47点（報告掲載4点、報告不掲載43点）である。このうち、長幅いずれもが3cm以下の剥片が277点を占める。残る131点のうち、全ての縁辺を折れ面で囲まれた剥片が44点ある。これを除く87点は、そのほとんどが両極打撃によって剥取された剥片で、打面が不明瞭で点あるいは線状となり、剥離途上で階段状剥離を生じて打撃方向と直交する方向に折れるものが多い。このような剥片が72点を占める。残りは打面が明瞭で、打面と主要剥離面との角度が120～130度で、剥離末端がフェザーで終り、刃縁を有する剥片である。このような剥片は大小あわせて15点に過ぎない。数は少ないものの、後者の剥片を剥片A類、前者の剥片を剥片B類とする。剥片A類は石材がまだ大きい段階で叩石等により平坦面を打撃して得られる剥片、対する剥片B類は石核を台石の上に縦置きし、叩石によって挟み撃ちし上下両端から打撃が加わることにより石核の表裏両面を剥離し、剥片剥取および石核の薄身化を図る際に生じる剥片である。数量的には剥片Bが多いことから、遺跡内では主に後者の両極打撃が行われたものと考えられるが、石核が大きい段階では剥片A類を剥離する局面があったことが確実である。次に石核の検討を行う。

石核には、板状素材の小口部を打撃して剥片を剥取した痕跡が明瞭な通常の「石核」と、板状素材を分割し分割面を打撃して剥片を剥取したか、あるいはその際の分割片を「分割石核」、素材の上下縁を打撃（両極打撃により上下縁に潰れがみられる場合が多い）し素材の表裏面で剥片を剥取する「楔状石核」に区分した。このうち楔状石核は従来「楔形石器」と呼ばれてきた石器である。サヌカイト製石器における楔形石器については、空港跡地遺跡接合資料において、両極打撃による剥片剥離を行った後の残核が、楔状石器と区分することができない形状を有していたこと（佐々木2000）から、特定の機能を有する定型石器ではなく、一義的には石器生産における残核として位置づけるのが適当と考える。

これらの石核区分は、「石核」が剥片A類を生じ、「楔状石核」が剥片B類を生じるものである。もちろん、楔状石核に至る過程で剥片A類を剥取する段階があり得る。

さて、先に述べた22点の打製石庖丁はどのような剥片を素材としているのか、報告分の10点の剥離面を検討すると、素材剥片の形状が整っていないものが多く、金山型（森下2002）の剥片と認定できるのは14の1点のみである。なお、52・213は背部調整が広範囲に及ぶことから明確ではないが、金山型の可能性もある。そのほかの素材剥片は、背面と主要剥離面の剥離方向を観察する限り、打点の左右への移動や打面を転移しながら剥取した剥片を素材としたものと考えられる。

以上により、打製石庖丁の素材剥片は、板状石核の素材面と当該剥片の主要剥離面との刃縁を刃部に

利用しており、上記剥片・石核の分類による剥片A類および「石核」が対応する。剥片に残された剥片剥離の流れは、打面が一定せず、打点が左右に振れながら、あるいは表裏入れ替えながら剥片剥離を進める状況が想定できる。これも上記の「石核」もしくは剥片A類の特徴に調和する。

サヌカイト製石器の石材は、肉眼観察による限りだが、すべて坂出市「金山」に産出するサヌカイトと考える。「金山」北麓から西麓にかけて、板状の大型石核から打面に調整を施し一定方向に打点を後退させ石核幅一杯の剥片を剥離する技法（金山型剥片剥離技術）が顕著にみられる（森下 2002、竹広 2005）。金山では伴出土器がなく時期が不明瞭だが、高松市多肥宮尻遺跡や東かがわ市池の奥遺跡などの事例から、このような技術は弥生時代中期中葉以降に出現し、おもに打製石庖丁や打製石剣の素材に用いられる（森下 2005）が、中期中葉以降のどの遺跡でもみられる訳ではない。主に原産地の金山で生産したそのような剥片と、消費地で加工自在な厚みのある板状素材、この二者が流通した品目である。

当遺跡の剥片A類は、打点を一定方向に後退させるのではなく、頻繁に転移させて石核から刃付きの大型剥片を剥離することに重点を置く。したがって、金山型とは異なるものである。自然面付着の石核の厚みから、厚さ5cmほどの板状素材を入手したことは間違いないが、そこから定型的な剥片を得るための技術ではなく、不定型でも使用可能な剥片を可能な限り得るための技術を指向したものといえる。後者のような技術は弥生後期初頭の空港跡地遺跡（佐々木 2000）弥生中期中葉の川津一ノ又遺跡（古野編 1998）、弥生前期の鴨部川田遺跡（森下友 2002）、縄文晩期の川岡遺跡（山元 2004）、縄文後期の永井遺跡（渡部 1990）に典型例をみる。これら例示した遺跡は、その地域では目だって多くのサヌカイト製石器・剥片類が出土した遺跡である。縄文後晩期から連綿と続くサヌカイト製石器生産の基本技術と考えられ、竹広文明氏が提唱した洗谷型剥片剥離技術（竹広 1988）に共通するものと考える。

当遺跡は主に厚みのある板状素材を入手し、石核をできるだけ温存させながら不定型ながらも刃縁を有する剥片A類を剥取する技術が認められた。今回の調査資料を見る限り、金山型剥片剥離技術にように、広域に流通する素材剥片などを大量生産している様子はうかがえず、入手した素材を自家消費した痕跡が顕著であると評価できる。

（4）SR02出土の破裂・変形土器について

SR02の土器集中Aは、第70図に示したように、河川北側肩部の浅い傾斜面に、河川の方向に沿って平面的に広がる土器片および礫の小規模な分布である。土器片や礫は、同一個体片がまとまり、接合する破片が多いことから、河川営力で流れたのではなく、河川肩部に投棄された状態を留めるものといえる。出土遺物は土器片以外に石鏃や剥片類が少量出土したのみで、焼土や焼石は確認できなかった。

出土した土器片には、すでに報告したように異質な土器が3点ある。282は大きく形状が歪んだ甕、273は黒斑部と非黒斑部が接合する壺、286は表面が破裂痕で覆われる鉢（もしくは高杯）である。第4章では土器焼成に伴う破損土器の可能性を指摘したが、ここでは、詳細な観察と本文報告以外の破片資料の検討を踏まえ、土器焼成痕跡と派生する問題点について述べておく。

まず上記の3点を詳細に観察する。

282は口径約16cm、器高約30+cmの中型サイズで、口縁部に凹線文、胴部最大径部にヘラ刻みを施し、内面をヘラ削りで薄く仕上げる普遍的な甕だが、口縁部から胴部下半まで器軸が30度以上歪む。焼成は堅緻で、指で弾くと金属に近い音がする。同一個体と推定した破片を含めて、表裏面は強く摩滅

する。色調は淡黄橙色部と淡灰色部があり、接合する破片間では漸次的な変化を呈する。胎土中に含まれる砂粒は、他の一般的な土器と共通し、石英・長石・赤色粒がある。ただし、砂粒が溶解して微細な気泡状の窪みとなる破片が多く、それらは特に淡灰色を呈する破片に目立つ。282に図化した接合体には、末端の縁辺で細かく捲れる部分があり、接合しない同一個体片にも末端が細かく捲れるもの（図版60）がある。しかし、捲れや歪みによって、器面に皺が生じたような痕跡はない。

同一個体と思われる破片の一部には、破裂痕を留めるもの(図版60)がある。円弧状に外器面が破裂し、クレータ状の窪みを形成する。破裂面の末端は段を形成せずにフェザーで終る。同じ破片の内面にも破裂痕がある。外面の破裂痕と異なり、3回ほどの破裂痕が重複し、破裂痕部分の縁辺には細かな捲れが伴う。このように胎土中の砂粒の融解、器体の歪みや捲れ、そして破裂痕が同一個体に共存する。

282と共通する土器が286の鉢（もしくは高杯）である。表面を覆う破裂痕からみて焼成破裂痕土器の可能性が高いが、摩滅や色調などは282に共通し、淡灰色部の砂粒の溶解、口縁部の歪み、破片縁辺の捲れを認める。

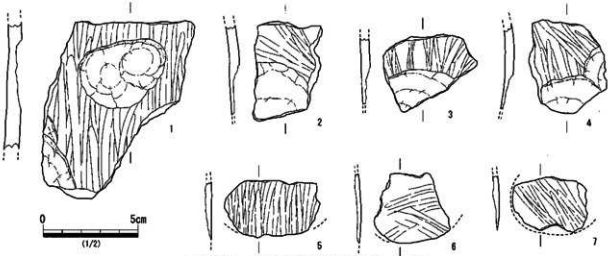
273の壺は図上で完形に復元しているが、胴部下半と口縁部～胴部上半は直接には接合しない。胴部上半側の外面一部に黒斑があり、口縁部の無黒斑部と接合する。黒斑部を細かく見ると、一部に淡灰色を呈する部分があり、その部分にのみ砂粒の溶解が認められる。また、口縁部の遺存部右端部には、表裏面および割れ口断面に灰色の黒化層が回る（図版58）状況が観察できる。胴下半部にも外面にまだらな黒斑が認められる。一部淡灰色部には砂粒の溶解もある。上下含めて、焼成破裂痕などは認められない。

以上の3点に共通して認められた砂粒の溶解は、堅緻な焼成とともに、土器が高温環境におかれたことを反映する可能性が高い。須恵器などによくみられる砂粒の溶解は、通常は千数百度以上の焼成温度をもつ窯焼成の土器に生じる。当該土器がどれほどの高温環境におかれたか不明だが、通常想定される覆い焼きによる土器焼成では説明が困難な化学変化である。一方で、外器面がクレータ状に破裂した痕跡をとどめた土器片や、黒斑・無黒斑接合、破損部黒化層の回りこみなど、土器焼成に関連する可能性が高い現象も多い。

変形土器に関しては、生成要因を推定しがたい状況である。土器製作途上の半乾燥状態で変形した可能性が考えられるが、その後砂粒溶解を伴うほどの高温で焼かれている。土器焼成前の半乾燥段階で異常な力が加わって土器が歪んだとすれば、口縁端部などに細かな皺やひび割れが生じるはずである。しかし、そのような痕跡はまったくない。

このように異質な土器の観察からは、焼成破裂痕や黒斑無黒斑間の接合など、土器焼成に関連する痕跡を見出すことができたが、一方で胎土に含まれる砂粒の溶解や土器の歪み・捲れなど、現段階では理解し難い変形土器を含めて、通常想定される覆い焼きによる土器焼成では説明が困難な化学変化を伴っていることも判明した。これらの資料は必ずしも土器焼成関連遺物だけで構成するものではない可能性が高い。

次に、本文報告では取り上げていない破片類を検討したい。SR02土器集中Aから出土した土器片で、本文報告に掲載していないものは、28リットル入りコンテナで2箱分（約80%収納）ある。そのうち、器面の破裂やひび割れなど、土器焼成に関連する可能性がある破片（田崎2000、田崎2007に準拠）は



第89図　焼成破裂痕土器実測図（1/2）

約1/5箱分ある。器面の剥離には、粘土接合痕で剥離したものや可塑性が失われてから破裂した剥離痕の縁辺に段が生じるものなど多いが、第89図に一部を示したように、焼成破裂痕土器、焼成破裂土器片が30片ほど認められた。1～4は外器面クレータ状の破裂痕をとどめた土器片である。剥離痕の末端は平面円弧状で、1のように複数の剥離痕が重複するものがある。1・4では末端が比較的直線的で、その部分は剥離面の末端断面に段をもつ。図では段部分を点描で示している。それ以外は剥離面の断面がスムーズに末端に至る（石器剥離面のフェザーに対応）ものである。5～7は焼成破裂土器片である。完形品はないが、破損部を復元すると、円形や楕円形で、中心部がやや厚く、縁辺が薄く尖る凸レンズ状となる。破裂面も器表面と同じ色調に焼きあがる、などの特徴をもつ。

これらは土器焼成中に焼成温度が500～600度に達した段階でよく生じる破損である。田崎博之氏によると、可塑性がまだ僅かに残る状態で破裂すると、上記のような凸レンズ状の破裂痕土器や破裂土器が生じるらしい。

このほか、図版60下段の高杯脚柱部には、円板充填部材の剥がれ、脚柱部割れ口の黒斑の2箇所に焼成痕跡がみられる。円板充填部材は接合部分の色調が部材・脚柱いずれもがほかの器面部と共通して橙色を呈す。その一方で、部材内部の芯は茶褐色層が橙色の器面層に包まれることが断面で観察できる。また、脚柱部の黒斑は断面観察の結果、表面の薄い黒化層の下に器面と同じ橙色層があり、その内側に胎土の芯となる茶褐色層がある。つまり3層構造をもつ。ところが、末端の割れ口には橙色層が途切れ、芯の茶褐色層と表面の黒化層のみの2層となる。このように、両者ともに土器破損後も引続き土器焼成が行われた場合に生じる現象である。

図版62最下段の底部片は途中まで亀裂が入るが割れるに至っていない個体である。底縁部は亀裂部分で1mmほどの段差が生じ、胴部下半には最大1mm弱の亀裂による空隙が生じる。亀裂内に煤や焦げなどが認められる訳ではないので、焼成後使用されることなく廃棄されたものと考えられる。

以上のように、SR02出土土器の破片資料を点検すると、土器焼成に関連する遺物が多く含まれることが判明した。報告している3点の異質な土器も、少なからず土器焼成の痕跡が認められることから、SR02近辺において土器焼成が行われた可能性は高いと考える。ただ焼土が全く出土しないことから、どのような焼成作業であったか、推定する手がかりは少ない。そして、変形土器に代表される「理解し難い現象」と、胎土中砂粒の溶解という高温環境が、これら土器焼成関連資料と直接的に結びつくか、

あるいは時間差や状況差などを介して、偶然に近い場所で生じて、同じ様に廃棄されたのか、解決できない問題は残る。愛媛県久枝遺跡（柴田編 2005）では、ほぼ同時期の変形土器が出土しており、四国外でも福岡県小郡市西島遺跡、大阪府美園遺跡・高宮八丁遺跡・雁屋遺跡・池上曽根遺跡などで出土しているが、一見して他の土器と区分できる割には報告例が少ない点は留意すべきである。金属器生産や祭祀に関わる資料という見方もある。当遺跡では次節で述べるように、幾つかの住居で小規模な鉄器の鍛冶作業を行ってはいるが、鍛冶炉形態からみても小鍛冶の範疇を逸脱するものではない。また、祭祀に関わる遺物は5区で分銅型土製品が1点出土しているのみで、積極的に祭祀場としての機能を推定するだけの材料は揃ってはいない。

なお、土器焼成関連資料は壺、甕、鉢、高杯という主要器種すべてに認められた。特定器種に限定されない土器生産の体制・背景を考えなければならない点を付記しておく。

なお、本節は愛媛大学教授田崎博之氏のご教示を得て遺物の再点検を行った成果を成文化したものである。記して感謝申し上げる次第である。

（5）奥白方中落遺跡出土の鉄器及び磁着微細粒資料

今回の調査では、弥生時代中期後半に所属する竪穴住居跡や掘立柱建物跡を構成する柱穴より、合計3点の鉄器片が出土した。いずれも断面が矩形で細長い棒状となる形態で、定型器種に区分できない「棒状鉄片」である。このような棒状鉄片、あるいは不定型な鉄片類は、同時期の三豊市紫雲出山遺跡（小林・佐原 1964）や高松市久米池南遺跡（高松市教委 1989）で出土している。また、若干時期が下るが、丸亀市綾歌町次見遺跡（香川県教委 1988）では後期前半の竪穴住居跡から、坂出市下川津遺跡（藤好・西村編 1990）では後期後半から終末期の竪穴住居跡から、それぞれ大量の鉄片類が出土している（信里 2004）。このうち、次見遺跡では掘り込みを伴う鍛冶炉が検出されており、鉄器生産に係る遺構・遺物群と判断できる。中期後半の上記遺跡では、後期以後の遺跡と比較して、鉄片類の出土量が少なく、鍛冶炉も明瞭ではないものの、当地域における初期の鉄器生産痕跡と考えてよいであろう。このような比較資料を前提として、当遺跡出土の3点の鉄片を鉄器生産痕跡と仮定した場合、それを裏付けるそのほかの遺構・遺物はどのようなものがあろうか。以下、竪穴住居跡床面の炉跡、炉跡埋土の水洗選別および磁着検査によって得た磁着微細粒資料、以上の二つの案件について検討し、当遺跡における鉄器生産のあり方について考察する。

―竪穴住居跡床面の炉跡遺構―

当遺跡では合計8棟の竪穴住居跡を検出した。そのうち、1区のSH003、3区のSH502では、床面（炉跡内部を含む）に複数の焼土集中部がある。

SH03では中央土坑の東側面傾斜にそって焼土がブロック状に分布し、土坑北側に接する住居床面の2箇所に焼土のまとまりがあった。中央土坑埋土は下部10cmに焼土細粒を含む暗黄灰色土があり、その上面窪みの傾斜面に焼土ブロックが存在する。焼土ブロック層と初期の埋没層との層境は比較的明瞭で、床面直上の土壌化層がそのまま焼土ブロック層に継続することから、住居機能時には土坑下部はすでに埋まっていたものと考えられる。焼土ブロック層の上下には微細な炭化物粒を認めるが、面的に広がるような炭化物層は検出できていない。住居床面の焼土は、断面観察から床面土壌化層の一部が直に被熱し焼土化したものと判断した。当該住居では鉄片は出土していないが、炉跡埋土の水洗選別砂粒には磁着する微細粒が多かった。

遺物番号	取上内容	時期	選別微細鉄個体数	微細鉄重量（選別後）	磁着砂粒総重量（選別前）	篩目	備考	遺構内容・土壌採取量
M0001	SH05 中央土坑（SK201）	中期後半	2	0.66	0.66	粗		円形住居跡床面中央やや南寄りの中央土坑（SK201）より、土嚢袋約1袋分土壌採取 小型扁平片刃石斧（地元石材）伴出
M0002	SH05 中央土坑（SK201）	中期後半	130	0.14	0.32	細		
M0003	SH03 中央土坑	中期後半	2	0.01	0.08	粗	球状滓	円形住居跡の中央土坑より、土嚢袋約1袋分土壌採取 住居跡床面には複数の焼土面あり
M0004	SH03 中央土坑	中期後半	71	0.07	0.45	細	球状滓	
M0005	SH06 床面西側の焼土部分	中期後半	3	0.06	0.1	粗		円形住居跡床面上で、焼土が馬蹄形状に広がる部分の中央窪みより土嚢袋1/4分土壌採取
M0006	SH06 床面西側の焼土部分	中期後半	19	0.02	0.09	細		
M0007	SH06 中央土坑	中期後半	16	0.26	0.78	粗	鍛錬滓？	円形住居跡中央土坑より土嚢袋約1/2分の土壌採取 小鉄片伴出
M0008	SH06 中央土坑	中期後半	108	0.06	0.21	細	球状滓、微小鉄片	

第3表　奥白方中落遺跡微細遺物一覧表

※遺物番号は図版73に対応
単位はg

SH06では、中央土坑より微細な棒状鉄片が1点出土している。中央土坑の掘り込みは数センチと極めて浅く、埋土は土壌化層上面を覆う埋土と区分できないほど類似するが、炭化物粒や焼土粒を比較的多く含むことで区分した。炭化物や焼土はいずれも粒状で、面的な分布ではない。土坑の西側床面直上に馬蹄形に分布する焼土面がある。また、先行する住居の壁溝沿いの床面直上に炭化物・焼土のまとまりが1箇所ある。炉跡埋土および馬蹄形焼土部で採取した土壌の水洗選別により、磁着する微細粒を得た。床面ではサヌカイトの小剥片類も多く分布する。

以上の複数の焼土面をもつ住居以外にも、SH05では浅い中央土坑の底面が強く被熱して焼土化し、それに接して薄い炭化物層がある。中央土坑埋土の水洗選別では、後述のように磁着微細粒が出土している。

なお、鉄片が出土したSH07では中央土坑底面に炭化物塊が散在するのみで、焼土や炭化物の面的な広がりはなかった。

以上の竪穴住居跡中央土坑等は、いずれも炭化物の面的な広がりを伴うものではない。鍛冶炉はカーボンベッドと呼ばれる炭床が構造上必要とされる。県内で鍛冶炉とされる旧練兵場遺跡SH51の中央土坑（森下英2003）では、土坑底部に厚さ10cmほどの置き土を施し、その上部に2～3層の薄い炭化物層、その上部の窪みに焼土ブロックが充填されていた。少なくとも炭化物層のうち一つは炉床ほぼ全面に広がる。そして、住居跡およびその周辺より、少なくとも6個体の鉄器・鉄片が出土している。この事例を参考にする限り、当遺跡で検出した炉跡については、全面的に拡がる炭化物層はなく、むしろ底面が被熱して焼土化（赤化）した状態で、出土した鉄片も極めて少量で、旧練兵場遺跡の鍛冶炉とは異なる部分が多い。ただ、掘り込みを伴わない床面直上に設置する最も簡易な鍛冶炉（村上鍛冶炉分類Ⅳ類、村上1994）の可能性もある。当遺跡で確認した炉跡や焼土部が鍛冶炉であれば、そのⅣ類に該当すると思われる。しかしながら、出土した鉄片類が少量で、通常の竪穴住居跡で見つかる中央土坑とも区分困難、今回検出したものが鍛冶炉ではない可能性は否定することができない。この現状からは、逆に積極的な鍛冶炉認定は困難と言わざるを得ない。

―磁着微細粒の検討―

上記の炉跡を中心として、調査中に採取した土壌を水洗し、抽出した砂粒に磁着検査を実施、実体顕

微鏡で形状を観察し、鍛冶関連の可能性がある微細粒を選別した。水洗した遺構は、①SH003中央土坑、②SH05中央土坑、③SH06中央土坑、④同馬蹄状焼土部、⑤SH08床面焼土部である。このうち、⑤については磁着する微細粒がなかった。①～④の磁着資料の詳細を第3表にまとめている。なお、篩目で「粗」としたものは約8mm方眼メッシュ、「細」としたものは約0.8mm方眼メッシュである。

結果、①～④のそれぞれの資料で微細な鉄片（主に錆化鉄で覆われる）や表面に光沢のあるガラス質成分が付着し一部発砲するような砂粒、あるいは細かな気泡をもつ微細な鉄滓状の粒などを認めることができた。また、SH03中央土坑では直径1mm弱で表面に光沢があり一部が小さく突出する球状滓が1点含まれていた。これは、旧練兵場遺跡で同様に水洗選別した資料（森下英2003）にも多く含まれ、鍛冶作業に生じる微細粒の可能性もある。特に表面が発砲しガラス化する砂粒は炉跡における高温作業を反映するものといえる。ただ、明確な鍛冶作業に伴う鉄滓であると判断するには、まだ類例が不十分で、竪穴住居跡の炉跡に普遍的に伴う可能性も否定できない。同様の特徴があり大粒のものは「ガラス滓」と呼ばれて、岡山県域（山本2006）や愛媛県域（柴田編2005）で弥生中期から後期にかけて大規模な集落で主に出土しているが、鍛冶作業との関係は明らかとなっていない。現段階では当遺跡の磁着微細粒が鍛冶作業に伴うかどうかは未だ判断できない状況である。

以上、竪穴住居跡の炉跡・焼土部、磁着微細粒を検討し、当遺跡における鉄器生産の検討を行ったが、いずれも鍛冶作業の有無に関する明確な根拠を欠いた。鉄片が出土していることは鍛冶作業を予測させるが、上記のような遺構・遺物の分析作業は、同様な視点・方法で比較事例を増やさねば考古学的な判断を下すことが難しい。ここでは不定型な鉄片が出土したことにより、鉄器生産に何らかの形で関与していた可能性を指摘するに留めたい。また、鉄片・鍛冶炉？・磁着微細粒ともに、特定の竪穴住居跡等にまとまるのではなく、個別分散的に出土している。時期的にも、中期Ⅲ-1～中期Ⅲ-3にまたがっている。仮に鍛冶作業が確認できたとしても、個別に小規模な鉄器の加工を行ったと評価すべきであろう。

（6）奥白方中落遺跡の評価

当遺跡の今回調査を行った範囲では、主に弥生時代中期後半から後期前半にかけての集落跡を確認した。中期後半とした中期Ⅲ-1から中期末の中期Ⅲ-3までの細かな遺構変遷を辿ると、竪穴住居跡2～3棟に掘立柱建物跡1～2棟が組み合う構造が連綿と維持されつつ、時期ごとに配置換えを行う状況を復元できる。1区から3・4区までを一つの単位とみると、その単位の東西幅は約70mである。これは、旧練兵場遺跡などでみられる単位（森下2006のユニット）のサイズにほぼ対応する。

そのような集落構造の解析を踏まえ、土器・鉄器・石器生産痕跡を確認した。土器については焼成破損土器がSR02に集中することから、その近辺での土器焼成を推定した。生産された土器には、甕、壺、高杯があり、特定器種に限定されない。時期的には中期Ⅲ-3に限定できる。一方、鉄器は中期Ⅲ-1で竪穴住居跡全棟に鉄片および微細粒資料があり、単位西側では中期Ⅲ-3の鉄片資料（SB06）が少量ある。また、SR02土器集中で確認した高温作業を反映する変形土器はSB06に近い位置で出土しているので、これに関連するかもしれない。単位の一角で小規模な鉄器の生産が続けられた可能性は指摘できる。ただし、鉄片出土量が少ないこと等から、前述のように個別的な小規模生産の枠を超えるものではない。

石器生産は厚さ5cmほどのサヌカイト製板状素材を分割し、両極打撃を多用しつつ剥片剥離を行う工程が復元できた。これは、原産地の金山で多くみられる定型剥片形状を重視する剥片剥離と異なり、石核を温存しながら不定型剥片を多産する縄文後期以来の石器生産がみられた。剥片も調査範囲に満遍

なく分布しており、SH06・07では鉄片とともに剥片石器生産痕跡も床面で認められた。つまり、集落内の手工業生産に関しては、特化した生産痕跡は現段階ではこれといって確認できない。

このように、当遺跡の今回の調査範囲での生産活動は、広域流通を目的に大量生産する、あるいは周辺の集落に生産物を供給するといった拠点性はうかがえない。同じ時期、石器生産では近隣の矢ノ塚遺跡（鷹田編 1987）、高松市多肥宮尻遺跡、東かがわ市池の奥遺跡（西岡編 2003）などで、大形のサヌカイト素材から金山型技術で横長剥片を剥離する工程が遺跡出土資料に含まれ、他遺跡への搬出も含めた積極的な石器生産を行った可能性が推察されている（森下 2005）。鉄器生産では、高松市久米池南遺跡や丸亀市次見遺跡で多量の鉄片類が出土し、群を抜いた鉄器生産集落も想定できる。これらと比較すると、今回の調査範囲で確認した生産痕跡は、多分に自家消費に近い小規模な生産活動と言える。

奥白方中落遺跡の弥生中期集落は、同じ弘田川水系に位置する旧練兵場遺跡を中心とする善通寺遺跡群や、その間に位置し矢ノ塚遺跡などが含まれる吉原遺跡群と密接な関係を維持したものと推測する。今後、その関係性の具体像を描く際には、不可欠なデータと評価することができよう。

第５章　奥白方南原遺跡

第１節　概要（第５・90図）

遺跡は２つの丘陵に挟まれた谷底平野から弘田川により形成された沖積地にかけて広がり、地形は前者側から後者側へと下る。２つの丘陵とは北側の経尾山と南側の天霧山を指すが、これらにより画された谷底平野は遺跡の所在する開口部付近でも幅が約300ｍと狭い。

調査区は、調査工程に基づきＡ～Ｈ区に設定した。また、各調査区名にはさらに１、２という小区画名を必要に応じて付与し、調査を実施した（Ｅ区①など）。本報告でも一部これを使用している。

主な調査成果は弥生時代では中期・後期に属する溝状遺構や旧河道を検出したことがある。また、中世では条里型地割の同じ坪内に形成された集落跡と付随する墓群や畑跡を確認したこと、良好な墨書を残す、木製品が出土したことがあげられる。

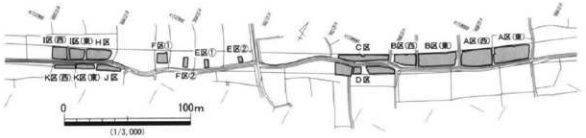
このように本遺跡では主に中世の集落跡を検出した。よって、遺跡付近の当該期の旧地形について述べると、大きくは西側の谷底平野内の緩斜面（Ｅ～Ｋ区。Ｅ区とＩ区間の比高差は東西150ｍで2.4ｍ）と東側の沖積地（Ａ～Ｄ区。Ａ区とＣ区間の比高差は東西150ｍで0.7ｍ）に区分できる。そして後者についてはさらに東側の微高地（Ａ区）と西側の微高地（Ｃ・Ｄ区）に細分できる。現在も地形的に高いＣ・Ｄ区だけでなくＡ区も微高地であったと考えるのは基盤層である灰色砂礫が耕作土直下で見られ、遺構面がある程度削平を受けていることによる。

第２節　土層（第91～96図）

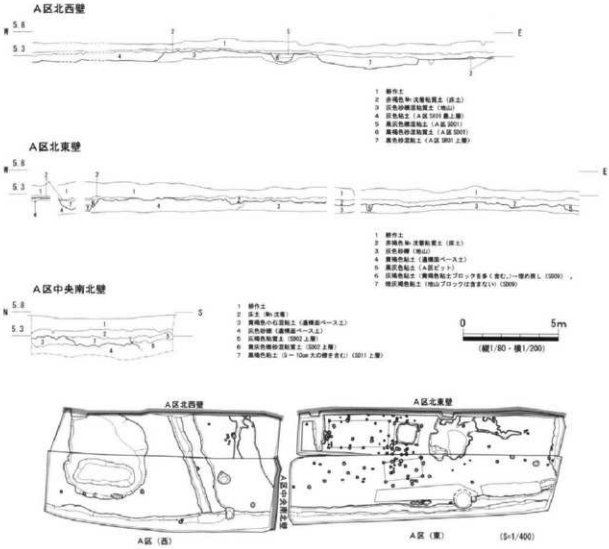
調査地は東西方向へ細長いため、調査区北壁土層図を用いて土層序を説明する。基本層序はＡ～Ｄ区とＥ～Ｋ区で異なるため、２つに分けて述べる。まずＡ～Ｄ区であるが、概ね上から耕作土、旧耕作土、中世包含層を経て、遺構面のベース土である黄褐色系粘土（ないしその下位にある灰色砂礫）に至る。次いでＥ～Ｋ区であるが、上から耕作土、旧耕作土を経て、弥生時代中期～後期の旧河道埋土に至る。この埋土が４、５層見られる下位で遺構面のベース土に至る。

〈Ａ区〉

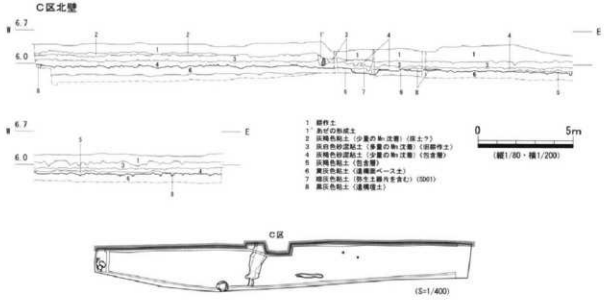
調査前には２枚の水田として利用されていた。地形的には東側の微高地上に位置し、中世の集落域などを検出した。先述のとおり、耕作土直下で基盤層〈灰色砂礫。遺構面のベース土（黄褐色系粘質土）の下位に堆積〉が見られ、ある程度削平されていると見られる。



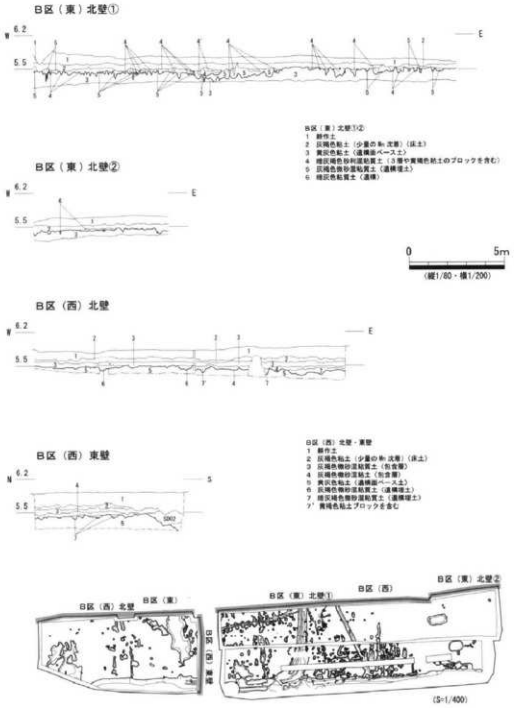
第90図　奥白方南原遺跡調査地区割図



第91図　A区（西・東）北壁・中央南北壁（縦1/80・横1/200）



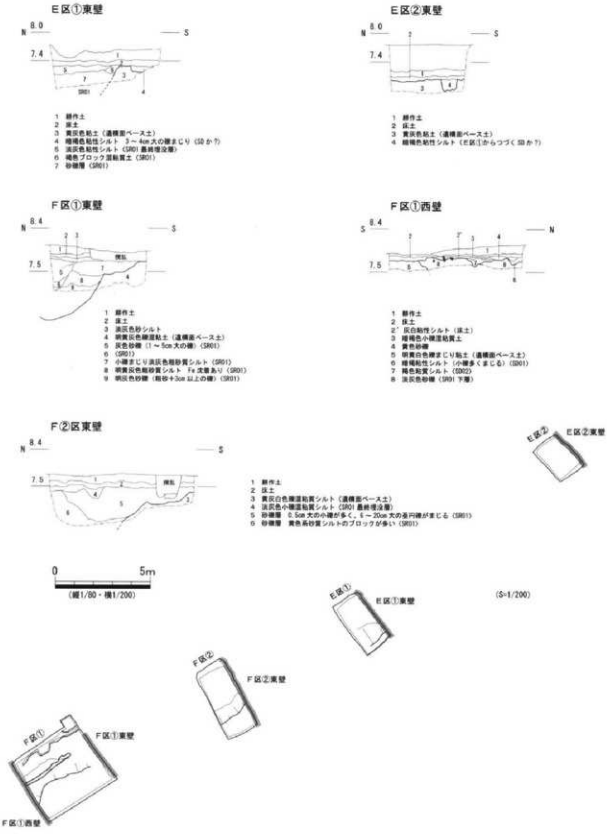
第92図　C区 北壁（縦1/80・横1/200）



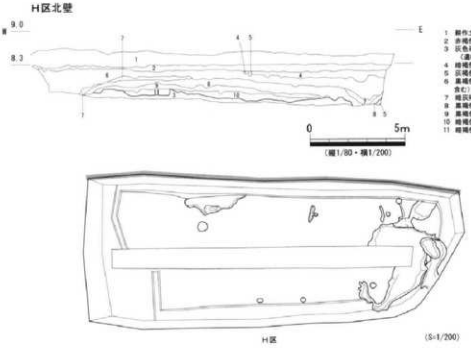
第93図　B区（東）北壁①・②、B区（西）北壁・西壁（縦1/80・横1/200）

〈B区〉

調査前には2枚の水田として利用されていた。地形的には東西の微高地間にある浅い凹地に位置し、中世の集落跡に付随する墓群や畑跡を検出した。畑跡に植えられた植物の痕跡はB区（東）北壁①土層断面の西側では小さな凹凸として観察できる（凹凸が根の痕跡と考えられる）。なお、B区西部では厚さ10cm程度の中世包含層が見られる。



第94図　E区①・②東壁、F区①・②東壁・F区①西壁（縦1/80・横1/200）



第95図　H区 北壁（縦 1/80・横 1/200）

〈C区・D区〉

調査前にはそれぞれ２枚の水田として利用されていた。地形的には西側の微高地上にあり、東側へごく緩く下る。検出遺構には弥生時代と中世の溝状遺構などがあるが、極めて希薄である。どちらの調査区も厚さ 10cm 程度の中世包含層に覆われる。

〈E・F区〉

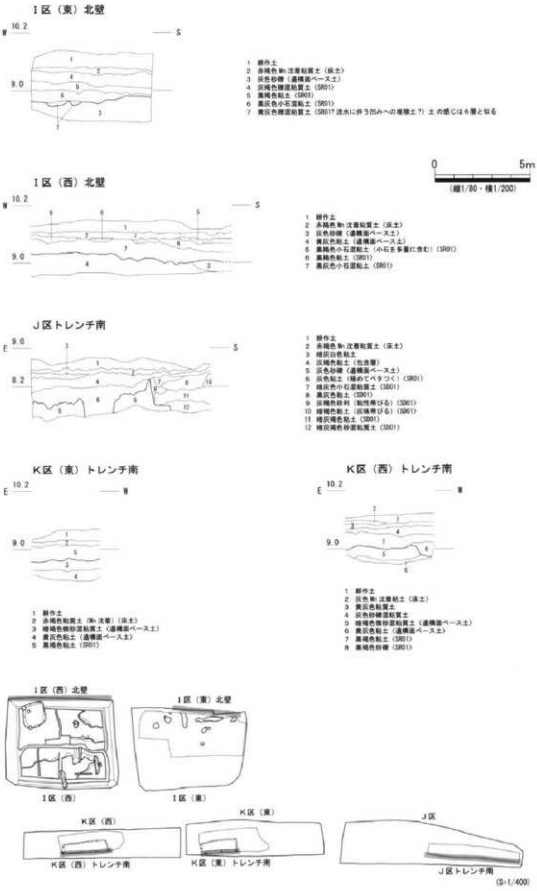
調査前にはどちらの調査区も２枚の水田として利用されていた。地形的には西側の緩斜面の東端部にある。検出遺構には弥生時代中期～後期の旧河道とこれを切り込む中世の溝状遺構などがあるが、ごく少数である。F区①では耕作土直下で厚さ 10cm 程度の中世包含層が見られるが、その他の調査区では耕作土直下で遺構面か、旧河道の埋土となる。

〈H・I区〉

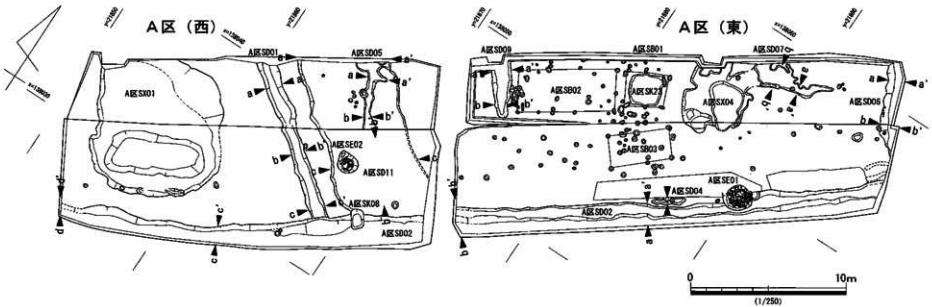
調査前にはH区が３枚、I区が２枚の水田として利用されていた。地形的には西側の緩斜面にある。調査区の全面が弥生時代中期～後期の旧河道であるが、J・K区で検出した旧河道は同一河川と考えられる。他の検出遺構として旧河道を切り込む少数の中世のピット、土坑などがある。なお、耕作土の直下で旧河道埋土となり、J・K区で見られる中世包含層は観察できない。

〈J・K区〉

調査前にはどちらも２枚の水田として利用されていた。地形的には西側の緩斜面にある。トレンチ調査を行ったのみであるが、全面で弥生時代中期～後期の旧河道を検出した。これはH・I区で検出した旧河道と同一河川と考えられる。また、これを切り込む中世の条里坪界溝も確認した。層序は耕作土の直下で中世包含層が見られ、その下位で旧河道埋土となる。



第96図　Ⅰ区（東・西）北壁、J区 トレンチ南、K区（東・西）トレンチ南（縦 1/80・横 1/200）



第97図　A区 遺構配置図（1/250）

第3節　遺構と遺物

A区の調査成果

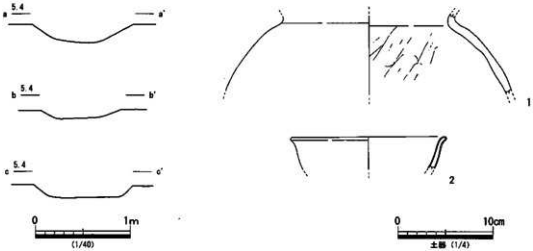
(1) 弥生時代の遺構・遺物

溝状遺構

A区 SD01（第98図）

調査区西部で検出した溝状遺構である。北部は調査区外に延び、南部は中世のSD02に切られる。また東側に隣接して同方向に延びるSD11がある。幅0.9～1.3m、深さ20cmを測る。主軸方向はN－53°－Wである。埋土はA区北壁土層断面で見ると上下2層に分かれ、ともに黒褐色系粘質土である。また下層では砂を含み、一定量の流水があったと考えられる。

出土遺物には弥生土器（1）、サヌカイトチップ、中世の青磁（2）などが少量ある。1は甕である。



第98図　A区 SD01 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

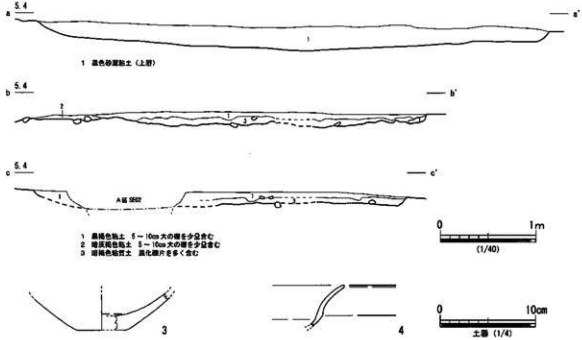
器形は肩の張りが緩やかで、やや丸みをもつ。内面は頸部直下までヘラケズリを施す。2は碗である。口縁部を小さく外反させる。溝状遺構の時期は後述するSD11との関係と埋土、出土土器（1）より弥生時代後期後半と考えられる。このため2は混入と判断する。

A区 SD11（第99図）

調査区西部で検出した溝状遺構である。北部は調査区外に延び、南部は中世のSD02に切られる。幅5.4m、深さ24cmを測る。主軸方向はN－53°－Wである。埋土は上下2層に大別でき、上層は黒色系粘土、下層は暗褐色系粘質土である。a－a'断面を見ると上層で砂を含むため、ある程度の流水があったと考えられる。

西側に隣接し、併走するSD01とは遺構配置、埋土、出土土器の時期より同時併存したと見られる。また、ともに微高地上に位置するため規模が大きいSD11が幹線水路、小規模なSD01が派生する水路であると考えられる。

出土遺物には弥生土器（3・4）が少量ある。3は壺の底部である。体部との境が緩やかで、やや丸み



第 99 図　A区 SD11 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

を帯びる。4は高杯である。口縁部は強く屈曲して外反する。溝状遺構の時期は出土土器より弥生時代後期後半と考えられる。

(2) 中世の遺構・遺物

建物跡

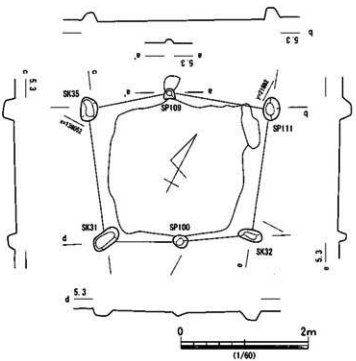
A区 SB01（第 100 図）

調査区の東部で検出した側柱建物である。SK23とちょうど重なるように位置し、西側にSB02が、東側にSX04が接する。規模は梁間1間×桁行2間（2.0×2.85 m）である。主軸方向はN－62°－Eである。柱穴跡の平面形は円形～楕円形で、径18～46cm、深さ6～17cmを測る。埋土は灰褐色系粘質土である。出土遺物はない。

建物跡の性格はSK23との位置関係よりこれに対する覆い屋であり、時期は同遺構との関係より13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

A区 SB02（第 101 図）

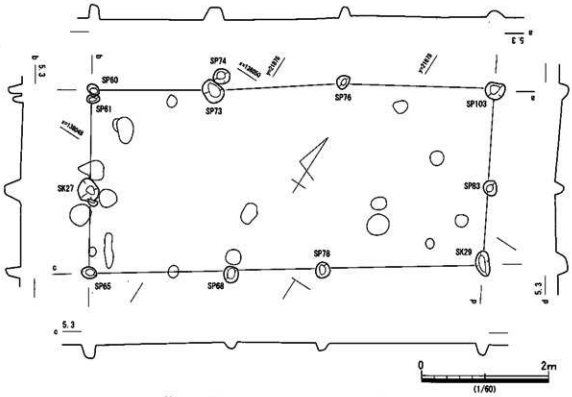
調査区の中央部で検出した側柱建物



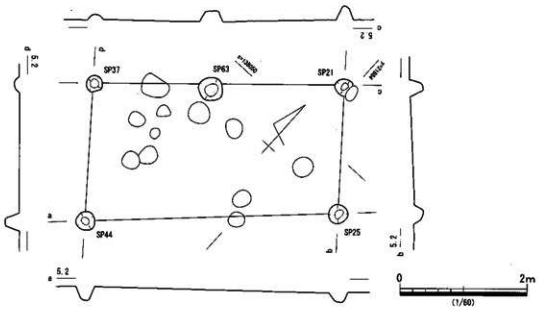
第 100 図　A区 SB01 平・断面図（1/60）

である。西側にSD09が、東側にSB01が位置する。規模は梁間2間×桁行3間（2.7×6.3m）である。主軸方向はN－57°－Eである。柱穴跡の平面形はほぼ円形であり、径21～36cm、深さ12～23cmを測る。埋土は灰褐色系粘質土である。出土遺物はない。建物西側の構成柱穴跡では隣接して別の柱穴跡が見られ、柱の建て替えが行われたようである。

建物跡の時期は周辺遺構の時期と埋土より13世紀代と考えられる。



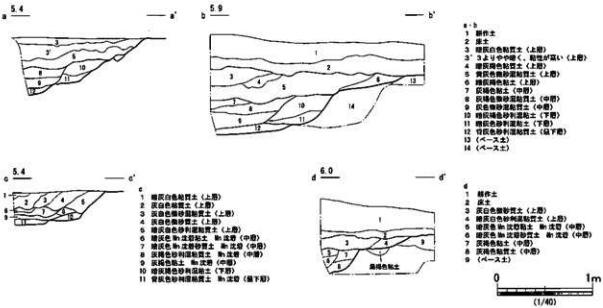
第101図　A区 SB02 平・断面図（1/60）



第102図　A区 SB03 平・断面図（1/60）

A区 SB03（第 102 図）

調査区の東部で検出した側柱建物である。北側に接して SB01 がある。規模は梁間 1 間×桁行 2 間（1.98 × 3.96 m）である。主軸方向は N − 49° − E であり、周辺遺構と比べて主軸方向がややずれる。柱穴跡の平面形は円形であり、径 21 ～ 36cm、深さ 12 ～ 23cm を測る。埋土は灰褐色系粘質土である。出土遺物はない。建物跡の時期は周辺遺構の時期と埋土より 13 世紀代と考えられる。



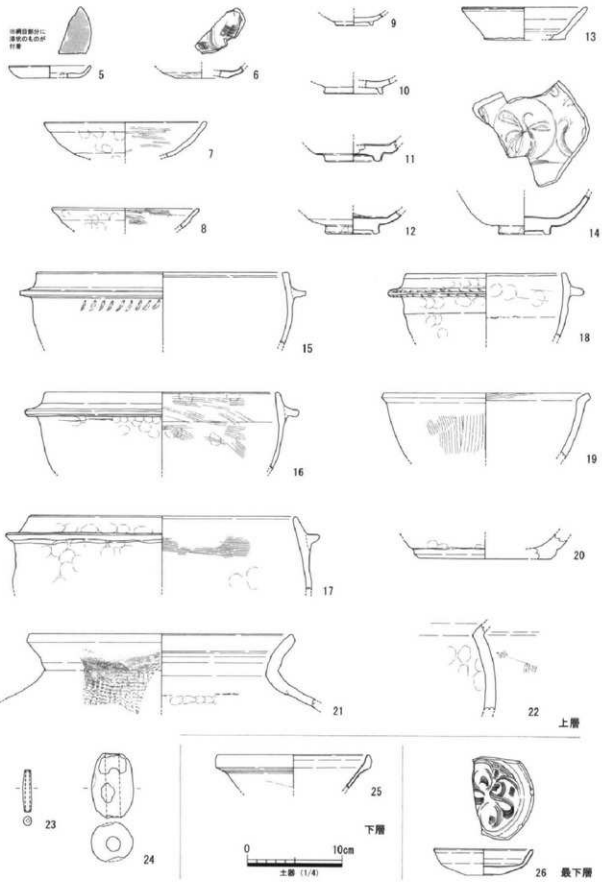
第 103 図　A区 SD02 断面図（1/40）

溝状遺構

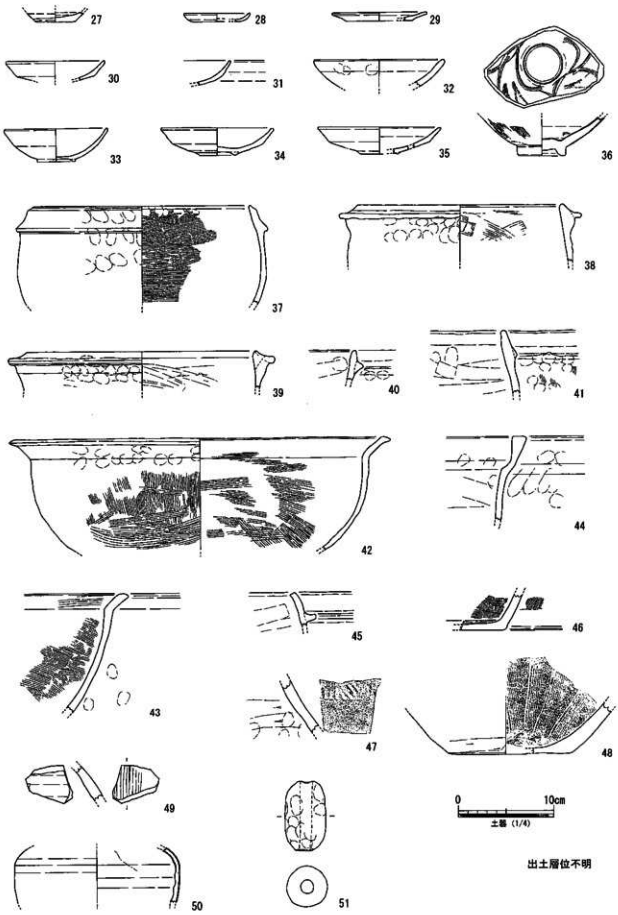
A区 SD02（第 103 ～ 105 図）

調査区の南部で検出した溝状遺構である。調査区内では北側の肩付近を検出したのにとどまり、調査区外に延びる。幅 1.7 m 以上、深さ 70cm を測る。主軸方向は N − 54° − E である。埋土は 4 層に大別できる。各層の特徴は概ね以下のとおりである。上層は灰白色系粘質土で砂をほとんど含まない。中層は灰褐色系粘質土で少量の微砂～砂を含む。下層は暗灰褐色系粘質土で砂を含む。最下層はグライ化した青灰色粘質土で砂を多く含む。こうした埋土の特徴から最下層の堆積時には旺盛な流水が、中・下層の堆積時にもある程度の流水があったと考えられる。また a − a' 断面、b − b' 断面を見ると下層の堆積後に再掘削が行われていると判断できる。溝状遺構の性格は遺跡周辺に広がる条里型地割の坪界線に対して検出位置と主軸方向が近接し、規模が大きいため条里坪界溝と考えられる。

出土遺物には 28 リットル入りコンテナ約 2 箱の中世土器（5 ～ 51）、獣骨、弥生土器がある。このうち弥生土器はごく少量に留まり、当該期の周辺遺構から二次的に移動したと見られる。5 ～ 24 は上層からの出土遺物である。5 は土師器小皿である。底部と体部の境界は丸みを帯び、短い口縁部は直立気味である。また内面全体に黒いタール状の付着物が見られるが、おそらく漆であろう。13 世紀代に位置づけられる。6 は同安窯系の青磁皿である。見込みに櫛目文と花を描いたヘラ描文が見られる。12 世紀後半に位置づけられる。7・8 は瓦器椀である。外面は口縁部直下に強い回転ナデを、その上下には顕著な指オサエを加える。内面はまばらに横方向のヘラミガキが見られる。12 世紀末～ 13 世紀前半



第104図　A区 SD02 出土遺物1 (1/4)



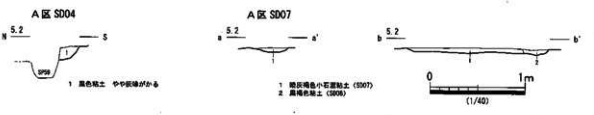
第105図　A区 SD02 出土遺物2 (1/4)

に位置づけられる。9・10は土師器椀である。どちらも小さい高台を貼り付けるが、9は特に矮小で後出的である。13世紀代に位置づけられる。11・12・14は龍泉窯系の青磁碗である。12・14は内面に施文があり、14は花などをヘラ描きする。13は土師器杯である。底部と体部の境界が角張り、口縁部は外反する。13世紀代に位置づけられる。15～18は土師質土器土釜である。15は鍔の直下に鍔の貼付にともなう爪形文が見られる。また、口縁端部と鍔の先端部は平坦に仕上げる。13世紀代に位置づけられる。16は口縁端部と鍔の先端部にやや丸みを帯び、口縁部と鍔の長さは同程度である。13世紀代～14世紀前半に位置づけられる。17は鍔の上下に顕著な指オサエが、内面は横ハケが見られる。鍔はやや短く、断面三角形状を呈し、作りは雑である。14世紀後半に位置づけられる。18は鍔の上下面に爪形文を加える。口縁端部と鍔の先端部は15と同様に平坦であり、13世紀代に位置づけられる。19は土師質土器土鍋である。口縁部は小さく、外面には粗い縦ハケを施す。20は瓦質土器鉢である。21は亀山焼甕である。口縁部は弱く外反し、胴部外面には格子目タタキが見られる。22は須恵器甕である。外面には自然釉が付着し、タタキが見られる。23・24は土師質の管状土錘である。

25は下層からの出土遺物である。白磁碗Ⅳ類であり、口縁部は玉縁状である。26は最下層からの出土遺物である。龍泉窯系青磁皿であり、見込みに櫛目文とヘラ描き文が見られる。12世紀後半に位置づけられる。

27～51は出土層位不明遺物である。27～29は土師器小皿である。27・28は口径が小さく、短い口縁部は直立気味である。13世紀後半に位置づけられる。29は口縁部が強く外傾し、口径が大きい割に浅い。12世紀代に位置づけられる。30・31・34・35は瓦器椀である。口縁部直下は強い回転ナデを加えたことにより凹線状を呈し、34・35では断面三角形の矮小な高台をもつ。12世紀末～13世紀前半に位置づけられる。32・33は土師器椀である。33は小さな高台を貼りつける。13世紀代に位置づけられる。36は同安窯系の青磁碗である。外面に櫛描き文様が、内面にも櫛目文とヘラ描文が見られる。37～41は土師質土器土釜である。37・41はごく小さい鍔を雑に貼り付けるが、37では内面の横ハケは丁寧に加える。38～40は鍔が矮小で口縁部もごく短い。15世紀後半に位置づけられる。42～44は土師質土器土鍋である。42・43は直立気味の体部から延びる口縁部が小さく外反し、内外面はハケメ調整する。44は口縁部がほぼ直立し、端部を断面三角形状に肥厚させる。45は瓦質土器釜、46は瓦質土器火鉢である。46は内外面に細かいハケメを施す。47・49は須恵器甕である。外面には自然釉が付着し、タタキが見られる。47は22と同一個体の可能性がある。48は瓦質土器すり鉢である。ただ、還元度が高く、須恵質気味である。50は白磁瓶である。強い回転ナデを加えており、特に内面で器壁に凹凸が目立つ。51は土師質の管状土錘である。法量は24と類似する。

これらの出土土器を見ると最下層からは12世紀後半の青磁皿、出土層位不明遺物には15世紀後半の土師質土器土釜が出土しており、溝状遺構の開削時期が12世紀代、埋没が15世紀代であると考えられる。ただ、出土土器の多くは13世紀代に位置づけられ、A区で中世集落が展開する主要な時期を反映している。



第106図　A区 SD04・07 断面図 (1/40)

A区 SD04（第 106 図）

調査区の南東部で検出した溝状遺構であり、SD02 のすぐ北側に位置する。幅 0.56 m、深さ 14cmを測る。埋土は灰色がかった黒色粘土である。主軸方向は N－54°－E である。出土遺物には中世の土師器、土師質土器がある。

溝状遺構の時期は周辺遺構の時期と出土遺物より 13～14 世紀代と考えられる。

A区 SD05（第 107 図）

調査区の中央部で検出した溝状遺構である。弥生時代の SD11 を切る。幅 0.6～1.6 m、深さ 8cmを測る。主軸方向は N－28°－W である。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物には土師器小皿（52）・杯、弥生土器（53）がごく少量ある。52 は細長い口縁部が強く外傾し、底部を回転ヘラ切りする。12 世紀代に位置づけられる。53 は壺の底部である。底部と体部の境界には小さな段が見られる。溝状遺構の時期は出土土器より 12 世紀代に位置づけられる。

A区 SD06（第 107 図）

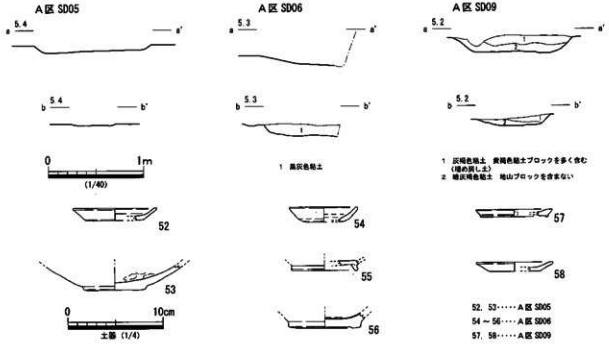
調査区の東端部で検出した溝状遺構である。西肩付近のみ検出しているが、検出位置より条里坪界溝と考えられる。幅 0.96 m以上、深さ 12cmを測る。主軸方向は N－24°－W である。埋土は黒灰色粘土である。

出土遺物には土師器杯（54）・椀（55）、瓦器椀、土師質土器土釜、白磁碗（56）などがごく少量ある。54 は口径が小さく、底部は回転ヘラ切りする。55 は細長く小さい高台を貼り付ける。13 世紀代に位置づけられる。溝状遺構の存続時期は出土土器より 13 世紀代を含む。

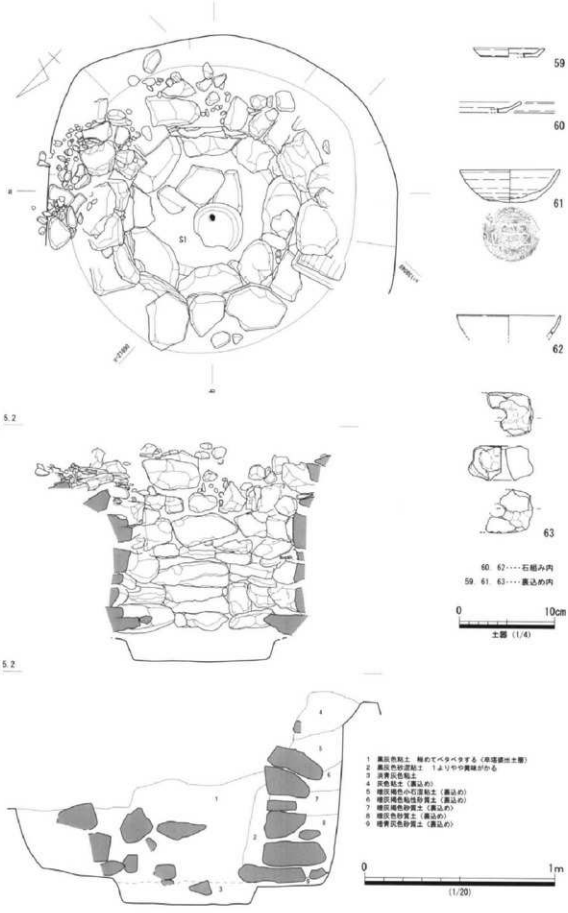
A区 SD07（第 106 図）

調査区の北東部で検出した溝状遺構である。SX04 とは西側に近接する位置や埋土の類似よりおそらく同一遺構であると考えられる。幅 1.5 m、深さ 6cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土である。

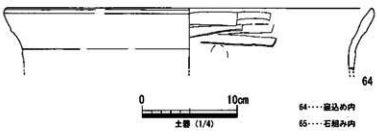
出土遺物には中世の土師器、土師質土器甕、須恵器などがごく少量ある。溝状遺構の時期は SX04 との



第 107 図　A区 SD05・06・09 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 108 図　A区 SE01 平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）



関係から13世紀代と考えられる。

A区 SD09（第107図）

調査区の中央部で検出した溝状遺構である。北部は調査区外に延び、幅1.3m、深さ18cmを測る。主軸方向はN－34°－Wである。埋土は上下2層に区分でき、どちらも灰褐色系粘質土である。このうち、上層では黄褐色粘土ブロックを多く含むため、人為的に埋め戻されたと考えられる。また、SD09の性格はSB02の西側に接するため雨落ち溝と見られるが、これより西側では柱穴跡がほとんど分布しないため建物群と西側の井戸跡(SE02)、出水状遺構(SX01)の分布域とを区画する機能も兼ねている。

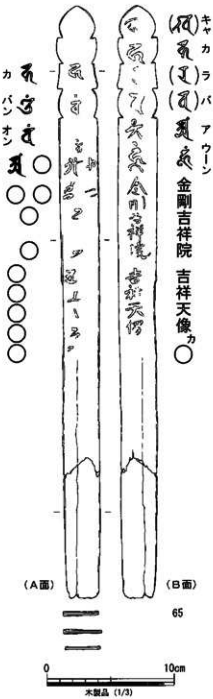
出土遺物には土師器小皿（57・58）・杯、瓦器椀、土師質土器土釜、須恵器などがごく少量ある。57は口縁部の立ち上がりがほとんど見られず、58は細長い口縁部を強く外傾させるが、どちらも底部を回転ヘラ切りする。13世紀代に位置づけられる。溝状遺構の時期は出土土器より13世紀代に位置づけられる。

井戸跡

A区 SE01（第108・109図）

調査区の南東部で検出した石組みの井戸跡である。SD02を切るが、試掘調査により北部を一部欠損する。平面形は隅丸方形で、規模は長径1.86m、短径1.66m以上、深さ109cmを測る。

石組みは下端で30～40cm大の大型の礫を設置した後、やや小ぶりの礫を積み上げて構築する。なお、下端の礫は内側にやや突出する。

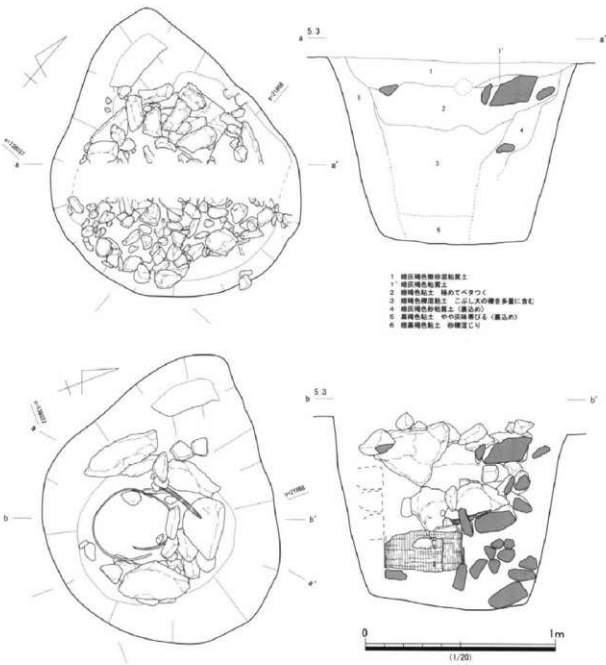


第109図　A区 SE01 出土遺物
(1/4・1/3)

出土遺物には土師器小皿（59・60）・杯（61・62）、土師質土器土鍋（64）、土製品（63）、卒塔婆（65）、石臼（S1）などがごく少量ある。59は短い口縁部が直立気味に立ち上がる。61は底部と体部の境界が角張り、器壁がやや厚い。また体部がやや丸みを帯びる。59・61は13世紀代に位置づけられる。63は中央部に穿孔を施す。65は頭部が五輪塔状、下端部が方形を呈する。断面形は角ばった方形であるが、

厚さは上下で異なる。両面に梵字を用いた墨書が見られる。釈文は実測図に記載しているが、A面とB面に分けて説明する。A面では釈読できない文字が多いが、主に梵字（冒頭から「カ・バン・オン・ア…」）が書かれている。部分的に左右2行になり、確認できる文字数は15文字である。またB面の冒頭では梵字で五大種子（五輪塔に書かれる空・風・火・水・地）が「キャ・カ・ラ・バ・ア」と書かれている。次いで梵字で「ウーン」とあるが、これはアシュク如来を表現している。この名は「アキショービャ」の音写であり、意味は「心不動なり」（何事にもゆるぎない心）である。また、アシュク如来は十三仏（故人の追善供養を行う際に守護仏となり、故人をさらなる成仏へと導く仏）にも入っており、七回忌を示す年回種子である。

その下位には「金剛吉祥院吉祥天像ヵ〇」と続く。「吉祥天」は仏の名前であり、その直後に「像ヵ



第110図　A区 SE02 平・断面図（1/20）

とも読める字が見えるが、定かでない。以上の内容からこの卒塔婆には真言経が書かれ、七回忌の供養のために作られた可能性がある。（註１）また、製作年代については①頭部が五輪塔状、下端部が方形。②両面写経。③厚さが不均一という特徴から 13 世紀～ 15 世紀前半と考えられる。（註２）

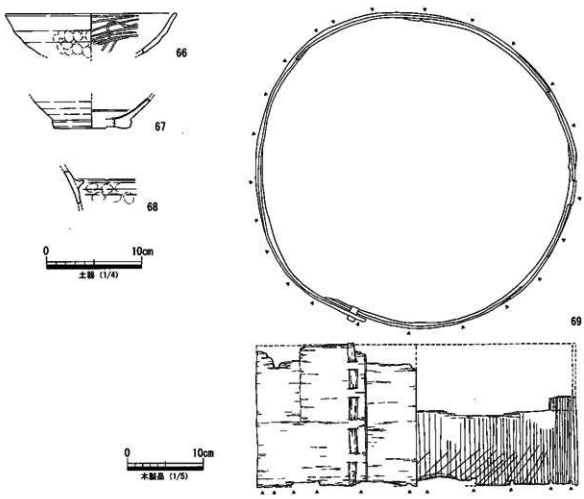
井戸跡の時期は SD02 を切ることから 15 世紀後半以降と考えられる。このため出土した 13 世紀代の土器は SD02 を切るための混入と見られる。また卒塔婆については石臼（S1）と同じく井戸の廃絶時に投棄されたと見られる。なお、付近には 13 世紀代の墓群（B 区 ST01・02）が位置し、五輪塔も現地表面で採集していることから、本来はこうした墓群に伴っていたのかもしれない。

A 区 SE02（第 110 ～ 112 図）

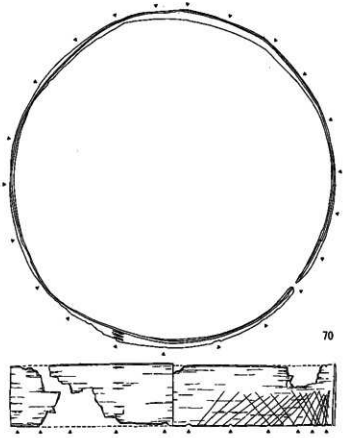
調査区の西部で検出した井戸跡である。掘り方の平面形は北側が突出するもののほぼ円形である。規模は長径 1.5 m、短径 1.32 m、深さ 95cmを測る。

調査時には上位から中位で拳大～人頭大の礫が不規則な配置で多量に見られ、これを除去すると井戸枠と考えられる曲げ物とこれを囲む石組みを確認した。こうした状況から礫群は井戸の廃絶後に投棄されたと見られる。石組みは東側の残りがよいのに対し、西側は旧状を留めていない。なお、石組みの東側では長さ 30cm 大の棒状の木片が出土した。加工は施されていないが、石組みの構築・補強材としての使用が推定される。

出土遺物には土師器小皿・杯、瓦器椀（66）、白磁碗（67）、瓦質土器釜（68）、曲物（69 ～ 71）な



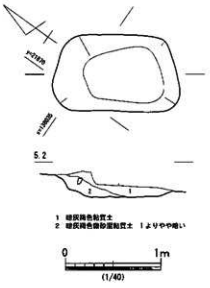
第 111 図　A 区 SE02 出土遺物 1（1/4・1/5）



第112図　A区 SE02 出土遺物2 (1/5)

どがごく少量ある。66は体部外面に顕著な指オサエが、内面にまばらなヘラミガキが見られる。12世紀後半に位置づけられる。68は井戸跡の廃絶に伴い投棄された上位の礫群に伴って出土した。鍔の上下に指オサエが多く見られる。14世紀代に位置づけられる。69・70は下端部に半円形の小さな切りこみがほぼ等間隔で見られる。また69～71の内面にはいずれも折り曲げ加工のための切り目が入れられている。70ではこれが斜格子状を呈する。

井戸跡の開削時期は集落跡を構成する周辺遺構の時期から13世紀代、廃絶時期は出土土器から14世紀代と考えられる。



第113図　A区 SK08
平・断面図（1/40）

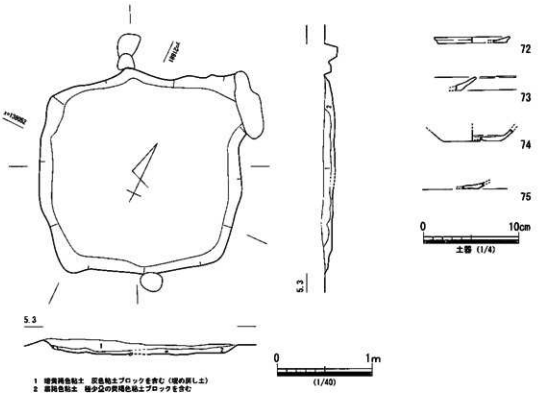
土坑

A区 SK08（第113図）

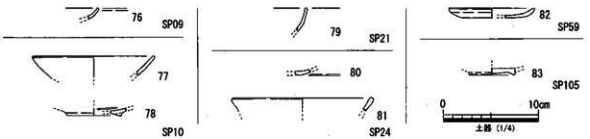
調査区の西部で検出した土坑である。大部分をSD02の掘削により破壊されるが、底付近は残存している。平面形は方形、断面形は壁が外傾気味であり、底は平坦である。規模は長径1.2 m、短径0.8 m、深さ26cmを測る。主軸方向はN－34°－Wである。埋土は暗灰褐色系粘質土である。出土遺物にはごく少量の瓦器がある。土坑の時期はSD02に切られることから12世紀後半以前と考えられる。

A区 SK23（第114図）

調査区の東部で検出した土坑である。土坑に対してSB01がちょうど重なるように位置する。よって、



第114図　A区 SK23 平・断面図（1/40）出土遺物（1/4）



第115図　A区 ピット出土遺物（1/4）

SB01を覆い屋として伴うと考えられる。平面形は整った方形、断面形は浅い皿状である。規模は長径2.16m、短径2.12m、深さ15cmを測る。主軸方向はN－26°－Wである。埋土は上下2層に区分できるが、上層は人為的な埋め戻し土と考えられる。

出土遺物には土師器小皿（72・73）・杯（74・75）、西村産須恵器椀、土師質土器土鍋、青磁などがごく少量ある。72はごく短い直立する口縁部をもつ。73・74は口縁部が強く外反する。75は薄作りで焼成が良好である。72～75はいずれも13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる。土坑の時期は出土土器より13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる。

ピット出土遺物（第115図）

76～83は掘立柱建物跡や柵列跡を復元できないピットから出土した中世土器である。器種は土師器小皿（76・80・82）・杯（77・81）・椀（79・83）、瓦器椀（78）がある。78は矮小な高台をもち、見込みにはまばらなヘラミガキが見られる。80は体部が強く外傾する。81は口縁端部を四角く仕上げる。82は底部と体部の境界に丸みを帯びる。これらは概ね13世紀代に位置づけられる。これはA区の他の中世遺構から出土した土器の時期とほぼ一致する。

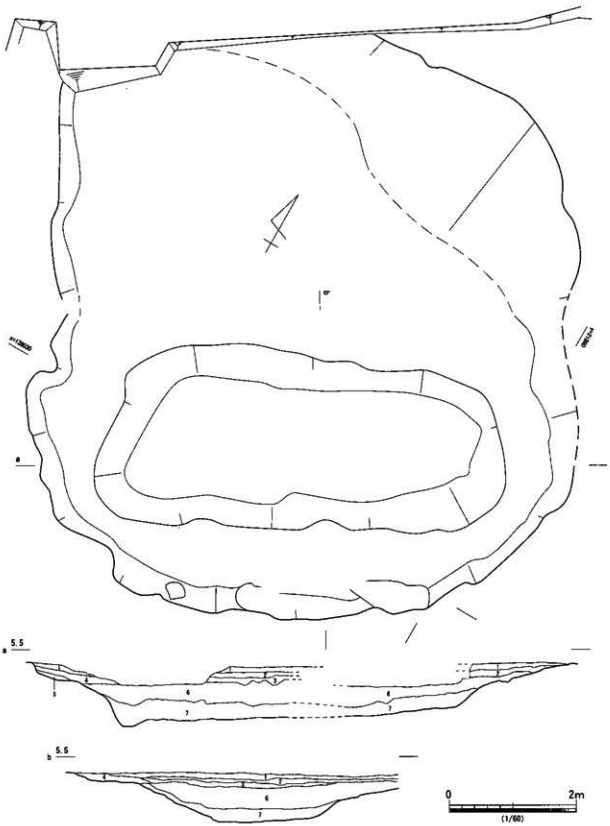
性格不明遺構

A区 SX01（第116～118図）

調査区の西端部で検出した遺構である。北部は調査区外に延びるが、平面形はやや不整な隅丸方形である。また、断面形は逆台形状であるが、南部中央で大きく窪む2段掘りである。規模は長径9.09m以上、短径8.31m、深さ81cmを測る。主軸方向はN－31°－Wである。埋土は3層に大別できるが、上層が周辺の中世遺構で多く見られる灰褐色系粘質土であるのに対し、中央の窪みに堆積する下層・最下層はグライ化し、極めて粘性が高い暗灰色粘土、暗黄灰色粘土である。特に最下層は暗灰色粗砂をラミナ状に含み、アシなどの植物遺存体を多く含む。よって、最下層の堆積時には旺盛な湧水があったこと、下層の堆積時にも滞水状態が継続していたことがうかがえる。

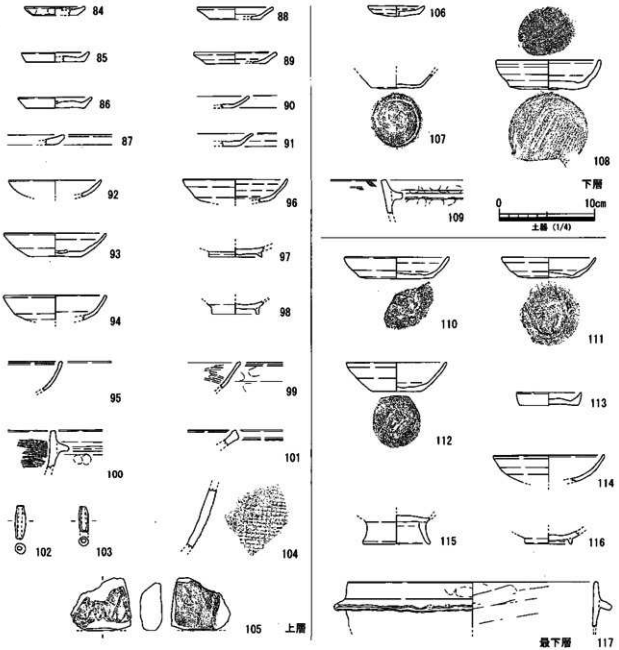
遺構の性格については土層の特徴と調査時でも湧水が著しかったことから井戸跡の可能性もあるが、規模が極めて大きいため出水跡と考えられる。配水用の溝跡は未確認であるが、おそらく地形的に下る北側の調査区外に存在すると推測される。

出土遺物には28リットル入りコンテナ約2.5箱の中世土器（84～140）、漆器片、鉄釘、獣骨、サヌカイト片があり、ほとんどが中世土器である。84～105は上層からの出土遺物である。84～91は土師器小皿である。84～87は直立気味の短い口縁部をもち、底部は84・85・87で回転ヘラ切り、86で回



1 灰褐色粘土（上層）
2 赤褐色 8m 泥岩粘土（上層）
3 暗灰色粘土　10cm 大の礫を含む　6よりやや炭味が強い（下層）
4 暗灰褐色粘土　10cm 大の礫を含む（下層）
5 灰灰色粘土（下層）
6 暗灰色粘土　締めて粘性が強くベタベタする　湧水他の地層土（下層）
7 暗灰色粘土＋暗灰色粗砂の互層　木片やアシの茎片が多く含む（最下層）

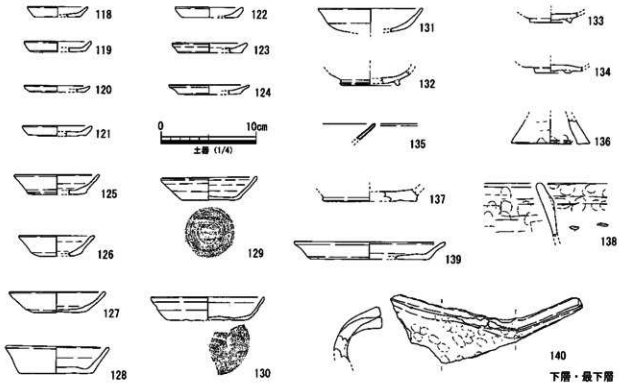
第116図　A区 SX01 平・断面図（1/60）



第117図　A区 SX01 出土遺物1（1/4）

転糸切りする。これらは13世紀後半に位置づけられる。88～91は細長い口縁部が強く外反し、口縁部直下に強い回転ナデを加える。88・89は底部を回転ヘラ切りする。88～91は14世紀後半に位置づけられる。92～96は土師器杯である。いずれも薄作りでやや硬質である。92･93は体部が強く外傾し、14世紀前半に位置づけられる。97・98は土師器椀である。小さい高台を貼り付けており、13世紀代に位置づけられる。99は瓦器椀である。100は土師質土器土釜である。口縁端部と鍔の先端部は平坦に仕上げ、内面にも丁寧な横ハケを施す。13世紀代に位置づけられる。101は須恵器甕、104は亀山焼甕である。102・103は土師質の管状土錘である。法量的には23と類似する。105は平瓦である。凸面には格子目タタキが、凹面には布目が見られる。

106～109は下層からの出土遺物である。106は瓦器小皿である。107・108は土師器杯である。107



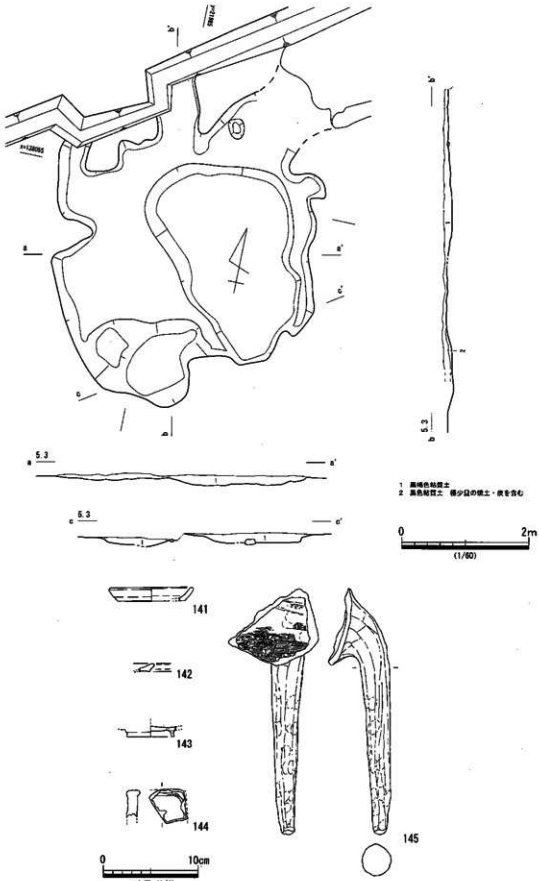
第118図　A区 SX01 出土遺物2 (1/4)

は薄作りで体部が強く外反し、底部は回転ヘラ切りする。14世紀代に位置づけられる。108は直立気味の口縁部をもち、底部は回転糸切りする。13世紀後半に位置づけられる。109は土師質土器土釜である。口縁端部と鍔の先端部は平坦であり、器形は100と類似する。13世紀代に位置づけられる。

110～117は最下層からの出土遺物である。110～112は土師器杯である。いずれも底部は回転ヘラ切りする。110は14世紀前半、111は14世紀前半～中葉に位置づけられる。113は土師器小皿である。底部は糸切りし、13世紀後半に位置づけられる。114～116は土師器椀である。115は直立気味の高い高台、116はごく小さい高台を貼り付ける。114・116は13世紀代に位置づけられる。117は土師質土器土釜である。口縁端部と鍔の先端部は平坦気味であるが、やや雑な作りである。鍔の上下には指オサエが見られる。13世紀代に位置づけられる。

118～140は下層・最下層からの出土遺物である。118～124は土師器小皿である。86のような直立気味で短い口縁部を持つ形態のものが多いが、124は細長い口縁部が強く外反し、やや口径が大きい。時期は124が12世紀代、それ以外が13世紀代に位置づけられる。125～130は土師器杯である。底部は128が回転糸切りする以外は、いずれも回転ヘラ切りしている。125・128は体部が直立気味で、器壁は厚い。13世紀代に位置づけられる。127・129は薄作りで硬質であり、体部は強く外反する。13世紀末～14世紀前半に位置づけられる。131は瓦器椀である。12世紀末～13世紀前半に位置づけられる。132～134は土師器椀である。134は非常に粗雑に高台を貼り付ける。いずれも高台がごく小さいため13世紀代に位置づけられる。135は白磁皿である。137は土師器鉢？である。ごく低い削り出し高台を持つ。138は土師質土器土釜である。ごく小さい痕跡的な鍔を貼り付ける。139・140は混入した古代の須恵器皿・甕である。

以上の出土土器を見ると最下層から14世紀前半の土師器杯が、上層から14世紀後半の土師器小皿が



第119図　A区 SX04 平・断面図（1/60）出土遺物（1/4）

第120図　A区 遺構外出土遺物（1/4）

出土しており、それぞれSX01の開削時期と埋没時期を示している。ただ、最下層を含めてどの層位にも多量の13世紀代が遺物が含まれていることから、開削時期は13世紀代に遡る可能性がある。

A区 SX04（第119図）

調査区の東部で検出した遺構である。平面形は不整な方形であり、北側には3条の溝状の落ち込みを伴う。これらのうち、西側の2条は調査区外に延び、東側の1条はSD07と連続すると考えられる。断面形は浅い皿状であるが、中央でやや隆起する。規模は長径4.05m、短径4.11m、深さ17cmを測る。主軸方向はN－13°－Wである。埋土は黒褐色系粘質土である。

出土遺物には土師器小皿（141・142）・杯、黒色土器椀（143）、瓦器、土師質土器土釜（145）・土鍋・硯（144）、古代の須恵器甕、鉄釘などがごく少量ある。141は直立気味の短い、142は矮小な口縁部をもつ。これらは13世紀代に位置づけられる。144は硯の隅部と考えられる。墨痕は見られない。145は土釜の脚である。遺構の時期は出土土器より13世紀代に位置づけられる。

遺構外出土遺物（第120図）

146～150は遺構外から出土した中世土器である。器種は土師器小皿（146・147）・杯（148・149）、土師質土器土釜（150）がある。いずれも13世紀代に位置づけられるが、これはA区の中世遺構から出土した土器の時期と一致する。

B区の調査成果

(1) 中世の遺構・遺物

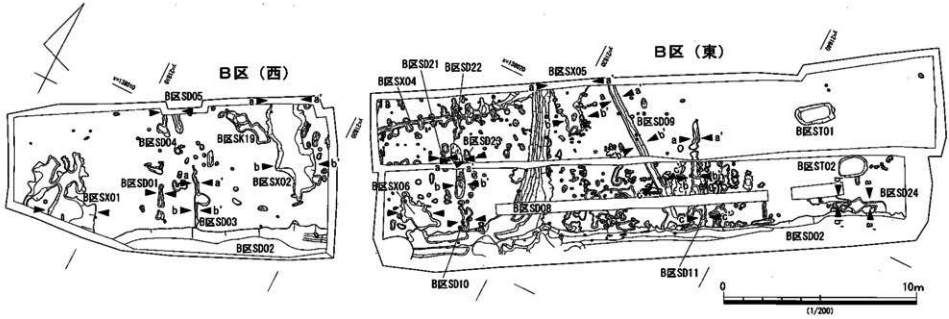
溝状遺構

B区 SD01（第122図）

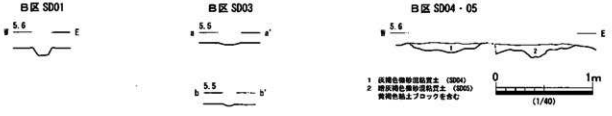
調査区の西部で検出した溝状遺構である。幅0.3m、深さ8cmを測る。主軸方向はN－24°－Wである。埋土は灰褐色粘質土である。SD01を北側へ延伸すると規模と埋土が類似するSD04に至り、本来は同一遺構である可能性がある。B区中央部に分布する小ピット群は後述するとおり畑跡と考えられるが、その東西限にSD02と直交する小溝（西にSD01・SD04、東にSD11）が見られる。よって、両者は畑跡を区画する溝と考えられる。出土遺物はない。溝状遺構の時期は埋土と周辺遺構の時期より13～14世紀代と考えられる。

B区 SD02（第123図）

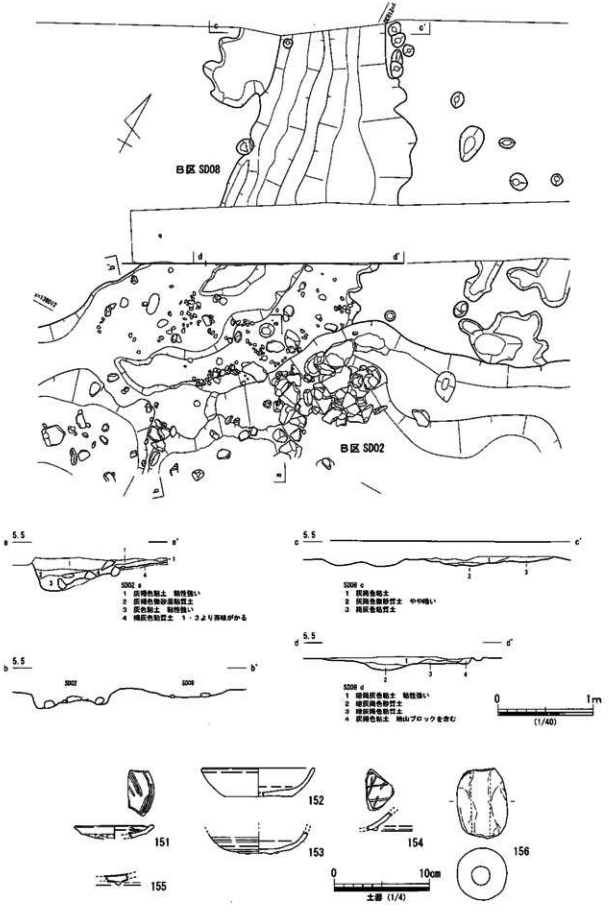
調査区の南部で検出した溝状遺構である。A区SD02と同一遺構であり、条里坪界溝と見られる。A区SD02と同様に調査区内では北側の肩付近を検出したのにとどまる。幅1.56m以上、深さ34cmを測る。主軸方向はN－64°－Eである。埋土は灰褐色系粘質土であるが、A区SD02のような再掘削の痕跡は明確でない。



第121図　B区遺構配置図（1/200）



第122図　B区 SD01・03・04・05 断面図（1/40）



第 123 図　B区 SD02・08 平・断面図 (1/60) 出土遺物 (1/4)

また、調査区中央部ではこれに直交し、北へ延びるSD08が分流するが、その分岐点付近では拳大の礫が多量に出土した。礫が最も密に分布するのは分岐点の東側となるSD02の北肩部であり、多くは底に接地していた。礫群の性格については溝状遺構の分岐点に位置することから簡易な堰であり、SD08への給水を調整したと考えられる。

SD02からの出土遺物は28リットル入りコンテナ約1箱あり、瓦器小皿（151）、土師器小皿・杯（152）、西村産須恵器椀（153）、瓦器椀（154）、白磁碗、青磁、土師質土器土鍋、亀山焼甕、土師質土錘（156）、古代の須恵器杯・甕、緑釉陶器碗（155）、弥生土器などが見られる。152は底部を回転ヘラ切りする。153は体部外面が強い回転ナデにより凹凸を生じており、底部には小さい粗雑な高台を貼り付ける。152・153は13世紀代に位置づけられる。156は長さが24と類似するが、やや幅広の形態である。溝状遺構の時期はA区SD02と同一遺構であることより12世紀後半～15世紀後半に収まると考えられる。

B区 SD03（第122図）

調査区の西部で検出した溝状遺構である。南部でSD02と接続する。幅0.2～0.8 m、深さ4cmを測る。主軸方向はN－26°－Wである。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物には弥生土器がある。溝状遺構の時期は周辺遺構の時期より13～14世紀代と考えられる。

B区 SD04（第122図）

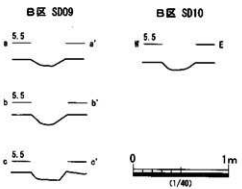
調査区の西部で検出した溝状遺構である。北部は調査区外に延び、幅0.16～0.6 m、深さ10cmを測る。主軸方向はN－24°－Wである。埋土は灰褐色粘質土である。先述のとおりSD01と同一遺構の可能性がある。出土遺物はない。溝状遺構の時期は埋土と周辺遺構の時期より13～14世紀代と考えられる。

B区 SD05（第122図）

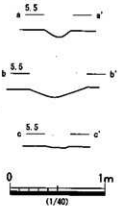
調査区の西部で検出した溝状遺構である。北部は調査区外に延び、幅0.32 m、深さ13cmを測る。主軸方向はN－42°－Wである。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は埋土と周辺遺構の時期より13～14世紀代と考えられる。

B区 SD08（第123図）

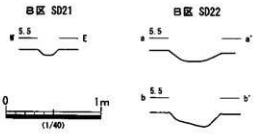
調査区の中央部で検出した溝状遺構である。北部は調査区外に延び、SX04・05を切る。幅0.8～1.7 m、深さ14cmを測る。主軸方向はN－24°－Wである。埋土は灰褐色系粘質土である。先述のとおりSD02から分岐しており、分岐点付近には堰を形成したと見られる礫群が出



第124図　B区 SD09・10 断面図（1/40）



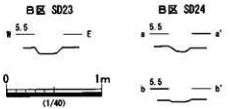
第125図　B区 SD11 断面図（1/40）



第126図　B区 SD21・22 断面図（1/40）

土した。

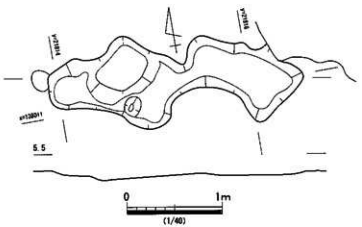
出土遺物には土師器小皿、杯、瓦器椀、土師質土器土釜・土鍋、須恵器などが少量あり、概ね13世紀代に位置づけられる。溝状遺構が機能していた時期はSD02（12世紀後半～15世紀後半）と埋土を共有し、併存する時期があることと出土土器の時期から13世紀代を含むと考えられる。



第127図　B区 SD23・24 断面図（1/40）

B区 SD09（第124図）

調査区の中央部で検出した溝状遺構である。北部は調査区外に延び、南部はSD02に切られる。幅0.4 m、深さ9cmを測る。主軸方向はN－51°－Wであり、周辺の条里型地割のそれと異なる。埋土は灰褐色系粘質土である。出土遺物には中世の土師器杯、弥生土器などがごく少量ある。溝状遺構の時期は遺構の切り合いと出土遺物より13世紀代以前と考えられる。



第128図　B区 SK19平・断面図（1/40）

B区 SD10（第124図）

調査区の中央部で検出した溝状遺構である。南部はSD02と接続し、北側に近接するSD22とは同一遺構である可能性が高い。幅0.4 m、深さ8cmを測る。主軸方向はN－26°－Wである。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は周辺遺構の時期と埋土より13～14世紀代と考えられる。

B区 SD11（第125図）

調査区の東部で検出した溝状遺構である。南部はSD02と接続し、幅0.86 m、深さ10cmを測る。主軸方向はN－29°－Wである。埋土は灰褐色粘質土である。これより東側では畑跡を構成する小ピット群が途切れるため畑跡の東側を区画する小溝と考えられる。出土遺物はない。溝状遺構の時期は周辺遺構の時期と埋土より13～14世紀代と考えられる。

B区 SD21（第126図）

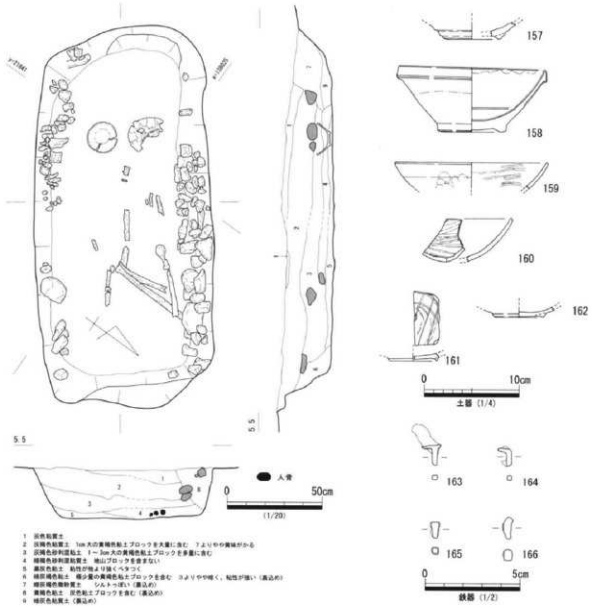
調査区の中央部で検出した溝状遺構である。幅0.4 m、深さ8cmを測る。主軸方向はN－29°－Wである。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は周辺遺構の時期と埋土より13～14世紀代と考えられる。

B区 SD22（第126図）

調査区の中央部で検出した溝状遺構である。南側に近接するSD10とは同一遺構である可能性が高い。幅0.5 m、深さ14cmを測る。主軸方向はN－33°－Wである。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は周辺遺構の時期と埋土より13～14世紀代と考えられる。

B区 SD23（第127図）

調査区の中央部で検出した溝状遺構である。幅0.3 m、深さ7cmを測る。主軸方向はN－42°－Wである。



第129図　B区 ST01 平・断面図（1/20）出土遺物（1/4・1/2）

埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は周辺遺構の時期と埋土より 13 ～ 14 世紀代と考えられる。

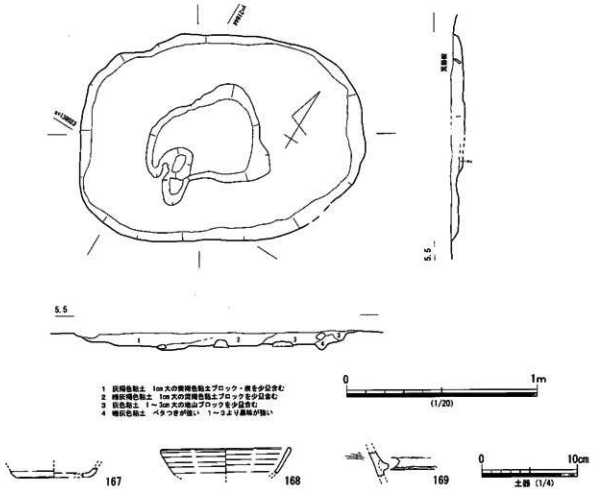
B区 SD24（第 127 図）

調査区の南東部で検出した溝状遺構である。ST02 に近接する。幅 0.8 m、深さ 5cmを測る。主軸方向は N － 69° － E である。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は周辺遺構の時期と埋土より 13 ～ 14 世紀代と考えられる。

土坑

B区 SK19（第 128 図）

調査区の北西部で検出した不整形な土坑である。規模は長径 2.7 m、短径 0.85 m、深さ 9cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土と周辺遺構の時期より 13 ～ 14 世紀代



第130図　B区 ST02 平・断面図（1/20）出土遺物（1/4）

と考えられる。

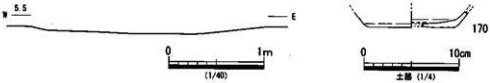
墓

B区 ST01（第129図）

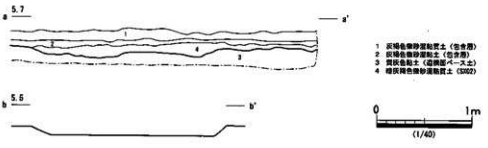
調査区東部で検出した土壙墓である。平面形は整った長方形、断面形は壁が直立気味に落ち、床面はほぼ平坦であるが、東側へごく緩く下る。規模は長径1.99 m、短径0.95 m、深さ26cmを測る。主軸方向はN－54°－Eである。

墓壙の中央北寄りで人骨を確認した。遺存状況はあまり良くないが頭蓋骨、足の骨などが比較的残っていた。埋葬姿勢は屈葬である。香川大学医学部解剖学教室の井尻巌教授に鑑定を依頼したところ、頭蓋骨の厚さから顔は南を向けていると考えられるが、性別・年齢・身長については遺存状況が悪いため判断できないとのコメントをいただいた。

埋葬施設については土層断面の7～9層の堆積状況から木棺の使用が推定される。また、小礫群が北辺部で直線的な帯状に密集する状況についても以下のようなプロセスを経た結果と解釈される。まず墓壙内へ木棺を設置した後、墓壙の北部では小礫群を含む裏込め土により、埋め戻しが行われる。その後、木棺が腐朽し、土砂が棺内へ流入するが、小礫より細かい土砂の堆積で棺内が充填される。このため小



第131図　B区 SX01 断面図（1/40）出土遺物（1/4）



第132図　B区 SX02 断面図（1/40）

礫の移動は下位への沈下に留まり、側板の痕跡に沿って小礫の密集が生じた。

なお、5層の分布範囲ではこの直上で人骨が検出された。この状況と土質より5層は腐朽した木棺底板の可能性をもつ。ただ、このように考えると白磁碗の底部が5層に食い込んでいる点は不自然である。これについては土圧などで碗が下位へ沈んだと考えておきたい。

出土遺物には土師器小皿・椀（157）・杯、白磁碗Ⅳ類（158）、瓦器椀（159～162）、鉄釘（163～166）などがごく少量ある。158は完形品であり、頭蓋骨の横に置かれていた。副葬品と考えられる。その他の土器は小片であり、墓の埋め戻し時に混入したと考えられる。157は体部下位が直線的である。古代に属する。159～162はまばらに平行するヘラミガキを施す。また、161・162の高台はごく小さい。これらは12世紀末～13世紀前半に位置づけられる。163・164・166は釘の頭部である。木棺を固定していたものと見られる。墓の時期は出土土器より12世紀末～13世紀前半に位置づけられる。

B区 ST02（第130図）

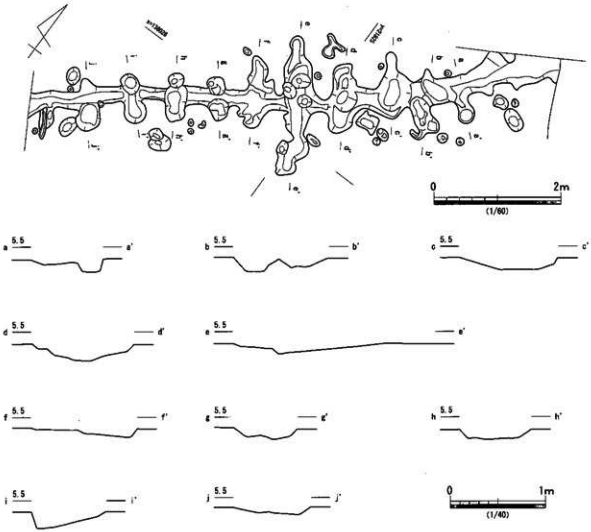
調査区東部で検出した土壙墓である。平面形は整った長方形、断面形は浅い皿状である。なお、床面はほぼ平坦であるが、中央でごく浅くくぼむ。規模は長径1.49m、短径1.06m、深さ9cmを測る。主軸方向はN－56°－Eである。埋土は4層に分けられるが、1～3層には地山ブロックを少量含む。

ST01とは2mと近接した位置にあり、主軸方向が類似する。また規模と形状や埋土内に地山ブロックを含有することから墓と考えられる。

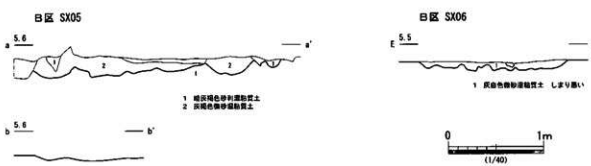
出土遺物には土師器小皿（167）・杯（168）、土師質土器土釜（169）などがごく少量ある。169は破損が著しいが、鍔が小さく、雑な作りである。墓の時期はST01との関係と出土遺物より13世紀代と考えられる。

ピット

B区では特に調査区中央部で、密集する小ピット群を検出した。これらは平面形が不整形、断面形が下位で細長い。またピットの底では径数cmの窪みも複数が見られる。こうした特徴から植物の根の痕

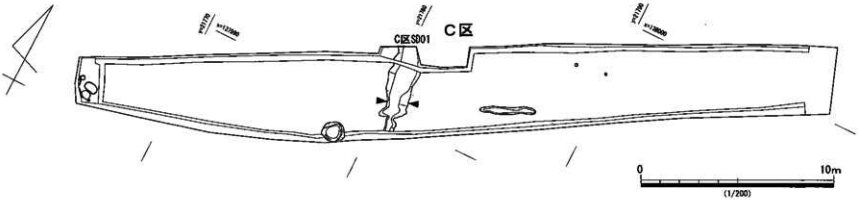


第 133 図　B 区 SX04 平・断面図（1/40・1/60）

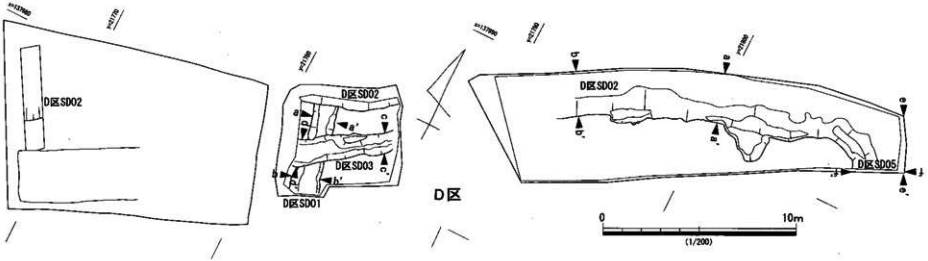


第 134 図　B 区 SX05・06 断面図（1/40）

跡と推定され、集落域に接する位置で密集した分布を示すことから畑跡と考えられる。ピット群からの出土遺物は極めて乏しいが、中世の土師器などが見られる。遺構の時期については出土土器、周辺遺構の時期より 13 ～ 14 世紀代と考えられる。



第135図　C区遺構配置図（1/200）



第136図　D区遺構配置図（1/200）

性格不明遺構

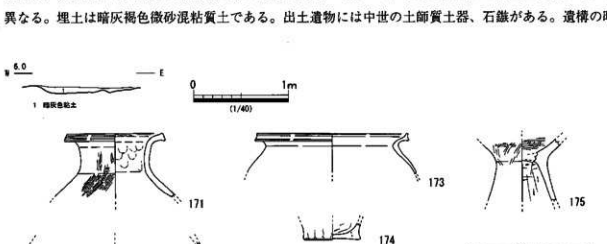
B区 SX01（第 131 図）

調査区の西部で検出した遺構である。平面形は不整な T 字状を呈し、断面形はごく浅い皿状である。規模は長径 3.8 m、深さ 8cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物には土師器杯（170）、土師質土器などがごく少量ある。170 は底部を回転ヘラ切りする。底径と器壁の厚さから 13 世紀代に位置づけられる。遺構の時期は出土遺物から 13 世紀代と考えられる。

B区 SX02（第 132 図）

調査区の西部で検出した遺構である。平面形は溝状であり、断面形は浅い皿状である。規模は長径 4.7 m以上、短径 2.1 m、深さ 14cmを測る。主軸方向は N－38°－W であり、周辺の条里型地割のそれと異なる。埋土は暗灰褐色微砂混粘質土である。出土遺物には中世の土師質土器、石鍬がある。遺構の時

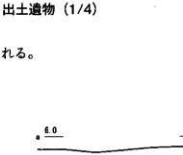


第 137 図　C区 SD01 断面図（1/40）出土遺物（1/4）

期は SD09 と主軸方向を揃えることより 13 世紀代以前と考えられる。

B区 SX04（第 133 図）

調査区の中央部で検出した遺構である。西部はB区（東）、（西）間の未調査部で収束する。東部は調査区外に延びるが、SD08 に切られる。平面形は連続する小さい土坑群を溝状遺構で結んだような形状であり、規模は東西 8.4 m以上を測る。最深部の深さは a－a' 間 12cm、b－b' 間 13cm、c－c' 間 8cm、d－d' 間 16cm、e－e' 間 10cm、f－f 間 8cm、g－g' 間 12 cm、h－h' 間 10cm、i－i' 間 16cm、j－j' 間 8cmを測る。また、これらの位置での平・断面を見ると中央の溝状の部分を挟んで両側で少し深くなり、ピット状に窪む箇所が目立つ。主軸方向は N－52°－E であり、周辺の条里型地割のそれと異なる。埋土は灰褐色粘質土であり、土坑状の部分と溝状の部分で埋土が連続する。



第 138 図　D区 SD01 断面図（1/40）

出土遺物には中世の土師器、土師質土器がある。遺構の時期はSD09と主軸方向が類似することより13世紀代以前と考えられる。

B区 SX05（第134図）

調査区の中央部で検出した遺構である。西側をSD08に切られる。平面形は溝状を呈し、断面形は浅い皿状である。また、底の凹凸が著しい。規模は長径2.4m以上、短径1.9m、深さ20cmを測る。主軸方向はN－40°－Wであり、周辺の条里型地割のそれと異なる。埋土は灰褐色系粘質土である。出土遺物はない。遺構の時期はSD09と主軸方向が類似することより13世紀代以前と考えられる。

B区 SX06（第134図）

調査区の中央部で検出した遺構である。平面形は不整な楕円形を呈し、断面形はごく浅い皿状である。規模は長径2.4m以上、短径1.2m、深さ10cmを測る。主軸方向はN－82°－Wである。埋土は灰白色微砂混粘質土である。出土遺物はない。遺構の時期は周辺遺構の時期と埋土より13～14世紀代と考えられる。

C区の調査成果

(1) 弥生時代の遺構・遺物

溝状遺構

C区 SD01（第137図）

調査区の中央部で検出した溝状遺構である。D区SD01と同一遺構と見られるが、北部は調査区外に延びる。幅1.6m、深さ8cmを測る。主軸方向はN－17°－Wである。埋土はグライ化により灰味が強い暗褐色粘土である。流水の痕跡はD区SD01でも乏しいが、微高地上に掘削され、周囲に同時期の遺構・遺物が希薄であるため、A区SD11と同様に灌漑用水路と考えられる。

出土遺物には弥生土器壺（171・172）・甕（173・174）・高杯（175）・鉢（176）などが少量ある。171・173・176は肥厚させた口縁部に少条の凹線文を施す。172は外面に丁寧な縦方向のヘラミガキを加える。また内面には顕著な指オサエが見られる。175は杯部の内外面にヘラミガキを施す。これらは凹線文出現期に位置づけられる。溝状遺構の時期は出土土器より弥生時代中期後葉と考えられる。

D区の調査成果

(1) 弥生時代の遺構・遺物

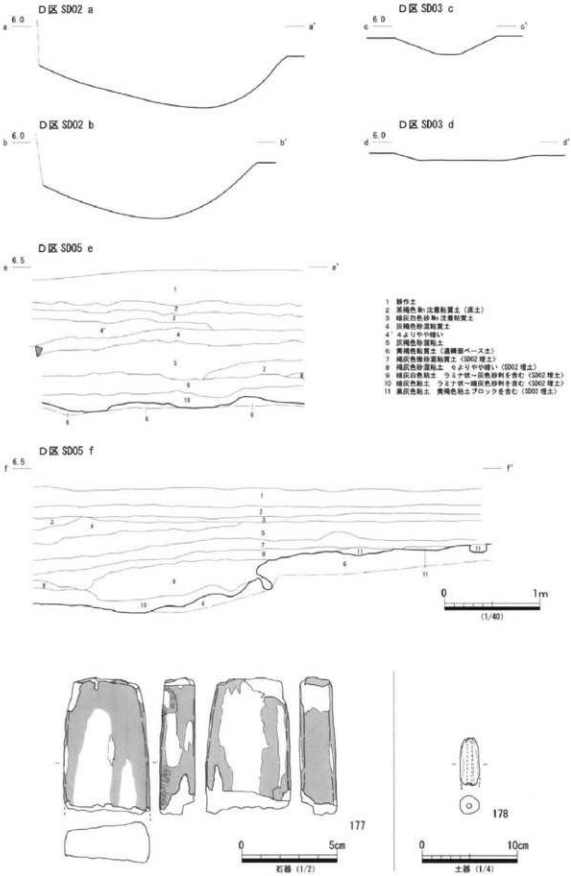
溝状遺構

D区 SD01（第138図）

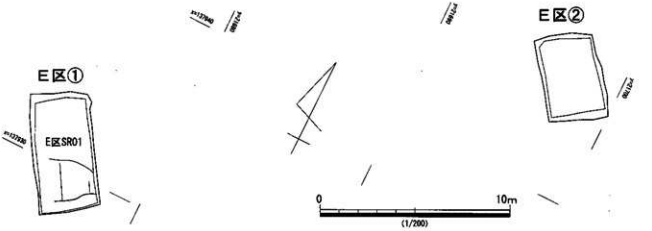
調査区の西部で検出した溝状遺構である。C区SD01と同一遺構と考えられ、南部は調査区外に延びる。中世に属するSD02･03に切られる。幅1.2m、深さ10cmを測る。主軸方向はN－16°－Wである。埋土はグライ化し、灰色がかった黒褐色粘土である。流水の痕跡は乏しいが、先述の通り灌漑用水路であると考えられる。出土遺物はない。溝状遺構の時期はC区SD01との関係から弥生時代中期後葉と考えられる。

(2) 中世の遺構

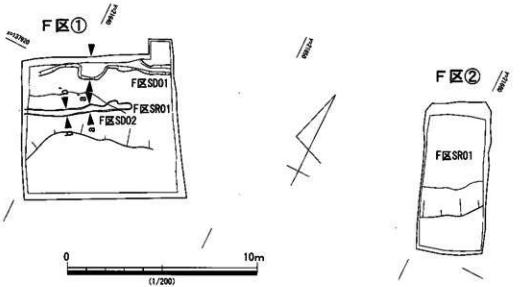
溝状遺構



第139図　D区 SD02・03・05 断面図（1/40）出土遺物（1/2・1/4）



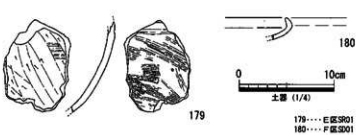
第140図　E区 遺構配置図（1/200）



第141図　F区 遺構配置図（1/200）

D区 SD02（第139図）

調査区の北部で検出した溝状遺構である。A・B区SD02と同一遺構であり、東西方向の条里坪界溝と見られる。調査区内では南側の肩付近を検出したのにとどまる。また東端部では南北方向に延びるSD05（南北方向の条里坪界溝）と合流する。SD02は幅2.5m以上、深さ55cmを測る。主軸方向はN－64°－Eである。埋土は灰褐色系粘質土であるが、下位では砂をラミナ状に含み、一定量の流水があったことがうかがえる。



第142図　E区 SR01・F区 SD01 出土遺物（1/4）

出土遺物には中世の土師器小皿・杯、西村産須恵器椀、土師質土器、

弥生時代の扁平片刃石斧（177）などが少量ある。177は結晶片岩製であり、刃部は失われている。溝状遺構の時期はA区SD02と同一遺構であることより12世紀後半～15世紀後半に収まると考えられる。

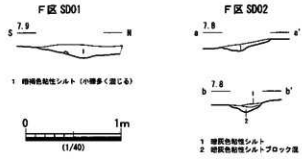
D区 SD03（第139図）

調査区の西部で検出した溝状遺構である。幅1.3m、深さ18cmを測る。主軸方向はN－55°－Eである。D区は3つの小調査区に細分して発掘調査を行ったが、その中央でしか検出されなかった。SD03は埋土がSD02と類似し、中世土器も出土しているため未掘部でSD02と合流すると推測される。

出土遺物には土師質土器鍋、土師質管状土錘（178）などがごく少量ある。178は23よりやや幅が広い。溝状遺構の時期は出土土器と埋土より中世に位置づけられる。

D区 SD05（第139図）

調査区の東端部で検出した溝状遺構である。ごく一部を検出したにとどまるが、検出位置や規模などから南北方向の条里坪界溝と考えられる。幅2.7m以上、深さ68cmを測る。埋土は灰褐色系粘質土である。SD02と合流し、埋土は全て共有するため同時併存したと考えられる。出土遺物はない。溝状遺構の時期はSD02との関係から12世紀後半～15世紀後半に収まると考えられる。



第143図　F区 SD01・02断面図（1/40）

E区の調査成果

本調査時に状況確認トレンチを掘削したところ、遺構密度が極めて希薄ながら旧河道の存在が予想された。このため旧河道の状況把握を主目的として調査を行った。

（1）弥生時代の遺構・遺物

旧河道

E区 SR01（第94・142図）

E区①で検出した旧河道である。検出位置と埋土よりF区SR01と同一河川であり、東に流下すると考えられる。幅5.4m以上、深さ44cmを測る。埋土の下位では砂礫層が見られ、旺盛な流水があったと考えられる。

出土遺物は弥生土器鉢（179）のみである。179は胴部の破片で外面は横ハケ、内面はヘラケズリを施す。旧河道の時期はF区SR01との関係より弥生時代中期後葉から後期前半と考えられる。

F区の調査成果

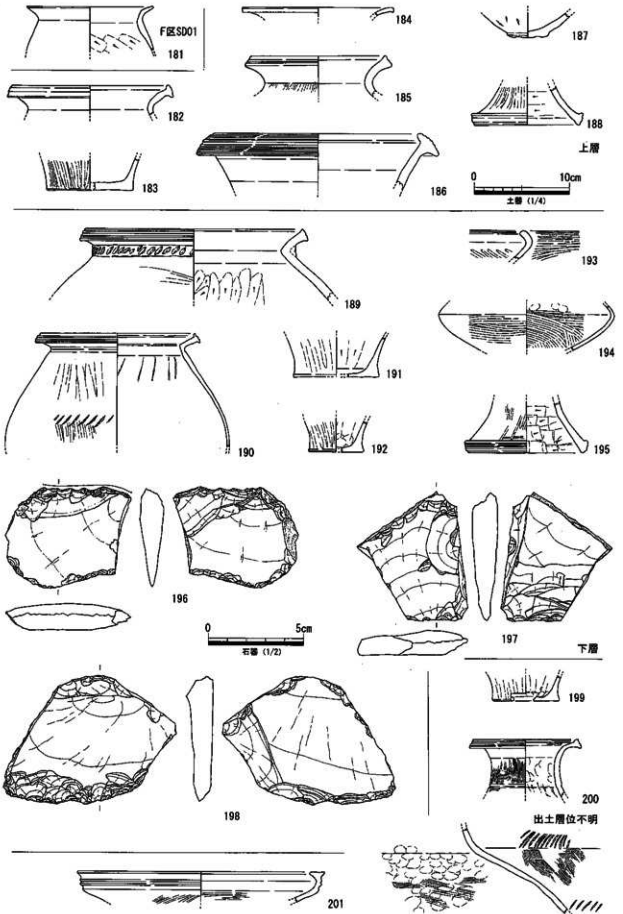
E区と同様、本調査時に状況確認トレンチを掘削したところ、遺構密度が極めて希薄ながら旧河道の存在が予想された。このため旧河道の状況把握を主目的として調査を行った。

（1）弥生時代の遺構・遺物

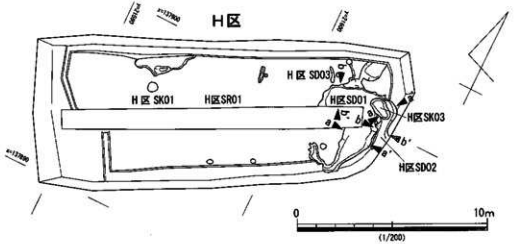
旧河道

F区 SR01（第94・144図）

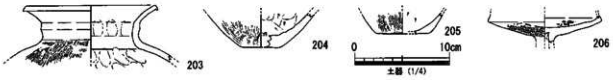
調査区のほぼ全面で検出した旧河道である。検出位置と埋土よりE区SR01と同一河川であり、東に流下すると考えられる。幅5.96m以上、深さ84cmを測る。埋土には粗砂や砂礫が目立ち、流水が旺盛



第144図　F区 SD01・SR01 出土遺物（1/4・1/2）



第145図　H区 遺構配置図（1/200）



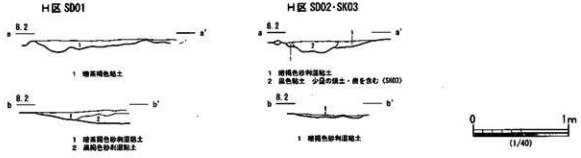
第146図　H区 SR01 出土遺物（1/4）

であったことがうかがえる。

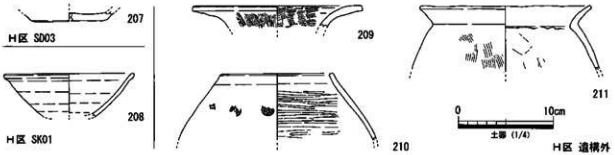
出土遺物には弥生土器（182～195・199～202）、石器（196～198）などが少量ある。上層からは壺（182・184～186）、甕（183）、鉢（187）、高杯（188）が出土した。182・185・186・188は口縁部や脚端部を上下に拡張し、数条の凹線文を加える。184は口縁端部に退化した凹線文を施し、弥生後期前半に属する。187は底部を小さく突出させた平底である。

下層からの出土遺物には壺（189）、甕（190～192）、鉢（193・194）、高杯（195）、打製石庖丁（196）、スクレイパー（197・198）がある。

189・190・195は口縁部や脚端部に少条の凹線文を施す。189は頸部に粘土ひもを貼り付け、指頭圧痕を加える。190は胴部最大径の外面に刻目を施す。191・192・195は外面に、193・194は内外面にヘラミガキを施す。196はどちらの面も刃部付近が使用により磨耗している。197は片刃、198は両刃で



第147図　H区 SD01・02・03 断面図（1/40）



第148図　H区 SD03・SK01・遺構外出土遺物（1/4）

あるが、どちらも刃部の調整は粗い。

出土層位不明遺物には甕（199）、壺（200・202）、高杯（201）がある。199は底部に焼成前穿孔を加える。200・201は口縁部から体部にかけて少条の凹線文を施す。202は外面において頸部に刻目を、胴部最大径にヘラ状工具による刺突文を加える。

これらの出土遺物には明瞭な凹線文が見られる弥生中期後葉の土器が多い。だが、上層出土土器のうち、184・187は弥生後期（前半）に位置づけられる。このため上層は弥生後期前半に、下層は弥生中期後葉に堆積したと考えられ、旧河道の時期は弥生中期後葉～後期前半に位置づけられる。

(2) 中世の遺構・遺物

F区 SD01（第142～144図）

F区①で検出した溝状遺構である。埋没したSR01を切り込んで掘削され、東西は調査区外に延びる。幅0.5m以上、深さ12cmを測る。主軸方向はN－67°－Eである。埋土は灰味を帯びた暗褐色粘性シルトである。

出土遺物には弥生土器壺、高杯（180）、甕（181）などが少量ある。180は弥生中期、181は弥生後期に位置づけられる。溝状遺構の時期は埋土から中世と考えられる。このため出土した弥生土器はSR01からの混入と考えられる。

F区 SD02（第143図）

F区①で検出した溝状遺構である。埋没したSR01を切り込んで掘削され、西部は調査区外に延びる。幅0.6m以上、深さ12cmを測る。主軸方向はN－61°－Eである。埋土は灰味を帯びた褐色粘質シルトである。出土遺物には中世の白磁、弥生土器がごく少量ある。溝状遺構の時期は出土土器より中世前半に位置づけられる。

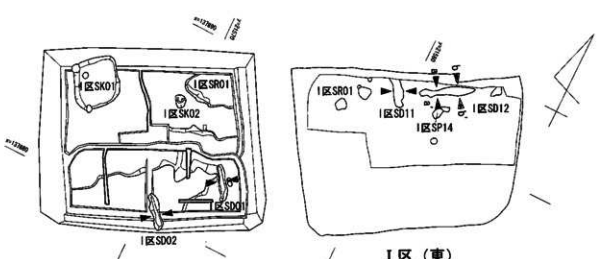
H区の調査成果

(1) 弥生時代の遺構・遺物

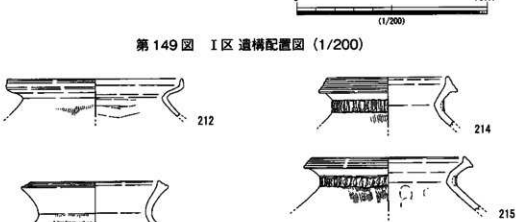
旧河道

H区 SR01（第95・146図）

調査区の全面で検出した旧河道である。検出位置と埋土からI区SR01と同一河川であり、東に流下すると考えられる。深さ72cmを測る。埋土の下位では砂を多く含む土層が、上位ではシルト～粘土層が目立つ。このためある程度埋没が進んだ段階以降は、基本的に穏やかな堆積環境にあったと推定される。



第149図　I区遺構配置図（1/200）



第150図　I区SR01出土遺物（1/4）

出土遺物は弥生土器壺（203・204）・甕（205）・高杯（206）がある。203は口縁部を下方に小さく拡張させる。内面の頸部以下は指ナデが顕著に見られる。204・205は平底であるが、やや丸みを帯びる。206は外面を分割してヘラミガキ調整する。いずれも弥生時代後期後半に位置づけられる。

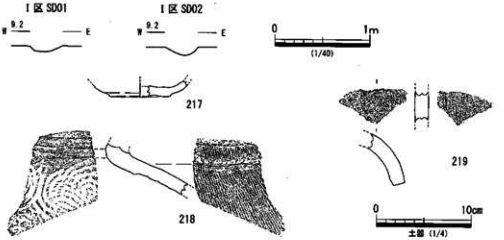
旧河道の時期は出土遺物とI区SR01との関係から弥生時代中期後葉～後期後半に収まると考えられる。

(2) 古代の遺構・遺物

土坑

H区SK01（第145・148図）

調査区の西部で検出した土坑である。埋没したSR01を切り込んで掘削される。平面形は円形、断面形は皿状である。規模は長径0.8m、短径0.6mを測る。主軸方向はN－82°－Eである。埋土は暗灰褐色微砂混粘質土である。



第151図　I区 SD01・02 断面図 (1/40) 出土遺物 (1/4)

出土遺物には須恵器杯（208）がある。体部は直線的であり、やや焼きが悪い。10世紀代に位置づけられる。土坑の時期は出土土器より10世紀代に位置づけられる。

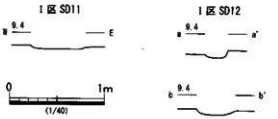
(3) 中世の遺構・遺物

この時期の属する全ての遺構は埋没したSR01を切り込んで掘削される。

溝状遺構

H区 SD01（第147図）

調査区東部で検出した溝状遺構である。東側でSK03に切られ、平面形は不整なコの字状を呈する。



第152図　I区 SD11・12 断面図 (1/40)

埋土は暗茶褐色粘土である。幅0.4～1.7 m、深さ12cmを測る。出土遺物には中世の土師器杯、弥生土器がごく少量ある。溝状遺構の時期は出土土器より中世と考えられる。

H区 SD02（第147図）

調査区の東端部で検出した溝状遺構である。SK03に切られ、南部は調査区外に延びる。幅0.6 m、深さ6cmを測る。埋土は暗褐色砂利混粘土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は周辺遺構の時期より中世と考えられる。

H区 SD03（第147・148図）

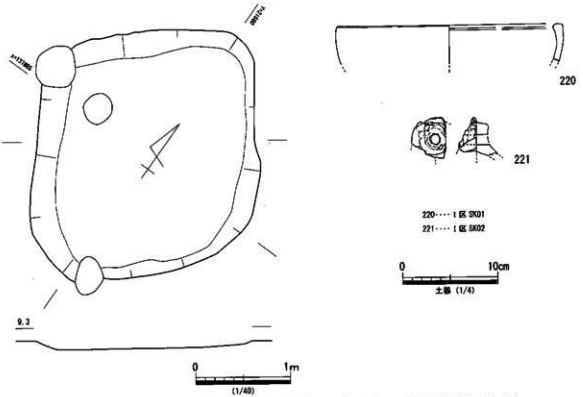
調査区の中央部で検出した溝状遺構である。幅0.2 mを測る。主軸方向はN－30°－Wである。埋土は暗褐色粘土である。

出土遺物には土師器小皿（207）・杯がある。底部は回転ヘラ切りし、器壁が厚い。中世前半に位置づけられる。土坑の時期は出土土器より中世前半に位置づけられる。

土坑

H区 SK03（第147図）

調査区の東端部で検出した土坑である。SD01・02を切る。規模は長径1.3 m以上、短径0.7 m、深さ12cmを測る。主軸方向はN－67°－Wである。埋土は暗褐色砂利混粘土である。出土遺物はない。土



第153図　I区 SK01 平・断面図（1/40）SK01・02 出土遺物（1/4）

坑の時期は周辺遺構の時期より中世と考えられる。

(4) 遺構外出土遺物（第148図）

209～211は遺構外から出土した弥生土器である。209・210は壺である。209は内外面に細密なハケメ調整を、210は外面に同心円状の櫛描き文様を施す。211は甕である。内面の頸部直下までヘラケズリ調整する。

I区の調査成果

(1) 弥生時代の遺構・遺物

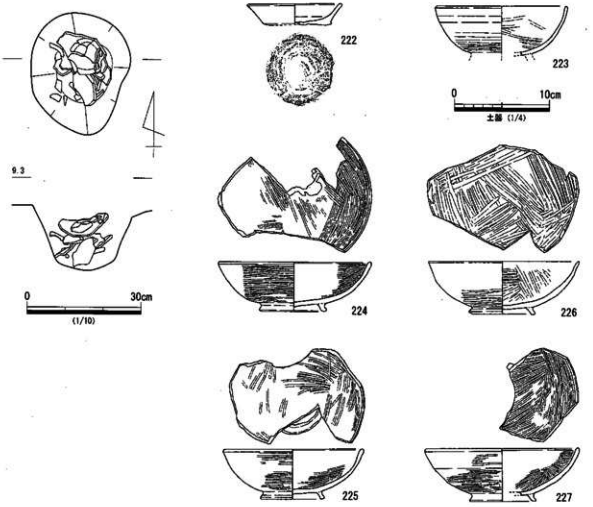
旧河道

I区 SR01（第96図）

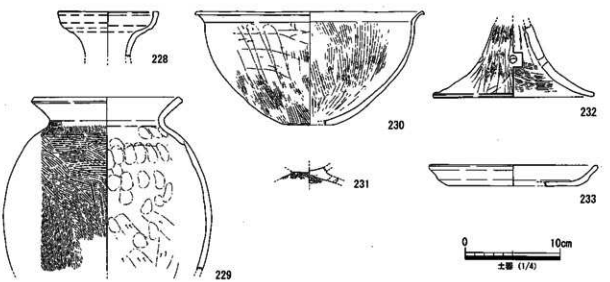
調査区の全面で検出した旧河道である。検出位置と埋土よりH・J・K区SR01と同一河川であり、東に流下すると考えられる。深さ68cmを測る。調査区西部では底に浅い窪みが見られる。埋土はあまり砂礫を含まない黒褐色系粘土であり、穏やかな環境で堆積したと推定される。

遺物は主に下層（黒灰色小石混粘土　第96図I区（西）北壁7層）から出土しており、弥生土器甕（212）・壺（213～215）・高杯（216）などが少量ある。212は口縁部を小さく肥厚させ、凹線文を1条加える。214・215は頸部外面に粘土ひもを貼り付け、指頭圧痕文を加える。216は脚部下位に穿孔を加えるが、3ヶ所が現存する。これらはいずれも弥生時代中期後葉に位置づけられる。また、上層（黒褐色粘土第96図I区（西）北壁6層）から出土した鉢（230）は弥生時代後期後半に位置づけられる。

旧河道の時期は出土土器から弥生時代中期後葉～後期後半に位置づけられる。



第154図　Ⅰ区 SP14 平・断面図 (1/10) 出土遺物 (1/4)



第155図　Ⅰ区 遺構外出土遺物 (1/4)

(2) 中世の遺構・遺物

溝状遺構

I区 SD01（第151図）

調査区の西部で検出した溝状遺構である。幅0.4m、深さ8cmを測る。主軸方向はN－35°－Wである。埋土は暗褐色粘質土である。

出土遺物には中世の土師器杯、土師質土器土鍋、古代の須恵器鉢（217）・甕（218）、丸瓦（219）などがごく少量ある。218は内面に青海波文が明瞭に残る。219は須恵質であり、内面には布目が見られる。溝状遺構の時期は出土土器より中世に位置づけられる。

I区 SD02（第151図）

調査区の西部で検出した溝状遺構である。幅0.4m、深さ10cmを測る。主軸方向はN－40°－Wである。埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は埋土より中世に位置づけられる。

I区 SD11（第152図）

調査区の東部で検出した溝状遺構である。北部は調査区外に延びる。幅0.5m、深さ6cmを測る。主軸方向はN－40°－Wである。埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物にはごく少量の弥生土器がある。溝状遺構の時期は埋土と周辺遺構の時期より中世と考えられる。

I区 SD12（第152図）

調査区の東部で検出した溝状遺構である。東部は調査区外に延びる。幅0.5m、深さ7cmを測る。主軸方向はN－57°－Eである。埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物にはごく少量の弥生土器がある。溝状遺構の時期は埋土と周辺遺構の時期より中世と考えられる。

土坑

I区 SK01（第153図）

調査区の北西部で検出した土坑である。平面形は整った方形、断面形は浅い皿状である。規模は長径2.52m、短径2.42m、深さ10cmを測る。主軸方向はN－37°－Wである。埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物には中世の瓦器と古代の須恵器鉢（220）、弥生土器がごく少量ある。土坑の時期は出土した瓦器より中世前半に位置づけられる。

I区 SK02（第149・153図）

調査区の西部で検出した土坑である。平面形はやや不整な円形であり、断面形は皿状である。規模は長径0.7m、短径0.5mを測る。主軸方向はN－32°－Wである。埋土は暗褐色粘質土である。

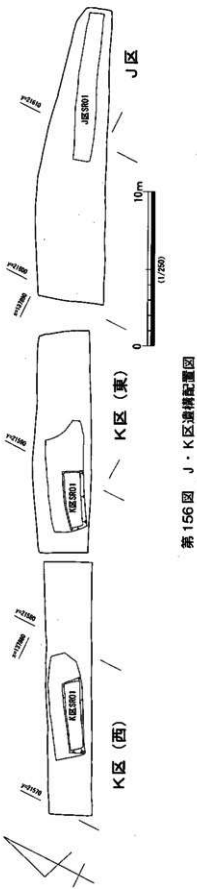
出土遺物には土師質タコ壺(221)などがごく少量ある。土坑の時期は埋土より中世に位置づけられる。

ピット

I区 SP14（第154図）

調査区の東部で検出したピットである。平面形はやや細長い円形であり、断面形はU字状である。規模は径0.30cm、深さ17cmを測る。埋土は暗褐色粘質土である。半分程度が残存する土器が重なって出土した。

出土遺物には土師器杯（222）、瓦器椀（223～227）がある。222は器壁が分厚く、底部を回転ヘラ切りする。223～227は体部外面に横方向の細密なヘラミガキを加える。また、内面も分割ヘラミガキ



第156図　J・K区遺構配置図

を施す。ピットの時期は瓦器椀より12世紀前半と考えられる。

(3) 遺構外出土遺物

228～233は遺構外からの出土遺物である。228～231は弥生土器である。228は壺であり、口縁部を直立させ、受け口状に仕上げる。229は甕である。肩が張らない卵形の器形を呈し、内面では頸部直下から胴部上半にかけて顕著な指オサエが、その下位でヘラケズリが見られる。230は鉢である。内外面に細密な縦ハケ調整を加える。底部は小さく、やや丸みを帯びる。出土位置は調査区北壁であるが、SR01上層に属し、弥生時代後期後半に位置づけられる。231は台付鉢である。鉢部下位に穿孔を加える。232は高杯である。233は古代の土師器杯である。

J区の調査成果

調査面積が狭小であること、周辺にあるH・I区の状況よりトレンチ調査を実施した。その結果、弥生時代の旧河道と中世の条里坪界溝を検出するにとどまったため、調査を終了した。

(1) 弥生時代の遺構・遺物

旧河道

J区 SR01（第96図）

トレンチのほぼ全体で検出した旧河道である。検出位置と埋土よりH・I・K区SR01と同一河川であると考えられる。トレンチ中央で一部窪む以外は、深さ20～40cmを測る。埋土はグライ化により灰色がかる黒褐色粘土である。出土遺物はない。旧河道の時期はI区SR01と同一河川と見られることより、弥生時代中期後葉～後期後半に収まると考えられる。

(2) 中世の遺構・遺物

溝状遺構

J区 SD01（第96図）

調査区の東端で検出した溝状遺構である。図化していないが、トレンチ北壁ではSR01を切る。幅1.78m、深さ72cmを測る。埋土は暗灰褐色系粘質土である。南北の調査区外に延び、ごく一部を検出したにとどまるが、遺跡周辺に広がる条里型地割の坪界線と位置的に近接し、規模が大きいため条里坪界溝と考えられる。出土遺物はない。溝状遺構の時期は埋土より中世と考えられる。

K区の調査成果

調査面積が狭小であること、周辺にあるH・I区の状況より2ヶ所についてトレンチ調査を実施した。その結果、弥生時代の旧河道を検出するにとどまったため、調査を終了した。

(1) 弥生時代の遺構・遺物

旧河道

K区 SR01（第96図）

2つのトレンチの全面で検出した旧河道である。検出位置と埋土よりH～J区SR01と同一河川であると考えられる。深さ30cmを測る。埋土は黒褐色粘土である。出土遺物はない。旧河道の時期はI区SR01と同一河川であると考えられることから弥生時代中期後葉～後期後半に収まると考えられる。

第157図　K区 遺構外出土遺物（1/4）

(2) 遺構外出土遺物

234は遺構外から出土した弥生土器である。口縁部を内傾気味に大きく拡張する。

(註1)以上の卒塔婆の釈読と説明については、普通寺市役所　海邉博史氏と大川広域行政事務所　松田朝由氏よりご教示を得た。記して感謝申し上げる。

(註2)松浦五輪美・原田憲二郎「柿経の考察－分類と編年について－」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育委員会(1982)

第４節　香川県奥白方南原遺跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

1. 試料

試料は香川県奥白方南原遺跡から出土した祭祀具１点である。

2. 観察方法

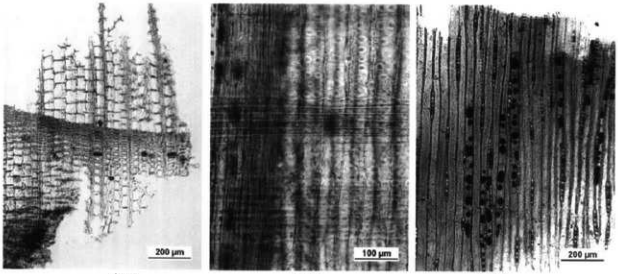
剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹１種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

－ 同定表 －

遺物 No.	品名	樹種
4（報文番号 65）	卒塔婆	スギ科スギ属スギ



木口　　柾目　　板目

写真 No.4　スギ科スギ属スギ

1）スギ科スギ属スギ (Cryptomeria japonica D.Don)（遺物・写真 No.4）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

◆参考文献◆島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
◆使用顕微鏡◆ Nikon DS-Fi1

第5節　まとめ

(1)　遺構の変遷

奥白方南原遺跡では弥生時代中期から中世にかけての遺構・遺物を確認した。以下ではこれらの遺構・遺物について時期ごとに説明する。

弥生時代中期～後期

西側に隣接する奥白方中落遺跡では当該期の集落跡が検出されたが、本遺跡では旧河道と溝状遺構が確認されたにとどまる。旧河道は遺跡西側にある谷底平野内（E～K区）で検出した。E・F区SR01とH～K区SR01があり、ともに東へ流下する。出土土器は少ないが、あまりローリングを受けておらず、所属時期が奥白方中落遺跡で出土した土器のそれと重なる。よって、上流域にある奥白方中落遺跡方面からの流れ込んだ土器であると推測される。

溝状遺構は弥生中期に属するC・D区SD01と後期に属するA区SD01・11がある。いずれも遺跡東側にある沖積地内の微高地上で検出し、周辺には同時期の遺構・遺物が希薄である。このため機能は灌漑用水路であると考えられる。

中世Ⅰ〈12世紀代〉

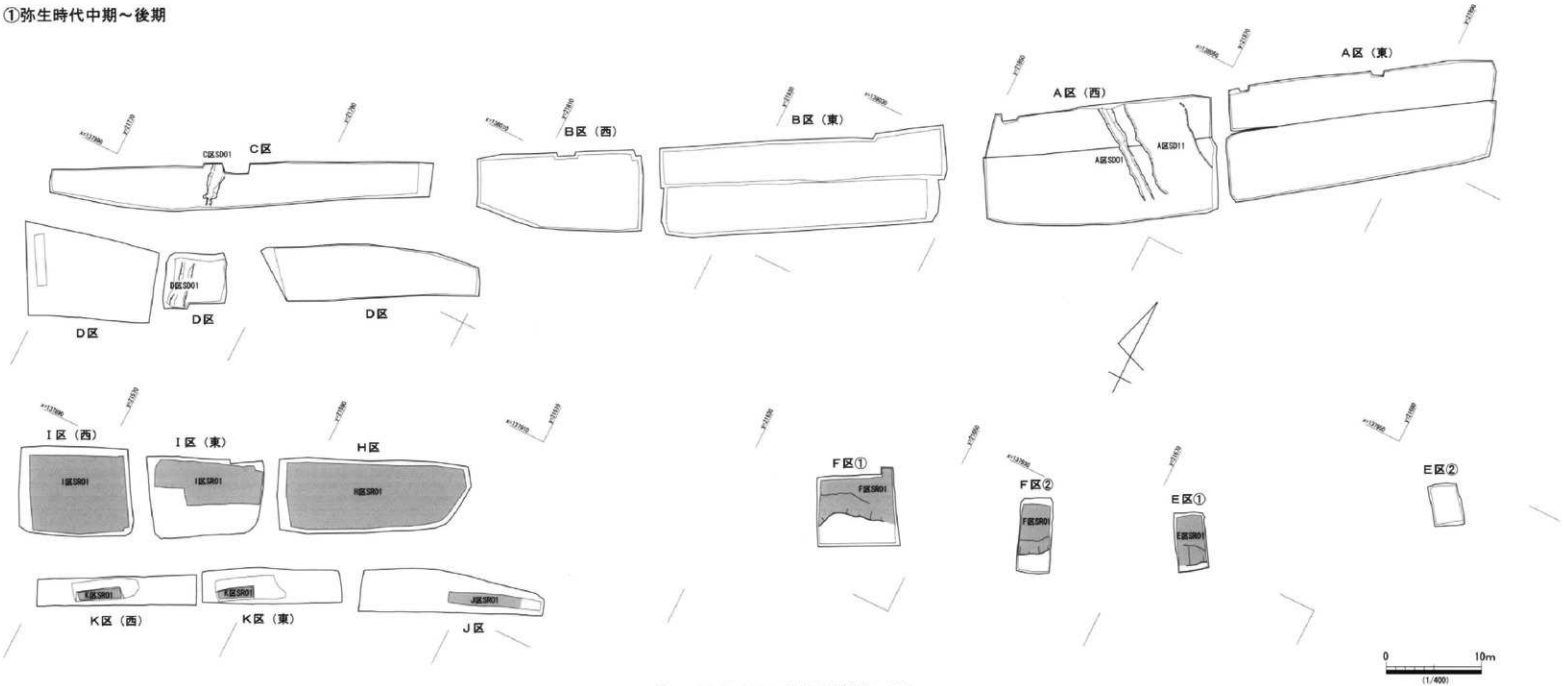
この時期に属する遺構は条里坪界溝を除くと少数であり、遺物もほとんど見られない。だが、遺構はB区でややまとまって分布する。具体的にはB区SD09・SX02・04・05がある。注意すべきは、これらの遺構の主軸方向が条里型地割のそれとは異なる点である。この付近の条里坪界溝（A・B・D区SD02）は12世紀後半に掘削され、13世紀代以降の遺構はほとんどが条里型地割に規制された主軸方向を取る。よって、上記の遺構は遺跡付近における条里地割の敷設以前からその初期にかけての時期に形成された可能性がある。

中世Ⅱ〈13～14世紀代〉

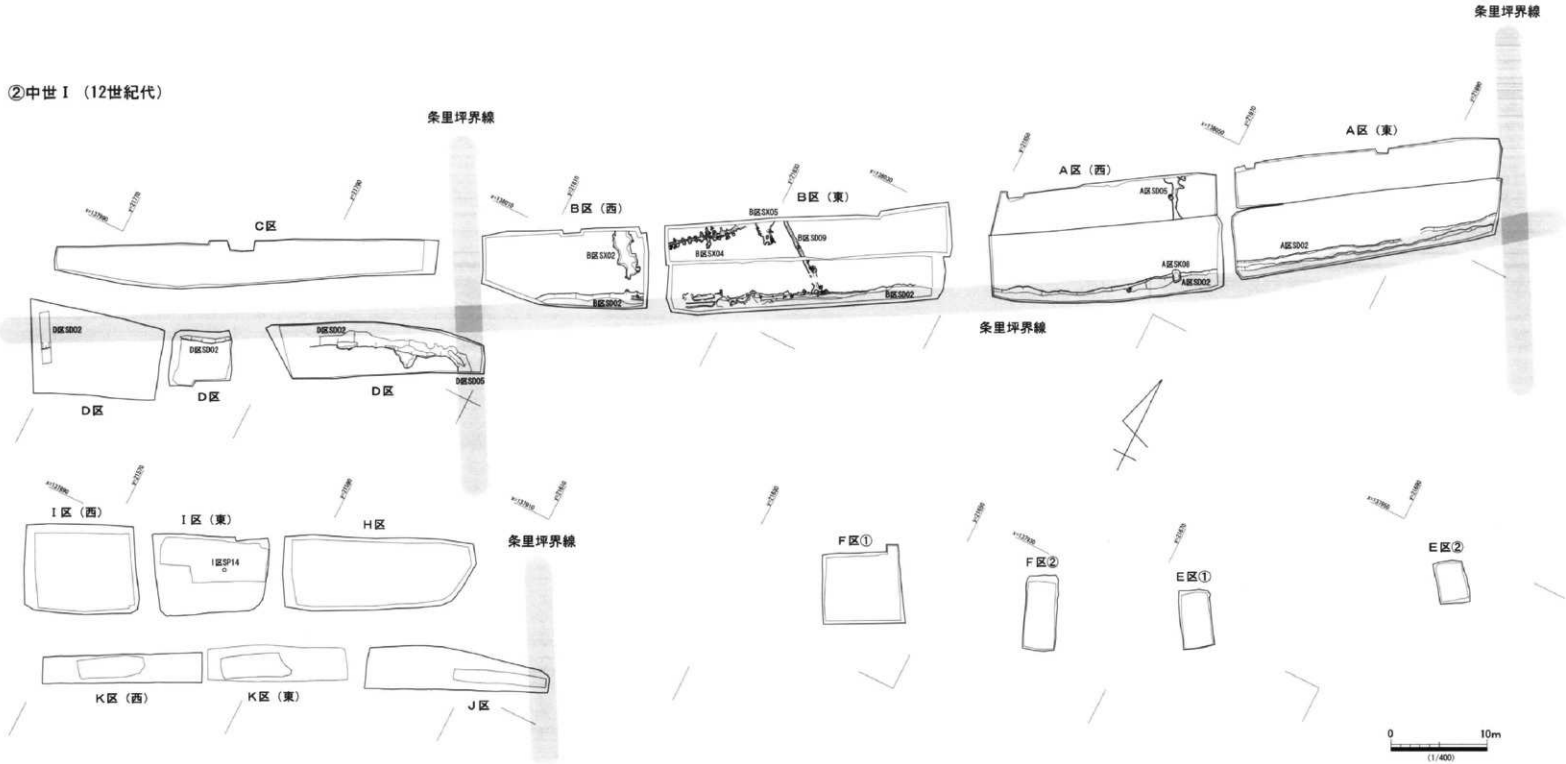
13世紀代はA・B区付近を中心として集落跡が形成される時期である。この集落跡は検出された条里坪界溝の位置から見て1坪の南端付近に位置する。そして、坪内東部の微高地上に掘立柱建物跡（A区SB01～03）・井戸跡（A区SE02）・出水状遺構（A区SX01）などの居住に関係する遺構が、西部の浅い凹地内に墓（B区ST01・02）や畑跡（B区の小ピット群）などの墓域・生産域を構成する遺構が見られる。これらの多くは13世紀代に比定できる。また、出土遺物がごく少量である畑跡についても集落跡と近接する位置関係などを考えるとこの時期には存在したと推測される。よって、条里地割の1坪内で同時期に営まれた遺構群が、その性格に応じて異なる微地形に配置されていると考えられる。

続く14世紀代は、機能していたことが確実な遺構は13世紀代のそれと比べて激減し、条里坪界溝（A区SD02部分）と出水状遺構（A区SX01）のみが挙げられる。ただ、この2つの遺構では14世紀代の遺物が一定量出土している。特に出水状遺構は条里坪界溝のような遺物の流れ込みを考えがたく、また農業用水の確保などにおいて生活との関わりが深い遺構であると見られる。このため近接した位置で集落跡が存続している可能性が高い。

①弥生時代中期～後期

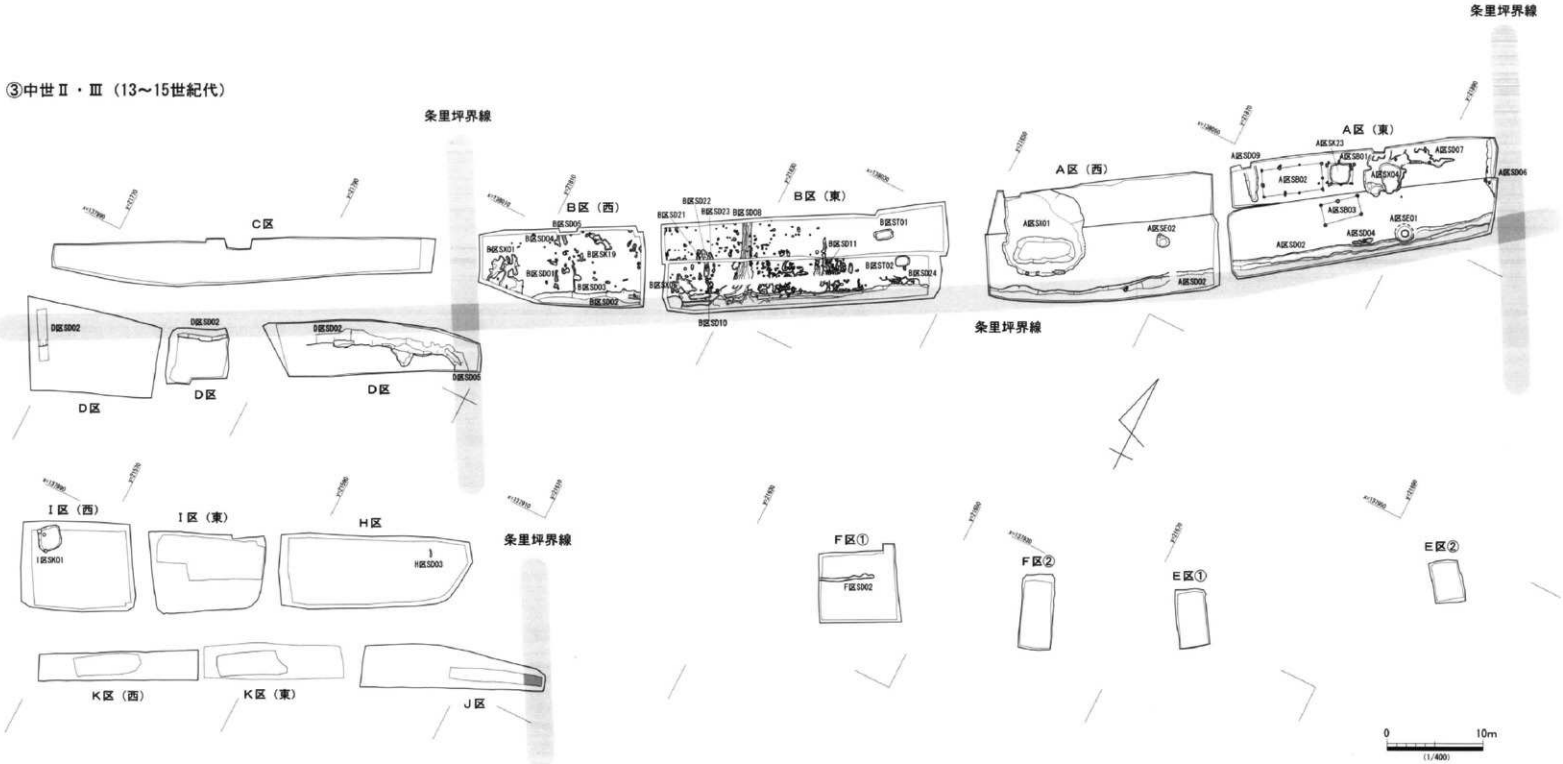


第158図　遺構変遷図①弥生時代中期～後期



第159図　遺構変遷図②中世Ⅰ（12世紀代）

③中世Ⅱ・Ⅲ（13～15世紀代）



第160図　遺構変遷図③中世Ⅱ・Ⅲ（13～15世紀代）

なお、A区SE01（15世紀後半以降）で出土した卒塔婆は形態の特徴などから見て、この時期に属すると考えられる。付近で墓が存在していたことを示唆する遺物であるため、B区ST01・02の墓群に関わる可能性もあり、注目される。

中世Ⅲ（15世紀代以降）

遺構は14世紀代よりもさらに希薄であり、遺物も条里坪界溝であるA区SD02などからごく少量が出土したのみである。ただ、15世紀後半以降に属する井戸跡（A区SE01）が存在することから、この時期にも近接した位置に集落跡が存在した可能性を示す。

参考文献

秋山 忠　1983　『天霧城跡 香川県善通寺市・多度津町・三野町にまたがる中世山城跡』一市二町天霧城跡保存会

今井和彦　1994　『坂出市内遺跡発掘調査報告書平成５年度国庫補助事業報告書鳥帽子山遺跡』坂出市教育委員会

大久保徹也　1990　「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団

大久保徹也・森格也　1995　『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊上天神遺跡第２分冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

大久保徹也　2005　「四国の前・中期古墳築造状況」『第 10 回中国・四国前方後円墳研究会　前半期の首長墳の消長』中国・四国前方後円墳研究会

岡 教憲　1995　『多度津町内遺跡発掘調査報告　平成６年度国庫補助事業報告書』多度津町教育委員会

岡 教憲　1999　「竹近の遺跡について」『多度津町内遺跡発掘調査報告書』多度津町教育委員会

香川県教育委員会　1988　『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和 59 年度～昭和 62 年度』

川越哲志　1992　「鉄生産と土器製塩」『新版［古代の日本］第四巻　中国・四国』角川書店

木下晴一　1998　『県史跡　盛土山古墳　－範囲確認調査報告書－』香川県教育委員会

小林行雄・佐原真　1964　『紫雲出－香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究』

鷹田耕作編　1987　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

斎藤賢一・藤好史郎　1987　『天霧城跡発掘調査概報－香川県善通寺市・多度津町・三野町所在の中世山城の調査－』一市二町天霧城跡保存会

佐々木博子　2000　「SK01 接合資料１・２」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊空港跡地遺跡Ⅳ第１分冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社

柴田昌児編　2005　『久枝遺跡　久枝２遺跡　本郷Ｉ遺跡　－一般国道 196 号今治小松道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第３集』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

白石純　1995　「上天神遺跡出土土器の胎土分析」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊上天神遺跡第２分冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

白石太一郎　1988　『製塩』『弥生文化の研究　10　研究の歩み』雄山閣

高松市教育委員会編　1989　『久米池南遺跡発掘調査報告書』高松市教育委員会

竹広文明　1988　「中国地方縄文時代の剥片石器－その組成・剥片剥離技術－」『考古学研究』第 39 巻第１号（通巻 137 号）考古学研究会

竹広文明　2003　『サヌカイトと先史社会』溪水社

竹広文明　2005　「先史社会におけるサヌカイト利用の体系的研究（課題番号 13610467）平成 13 年度～平成 16 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）(2)）研究成果報告書」

田崎博之　2000　「遺跡出土の焼成粘土塊・焼成剥離土器片からみた弥生土器の生産・供給形態（課題番号 09610406）－平成９～10 年度科学研究費補助金、基礎研究（C）(2) 研究成果報告書－」

田崎博之　2007　「上の山遺跡出土の焼成失敗品について－弥生時代中期前葉（弥生Ⅱ～Ⅲ期）の土器の生産様態－」『大阪府文化財センター調査報告書第 155 集上ノ山遺跡Ⅱ』(財)大阪府文化財センター

中村 浩　1981　『和泉陶邑窯の研究　－須恵器生産の基礎的考察－』柏書房

西岡達哉編　2003　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 46 冊池の奥遺跡金見羅山遺跡２』香川県教育委員会・日本道路公団・(財)香川県埋蔵文化財調査センター

信里芳紀　2004　「下川津遺跡における鉄器生産の可能性について－弥生後期の鍛冶関係資料の新例－」『(財)香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要 11』(財)香川県埋蔵文化財調査センター

信里芳紀　2005　「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心にして－」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』香川県埋蔵文化財センター

藤好史郎・西村尋文編　1990　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅻ下川津遺跡』香川県教育委員会・日本道路公団・(財)香川県埋蔵文化財調査センター

吉野徳久　1998　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 30 冊川津－ノ又遺跡Ⅱ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

宮崎哲治　2003　『県道多度津丸亀線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　中東遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター

村上恭通　1994　「弥生時代における鍛冶遺構の研究」『考古学研究 第 41 巻第３号』考古学研究会

森下英治　1996　「香川県の石器組成の変遷」『国立歴史民俗博物館資料調査報告書７農耕開始期の石器組成１』国立歴史民俗博物館

森下英治　1998　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 29 冊龍川五条遺跡Ⅱ・飯野東分山崎南遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

森下英治　2002　「石器の生産と流通」『第 16 回古代学協会四国支部研究大会弥生前期末・中期初頭の動態－研究発表要旨集－』古代学協会四国支部

森下英治　2003　『国立善通寺病院改修事業に伴う旧練兵場遺跡発掘調査概報1－平成13年度・14年度上半期の発掘調査成果概要報告－』
森下英治　2005　「弥生時代におけるサヌカイトと石器生産」『第19回古代学協会四国支部研究大会原産地遺跡から時代を読む－発表資料集－』古代学協会四国支部
森下英治　2006　「瀬戸内の大規模密集型集落－香川県旧練兵場遺跡と周辺遺跡－」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会
森下友子　2002　『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第10冊鴨部川田遺跡Ⅲ第1分冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・国土交通省四国地方整備局
山下平重　1999　『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊多肥松林遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
山本悦世　2006　「ガラス滓が出土する集落遺跡－弥生時代を中心に－」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会
山元素子　2004　『県道円座香南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊川岡遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財センター・香川県土木部
渡部明夫　1990　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第9冊永井遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

中東遺跡　土器観察表（1）

報文番号	地区名・層位	遺構名・層位	器種	口径	器高	底径	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	焼成	色調	備考
1	Ⅱ区	SD01 アゼ	土師質土器　埦　底部	-	-	6.0	回転ナデ　貼付高台	回転ナデ	高台貼付時のナデ	密（1～1.5mmの微色砂粒多い）	良好	浅黄橙　10YR8/4	
2	Ⅱ区	SD01 包含層	土師質土器　坏	12.2	2.9	9.0	回転ナデ	（体部）回転ナデ（底部）ナデ、指押	ヘラ切り後ナデ	密（1～2mmの砂粒を多く含む）	良好	灰色 10YR8/2	
3	Ⅱ区	上面精査及び銅溝	土師質土器　小皿	10.4	-	-	回転ナデ	回転ナデ	-	密（0.5mm以下の砂粒）	良好	灰白　10YR8/2	
4	Ⅱ区南側	褐灰色礫混粘質土	土師質土器　小皿	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	-	密　精良	良好	にぶい橙　7.5YR7/4	
5	Ⅰ区	SX01（土器集中範囲№7）	弥生土器　広口壺　口縁部	26.6	-	-	粘土紐貼付後調目ナ	横ナデ	-	密（1～2mmの砂粒を多く含む）	良好	明褐　7.5YR5/6	
6	Ⅰ区	SX01	ミニチュア土器　壺	-	5.4	1.8	指押	指押	ナデ	やや粗（1～2mmの砂粒含む）	良好	にぶい黄橙　10YR6/4	外面に黒斑
7	Ⅰ区	SX01（土器集中範囲№8）	弥生土器　鉢　上半部	39.1	-	-	ナデ	ナデ	-	密（0.5～3mmの砂粒多く含む）	良好　やや堅緻	浅黄橙　7.5YR8/4	
8	Ⅰ区	SX01（土器集中範囲№7）	弥生土器　鉢　上半部	15.2	-	-	（口縁部）横ナデ（体部）シボリ、ナデ	（体部）斜ヘラミガキ	-	やや粗（0.5mm以下の砂粒）	良好	浅黄　2.5Y7/4	外面に黒斑
9	Ⅰ区	SX01（土器集中範囲№2）	土師器　鉢	10.8	2.5	4.0	指押	マメツ	-	やや粗（1.5mm以下の砂粒多い。金雲母、赤色粒含む）	良好	にぶい黄橙　10YR6/4	
10	Ⅰ区	SX01（土器集中範囲№1）	弥生土器　底　坏　杯部	-	-	-	ヘラケズリ	マメツ	-	やや粗（2～5mm大の砂粒）	やや軟	橙　7.5YR6/6	
11	Ⅰ区	SX01（土器集中範囲№1）	弥生土器　高　坏　脚部	-	-	15.7	マメツ	-	マメツ	粗（0.5mm以下の砂粒、金雲母含む）	不良	にぶい褐　7.5YR5/4	内面に黒斑
12	Ⅰ区	SX01（土器集中範囲№6）	弥生土器　甕　上半部	12.4	-	-	指押（口縁部）横ナデ	指押	-	やや粗（2mm以下の砂粒含む）	良好	赤　10R5/6	
13	Ⅰ区	SX01（土器集中範囲№7）	土師器　甕　口縁部	15.8	-	-	横ナデ　マメツの為不明瞭	横ナデ　マメツの為不明瞭	-	普通（0.5～2mmの砂粒を多く含む。雲母が目立つ）	良好	にぶい黄橙　10YR6/4	
14	Ⅰ区	SX01（土器集中範囲№5）	土師器　甕　口縁～体部上半	15.3	-	-	マメツ（口縁部）横ナデ	ナデ	-	密（0.5～2mmの砂粒多く含む）	良好　やや堅緻	にぶい黄橙　10YR6/4	
15	Ⅰ区	SX01（土器集中範囲№3）	弥生土器　甕　口縁～体部上半	16.9	-	-	マメツ	指押、ヘラケズリ	-	やや粗（0.5～6mmの砂粒、黒雲母多く含む）	良好	橙　5YR6/6	
16	Ⅰ区	SX01（土器集中範囲№1）	弥生土器　甕　体部下半	-	-	5.3	ナデ	ナデ（底部）指押	ナデ	普通（1～3mmの砂粒を含む）	良好　堅緻	（外部）橙　7.5YR7/6（内部）淡黄 2.5Y8/3	底部付近は二次被熱を受ける。同一個体別にあり、焼成破損あり
17	Ⅰ区	SX01（土器集中範囲№5）	弥生土器　壺　底部	-	-	3.7	指押	指押	-	やや粗（2～5mm大の砂粒多い、赤色粒含む）	やや軟	橙　7.5YR6/6	外面に黒斑
18	Ⅰ区	SX01（土器集中範囲№6）	土師器　甕　体部下半	-	残存高 7.4	-	ナデ	ハケのちナデ（底部）指押	ナデ	普通（0.5～3mmの砂粒を多く含む）	良好	（外部）明赤褐 2.5YR5/6（内面）にぶい橙　7.5YR6/4	
19	Ⅰ区	SX01（西）黒褐色礫混粘質土	弥生土器　広口壺　口縁部	-	-	-	横ナデ	横ナデ	-	密（0.5～2mmの砂粒を含む）	良好	橙　5YR6/8	
20	Ⅰ区	SX01（西）黒褐色礫混粘質土	弥生土器　壺　口縁部	-	-	-	-	ナデ	-	密（1.5mm以下の砂粒、黒雲母）	良好	にぶい橙　7.5YR5/4	
21	Ⅰ区	SX01（W）	弥生土器　甕　口縁～体部上半	16.6	-	-	マメツ	マメツ	-	粗（2mmの砂粒含む）	やや軟	にぶい褐　7.5YR5/4	

中東遺跡　土器観察表（2）

報文番号	地区名	遺構名・層位	器種	口径	器高	底径	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	焼成	色調	備考
22	Ⅰ区	SX01（西）黒褐色礫混粘質土	土師器　甕　口縁部	17.2	-	-	（口縁部）横ナデ	-	-	密（0.5～1㎜の砂粒を含む。雲母が目立つ）	良好やや堅緻	橙　7.5YR6/6	
23	Ⅰ区	SX01（E）	弥生土器　甕　口縁～体部上半	15.2	-	-	叩き（口縁部）横ナデ	指押	-	やや粗（0.5㎜以下の砂粒、赤色粒含む）	良好	におい黄橙　10YR6/4	
24	Ⅰ区	SX01（西）黒褐色礫混粘質土	土師器　甕　口縁～体部上半	14.5	-	-	ハケ（口縁部）横ナデ	指押、ナデ	-	やや粗（2㎜以下の砂粒、赤色粒含む）	良好	橙　7.5YR6/6	
25	Ⅰ区	SX01（W）	弥生土器　甕　口縁～体部上半	13.8	-	-	叩き	（口縁部）横ハケ、ナデ（体部）へラケズリ	-	粗（2.5㎜以下の砂粒）	良好	におい橙　10YR6/3	
26	Ⅱ区	SX01下層黒褐色粘質土	弥生土器　甕	10.1	残存高11.9	-	マメツ	（上半）指押（下半）へラケズリ	-	粗（2～3㎜大の砂粒多い。赤色粒、金雲母含む）	良好	橙　7.5YR6/6	
27	Ⅰ区	SX01（東）黒褐色礫混粘質土	土師器　甕　口縁部	-	-	-	（体部）叩き（口縁部）横ナデ	（体部）マメツ	-	普通（0.5～3㎜の砂粒を少量含む）	良好	浅黄　25Y7/4	
28	Ⅰ区	SX01（西）黒褐色礫混粘質土	弥生土器　甕　口縁部	-	-	-	叩きのちナデ	（上部）ナデ（下部）マメツ	-	密（0.5～2㎜の砂粒を少量含む）	良好やや堅緻	におい黄橙　10YR6/3	
29	Ⅰ区	SX01（西）黒褐色礫混粘質土	弥生土器　鉢　上半部	16.9	残存高4.6	-	マメツ、指押（口縁部）横ナデ	マメツ	-	やや粗（3㎜以下の砂粒）	良好	明赤褐　5YR5/6	
30	Ⅰ区	SX01（西）黒褐色礫混粘質土	土師器　鉢　口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	-	密（1～2㎜の砂粒少量含む）	良好やや堅緻	明赤褐　2.5YR5/6	
31	Ⅱ区	SX01（西）黒褐色礫混粘質土	弥生土器　鉢	-	-	-	指押、ナデ	ハケ、指押	-	やや粗（2㎜以下の砂粒含む）	やや軟	橙　7.5YR6/6	
32	Ⅱ区	SX01下層黒褐色粘質土	弥生土器　鉢　口縁～体部上半	-	-	-	マメツ	マメツ	-	粗（3㎜以下の砂粒、赤色粒含む）	良好	橙　7.5YR6/6	
33	Ⅰ区	SX01（一部灰褐色土まじる）	弥生土器　台付鉢　脚部	-	-	-	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	-	密（0.5㎜大の砂粒多い）	良好	橙　5YR7/8	裾部に穿孔
34	Ⅰ区	SX01（一部灰褐色土層まじる）	弥生土器　高坏　脚部	-	-	-	叩き後ナデ	ヘラケズリ	-	粗（2～3㎜大の砂粒。赤色粒含む）	良好	明褐　7.5YR5/6	
35	Ⅱ区	SX01の上部（褐灰色礫混粘質土）	弥生土器　甕　底部	-	残存高4.8	6.0	板ナデ後指押さえ	指押	-	粗（3㎜以下の砂粒）	良好	明褐　7.5YR5/6	
36	Ⅱ区	SX01（アゼ部分）	弥生土器　甕　底部	-	-	3.0	ナデ	ナデ	ナデ	密（1㎜以下の砂粒少量含む）	良好	におい黄橙　10YR6/3	
37	Ⅱ区	SX01下層（アゼより南）	製塩土器脚部	-	-	4.7	指押	ナデ	指押	普通（1～3㎜の砂粒を含む）	良好	明赤褐　2.5YR5/6	
38	Ⅰ区	淡褐色礫混粘質土（一部黒褐色粘質土の上面土層がまじる）	弥生土器　広口壺　口頸部	-	-	-	（頸部）縦ハケ後横ナデ（口縁部）横ナデ	（頸部上部）横ハケ後ナデ（頸部下部）指押	-	普通（0.5～4㎜の砂粒を多く含む）	良好	におい黄橙　10YR6/4	
39	Ⅱ区南側	褐灰色礫混粘質土	弥生土器　甕　口縁～体部上半	13.8	-	-	（体部）ハケ（口縁部）横ナデ	指押	-	粗（3㎜以下の砂粒、赤色粒多い）	やや軟	暗灰黄　2.5Y5/2	
40	Ⅰ区	淡褐色礫混粘質土（一部黒褐色粘質土の上面土層がまじる）	弥生土器　鉢　口縁部	-	-	-	（口縁部）横ナデ	-	-	やや粗（0.5㎜以下の砂粒、赤色粒を含む）	やや軟	におい黄橙　10YR6/3	
41	Ⅱ区	SX01の上部（褐灰色礫混粘質土）	製塩土器　脚部	-	-	4.1	指押	ナデ	指押、ナデ	密（0.5～2㎜の砂粒を多く含む）	良好やや堅緻	橙　7.5YR7/6（底部）橙　2.5YR6/6	
42	Ⅱ区	SX01の上部（褐灰色礫混粘質土）	製塩土器　脚部	-	-	4.0	ナデ	マメツ	マメツ	普通（1～2㎜の砂粒多く含む）	良好	明赤褐　2.5YR5/6	
43	Ⅱ区	SX01の上部（褐灰色礫混粘質土）	製塩土器　脚部	-	-	4.2	指押、ナデ	指押、ナデ	-	やや粗（2㎜以下の砂粒多い）	良好	明黄褐　10YR6/6	

中東遺跡　土器観察表（3）

報文番号	地区名	遺構名・層位	器種	口径	器高	底径	外面調整	内面調整	底部調整	胎土	焼成	色調	備考
44	Ⅱ区南側	褐灰色礫混粘質土（黒褐色土より上）	製塩土器　脚部	-	-	4.8	叩き、指押	指押	-	やや粗（3㎜以下の砂粒）	やや軟	にぶい橙 5YR6/4	
45	Ⅱ区	SX01の上部（褐灰色礫混粘質土）	製塩土器　脚部	-	-	4.0	指押、ナデ	指押、ナデ	-	やや粗（2㎜以下の砂粒）	良好	橙　5YR6/6	
46	Ⅱ区	SX01上層（黒褐色粘質土の上面）	製塩土器　脚部	-	-	4.2	ナデ	ナデ、指押	ナデ	密（0.1～2㎜の砂粒を含む）	良好	（外面）赤褐 10R5/6（内面）にぶい黄 2.5Y6/3	
47	Ⅱ区南側	褐灰色礫混粘質土（黒褐色土より上）	製塩土器　脚部	-	-	4.0	横ナデ	ハクリ面	横ナデ	普通（1～3㎜の砂粒を含む）	良好	橙　7.5YR7/6	底部円盤充填
48	Ⅱ区南側	褐灰色礫混粘質土（黒褐色土より上）	製塩土器脚部片	-	-	3.6	指ナデ	-	指ナデ	普通（0.5～5㎜の砂粒を含む）	良好	明赤褐 2.5YR5/6	
49	Ⅱ区	SX01の上部（褐灰色礫混粘質土）	製塩土器　脚部	-	-	4.6	指押	ナデ	指押	やや粗（2㎜大の砂粒含む）	良好	橙　5YR7/6	底部円盤充填
50	Ⅱ区	SX01の上部（褐灰色礫混粘質土）	製塩土器　体部片	-	-	-	叩き	ケズリ	ナデ	やや粗（1㎜程度の砂粒多い）	良好	（外面）にぶい橙 2.5YR6/4（内面）暗褐色	
51	Ⅱ区南側	褐灰色礫混粘質土	須恵器　装飾付器台	-	-	-	波状文2条	回転ナデ	-	密　精良	良好 堅緻	灰　N6/	
52	Ⅱ区	上面精査及び側溝	器財埴輪	横、縦5.0	幅1.1	-	-	-	-	普通（0.1～4㎜の砂粒を多く含む）	良好	明赤褐　5YR5/6	
53	Ⅱ区	上面精査及び側溝	器財埴輪	幅5.9	-	-	ナデ	ハケ、縦方向の強いナデ	-	やや粗（1～3㎜の砂粒を多く含む）	良好	橙　5YR6/8	
54	Ⅱ区	SX01（黒褐色粘質土）	器財埴輪	横5.8 縦6.9	幅1.7	-	-	-	-	普通（0.1～4㎜の砂粒を多く含む）	良好	明赤褐　5YR5/6	
55	Ⅱ区	上面精査及び側溝	須恵器　坏　底部	-	残存高1.5	8.8	回転ナデ	回転ナデ	高台貼付後回転ナデ（底）回転ヘラケズリ	密　精良	良好 堅緻	灰白　N6/	
56	Ⅱ区	上面精査及び側溝	土師質土器　坏　底部	-	-	5.7	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	密　精良	良好 堅緻	橙　5YR6/6	
57	Ⅱ区	上面精査及び側溝	土師質土器　小皿	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	-	密　精良	良好	浅黄橙　10YR8/4	
58	Ⅱ区	側溝掘削	土師質土器　羽釜　口縁～鍔部	-	-	-	（上部）横ナデ	ナデ	-	密　精良（0.5～2㎜の砂粒を含む）	良好 堅緻	（外）にぶい橙　5YR6/4（内）にぶい赤褐　5YR5/4	外面に煤付着
59	Ⅱ区	上面精査及び側溝	鮎壺	幅4.6	4.1	穴の直径0.9	ナデ、（穿孔の縁辺）強いナデ	未調整	-	普通（0.5～2㎜の砂粒を多く含む）	良好	にぶい褐 7.5YR5/4	
60	Ⅱ区	SX01	土製紡錘車	直径6.4	厚さ1.2	穴の直径0.9	ナデ	-	-	普通（0.5～3㎜の砂粒を多く含む）	良好	にぶい黄 2.5Y6/3	表面に淡い黒斑
61	Ⅰ区	盛土除去　壁　切排土中	サヌカイト　剥片	幅2.8	長さ2.7	厚さ0.5	-	-	-	-	-	-	刃部に2～3㎜の加工痕あり
62	Ⅰ区	SX01	太形粘刃石斧（伐採斧）	長さ6.3	幅6.7	厚み3.2	-	-	-	-	-	緑灰　10YG6/1	刃部に敲打痕、叩石に転用

奥白方中落遺跡　土器観察表（1）

報文番号	図版番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土						法量				調整・技法		残存率	備考
					外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	黒色粒	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外面	内面		
1	36	SH01	弥生土器	甕	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	細・並	中・並			細・少						胴部刷目・ﾊｹ目	ﾊｹ目後指ｵｻｴ	胴部細片	
2	36	SH01	弥生土器	壺	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/3 褐	細・並	細・少		細・少							沈線5条	指ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目	頸部細片	
4	36	SH02	弥生土器	甕	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	細・並	細・少		細・少			20.3				凹線文3条・ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	口縁部細片	
5	36	SH02	弥生土器	壺	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並	中・少		細・少			19.5				凹線文3条・ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目？	口縁部細片	
6	36	SH02	弥生土器	壺	5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	中・多	中・多		細・少		細・少	15.1				凹線文5条・ﾖｺﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ	口縁部細片	
7		SH02	弥生土器	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	中・並	細・並				細・少			6.0		ﾍﾗﾐｶﾞｷ？	板ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ	底部1/8	
8	36	SH02	弥生土器	甕	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR5/6 明赤褐	中・並	中・少			中・並		16.9				凹線文2条・ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	口縁部2/8	
9	36	SH02	弥生土器	高杯	5YR6/6 橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・多	細・少		細・少			19.1				凹線文3条	ﾖｺﾅﾃﾞ	口縁部細片	
10	36	SH02	弥生土器	高杯	5YR6/6 橙	5YR5/8 明赤褐	中・並	中・並									凹線文2条	ﾏﾒﾂ（指ｵｻｴ）	口縁部細片	
11	36	SH02	弥生土器	高杯	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR5/6 明黄褐	中・多	中・多		細・並					8.8		ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾖｺﾅﾃﾞ・凹線文2条	ﾍﾗﾐｽﾞﾘ後指ﾅﾃﾞ※穿孔2ヶ所	脚部1/8	
16	36	SH03	弥生土器	壺	5YR7/8 橙	N2/ 黒	中・多	中・多		細・少			14.5				（口）凹線文2条・（頸）凹線文3条・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	円形浮文・ﾅﾃﾞ	口縁部2/8	頸部に焼成前穿孔1ヶ所
17	37	SH03	弥生土器	甕	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	中・少	中・多		細・少			19.6				凹線文3条・ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹ目後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ・指ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ	口縁部2/8	
18	38	SH03	弥生土器	甕	10YR3/2 黒褐	10YR4/2 灰黄褐	中・並	中・並					19.6				凹線文2条・ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹ目	ﾊｹ目後ﾖｺﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ	口縁部2/8	
19	38	SH03	弥生土器	甕	7.5YR5/6 明褐	7.5YR6/6 橙	中・少			細・並	細・少		17.1				ﾏﾒﾂ（ﾖｺﾅﾃﾞ）	ﾖｺﾅﾃﾞ	口縁部細片	
20	38	SH03	弥生土器	壺	7.5YR4/3 褐	7.5YR5/3 にぶい褐	細・並	細・少		細・少			13.6				凹線文2条・ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	口縁部1/8	
21		SH03	弥生土器	甕	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・少					中・無					凹線文2条・ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾊｹﾘ	口縁部細片	
22	38	SH03	弥生土器	？	7.5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	細・並	中・並				中・少			7.6		ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	底部1/8	
23		SH03	弥生土器	甕	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR2/ 黒	細・多	細・少		細・多					7.0		ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾊｹ目	底部3/8	
24		SH03	弥生土器	甕	7.5YR5/2 灰褐	5YR5/6 明赤褐	細・並			細・少		細・少			9.8		ﾍﾗﾐｶﾞｷ	板ﾅﾃﾞ・指ｵｻｴ	底部1/8	
25	38	SH03	弥生土器	甕	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR3/1 黒褐	中・少	細・少				中・少			6.4		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	底部破片	
26		SH03	弥生土器	甕	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	細・少					細・少			5.4		指ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ	底部2/8	
27	38	SH03	弥生土器	高杯	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐	中・並			細・少		中・多	26.6				ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹ目	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹ目	口縁部破片	
28	38	SH03	弥生土器	高杯	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・多						20.0				ﾊｹﾘ・ﾍﾗﾅｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹ目	口縁部破片	

奥白方中落遺跡　土器観察表（2）

報文番号	図版番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土						法量				調整・技法		残存率	備考
					外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	黒色粒	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外面	内面		
29	38	SH03	弥生土器	高杯	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	粗・少					細・少					ヘラミガキ後斜み目・凹線文5条	ヘラナズリ	脚部細片	
30	38	SH03	弥生土器	高杯	5YR5/6 明赤褐	7.5YR6/6 橙	細・少	中・少							11.2		ヨコナデ・凹線文3条	ヘラナズリ	脚部 1/8	
31	38	SH03	弥生土器	高杯	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・少	細・少		細・少					10.4		ヨコナデ・凹線文3条	ヘラナズリ	脚部 1/8	外面に逆「V」字状のヘラ描
32	38	SH03	弥生土器	鉢？	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/1 灰白	中・少			細・少							ヨコナデ	ハケ目？	口縁部細片	
33	38	SH03	弥生土器	高杯	5YR5/6 明赤褐	5YR5/8 明赤褐	中・少		細・少			細・少					円形浮文2個？・凹線文2条・凹線文3条	ヘラナズリ後ナデ・ヨコナデ	脚部細片	脚端面にヘラ描
35		SH04	弥生土器	壺	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y3/1 黒褐	細・少			細・少							刺目突帯	板ナデ後指ナデ	体部破片	
36	38	SH04	弥生土器	ミニチュア土器 壺	7.5YR6/3 にぶい褐	10YR6/4 にぶい黄橙	細・並	細・並		細・少			2.9	3.8	1.6		指オサエ・指ナデ	指オサエ	8/8	
37		SH04	弥生土器	壺	7.5YR 7/6 橙	7.5YR6/6 橙	細・並	細・少					18.6				ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部破片	
38		SH04	弥生土器	高杯	5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	中・並	中・少									ハケ目	ヘラナズリ	脚部細片	
39		SH04	弥生土器	高杯	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並			細・並	中・少						ヘラミガキ・凹線文1条	ヘラナズリ	脚部 (1/9)	
40		SH04	弥生土器	高杯	5YR5/6 明赤褐	7.5YR5/6 明褐	中・少	中・並							12.0		ハケ目後ナデ・凹線文1条	ヘラナズリ	脚部破片	
41		SH04	弥生土器	底か壺	7.5YR5/6 明褐	5YR5/6 明赤褐	中・並	中・少							5.6		ハケ目	板ナデ	底部 1/8	
42		SH04	弥生土器	壺	5YR4/4 にぶい褐	5YR4/6 赤褐	中・少								6.0		ヘラミガキ	ヘラナズリ	底部 3/8	
43		SH04	弥生土器	壺	5YR3/6 暗赤褐	5YR4/6 赤褐	中・少	中・少							6.0		ヘラミガキ	ヘラナズリ	底部 1/8	
44		SH04	弥生土器	壺	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR3/3 暗褐	中・少	細・並							10.0		ヘラミガキ	ヘラナズリ後板ナデ	底部 1/8	
45	39	SH05	弥生土器	壺	10YR5/6 黄褐	5Y3/1 オリーブ黒	中・並								8.2		ヘラミガキ	ハケ目後板ナデ後指オサエ	底部 5/8	
46	39	SH05	弥生土器	壺	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	細・並	中・並		細・少			17.6				凹線文2条・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目後板ナデ	口縁部破片	
47	39	SH05	弥生土器	壺	5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	中・少	細・少	細・少	細・少			26.8				凹線文1条・ヨコナデ・押捺突帯文	ヨコナデ・板ナデ	口縁部 1/8	押捺突帯文ナデ消し
48		SH05	弥生土器	?	5YR4/3 赤褐	7.5YR5/6 明褐	細・並	中・並							12.6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	底部 1/8	
49		SH05	弥生土器	壺	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	細・少	細・少							8.1		ヘラミガキ	ハケ目	底部 1/8	
50		SH05	弥生土器	壺	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/1 褐灰	細・少			細・少					5.6		ヘラミガキ	ヘラナズリ後指ナデ	底部 2/8	
51	39	SH05	弥生土器	高杯	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	細・並	細・並		細・少			10.0				ヘラミガキ・凹線文2条	ヘラナズリ	脚部 1/8	

奥白方中落遺跡　土器観察表（3）

報文番号	図版番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土						法量				調整・技法		残存率	備考
					外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	黒色粒	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外面	内面		
54	39	SH06	弥生土器	甕	5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐		粗・並					13.4	25.7	6.4		凹線文3条・ヨコナデ・ハケ目・胴部刻目・ヘラミガキ	ヨコナデ・ハケ目後指オサエ・ヘラナズリ	2/8	
55	39	SH06	弥生土器	甕	5YR4/6 赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	中・並	中・少					15.1				凹線文3条・ヨコナデ・マメツ・ハケミガキ・胴部刻目	ヨコナデ・板オサエ後指オサエ・ヘラナズリ	2/8	
56		SH06	弥生土器	壺	5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	細・並	細・少		細・少							ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ハケ目	口縁部細片	
57		SH06	弥生土器	甕	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	細・並	細・少									凹線文3条・ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部破片	
58		SH06	弥生土器	高杯	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並	細・少									ハケ	ヨコナデ・板ナデ	口縁部細片	
59	39	SH06	弥生土器	紡錘車	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	細・少	細・少		細・少			長さ 2.4	幅 2.2	厚さ 0.35		ヘラミガキ	ナデ	8/8	
63		SH07	弥生土器	甕	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	細・少			細・少							粘土紐貼付＋押捺突帯文・ヘラミガキ	ヘラミガキ	頸部細片	
64		SH07	弥生土器	甕	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR4/2 灰黄褐	中・並	中・並		細・少					6.6		ヘラミガキ	板ナデ後指オサエ	底部7/8	
65		SH07	弥生土器	鉢	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・並	細・少			細・少	19.9					凹線文2条・ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部破片	
66	40	SH07	弥生土器	高杯	10YR3/3 暗褐	7.5YR4/4 褐	細・少	細・並		細・少					8.4		ヘラ描直線文10条・ヘラ描文・凹線文2条	ヘラナズリ	脚部1/8	
67		SH07	弥生土器	高杯	7.5YR6/3 にぶい褐	5YR6/4 にぶい橙	中・並			細・少							ヘラミガキ	ハケ目・板ナデ	杯部底部5/8	
71		SH08	弥生土器	壺	5YR5/6 明赤褐	2.5YR4/6 赤褐	中・並			細・少		9.2					ヨコナデ・マメツ（ハケ目）	ヨコナデ・板ナデ後指オサエ	口縁部1/8	
72		SH08	弥生土器	鉢	5YR5/8 明赤褐	5YR5/8 明赤褐	中・並	細・並		細・少							凹線文4条	ヨコナデ・板ナデ	口縁部細片	
73		SH08	弥生土器	高杯	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	中・少	中・少									ヘラミガキ・ナデ	ヨコナデ	口縁部細片	
74	40	SB01	弥生土器	壺	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・少				中・少						ハケ目後ヘラミガキ※胴部刻目あり	ハケ目後板ナデ・指オサエ	体部2/8	
75		SB01	弥生土器	甕	5YR5/6 明赤褐	5YR5/8 明赤褐	細・並			細・少	細・少	22.8					凹線文3条・ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部細片	
76	40	SB01	弥生土器	高杯	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・並			細・少	細・少						凹線文3条	ヨコナデ	口縁部細片	
77		SB02	弥生土器	壺	5YR5/6 明赤褐	7.5YR6/6 橙	細・少			細・少	中・少	16.0					凹線文3条・ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ目	口縁部細片	
78		SB02	弥生土器	甕	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/3 にぶい褐	細・少				細・並						凹線文2条・ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部細片	
79	40	SB02	弥生土器	壺	2.5YR5/8 明赤褐	5YR5/8 明赤褐	中・並			細・少	中・多	37.6					凹線文5条・ヨコナデ・指オサエ・押捺突帯文	ヨコナデ	口縁部細片	押捺突帯文ナデ消し
80	40	SB02	弥生土器	高杯	7.5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並			細・少	細・少	27.0					凹線文2条・ヘラミガキ	ハケ目後ヨコナデ	口縁部細片	
81	40	SB02	弥生土器	高杯	5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	細・並				細・無	26.9					ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ハケ目	口縁部破片	
82		SB02	弥生土器	高杯	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/6 橙	細・少	細・少		細・少					12.9		ヨコナデ・凹線文3条・刺み目	ヘラナズリ	脚部(1/10)	

奥白方中落遺跡　土器観察表（4）

報文番号	図版番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土							法量				調整・技法		残存率	備考
					外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	黒色粒	砂粒		口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外面	内面		
83		SB02	弥生土器	?	10YR4/2 灰黄褐	2.5Y2/1 黒	中・並			細・少						7.0		ヘラミガキ後指オサエ	ヘラナズリ	底部 1/8	
84		SB02	弥生土器	甕	5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR4/4 褐	細・並					細・少				7.2		ヘラミガキ・ヨコナデ	ヘラナズリ後ハケ目	底部 4/8	
85		SB02	弥生土器	甕	5YR5/8 明赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	細・並					中・少				8.1		ヘラミガキ・ヨコナデ	ヘラナズリ	底部 1/8	
86		SB02	弥生土器	甕	5YR4/8 赤褐	10YR5/3 にぶい黄褐	中・少					中・少				5.9		ヘラミガキ	ハケ目後指オサエ	底部 2/8	
88	41	SB03	弥生土器	壺	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	細・少	細・少										回線文1条・ヨコナデ	斜格子文	口縁部破片	回線文は浅く不明瞭
89		SB03	弥生土器	甕	5YR5/8 明赤褐	5YR5/8 明赤褐	中・少			細・少								回線文2条・ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部破片	
90	41	SB03	弥生土器	壺	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	細・少							9.0				回線文2条・ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部 (1/10)	
91		SB03	弥生土器	甕	5YR5/6 明赤褐	7.5YR4/4 褐	中・並	中・並								6.0		ヘラミガキ	ヘラナズリ後板ナデ	底部 2/8	
92	41	SB04	弥生土器	甕	5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	中・並	細・少				細・少		10.8				回線文2条・ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・板ナデ・ヘラナズリ	口縁部 8/8	
93		SB05	弥生土器	壺	5YR3/1 黒褐	7.5YR5/4 にぶい褐	中・並	中・多								10.6		ヘラミガキ	ヘラナズリ	底部破片	
94		SB05	弥生土器	壺	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	中・並	中・並								8.7		ヘラミガキ	指オサエ	底部 2/8	
95		SB06	弥生土器	甕	5YR4/6 赤褐	7.5YR3/2 黒褐	中・並	細・少		細・多				19.0				回線文3条・ハケ目・ヨコナデ	ヨコナデ・板ナデ	口縁部 1/8	
96		SB06	弥生土器	甕	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	細・少			細・少				15.0				回線文2条・ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部細片	
97		SB06	弥生土器	壺	5YR5/8 明赤褐	10YR2/1 黒	細・並	細・少								7.0		ヘラミガキ	ハケ目	底部 1/8	
100		SB07	弥生土器	壺	5YR5/6 明赤褐	2.5Y5/1 黄灰	細・少	細・少		細・少				10.7				ヨコナデ・ハケ目	ハケ目・板ナデ	口縁部破片	
101		SK02	弥生土器	壺	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	細・並	細・並		細・少				14.1				回線文3条・ヨコナデ・ヘラミガキ	ハケ目・ハケ目後板ナデ	口縁部 (1/12)	
102		SK02	弥生土器	壺	10YR2/2 黒褐	10YR5/4 にぶい黄橙	粗・並			細・少				18.1				ヨコナデ・板ナデ	ヨコナデ・板ナデ	口縁部 1/8	
103	42	SK02	弥生土器	壺	7.5YR5/6 明褐	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並					細・少						ハケ目後板ナデ	ハケ目後板ナデ	頸部 4/8	部分黒斑
104	43	SK02	弥生土器	甕	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/3 にぶい黄褐	細・多	細・少		縄・多				15.3				回線文2条・ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ目・板ナデ	口縁部 1/8	
105	43	SK02	弥生土器	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	粗・多	中・並						22.1				ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ・ハケ目	ハケ目・マメツ（指オサエ）	口縁部破片	
106	43	SK02	土師器	椀	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	中・並	細・並						17.6				ヘラミガキ	ヘラミガキ	口縁部破片	
107		SK02	弥生土器	高杯	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並	中・多		細・少				35.6				回線文2条・マメツ	ヨコナデ・マメツ	口縁部破片	
108		SK02	弥生土器	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/1 褐灰	粗・並	中・少		細・少						6.2		ハケ目	ヘラナズリ	底部 2/8	
109		SD01	弥生土器	甕	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	細・少					細・少						回線文2条・ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部細片	